特別史跡熊本城跡総括報告書

調査研究編

第１分冊

2020

熊　本　市

口絵 1　特別史跡熊本城跡全域航空写真

口絵 2　平成 28 年熊本地震以前の天守閣

口絵３　内坪井から見た熊本城（冨重写真所蔵）

口絵４　宇土櫓から見た大小天守（冨重写真所蔵）

発刊にあたって

本市では、熊本城跡の継続的な研究体制強化のため、平成 25 年（2013）10 月に熊本城調査研究センターを設置しました。設置後は、城及び城下の総合的な調査研究に着手し、総括報告書『整備事業編』『歴史資料編』『調査研究編』の刊行を計画いたしました。

このうち『整備事業編』につきましては、石垣や重要文化財建造物の修理、建造物の復元整備、公園整備などについてまとめたもので、平成 28 年（2016）3 月に刊行しました。

同年 4 月に平成 28 年熊本地震が発生し、熊本城は甚大な被害を受けましたが、調査研究は継続し、熊本城に関する古文書・絵図・古写真などの資料をまとめた、『歴史資料編』を平成 31 年（2019）3 月に刊行することができました。

本書『調査研究編』は、平成 28 年熊本地震前の熊本城跡に関係する発掘調査報告書等を中心に調査成果をまとめ、現状で把握できる熊本城跡の歴史的・文化財的な評価と総括を行ないました。半世紀以上にわたって実施されてきた熊本城跡の発掘調査によって得られた成果と課題を、確認・整理できたと考えております。

本市としましては、今回明らかとなった成果と課題を今後の発掘調査に反映し、熊本城跡の保存と活用に努め、文化財的価値を高めていくとともに、より質の高い調査研究活動を続けてまいります。

最後になりましたが、『調査研究編』の刊行にあたりご指導、ご協力いただいた方々に深く感謝申し上げます。

令和 2 年（2020）3 月

熊本市長　大西　一史

例　言

1　熊本市は、特別史跡熊本城跡で長年実施してきた様々な史跡整備、資料収集、発掘調査の成果を取りまとめ、総括し、特別史跡熊本城跡総括報告書を作成することとした。総括報告書は、史跡整備をまとめた整備事業編(2016 年 3 月既刊)、古文書・絵図・古写真などを網羅した歴史資料編(2019 年 3 月既刊)、発掘調査の成果を中心とした調査研究編(本書)の 3 編で構成される。

2　本報告書で掲載対象とした発掘調査は、昭和 35 年度の藤崎台から、平成 28 年熊本地震前までとした。

3　本報告書掲載の記事は、既に報告書が刊行されているものについては、その報告書から抜粋した。

4　図版のキャプションについて、章-節-項-〇図という体裁をとっている。
(例:第 4 章第 2 節第 1 項 3 図→ 4-2-1-3 図)

5　第 4 章に掲載した写真のキャプションについて、元資料に記載がある場合はそのまま記載した。所蔵先はキャプションに示したが、記載のないものは全て熊本市の所蔵である。

6　瓦の文様の表記については、熊本城跡において家紋と理解できるものは「紋」を用い、家紋でない文様については「文」を用いて文章中で区別している。

7　本報告書は、令和元年度熊本城調査研究センター職員を中心に執筆した。第 5 章以下について執筆者を記す。第 5 章:第 1 節　金田一精、第 2 節　美濃口紀子、第 3 節　美濃口紀子、第 4 節　嘉村哲也、第 5 節　山下宗親、第 6 章:鶴嶋俊彦、第 7 章:第 1 節　下高大輔、第 2 節　美濃口紀子。
　本報告書の編集は、平成 30 年度までを美濃口紀子が行ない、令和元年度から林田和人が引き継いで行なった。

8　資料の掲載に際し、下記の機関よりご配慮を賜った。記して感謝申し上げる。
一般財団法人熊本城顕彰会、宮内庁三の丸尚蔵館、熊本県文化課、熊本県立図書館、熊本市文化財課、熊本市立熊本博物館、熊本日日新聞社、公益財団法人永青文庫、しろはく古地図と城の博物館富原文庫、長崎大学附属図書館(50 音順)

特別史跡熊本城跡総括報告書　調査研究編

目　次

第１章　調査の概要 …… 1
　第１節　特別史跡熊本城跡の概要 …… 1
　第２節　総括報告書作成の経緯 …… 1
第２章　熊本城の位置と環境 …… 2
　第１節　地理的環境 …… 4
　　第１項　概要 …… 4
　　第２項　金峰山塊の岩質 …… 4
　　第３項　熊本城跡の地形 …… 6
　第２節　歴史的環境 …… 7
　　第１項　周辺遺跡の概要 …… 7
　　第２項　熊本城と城下の変遷 …… 11
第３章　熊本城研究史 …… 15
第４章　発掘調査の概要 …… 43
　第１節　発掘調査史 …… 43
　第２節　発掘調査の内容 …… 43
　　第１項　本章の目的 …… 43
　　第２項　対象範囲 …… 43
　第３節　各地区の概要と調査成果 …… 48
　　第１項　本丸地区 …… 48
　　【本丸上段】 …… 49
　　【平左衛門丸】 …… 142
　　【数寄屋丸】 …… 149
　　【西竹の丸(飯田丸)】 …… 154
　　【東竹の丸】 …… 199
　　【竹の丸】 …… 206
　　【西出丸】 …… 224
　　【奉行丸】 …… 230
　　【櫨方丸】 …… 255

第１分冊(本報告書)

第４章　発掘調査の概要 …… 1
第３節　各地区の概要と調査成果 …… 1
第２項　二の丸地区 …… 1
第３項　三の丸地区 …… 34
第４項　古城地区 …… 51
第５項　千葉城地区 …… 89
第６項　城下(参考) …… 98
第５章　総括 …… 130
第１節　地質・層序 …… 130
第２節　遺構 …… 149
第３節　遺物 …… 162
第４節　石垣 …… 185
第５節　西南戦争との関連 …… 197
第６章　熊本城の調査研究と課題 …… 205
第７章　付編 …… 210
第１節　熊本城の石垣変遷 …… 210
第２節　熊本城の出土瓦編年試案 …… 229

第２分冊

第１章　調査の概要

第１節　特別史跡熊本城跡の概要

熊本城は、加藤清正によって築かれた名城で、明治 10 年(1877)西南戦争では政府軍が籠城し、13 の櫓や城門などが残存し、石垣や城壕の多くが旧規を保つとして昭和 8 年(1933)に建物は国宝に、石垣や空堀、水濠などが史蹟「熊本城」に指定された。昭和 25 年(1950)に文化財保護法が制定されると、重要文化財と史跡「熊本城」に名称が変更となり、史跡は追加指定を経て昭和 30 年(1955)に特別史跡に指定されている。城域は約 98ha と広大で、現在はこのうちの約 57.8ha が史跡指定地である。

史跡の保存管理については、昭和 57 年度に「特別史跡熊本城跡保存管理計画」を策定し、環境整備は特別史跡としての熊本城跡を良好な状態で保存していくことを最優先に考え、残存する遺構の維持保存だけでなく、城域の境界を明確にするために石垣や堀の積極的な復元なども行なうべきであるとまとめている。また、平成 9 年度には「熊本城復元整備計画」を策定し、地域の貴重な歴史遺産であり文化の象徴でもある熊本城跡の価値をより一層高めるため、歴史的建造物の保存と復元、都市のうるおい空間としての環境整備、サービス空間の創出、この三つを基本方針として、城域全体を対象に史実に基づいた建造物・遺構の復元・修理を行なうことを決定した。この「復元計画」は短期・中期・長期に分けて進められ、短期スケジュールの第 1 期で西出丸(奉行丸)一帯を対象に復元整備事業と事前の発掘調査が実施された。続く短期スケジュール 2 期の整備の整備対象地区は飯田丸一帯で、五階櫓御櫓の復元とともに石垣の膨らみが著しい箇所や明治初期に撤去された部分の石垣解体修理及び復元整備工事が行なわれている。

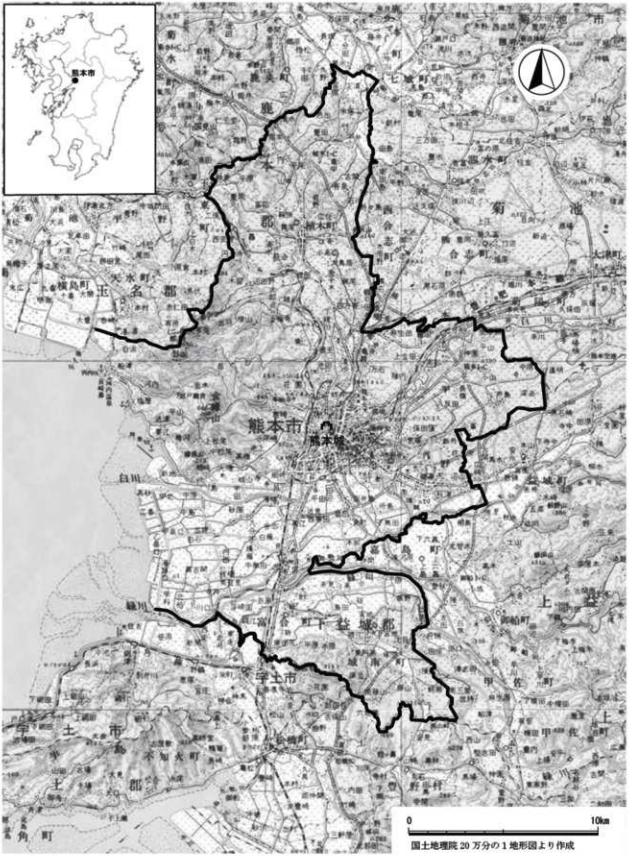
さらに平成 29 年度には、熊本城跡の本質的な価値とそれを構成する諸要素を再確認し、そのうえでより適切な保存・管理のあり方や、現状変更などの取扱基準を定めて活用・整備の方向性を示した「特別史跡熊本城跡保存活用計画」に改訂した。熊本城の本質的価値は、熊本城にまつわる歴史資料や城域の縄張、石垣、歴史的建造物などの諸要素で構成され、これらを堅実な調査によって史実に正しく解釈することで不変の価値と認識できるものとなる。特別史跡である熊本城跡の保存活用は、その上で保存や整備、啓発を図っていくことが特に肝要となる。

第２節　総括報告書作成の経緯

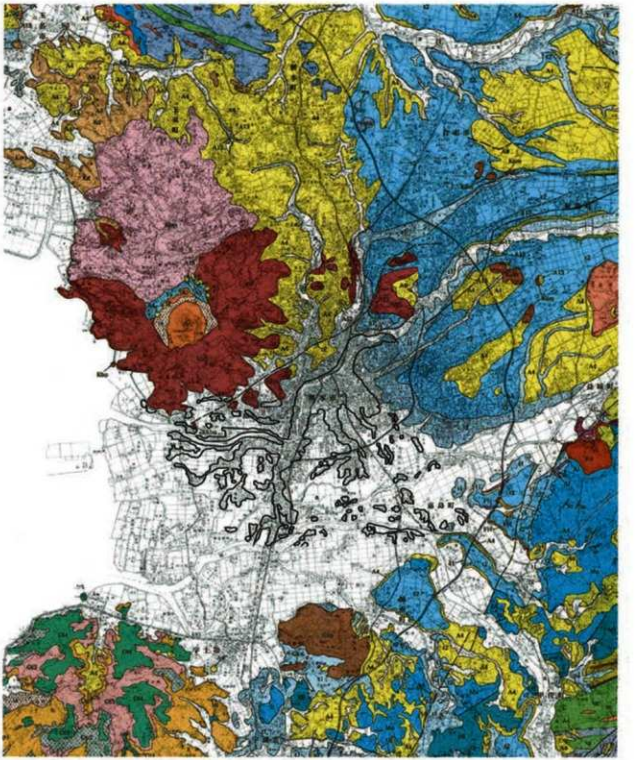
熊本市では、特別史跡熊本城跡の本質的価値の解明に向けた継続的な研究体制強化のため、平成 25 年 10 月に熊本城調査研究センターを設置し、城及び城下の総合的な調査研究を本格的に開始した。熊本城調査研究センターでは、これまで特別史跡熊本城跡で長年実施されてきた様々な整備事業、資料収集、発掘調査などの成果を取りまとめて本質的価値の調査・研究の基礎資料とするため、特別史跡熊本城跡総括報告書の刊行を企画した。

総括報告書は、整備事業を取りまとめた『整備事業編』、古文書・絵図・古写真などを網羅した『歴史資料編』、発掘調査の成果を中心とした『調査研究編』の 3 編で構成するもので、平成 27 年度末に『整備事業編』(2016)を刊行した。

その後平成 28 年 4 月に熊本地震が発生し、熊本城では石垣や重要文化財建造物などに甚大な被害を受けた。平成 29 年度からは本格的な復旧工事などに着手しているが、その一方で調査研究業務も継続しており、残り 2 編の総括報告書(歴史資料編、調査研究編)の作成も進め、平成 30 年度には『歴史資料編』を刊行した。今回、令和元年度に『調査研究編』を刊行する運びとなった。これらの調査研究成果については、熊本地震で被災した熊本城の復旧工事に対しても、随時反映している。



2-1-1-1 図　熊本城位置図



熊本市周辺の地質図　熊本県地質図（10万分の1）説明書（2008）より加筆引用

凡例

A4：阿蘇－4火砕流堆積物　Kbo：金峰火山古期噴出物　A13：阿蘇－1～3火砕流堆積物　t1：低位段丘堆積物　t2：中位段丘堆積物
Ki：金峰火山新期堆積物　Ys：芳野層　ta：崖錐堆積物　Kbm：金峰火山中期噴出物　Kum：熊本層群　Ai：赤井火山（砥川溶岩）
Mu：御船層群上部層　FH：布田層・花房層　MI：御船層群下部層　vg：苦鉄質火山岩類　cc：結晶質チャート　um：超苦鉄質岩類
Gks：屋回山層　Ol1：大岳古期輝石安山岩溶岩　Ol3：大岳新期角閃石安山岩溶岩　Ol4：大岳新期輝石安山岩溶岩
Op1：大岳新期角閃石安山岩火砕岩　Op2：大岳新期輝石安山岩火砕岩

○の範囲は調査地、○の範囲は自然堤防の範囲を示す。

2-1-1-2 図　熊本市周辺の地質図

第１節　地理的環境

第１項　概要

熊本市は、熊本県の県庁所在地として発展し、平成 20 年(2008)に富合町、平成 22 年に植木町・城南町と合併した結果、人口が 73 万人に達し平成 24 年度に政令指定都市に移行した。この合併により市域は大幅に拡大し、面積は熊本県全体の 5.3% にあたる約 390 ㎢を占めるに至った。以下、熊本城周辺を中心に熊本市域の地勢について概観する。

市域は大きく分けて、有明海と内陸部を隔てている中央西側の金峰山塊、市域南西西側にあって有明海に望み、台地と山地で縁どられた広大な熊本平野、北部・東部・南部にかけての台地(火砕流台地・河岸段丘)で構成される。市域には、東西に貫流する白川、南東から東西に貫流する緑川の水系があり、熊本平野に望む台地は両水系によって開析され、活発な沖積作用により熊本平野は形成された。

東部の台地は、先端の熊本平野から北へ向かって標高を増し、阿蘇外輪山西側斜面へと続く。北側の台地も熊本平野から北へ向かってやや標高を増しながら続き、国道 208 号線・県道 30 号線付近を境に標高を下げて、山鹿盆地・玉名平野に望む。先の道路付近が分水嶺境界となり、境界から北側は木葉川や合志川などの菊池川水系の河川に開析されている。

熊本城跡は、通称京町台地先端の茶臼山に立地する。この台地は阿蘇火山起源の火砕流堆積物が基盤をなす。阿蘇火山からの火砕流は数万年の間隔をおいて 4 回起こり、最大規模であった約 9 万年前といわれる最後の火砕流(以下「Aso-4」と略す)が熊本市域を広範に厚く覆っている。京町台地より東側の台地は、さらに Aso-4 以後の砂礫層に覆われているが、この砂礫層は京町台地までは到達していない。このため、京町台地を含めて金峰山塊までの間は Aso-4 の端部の様相を呈し、火砕流が金峰山塊にのり上げた格好になるため、噴出源である阿蘇火山に対して逆傾斜になる。火砕流は花岡山にも到達し、その先は沖積平野の下に潜っている。この火砕流による堆積物は、深い部分では溶結し硬質の溶結凝灰岩となり、浅い部分は溶結が進まず軟質の非溶結凝灰岩となる。熊本城域においては、熊本県立第一高等学校(以下第一高校)グラウンド・藤崎台県営野球場(以下藤崎台)・清爽園(明治時代に整備された庭園)などの崖面に非溶結凝灰岩の露頭が確認できる。

Aso-4 の後は、地形に影響するような大きな火山活動は無く、熊本市域の洪積台地は主に阿蘇火山や雲仙火山起源の火山灰に覆われている。火山灰の上位は腐植の集積した黒土層で、黒ボクと呼ばれ現在の表土となる。下位は粘性の強い褐色土で赤ボクと呼ばれる。黒ボクの下位には、2 万 9,000 ～ 2 万 6,000 年前とされる鹿児島湾の姶良大噴火に起因する姶良丹沢火山灰が混入し、肉眼でも火山灰ガラスを観察できる。その上位に 7,300 年前の喜界カルデラ大噴火に起因する喜界アカホヤ火山灰が確認される地域があり、遠隔地の火山活動による火山灰が人類史を区分する鍵層となっている。

火砕流堆積物と火山灰によって形成された京町台地は、白川水系の坪井川・井芹川とその支流により開析され、河川の主な流下方向である南北方向に長く伸びる。河川の浸食は非溶結凝灰岩だけでなく溶結凝灰岩も樹枝状に解析し、京町台地は急崖に縁どられる特徴的な地形を呈している。台地表面の起伏は弱く、基盤である火砕流堆積物と同様に北東から南西へ緩やかに下がりながら熊本平野へ至る。

第２項　金峰山塊の岩質

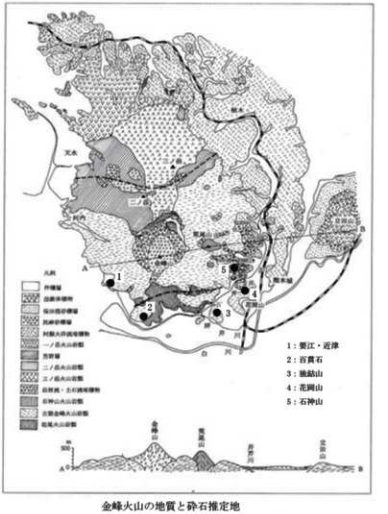
熊本城跡の石垣の大半は輝石安山岩である。これは金峰山塊で産出される安山岩の一つで、立地も含めて金峰山塊が主産地と想定されている。実際に、矢穴の痕が残る転石も確認されている。以下に石垣石材の生成に絡む金峰山塊について記す。

金峰山塊は、一つの大きな成層火山ではなく、多くの火山の集合体である。火山の活動は 2 期に大別され、古期噴出物としては、80 ～ 120 万年前の活動による松尾山火山岩類・古期金峰火山岩類・石神山火山

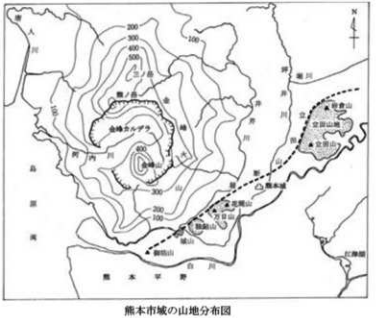
岩類があり、新期噴出物としては、三ノ岳火山岩類・二ノ岳火山岩類・カルデラ形成後に成長した一ノ岳(中央火口丘)火山岩類がある。古期噴出物の岩質は、玄武岩・輝石安山岩・角閃石安山岩など多様であり、うち、角閃石を少量含む輝石安山岩が主体をなす。これは、粘性の強い溶岩噴出によって生成されたもので、肌理が細かく、割るのにも適していることから、加工石材として現在も広く利用されている。現在の安山岩類の採掘場は、古期噴出物から形成される地域、すなわち外輪部の南東―南―西側で数箇所が知られる。

外輪部とはやや離れるが、地質的に同質の火山噴出物で構成された丘陵がみられる(2-1-2-1 図)岩倉山・花岡山・万日山・独鈷山・城山・御坊山で、北東―南西方向に並び、南西になるにつれて、順次面積・高度が小さくなる。この丘陵群は、西側・北東側斜面が急であるのに対して、東側・南西側斜面が緩やかな非対称な断面形を呈する傾向を示す。これは丘陵群にそって立田山断層が存在することに起因しており、本来、外輪部であった丘陵群が断層活動によって金峰山塊から切り離されたためと考えられている。熊本城が立地する茶臼山もこの並び上に当たる。現状では安山岩の露頭はみられないが、昭和 35 年(1960)の天守再建に先立つボーリング調査で、天守東側地下約 36 mに安山岩層が存在するとされている。先述の丘陵群と同様に金峰山塊から切り離された後で火砕流に覆われ小高い地形になった可能性もある。

立田山断層は、熊本城の北側付近を走ると想定されている。城内と京町を分ける新堀も、立田山断層に起因する丘陵の狭隘部を利用したとされ、京町台地と茶臼山丘陵を分ける高低差もこの断層によるずれとも考えられている。なお、地質



金峰火山の地質と砕石推定地



熊本市域の山地分布図

0　　10km

2-1-2-1 図　熊本市域の山地と金峰火山

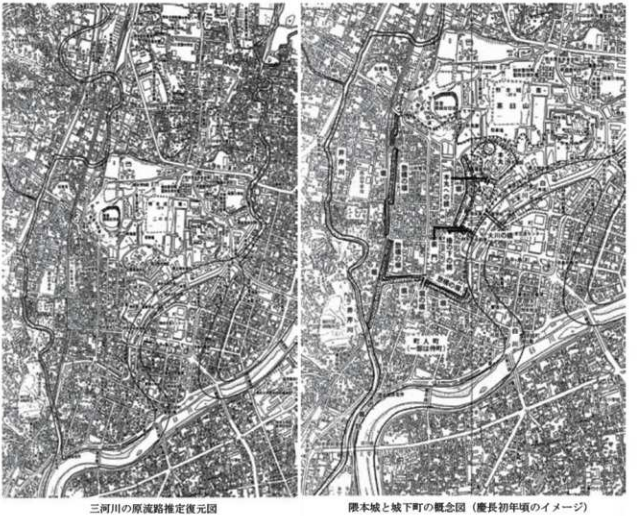
図(2-1-1-2 図)によれば、津浦・高平・徳王付近にも同質の噴出物が表示されている。

熊本城石垣の石取場の推定については、富田紘一の研究がある。これによれば、石垣採石により地形が大きく変化している可能性が高いことから、大量の熊本城石垣の供給を賄い得た場所として、坪井川河口付近の要江・近津を主要採掘地の有力候補としている(富田 2007)。この他、岩石学的成果の援用、『肥後国誌』などの伝承、矢穴の痕跡を認める転石などの存在から、石神山・花岡山・独鈷山・百貫石付近などを採石地として紹介している。

第 3 項　熊本城跡の地形

京町台地の先端は現在の新堀橋付近で東西幅が狭くなっており、古来から茶臼山とも呼ばれていたように独立丘陵状を呈している。平面形は河川開析による大小の弧の連続で構成されており、全体としては現在の第一高校を要とし、東の千葉城、西の藤崎台、清爽園などの崖面に Aso-4 火砕流堆積物の非溶結凝灰岩露頭がみられる。

崖面の形成は河川により削られたものだが、富田紘一の研究成果(富田 1996)によれば熊本城築城時、白川も京町台地に接して流れていたとされる。富田は、「慶長国絵図」(永青文庫蔵)などをもとに、現在熊本城の南を流れる白川が、世継橋から北側へ大きく蛇行し、市役所付近で坪井川と合流していて、これを 17 世紀初頭に加藤清正が白川を直線化し、現在の流路に付け替えたとする。富田の旧白川跡想定地となる下通筋には、現在でも帯状窪地がみられる。この河川の流路変更と合わせて城内の南崖面を概観すると、

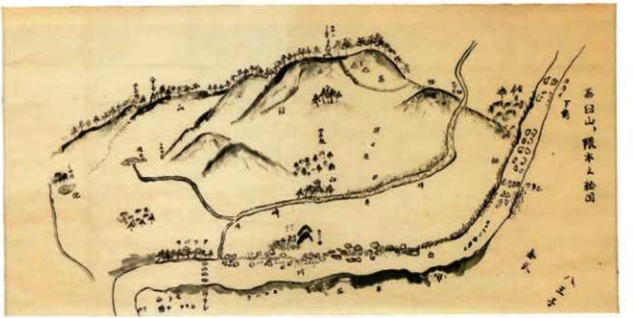


三河川の原流路推定復元図　　熊本城と城下町の概念図（慶長初年頃のイメージ）

2-1-3-1 図　三河川流路と城下町のイメージ

第一高校のグラウンドに面した崖面、国立病院機構熊本医療センター(以下、国立病院)と桜の馬場の間の段差、桜の馬場と奉行丸の間の段差、東竹の丸の高石垣と連続した高低差の大きい孤状の地形は、白川・坪井川の浸食面であった可能性を想定できる。実際、桜の馬場の発掘調査や第一高校長官舎建設に伴う発掘調査の際に、流路であった部分を2～5mほどの厚さで埋め立てていることが確認されている。埋立前は、白川に削られた崖面が連続していたのであろう。飯田丸は、浸食面と思われる地形の一部に当たると思われるが、曲輪はやや南へ突出した地形となっている。

築城前の旧地形を知る参考資料としては、「茶臼山ト隈本之絵図」(熊本博物館蔵)(2-1-3-2図)がある。築城前の地形が独立丘陵上に描かれ、「クワンノン堂」など築城前の土地利用状況を示している。しかし、先の白川の蛇行の表現もなく、いつ頃の景観として描かれたものかわかっていない。ただ旧地形は、この絵図にあるように、現在の本丸付近を最高所として東は急に、西へは緩やかに下がる地形であった。



2-1-3-2図　茶臼山ト隈本之絵図(写)(熊本博物館蔵)

第2節　歴史的環境

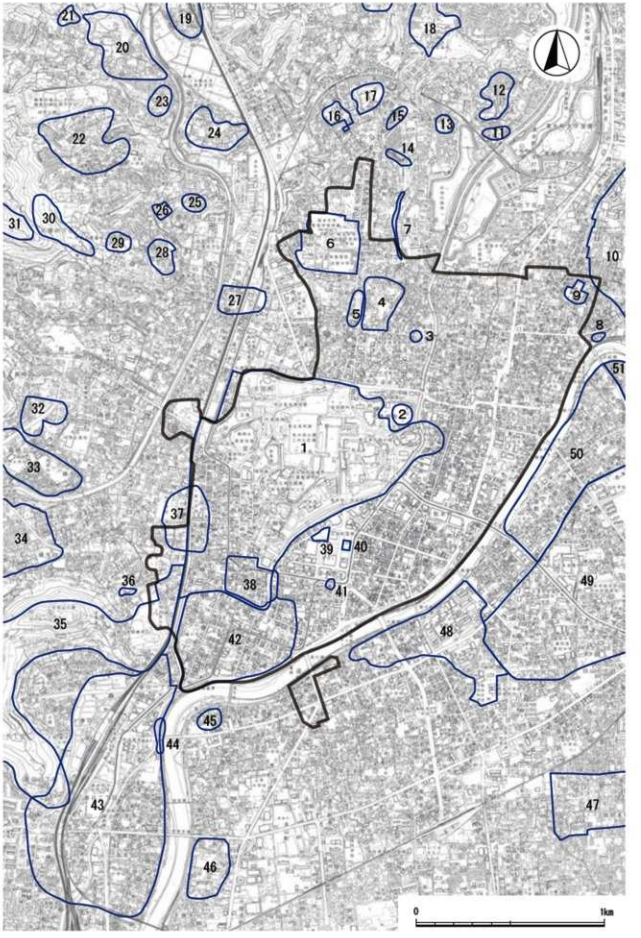
第1項　周辺遺跡の概要

熊本城跡の土地利用の概略は、古代から中世にかけて国府所在地であった二本木遺跡群をはじめ各所へ向かう官道などの交通の要所、中世の寺院、戦国期の城を経て、近世城郭の築城となり、近代の軍用地を経て現在に至る。城下町は、中世までの国府を核とした二本木遺跡群の町屋・寺院を、加藤清正が古町に移して隈本城時代の城下町と融合し、現在に至る。

以下に、熊本城跡遺跡群周辺の旧石器時代～中世について、時代ごとに記す。

市域における旧石器時代の遺跡は、金峰山麓・立田山麓にみられ、山麓から派生する丘陵裾部でも近年出土例が増加している。熊本城周辺域ではまだ出土例がない。

縄文時代の遺跡は、金峰山丘陵裾部に濃密に分布する。特に後晩期の遺跡が多く、井芹川上流には太郎迫遺跡や四方寄遺跡など著名な遺跡もある。熊本城跡遺跡群周辺域では、二本木遺跡群で中期から晩期の土器・石器、京町台遺跡群で晩期の遺物、熊本城跡遺跡群の西縁部に当たる段山遺跡で打製石斧や磨製石斧が採集されている。島崎遺跡も同時期の遺物が出土している。熊本城跡遺跡群においても、天守閣南の地蔵門の脇から縄文時代後期の土器片がまとまって出土している。



2-2-1-1 図　熊本城周辺遺跡分布図(2-2-1-1 表に対応)

2-2-1-1 表　周辺遺跡一覧表

No.	遺　　跡　　名	主要な時代	備　　考
1	熊本城跡遺跡群	縄文～近代	国指定特別史跡熊本城跡・段山遺跡・千葉城横穴群・磐根橋際横穴群・古城横穴群・茶臼山廃寺・藤崎宮跡
2	藤園中学校校庭遺跡	弥生中期	甕棺出土
3	内坪井遺跡	弥生	
4	伝大道寺跡遺跡群	弥生～近代	
5	京町2丁目遺跡	近世	
6	京町台遺跡群	縄文～近代	伝赤尾丸城跡
7	寺原横穴群	古墳	
8	子飼遺跡		
9	七軒町遺跡		
10	黒髪町遺跡群	縄文～平安	
11	打越貝塚		
12	打越遺跡群		
13	舟場山古墳	古墳時代	
14	稗田横穴群	古墳時代	
15	津浦一ノ谷横穴群	古墳時代	
16	池田城跡		
17	池田町遺跡（池田小学校遺跡）		
18	池田山伏塚遺跡群		
19	北島遺跡群		
20	柿原遺跡群		
21	シブラ墓地		
22	経塚遺跡群		
23	柿原宮ノ原廃寺		
24	池亀遺跡		
25	井芹遺跡（井芹甕棺遺跡）	弥生中期	
26	井芹城跡	中世	
27	牧崎遺跡（牧崎甕棺遺跡）	弥生中期	1966年、甕棺14基出土。
28	中尾丸城跡	中世	
29	本妙寺北遺跡		
30	本妙寺A箱式石棺群	古墳時代	
31	本妙寺B箱式石棺群	古墳時代	
32	石神原遺跡	縄文	
33	千原台遺跡群	縄文	
34	戸坂遺跡	弥生・古代	
35	花岡山・万日山遺跡群	古墳・近世	花岡山箱式石棺群・万日山古墳・万日山東古墳・万日山山頂古墳・妙解寺跡
36	吉祥寺横穴群	古墳	
37	新馬借遺跡	古代・中世	
38	船場町遺跡	弥生中期	1977年、下水道工事中に甕棺出土。
39	山崎古墳	古墳	消失、位置不明瞭。
40	花畑邸跡	中世・近世	加藤・細川時代の藩主邸宅の一部、世継神社跡地
41	辛島町遺跡		
42	古町遺跡	弥生～近世	
43	二本木遺跡群	縄文～近世	北岡神社古墳・北岡神社横穴群・春日町遺跡・古町小学校校庭遺跡・館田国府推定地
44	石塘遺跡（白川橋遺跡）		
45	本山城跡	中世	
46	世安池田遺跡		
47	出水国府跡	奈良～平安	
48	本庄遺跡（熊大病院敷地遺跡）	縄文～近代	
49	大江遺跡群	縄文～中世	
50	新屋敷遺跡	縄文～中世	
51	大江白川遺跡		

（2-2-1-1 図の黒線は、『平山城肥後国熊本城廻絵図』（熊本県立図書館蔵）の城下の範囲を示す）

弥生時代の遺跡は、市域全体で早・前期は少なく、中期から急増する傾向がある。早・前期の資料は、二本木遺跡群から出土している。縄文時代晩期で途切れて弥生時代に連続しない遺跡が多い中で、この二本木遺跡群は、縄文時代晩期から継続して弥生時代早・前期の資料がみられる。扇状地と低地の境界に立地している点など、縄文時代から弥生時代への過渡期を考える上で注目される。弥生時代中期の甕棺も出土し、後期には壕や多数の竪穴住居群が出土している。鋼鏃の出土例もあり有力な集落が形成されていたようである。二本木遺跡群の南に位置する八島町遺跡でも、多数の竪穴住居があり、二本木遺跡群と同様な状況がうかがえる。熊本城跡遺跡群の周辺では、城下町が形成された白川右岸の京町台地の先端から南南西に伸びる緩扇状地にかけて、船場町遺跡の中期の甕棺、古町遺跡の中期の甕棺(唐人町遺跡)や、後期の竪穴住居群が出土しており、弥生時代中期頃から本格的な土地利用が始まったようである。後期には、桜町周辺・古町遺跡・二本木遺跡群・八島町遺跡・南新宮遺跡など、数百mから1㎞程度の距離をおきながら集落が営まれており、各集落間の関係性が注目される。他にも井芹遺跡・牧崎遺跡・藤園中学校校庭遺跡で中期の甕棺が出土している。

古墳時代の熊本城跡遺跡群周辺については、前期に京町台遺跡群と本庄遺跡で区画溝が見つかっている。ともに前期後半～末に集落の形成が始まっている。中期は本庄遺跡で多数の竪穴住居群が出土している。後期は京町台地に特徴的な崖地形に多数の横穴墓が造られている。熊本城跡遺跡群内にも古城横穴群・千葉城横穴群・磐根橋際横穴群がある。さらに北には、寺原横穴群や、津浦一の谷横穴群などがあり、熊本市域の横穴墓集中地の一つである。古城横穴群は、崖面に3段にわたって築かれ、数回の発掘調査で53基の横穴墓が確認されている。そのうち39号には「火守」あるいは「火安」と読める文字が刻まれた閉塞石があり、墓室からは鉄滓が出土している。被葬者の職制を反映したものと想定されている。千葉城横穴群は、昭和37年(1962)にＮＨＫ熊本放送局建設の際に発掘調査が行なわれ、10基の横穴墓が出土した。横穴墓の配置は「コ」字状に前庭部を共有した横穴群であった可能性もある。これらの横穴群の集中に対して、墳丘を持つ古墳の分布は少ない。緩扇状地上にあった船場山古墳・長迫古墳・山崎古墳は、開発によって消滅し位置も不明瞭である。その中で山崎古墳は、長瀬真幸の調査記録により、寛政8年(1796)に主体部が発見されたことが知られる。発見の経緯と人骨や遺物の良好な出土状況は、長瀬の知友であった伴信友の『信友随筆』などに収録されて今日に伝えられている。京町台地から離れたところでは、花岡山・万日山遺跡群や二本木遺跡群で墳墓がみられる。古墳についてはいずれも現存していないが、注目事例を記しておく。花岡山箱式石棺群(花岡山・万日山遺跡群)では、箱式石棺の近くから中期の土師器壺が出土している。この壺には、中に碧玉製勾玉2個・碧玉製管玉1個・ガラス玉26個が納められており、地鎮行為に伴い埋納されたものと考えられている。万日山古墳(花岡山・万日山遺跡群)は石室の構造、出土遺物から7世紀前半に比定される。全長12.3ｍの特異な構造の横穴式石室は、玄室の左右に石屋形を設け奥壁に刳抜式の家形石棺を設置している。家形石棺については畿内的様相が認められる。これらの点から本古墳は当該地域における首長墳と捉えられ、安閑2年(535)に当該地域に設置されたとされる春日の屯倉との関連性も考慮される。北岡横穴群(二本木遺跡群)は上下3段に展開し、下段は枝分かれ状に伸びる長い前庭部をもつ。県下に類例は少なく、北部九州の遠賀川流域に認められる特徴である。墳墓に対して集落は調査例が少ない。二本木遺跡群に後期の井戸がある。

古代において最も注目されるのは二本木遺跡群で、7世紀末以降遺跡の隆盛が著しく、特に8世紀後半～9世紀前半において充実している。これまでの発掘調査で、大規模な建物を含む規格的な配置の建物群や、陶硯・瓦の大量出土から官衙施設と想定される遺構を検出している。少なくとも郡衙以上の規模と内容も持った施設で、国府とみなしても何ら遜色ない。官衙施設の周辺には、竪穴住居や掘立柱建物で構成される大規模な集落が広がっており、輸入陶磁器・国産陶磁器や腰帯具・文字土器などの希少遺物も大量に出土している。特に集落の端にある村落内寺院付近で出土した唐三彩は注目される。二本木遺跡群以外に、

古代飽田郡の施設とみられるのが京町の伝大道寺跡遺跡群である。京町一帯は近世に武家屋敷・町人町として開発され、そのまま現在の市街地になっているため近世以前の様相はわかりにくいが、本遺跡からは7世紀後半～9世紀の瓦が出土している。この期間の瓦が継続して出土する遺跡は熊本市域では今のところ本遺跡のみである。伝大道寺跡遺跡群付近には、養蚕駅から西へ延びた官道が想定されており、飽田郡の重要地点に造られた施設であった可能性もある。なお、熊本城内でも二の丸・三の丸・監物台で古瓦や土師器・腰帯具が出土している。ほか戸坂遺跡でも古代の集落(竪穴住居・掘立柱建物)が確認されている。

中世も引き続き二本木遺跡群が隆盛する。二本木遺跡群では近世まで遺構・遺物が途切れなく認められる。10世紀代に当該地に国府が移転・設置され、これに連動して肥後国の中心として周辺域が発展したことによるとみられる。遺構・遺物ともに膨大・多様であり、溝による半町単位の矩形土地区画がみられるなど、都市的な様相を呈する。資料数・範囲は10世紀後半～11世紀代において限定的であるものの、12世紀代には急増して、ピークをみる。その後も多くの資料が認められ、都市として繁栄したことが窺われる。しかし17世紀前半には急減・衰退する。これは加藤清正の入国により、熊本城下(古町遺跡)に町屋・寺院が移転したことによるものと理解されている。古町遺跡にも中世の資料が認められるが、これは二本木遺跡群における都市の拡大・伸長によるものと想定される。

中世城としては、国衆といわれる在地土豪の居城である隈本城(千葉城・古城跡―いずれも熊本城遺跡群内)、鎌倉御家人詫磨氏の居城とされる本山城があげられる。現第一高校セミナーハウスでは、発掘調査により、散兵線とされる溝や版築土塁を検出している。本山城跡は字名から城城が想定されているが、現況の地形や試掘確認調査の成果からは城の存在は不明瞭である。京町台遺跡群で中世末期の堀が確認されている。

中世の石造物資料は、熊本城内(熊本城跡遺跡群)や古町遺跡内の寺院に分布している。熊本城内のものとしては、大永2年(1522)銘「釈迦立像線刻板碑」、本丸御殿南に大永4年(1524)銘「如意輪観音像線刻板碑」、天文5年(1536)銘「阿弥陀三尊種子板碑」など、銘があるだけで12基確認されている。五輪塔地輪も礎石や石垣の一部に転用されており、熊本城築城以前の茶臼山には中世寺院(茶臼山廃寺)が存在したと想定されている。古町遺跡の寺院内には、善教寺境内の建長2年(1250)銘宝塔塔身が最古例としてあり、15世紀末から16世紀前半の板碑が多く見られる。

第2項　熊本城と城下の変遷

熊本城や城下について、文献のほか発掘調査などで考古学的所見が得られた内容を加味し、時代を追いながら記述する。

熊本城が文献に登場するのは、南北朝時代である。肥前国松浦の大嶋堅と大嶋政の永和年(1377)の軍忠状にみえる「隈本城」が初出で、位置の特定はされていない。

熊本城跡遺跡群内での端緒は、応仁年間に出田秀信が茶臼山の東側に迫り出した千葉城と呼ばれる一帯に城を築いたことに始まるとされる。なお地名としての千葉城は旧城城の中で東端台地にある。旧NHK熊本放送局建設時の発掘調査で横穴群が発見されたことから、旧地形が残されていることは明らかである。またその北側にはかつて旧城城を区分していた旧坪井川の流路も残り、歴史的景観を留めている。その後、『肥後国誌』によれば、明応5年(1496)に鹿子木親員(寂心)が築き、城親冬が天文19年(1550)に入城したという隈本城の城城は、第一高校から国立病院敷地内一帯と想定されている。現在でも古城という地名が残り、第一高校周辺には城内最古の石垣が良好な状態で残存している。発掘調査としては、第一高校セミナーハウス建築に伴う調査で15世紀半ばから16世紀後半の陶磁器が出土し、国立病院の看護学校建設に伴う調査で16世紀前葉からの掘立柱建物群が出土している。この掘立柱建物群は堀・柵・櫓で構成された防御施設で、鹿子木氏・城氏の在城時期と合致することから、当時の城城を考える上で重要な調査成果と

なった。

隈本城には、天正 15 年(1582)に佐々成政が、翌天正 16 年には加藤清正が入城し、清正は中世の城を織豊城郭に改修を進めている。その後、加藤清正は隈本城を拡大して、京町台地南端の茶臼山一帯に熊本城を築城した。出土資料としては、「慶長四年八月吉日」銘の滴水瓦が出土しており、少なくとも慶長 4 年(1599)から何らかの工事が行なわれていたと考えられる。本城整備に伴って、白川・坪井川の改修、城下町の再編成も行なわれた。先述のように、大きく蛇行していた白川の流路を直線的に付け替え、それまでの白川流路と隈本城惣堀を利用して坪井川を開削したと考えられている。これにより、熊本城南側の防御線は、坪井川を内堀、白川を外堀に相当させることで強化され、加えて城下の洪水解消、武家屋敷の面積拡大、船運路の整備にもつながった。

旧白川の流路にあたると想定される桜の馬場地区の発掘調査でも、17 世紀初頭に埋め立てられた流路が確認されている。同じ旧流路の下流にあたると想定される第一高校の校長官舎建築に伴う発掘調査でも、厚さ 5 m にわたる版築層が検出され、その下位に河道を示す砂地が確認されている。いずれも旧白川の埋め立てに関連する調査成果である。国立病院の看護学校建設に伴う調査では、加藤期と想定される道路が出土しており、築城に際した資材運搬用の修羅道の可能性が指摘されている。

加藤治世期の末、寛永 6 ～ 8 年(1629 から 1631)頃の作と推定される「熊本屋敷割下図」(熊本県立図書館蔵)は、拡大・再編された城下町の様子を知る最古の資料である。この絵図にみえる城下町の範囲は、東から南は白川、北は出京町、西は段山から新町の高麗門・古町西側の坪井川・井芹川・石塘までである。北側の京町は、京町台地の東側・西側が急崖で囲まれており、北端に空堀と土塁を設けていた。

現在の新町は、隈本城時代の侍町として始まり、その後惣構として整備された。惣構は、西側には新町西側の水堀と堀の東側に土塁を設け、南側は新たに掘削した坪井川で区切った。惣構と城内を区切るのは新一丁目御門で、現在の法華坂の清爽園付近にあった。枡形を伴う櫓門であったが、枡形を含めて現存しない。門の前は広場となり、高札が掲げられ札ノ辻と呼ばれ、各方面に伸びる街道の基点となったとされる。惣構の西側は城の裏鬼門にあたるため寺町を整備し、惣構との連絡に「こうらい(高麗)門」が設けられた。

惣構の南側の古町には、古府中から移転した町屋が整備された。古町遺跡の発掘調査資料は、このことを反映しており、16 世紀末～ 17 世紀初頭から増加する。惣構内の新町が短冊形の町割で、「T」「L」字状の道が多いのに対して、古町は方一町の碁盤目状の区画の中央に寺院を配置するという特異な町割が形成された。町割形成当初の武家地と町屋の違いと考えられ、その間は坪井川で明確に区切られている。惣構と町屋の連絡には、惣構側に新三丁目門と坪井川に現明八橋が設けられた。新三丁目門は、絵図では枡形を伴う櫓門であることが分かっていたが、近年発見された長崎大学図書館所蔵の古写真で、城内の櫓門に匹敵する規模であったことが分かった。古町の一角の阿弥陀寺周辺に土塁の残存がみられ、惣構のように戦略上の配慮や水害対策が施されていた可能性もある。

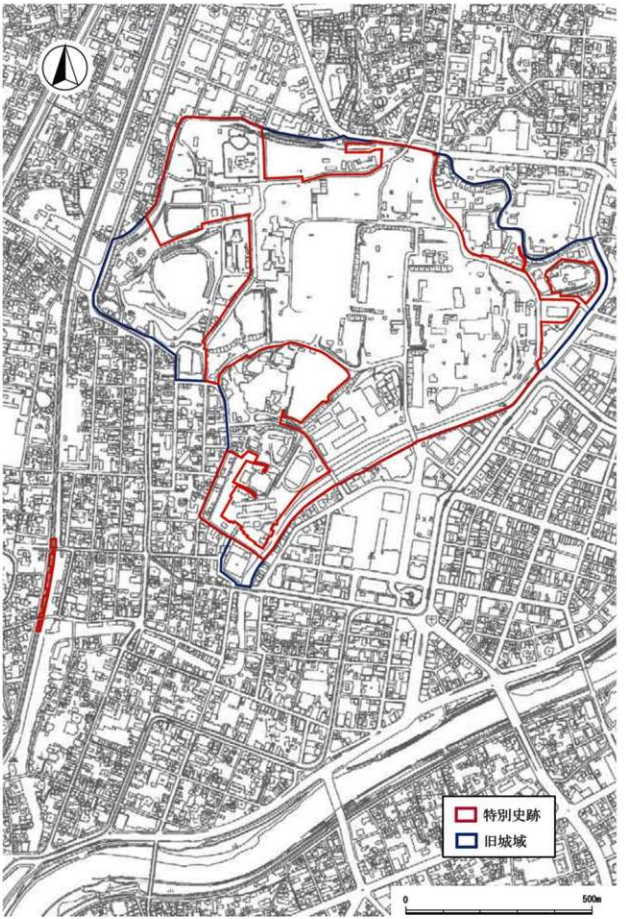
明治維新の後、明治 4 年(1871)に、城内に鎮西鎮台が設置され、その後熊本城は第二次世界大戦終了まで陸軍の管理下に置かれた。明治初期には、各地の城郭と同じように隈本城でも櫓・塀・石垣の解体や改修が行なわれ、明治 10 年(1877)には西南戦争の主戦場の一つとなり、天守をはじめとする本丸中心部の大半の櫓が焼失した。本丸御殿の発掘調査では、焼失した御殿の建築材、金具などが焼損した状態で焼土とともに多量に出土している。西南戦争では城下町も戦場となり、「射界の清掃」戦略で意図的に火が放たれ、大半が焼失した。その痕跡は、新馬借遺跡や古町遺跡での発掘調査で確認されている。古町遺跡の発掘調査では、江戸期の表土を広範に覆う焼土層と判断された。

西南戦争の後、軍施設はさらに整備され、明治 21 年(1888)には第六師団となる。軍の組織が整備されるに伴い、城内各所に新たな施設が建てられ、現在の天守前広場には大正 6 年(1917)に師団司令部が置かれた。桜馬場地区は、西南戦争以前から砲兵隊が置かれ、その後兵器工廠となった場所で、平成 20・21 年

(2008・2009)に行われた同地区の確認調査で、大正年間(1912 ～ 1926)に造られた工廠の煉瓦造り建物の基礎が確認されている。西南戦争で焼失した城下町にも、戦後、山崎練兵場など軍関係の施設が整備されていく。

明治22年(1889)に就任した第3代熊本市長辛島格は、熊本市を九州地方の中枢管理都市にすべく尽力し、周辺町村との合併や三大事業と呼ばれる上水道・市電の整備、歩兵第二十三連隊の移転を推進した。旧城下町にあたる山崎練兵場などの軍施設の移転は、当時の時代性もあり難航を極めたが、飽田郡大江村(現在の熊本市中央区大江)に移転することで同意がなされた。移転は明治 33 年(1900)に行なわれ、市街地を分断していた練兵所跡地は新市街となり、現在につながる市街地形成が行われた。山崎練兵場が移転した先の大江遺跡群では、移転後、軍による大規模な造成が行なわれ、土地が平坦化されるとともに多くの遺跡が失われた。発掘調査では、三角兵舎の柱穴跡や塹壕跡がしばしば確認され、第二次世界大戦頃の軍用品が出土することも少なくない。

熊本城は、大正末期から城跡の保存・顕彰が叫ばれるようになり、熊本城陞保存会が発足した。この会が中心となって、昭和 2 年(1927)宇土櫓を解体・修理、長塀を改築している。昭和 8 年(1933)には熊本城全域が史跡となり、残存していた建造物が国宝に指定されている。昭和 25 年(1950)、文化財保護法により、国宝建造物が重要文化財に指定され、昭和 30 年(1955)には城内の主要部分が特別史跡に指定されている。昭和 35 年(1960)には、大天守が小天守とともに鉄骨鉄筋コンクリートで外観復元された。昭和 50 年(1975)には、西出丸戌亥櫓跡から西大手門跡の石垣が復元された。昭和 57 年(1982)には、「特別史跡熊本城跡保存管理計画」がまとめられ、保存と整備の方針が決まる。昭和 56 年(1981)には西大手門の再建が行なわれ、平成元年(1989)には、宇土櫓の修復と数寄屋丸二階御広間の復元を行なった。平成 3 年(1991)、台風 19 号の襲来により、長塀中央部分が倒壊した。平成 5 年(1993)には、熊本城三の丸一帯を熊本市が買収し、東子飼町にあった旧細川刑部邸を移築復元している。平成 11 年(1999)台風 18 号により、西大手門が倒壊する。平成 14 年(2002)に南大手門の復元をはじめ、平成 15 年(2003)には戌亥櫓、未申櫓、元太鼓櫓、西大手門と西出丸一帯復元が完了した。平成 17 年(2005)には、飯田丸五階櫓の復元が完了する。平成 19 年(2007)には、熊本城築城 400 年を記念して本丸御殿大広間を復元し、平成 20 年(2008)から公開した。平成 28 年熊本地震で石垣、地盤、重要文化財建造物、復元建造物、便益・管理施設などに甚大な被害が発生した。現在は平成 28 年(2016) 12 月に策定された「熊本城復旧基本方針」及び平成 30 年(2018)3 月に策定された「熊本城復旧基本計画」に基づいて、城内各所の復旧工事を進めている。また昭和 57 年(1982)作成の「保存管理計画書」を大幅に改訂する形で、平成 30 年(2018) 3 月に「特別史跡熊本城跡保存活用計画」がまとめられ、今後の特別史跡熊本城跡についての保存と整備の方針を策定した。



2-2-2-2 図　熊本城周辺図

第3章　熊本城研究史

熊本城については、文献史学・建築史学・考古学など複数の分野から各々ないし総合的に研究されてきた。そのため、各学問体系や研究者の専門領域などで明瞭に区分して研究史を論じることができないのが現状である。こうしたことから、本章では、研究対象である、1. 文献資料、2. 遺構、3. 遺物、と大きく三分類して詳述することとする。また、2. 遺構については、(1)建造物、(2)記念物にわけて詳述することとする。なお、熊本城に関する研究史は膨大にあり、観点も多岐にわたるためすべてを紹介するに至らず、限定的な研究史となったことを断っておきたい。また、個別に取り上げることのできなかったものについては、本章末の一覧表を参照されたい。

1. 文献資料からのアプローチ

ここでは、まずは文献資料の定義とその概要について触れたうえで、研究対象・内容をテーマ別に大きく括って詳述することとする。

(1)熊本城に関する文献資料の概要

熊本城の築城および修理などの維持・管理、城内建築物の使途や改廃について、書状・藩政文書・日記・明治時代以降の行政文書などの古文書・古記録があるが、これに絵図・指図・地図と古写真を含めたものを文献資料として本報告書では扱う。以下に、熊本城に関する文献資料について、これまでに報告された刊行物に触れながら概要を述べる。

熊本城に関わる文献資料としては、まず築城期のものとして加藤清正書状があるが、多くが個人や公的機関に分散的に所蔵されている。加藤家以降の熊本藩についての古文書・絵図などは、熊本藩主を務めた細川家に伝わったものが公益財団永青文庫に所蔵されている。また、絵図・地図については細川家から熊本県に移管された絵図や、明治以降の地図類が現在熊本県立図書館に多く所蔵されている。古写真については明治3年(1870)に熊本で開業した冨重写真所に原板・プリントが多数所蔵されているほか、明治初期に熊本に外国人教師として滞在したジェーンズのアルバムがプリンストン大学に、ジェーンズと同時期に熊本医学校の教師として熊本に滞在したマンスフェルトのアルバムや、長崎の写真師上野彦馬の撮影とされる写真が長崎大学附属図書館に所蔵されている。写真については、プリントされ天皇に献上されたものや、土産として出回ったものもあり、宮内庁をはじめとする各所に所蔵されている。一方、明治以降の鎮台・師団関係資料は防衛省防衛研究所の所蔵する『陸軍省大日記』に多く記載がある。

これらの文献資料のうち刊行されたものとして、古くは明治21～25年(1888～1892)にかけて宮内大臣から布達された国事執掌事業のため嘉永6年(1853)6月から明治4年(1871)7月までの熊本藩の史料をまとめ、大正2年(1913)に宮内省に提出された『肥後藩国事史料』があり、幕末維新期の熊本城に関する史料が掲載されている。その後、改訂され昭和7年(1932)に出版された(細川家編纂所 1974『改訂肥後藩国事史料』國書刊行会)。

戦後には『熊本縣史料』として中世篇5冊、近世篇3冊が刊行された。中世篇には全国に分散して所蔵される加藤清正書状 227 通が収録され熊本城築城期の基本的な史料を把握することができる(熊本県 1963『熊本縣史料中世篇』)。また、近世篇には永青文庫細川家文書の「部分御旧記」24 部のうち、公用部から普請作事部までの10部が翻刻され収録された(熊本県 1966『熊本縣史料　近世篇第一～第三』)。その後、昭和44年(1969)からは東京大学史料編纂所による細川家文書の刊行が始まり、現在までに 26 巻が刊行されており(東京大学史料編纂所 1969～2018『大日本近世史料細川家史料　一～二六』東京大学出版会)、細川忠興・忠利・光尚や幕閣の往復書状のなかに熊本城の修理に関するものが含まれている。一方古写真については、冨重写真所の開業者である冨重利平の写真が荒木精之によって紹介された(荒木精之編 1977『冨重利平作品集』冨重利平作品集刊行会)。

その後、昭和40年代から60年代にかけて、『藩法集』(藩法研究会 1971『藩法集7　熊本藩』創文社)や『肥後文

献叢書』(武藤畿男・宇野東風・古城貞吉編 1971『肥後文献叢書(一)～(六)』歴史図書社)、『加藤清正伝』(中野嘉太郎 1979『加藤清正伝』青潮社)、『熊本藩町政史料』(細川藩政史研究会 1985～1993『熊本藩町政史料 1～3』)などの史料集の刊行が相次いだ。また、昭和 63 年(1988)から始まった新熊本市史編纂事業において刊行された史料編では、加藤清正書状や細川家入国直後の熊本城関連史料が収録されたほか(新熊本市史編纂委員会 1993～1999『新熊本市史　史料編』第 1 巻～第 9 巻　熊本市)、別編として近世・近代の絵図・地図が豊富に掲載された(新熊本市史編纂委員会 1993『新熊本市史　別編第 1 巻　絵図・地図上　中世・近世』『同　下　近代』熊本市)。

さらに平成 5 年(1993)には北野隆によって熊本城及び侍屋敷に関する絵図・指図が紹介された(平井聖監修・北野隆編 1993『城郭・侍屋敷古図集成　熊本城』至文堂)。また、永青文庫所蔵の絵図については熊本大学永青文庫研究センターから刊行された永青文庫叢書で、図の大要を知ることができる(熊本大学文学部附属永青文庫研究センター編 2011『永青文庫叢書　細川家文書　絵図・地図・指図編Ⅰ』吉川弘文館)。また、市街地図については近年、熊本市都市政策研究所がまとめた資料集で明治 22 年(1889)の熊本市誕生から戦後までの熊本市の変遷を知ることができる(熊本市都市政策研究所 2014・2016『熊本市都市形成史図集』『同　戦後編』)。

近年では、加藤清正書状の所在調査が進められ、613 通が確認されている(大浪和弥・鳥津亮二・山田貴司・金子拓編 2015『加藤清正文書目録』)。さらに、平成 31 年(2019)に熊本城調査研究センターは、熊本城と城下に関する基本的な文献資料をまとめた報告書を刊行し(熊本城調査研究センター 2019『特別史跡熊本城跡総括報告書　歴史資料編』熊本市)、従来個別に紹介されてきた古文書・絵図・地図・古写真を総括的にまとめたほか、近世中期以降の熊本城修理に関する永青文庫所蔵の記録や、防衛省防衛研究所に所蔵される近代以降の陸軍による城郭の維持管理に関わる史料を新たに紹介した。

(2)研究史

①中世隈本城について

加藤清正入国以前の隈本城に関する研究は、その所在の観点から言えば南北朝期の隈本城、出田氏時代の隈本城(千葉城)、鹿子木氏から城氏の時代の隈本城(古城)に分けて論じられている場合が多いが、特に南北朝期と出田氏時代の隈本城を連続するものとして考えているものもある。まず、南北朝期の隈本城の位置は、史料の制約があり特定されていないが、これまでに藤崎台地説、詫摩氏居城の本山城説が挙げられてきた。森下功は「肥後隈本城」は「藤崎御陣」と考え、藤崎台あるいは茶臼山の陣地が「隈本城」と呼ばれたと論じた(森下功 1984『茶臼山下隈本之絵図」について』『隈本古城史』熊本県立第一高等学校)。

阿蘇品保夫は、森下の隈本城=藤崎御陣説について問題を指摘したうえで、本山城や藤崎台・茶臼山も含んだ広い範囲に存在した可能性もあるとし、南北朝期の隈本城の位置については断定し得ないとした(阿蘇品保夫 1984「出田・鹿子木・城氏」『隈本古城史』熊本県立第一高等学校)。また、茶臼山築城の始まりは出田氏の千葉城であるという伝承は天和～貞享(1681～1687)頃に成立した「古城主記」にはじまり、その後の地誌に記述がわずかに追加されたことを述べた。また、出田氏が藤崎宮の惣政所として藤崎宮領の宮内荘をはじめとする茶臼山周辺地域の実質的支配者であったことからその拠点として、西側の藤崎台に対して東側の千葉城が選ばれたとした。また、千葉城とみられる隈本城が出田氏の城であったと推定される史料として文亀年間の「菊池武運(能運)書状」を挙げている。

柳田快明は、南北朝期の隈本城の位置について幾多の解釈があることを述べたうえで、藤崎台地説については森下や阿蘇品の引用する史料がすべて他国・他郡の人々になるものから地理的表現として正確さを欠いている可能性があること、本山城説については永和 3 年(1377)9 月段階で今川軍の攻撃対象となっていることから北朝方の詫摩氏居城説は成り立ち難いとした(柳田快明 1998「今川了俊の肥後攻略」『新熊本市史　通史編　第二巻　中世』熊本市)。また、永和 4 年(1378)の史料には「隈本敵城」を攻撃する向城として藤崎城が存在し、藤崎城は複数の陣地からなる臨時的に構築された城であろうとした。そして、隈本城の位置は特定できないが、藤崎城が藤崎台

地上にあったと考えるならば台地を隔てた場所にあってかなりの要害で、菊池一族を城主とする城として征西府時代に築城されたと推定した。

また、柳田は戦国期の隈本城は千葉城にあった出田氏の城で、その後に古城に移ったことは詳述していないが、『八代日記』の「隈本きおんひら城」の記述から、本来飽田国府のあった場所と区別して使われていた「隈本」という領域が、戦国期には旧国府を含めた領域として認識されるようになったと指摘した(柳田快明 2000「南北朝期から戦国期の『隈本城』を考える」『市史研究くまもと　11 号』、熊本市)。

また、村上豊喜は南北朝期の隈本城が南朝方、すなわち菊池氏またはその与同勢力の城であったことは間違いのないところとした上で、南朝勢力のルートとして岳→松尾→赤山→川尻→宇土→八代があったという高森荘子の説(高森荘子 1995「中世肥後の『南郡』について」『市史研究くまもと　6 号』熊本市)が隈本城へのルートとしても重要であったとし、戦国期にみえる「隈本ぎおんひら城」のあった花岡山が、飽田国府や託摩氏拠点の本山城を看守できる位置にあることと、花岡山に連なる万日山からは独鈷山・赤山城を看守できる位置にあることから、花岡山を隈本城の始まりとする説を提示した(村上豊喜 2010～2014「熊本城前史　中世の隈本城」『熊本城』復刊 80～95 号、熊本城顕彰会)。また、千葉城については出田氏の最後の砦、いわば私的城であったと推定した。

②新城築城開始時期について

茶臼山台地に築かれた熊本城、いわゆる新城の築城着手時期については、一般的に慶長 6 年(1601)築城開始、慶長 12 年(1607)完成が通説となっている。この他にも⑴天正 17 年(1589)から文禄年間(1592～1596)着工、慶長 5 年(1600)頃完成、⑵慶長初年着工、慶長 7 年(1602)完成(古城考)、⑶慶長 4 年(1599)、同 6 年本格的工事(熊本城出土軒平瓦銘)、⑷慶長 3･4 年頃着工、7 年完成(古城主考)、⑸肥後半国領主期着工、同期完成(細川家記)、⑹半国領主期着工、一国領主期完成(古城主考)、⑺一度完工した天守を宇土櫓に移し、そのあとに大天守再建、⑻慶長 12･13 年着工などの諸説が挙げられてきた(森山恒雄 2001「佐々・加藤の政治」『新熊本市史　通史編　第四巻　近世Ⅰ』熊本市)。

このうち、慶長 6 年着工説は「続撰清正記」の「熊本城新に取立給事」の項に、清正が慶長 6 年に徳川家康に面会して許可を得たうえで 8 月中旬より鍬始とあることによるもので、天保 3 年(1832)に成立した鹿子木量平による「藤公遺業記」もこの説に依っている(武藤厳男・宇野東風・古城貞吉編 1971『肥後文献叢書(二)歴史図書社)。また、細川藤孝から光尚までの事績をまとめた安永 7 年(1778)成立の「綿考輯録」(細川護貞監修・土田將雄編 1989『綿考輯録　第四巻』出水神社)は築城開始時期について「一説ニ、半国の時業を初め、一国拝領の後成就と云」と半国領主期の築城着手説を挙げており、早くも江戸期から築城開始時期に諸説が生まれていたことを示している。

明治 34 年(1901)に第六師団司令部によってまとめられた『熊本城史梗概』には「慶長六年隈本ノ城今ノ古城ヲ廃シテ後ロノ茶臼山今ノ本丸ニ築城ス」と慶長 6 年説を採るが、「慶長初年鍬初七年ニシテ土木工成ル丶或ハ云フ慶長八年朔日工ヲ初メ同十二年成就スト」と別説も挙げている(第六師団司令部 1901『熊本城史梗概』)。

その後、昭和 6 年(1931)の『熊本市史』(平野流香 1932『熊本市史』熊本市)では築城着手について慶長 6 年･慶長 4 年･慶長 3 年の 3 つの説があると述べた上で、大規模な築城と城下の建設が実施できたのは関ヶ原の合戦以降のことと推定している。また、大類伸・鳥羽正雄『日本城郭史』(大類伸・鳥羽正雄 1936『日本城郭史』雄山閣)では、諸大名の築城の項のうち「天守閣の築造の年代」として、熊本城は「慶長六年加藤氏改築増修、天守閣建」と記述する。具体的な根拠は示されていないが、おそらく「続撰清正記」や「藤公遺業記」などの記述に依ったものであろう。さらに、藤岡通夫は「藤公遺業記」の慶長 6 年説、「細川家記」の半国領主期説、「清正公系譜」に記述される慶長四年銘軒瓦を挙げた上で、朝鮮出兵中から関ヶ原合戦の間の築城は困難であったろうと推定し、天守の築造については「慶長 6 年に着手したと考えて、その完成は早くて慶長 10 年頃とみるのが至当ではなからうか」と考察した(藤岡通夫 1941「熊本城天守復元考」『建築学会論文集 22』日本建築学会)。その後、藤岡は自身が関った昭和 35 年(1960)の天守再建工事に伴って出土した「慶長四年八月吉日」銘の滴水瓦の存在と、小天守台の

増築に着目し、大天守築造開始を慶長4年と結論付け、小天守の増築は早くて慶長10年頃が至当であろうとした(藤岡通夫1976『熊本城』中央公論美術出版)。

一方、森山恒雄は慶長6年説に根拠となる史料がないとして、天正期の加藤清正に城普請の記述があることから、天正18年4月頃には着手し、天守は慶長4年8月頃に上棟、翌5年10月にはほぼ成就し、城全体も慶長12年4、5月頃には完成したとしている(森山恒雄1979「加藤清正と小西行長の明暗」『新・熊本の歴史4　近世(上)』熊本日日新聞社)。しかし、着手時期については古城にあった隈本城の普請についても新城の普請と捉えていた。さらに森山は慶長6年築城説の根拠となっている「続撰清正記」の成立を分析し、慶長6年に熊本城着工のため江戸で徳川家康に許可を得たとする記述の誤りを指摘し、同年の着工とする説に疑問を呈した(森山恒雄1993「加藤清正伝記『続撰清正記』の成立とその追加集の紹介(一)」『熊本大学教育学部紀要』42号 熊本大学)。

その後、富田紘一が慶長国絵図の表現や郡界の位置から白川が現在の世継橋付近から北に向かって大きく蛇行していたことを明らかにし、慶長年間の白川・坪井川の流路変更の観点から天正・文禄期の普請関係文書が捉え直され、古城の隈本城にも天守や櫓、御上などの建築物を持つ城郭が整備されていたことを示した(富田紘一1996「白川・坪井川流路と城下町の形成」『市史研究くまもと』第7号 熊本市)。

その後、「慶長四年八月吉日」銘の滴水瓦の存在や、慶長5年(1600)10月26付の加藤清正書状に「新城」の天守が完成間近の状況であったことを根拠に、慶長3年(1598)の秀吉の死去と朝鮮からの帰国後に、茶臼山丘陵全体を取り込んだ新城「熊本城」の築城に着手したとする理解が有力となった(森山恒雄2001「佐々・加藤の政治」『新熊本市史　通史編　第四巻　近世Ⅰ』熊本市、吉村豊雄2006「加藤氏の権力と領国体制―清正期を中心に―」『加藤清正築城と治水』冨山房インターナショナル　ほか)。また、この築城にあたっては朝鮮出兵による領国の地域社会の疲弊による夫役免除が出されながらも、慶長4年春には給地の百姓の動員が清正の意に反して行われたことに対し、家臣＝給人の基本権の一つである夫役徴収権を一時的にではあるにせよ凍結させる措置がとられたことが指摘されている(稲葉継陽2012「加藤清正の歴史的位置」『生誕四五〇周年記念展　加藤清正』生誕四五〇周年記念加藤清正展実行委員会)。

近年、大浪和也・鳥津亮二・山田貴司・金子拓らによる加藤清正書状の研究により未確定だった清正書状の年次比定が進んだ(大浪和弥・鳥津亮二・山田貴司・金子拓編2015『加藤清正文書目録』)。山田は慶長4年7月29日に比定された清正書状には「爰元普請昼夜之境もなく申付候、其元も此方なミに、百姓以下を召つれ、内之まきの普請、無由断可申付候」とあり、この時期に本城である熊本城と同様に支城の普請が急ピッチで進められていたことを踏まえ、慶長4年の早い段階で新城築城に着手したと述べ、慶長4年築城説を補強している(山田貴司2016「熊本城普請の開始時期とその政治的背景」『チャリティシンポジウム 今だからこそ、熊本城を考える―紙上報告編―』大阪大谷大学)。

③城郭修理について

城郭の修理に関する研究は、全国的には幕藩体制の研究の観点から進められてきた。まず、城戸久が武家諸法度における城郭規定(新城の禁止、城郭修築の許可制)の変遷に注目し、慶長20年(1615)の武家諸法度では新城を原則禁止、修補を許可制とし、寛永12年(1635)の武家諸法度で作事に関しては緩和したと指摘した(城戸久1960「江戸幕府の諸侯城郭に対する政策について」『日本城郭全集　第二巻　近世の城・概論』日本城郭協会出版部)。その後、藤井譲治は城郭普請許可の主体は将軍あるいは大御所であったのが、寛永12年の法度改訂後は修復の普請・作事の許可権を老中に機能分化したと述べた(藤井譲治1990「大名城郭普請許可制について」『人文学報』66号　京都大学人文科学研究所)。さらに白峰旬は居城修補規定の実際的運用について、大名側の史料をもとに具体的プロセスを明らかにした(白峰旬1998『日本近世城郭史の研究』校倉書房)。

一方、熊本城築城以降の修理に関しては、北野隆が江戸期の修補願絵図の一部を紹介し(平井聖監修・北野隆編1993『城郭・侍屋敷古図集成　熊本城』至文堂)、その後『新熊本市史　史料編　第三巻　近世Ⅰ』で細川家入国直後

の修理に関する史料が紹介された。この他に刊行されている『熊本縣史料　近世篇』や『大日本近世史料　細川家史料』などでも熊本城の修理に関する史料は含まれていたものの、熊本城の修理に関する個別研究はほとんどなかった。

近年では、後藤典子が細川忠利代の熊本城修理に関して、永青文庫細川家文書から修理の具体像を示した(後藤典子 2017『熊本城の被災修復と細川忠利』熊本日日新聞社)。さらに熊本城調査研究センター は、既刊の修理関係史料に加えて、これまで知られていなかった修補願絵図や江戸中期以降の修理に関する史料を掲載し、江戸期の熊本城の修理履歴の把握が進んでいる(熊本城調査研究センター編 2019『特別史跡熊本城跡総括報告書歴史資料編』熊本市)。また最近では、文献資料から石垣の修復履歴を検出し、該当する箇所の築石形状・積み方、各石垣の新旧関係などから石垣構築以後の修復の有無を見出すことで、江戸期修復石垣の標識資料を確認するという文献史学・考古学が共同した研究がある(嘉村哲也・木下泰葉・下高大輔・関根章義 2019「熊本城の江戸期修復石垣の様相―彦根城と仙台城の比較から修復石垣の変遷を考える―」『熊本城調査研究センター年報 5』熊本城調査研究センター)。

なお、石垣の構築および修復に関する技術についての研究としては、北垣聰一郎によって全国に残る石垣構築の技術書が紹介され知られている(北垣聰一郎 1987『石垣普請』法政大学出版会)。このうち熊本に残る技術書である「石垣秘伝之書」とは石垣の構築(根石の設置、勾配のつけ方など)に関する技術や城郭一般に関する知識について、29 項目にわたって記述したもので、少なくとも熊本藩の穴生三家に伝来しており、この「石垣秘伝書」にみえる勾配の計算法が加藤時代に築かれた熊本城の石垣勾配に一致するという説がある(北垣聰一郎 2002「伝統技術からみた城郭石垣の勾配について」『関西大学考古学研究室 50 周年記念考古学論叢』関西大学考古学研究室開設五拾周年記念考古学論叢刊行会、西田一彦・西形達明・玉野富雄・森本浩行 2003「城郭石垣断面形状の設計法とその数式表示に関する考察」『土木学会論文集』750 号 土木学会ほか)。なお、「石垣秘伝之書」文中には「公儀穴生」の文言が見えることから、藩穴生の立場から書かれた技術書であるという特徴を把握した上で、加藤家の技術者の意識や知識が反映されているのか、加藤家改易後の細川家に招かれた坂本穴生の石垣技術が反映されている可能性を検証する必要性も指摘されている(木越隆三 2011「全国に残る石垣秘伝書」『金沢城石垣構築技術史料Ⅱ』石川県金沢城調査研究所)。

④城内施設等の様相・使途について

天守や櫓をはじめとする熊本城内の建築物がどのように利用されていたかについての実態的な研究はさほど多くはない。近年では、宝暦改革の一環として行なわれた奉行所の機構改革において整備された 12 の部局のもとで、各部局の業務に関連して城内の建築物が利用されていたことが明らかにされている。例えば、高橋実は熊本藩の各部局で作成された文書が、諸帳方と呼ばれる文書管理を専門に主管する部局によって管理され、それらの文書記録が未申櫓や天守、蔵などの城内の施設に保管されたことを明らかにした(高橋実 2006～2007「熊本藩の文書記録管理システムとその特質(その 1)」「同(その 2)」(『国文学研究資料館紀要アーカイブス研究編』2・3)。なかでも天守には伝来の美術工芸品類などが保存されていたことが指摘されている。

さらに今村直樹は熊本藩主細川家の歴代当主の甲冑は城内方のうち天守方が管理し、熊本城の天守、とりわけ小天守で保管され、明治維新後に保存場所を失うと旧家臣らの願い出を受けて彼らに甲冑類を預け、現在まで旧家臣宅で保管されていたものもあれば、西南戦争後に旧家臣から細川家に返納されて現在熊本県立美術館寄託(永青文庫所蔵)となったものがあることを明らかにした(今村直樹 2018「廃藩置県後の細川家当主所用甲冑と旧家臣」(『永青文庫研究　創刊号』永青文庫研究センター)。

近代以降の城郭の利用については、明治 4 年(1871)に熊本に鎮西鎮台が設置されて以降、熊本城が陸軍省管理となったことにより、設置された陸軍の部隊史が編纂され兵営の変遷などが紹介されてきた(帝国聯隊史刊行会 1923『歩兵第十三聯隊史』、工兵第六連隊史編纂委員会 1978『工兵第六連隊史』工六会、九州砲兵概史編纂委員会 1986『九州砲兵概史』山吹会　ほか)。その後、増田民男によって熊本城内の兵営の変遷が紹介された(増田民男 1999「城内兵営の変遷を辿る」『熊本城　復刊 33 号』熊本城顕彰会)。さらに『新熊本市史』では鎮台の設置以降の熊本城に駐屯した

部隊と営地の変遷がまとめられた(瀬戸致誠 2001「徴兵制度の実施と熊本鎮台」「第六師団の成立と警察制度の確立」『新熊本市史　通史編　第五巻　近代Ⅰ』熊本市)。

また、近年では第六師団そのものの研究だけに留まらず、軍隊の存在を地域社会との関係性のもとに捉える研究が展開されている(熊本近代史研究会 2011『第六師団と軍都熊本』熊本出版文化会館)。

⑤熊本城の障壁画について

熊本の近世絵画についての研究は昭和 51 年(1976)に開館した熊本県立美術館を中心に進められてきた。その最初の成果となったのは「肥後の近世絵画」展で、熊本の近世絵画史の変遷がまとめられた(1979「肥後の近世絵画史概説」『肥後の近世絵画』熊本県立美術館)。その後、熊本県立美術館では熊本藩の御用絵師についての展覧会が開催され、これらの展覧会のなかで熊本城本丸御殿の障壁画の一部と伝わる作品(「団扇形楼閣山水図貼付屏風」・「老松牡丹図屏風」・「日の出老松図屏風」・「梅に月図屏風」・「猿牽図小襖」)も紹介されてきた。また、熊本城築城に伴って障壁画制作にあたった狩野派の絵師や、細川家入国後の御用絵師矢野派の活動については上記展覧会図録のほか『新熊本市史』にまとめられている(大倉隆二 2003「花ひらく絵画等の芸術」『新熊本市史　通史編　第四巻　近世Ⅱ』熊本市)。

熊本城、とくに本丸御殿の障壁画については、御用絵師杉谷行直の画稿が本丸御殿大広間復元整備事業の過程で新たに発見された。この画稿の内容と制作目的については米満泉によって詳細に論じられ(米満泉 2004「肥後藩御用絵師杉谷行直の新出画稿と本丸御殿障壁画について」『デアルテ』20 号　西日本文化協会)、その後の復元については脇坂淳によってまとめられている(脇坂淳 2005「熊本城本丸御殿の障壁画―昭君の間,若松の間の復元にちなんで―」『京都教育大学紀要』106)。また近年、金子岳史は本丸御殿の障壁画を描いたとされる狩野言信を改めて考察し、言信とその一派が描いた本丸御殿の障壁画は『本朝画史』で述べられる狩野派による城郭の障壁画の理論とほぼ一致する殿舎の障壁画として注目できるとした(金子岳史 2018「加藤清正御用絵師・狩野言信について」『畫下遊楽　二　奥平俊六先生退職記念論文集』奥平俊六先生退職記念論文集編集委員会)。

⑥城下について

熊本城下の研究については、まず鎌田浩によって、熊本城下町(熊本町)を中心に熊本藩の町政機構の変遷が述べられた(鎌田浩 1984「熊本藩の町政機構―特に熊本城下町について」『幕藩国家の法と支配　高柳眞三先生頌寿記念』有斐閣)。要約すれば、熊本藩では熊本城下町に並んで八代城下町・川尻町・高橋町・高瀬町の 5 つ(五ヵ町)が他の在町と区別して重要視され、一貫して町奉行による町政が行なわれたこと、その町政機構は町奉行―別当―町頭―組頭―町人であること、熊本城下町では宝暦改革以前は 2 名の月番町奉行宅を町奉行所とし、宝暦後に廃止され奉行の直接支配となるが、天保 13 年(1842)に再度町奉行・町奉行所制が採用され幕末まで踏襲されたこと、近世中期以降の町の行政区画は約 86 で、それらが 15～16 の懸りに統合されていること、別当・町頭ら町役人の集会所としての町会所が文化 4 年(1807)に初めて開設されたことなどである。

また、同時期に松本寿三郎によって細川氏入国後の侍屋敷・町の拡大や城下の構造について詳細に報告され(松本寿三郎 1984「細川藩時代」『隈本古城史』熊本県立第一高等学校)、これらが熊本城下研究の基礎となっている。

その後、『新熊本市史』の編纂に伴って、市域を構成する熊本城下町の研究が進展した。本田秀人は「新町絵図」を用いて新町の町屋の様相と町奉行と町奉行所、町役人と町会所、さらに新町で行われた商工業とその保護、町人の役負担など多岐にわたって検討を加えた(本田秀人 1992「熊本城下町の研究―新町の町屋と町人」『市史研究くまもと　第 3 号』熊本市)。また、松﨑範子は熊本町の主要産業であった造酒業を取り上げ、酒の製造を許可された特権である「造酒本手」を持つ造酒屋が、町政における重職を占め、町を束ねていたことを明らかにした(松﨑範子 1996「近世熊本町の造酒屋」『市史研究くまもと　第 7 号』熊本市)。

その後、本田は「近世都市の基礎構造」の研究を主題として、熊本城下町のうち中世隈本城下府中町にもつな

がる西古町懸西唐人町を対象に個別町(丁)を検討し、熊本町全体である惣町(都市)の運営がいかに行なわれていたのかを町諸役を通じて明らかにした(本田秀人 2010『近世都市熊本の社会』熊本出版文化会館)。また松崎は、三都(江戸・京都・大坂)を中心に積み重ねられてきた「都市社会論」に加えて、従来非領国地帯で展開されていた地域社会の自律性を評価する「地域運営論」の成果を取り入れつつ、熊本城下町を題材に住民組織が領主支配と対応しながら、いかに町域を自主的に運営したのかを明らかにした(松崎範子 2012『近世城下町の運営と町人』清文堂出版)。

また、明治 10 年(1877)の西南戦争で熊本城下の大部分は焼失するが、これらの焼失家屋については熊本県資料の「西南役家屋焼失調」を用いて建築史の立場から研究がなされてきた。これについては後述するが、文献史学の立場からは「焼失調」に加えて地券台帳や字図を用いて山崎町と京町の西南戦争前後の住人の変化が考察されている(三澤純 2001「第一編 近代熊本の黎明 第三章 西南戦争 三 戦後処理と復興―山崎町と京町の場合」『新熊本市史 通史編 第五巻 近代Ⅰ』、作図:田中勝士「図3 明治13年山崎町復元図」「図4 明治13年京町東部復元図」)。

⑦西南戦争に関する研究について

明治 10 年(1877)2 月 19 日、西南戦争開戦直前に天守・本丸御殿などが炎上した火事については、従来①放火説、②自焼説、③失火説、④市中火災からの延焼説が挙げられ、現在まで結論をみていない。

昭和 8 年(1933)発行の平野流香『熊本市史』(平野流香 1933『熊本市史』熊本市)では 2 月 19 日午前 11 時 40 分に、本丸の「二ノ天守閣」(小天守)付近から原因不明の出火が起こり、「一ノ天守閣・二ノ天守、その他城頭各部の建物に延焼」し、さらに城下の内坪井町・藪内町・京町・高田原・山崎町・塩屋町まで延焼したと述べる。また、藤岡通夫は、火災については兵火によるものという説もあるとするが、「細川家中山健氏が幼時谷干城将軍に直接聞いた話によると、屯兵の失火がその原因であった由である」と失火説を挙げている(藤岡通夫 1941「熊本城天守復元考」『建築学会論文集 22』日本建築学会)。

その後、富田紘一は、炎上時の有力史料として使われているものが事実と異なる点や、焼失したとされる大量の糧米が発掘調査ではほとんど確認されていないことから、自焼説を強めた(富田紘一 1999「熊本城炎上の謎を考える」『熊本博物館報』11 号 熊本博物館)。

なお、従来は漠然と熊本城全体が焼失したと理解されていたが、富田は豊富な古写真を比較検討し、撮影対象である城郭建築や陸軍の構造物の変遷から撮影年代を編年していく「写真考古学」の手法で、数寄屋丸や飯田丸などの曲輪で西南戦争以前に櫓が解体されていた事実を突き止めた。また、過去の発掘調査の成果から焼土層が確認された範囲が天守や本丸御殿一帯など、本丸のごく一部に限られていることを示した(富田紘一 1993『古写真に探る熊本城と城下町』肥後上代文化研究会)。

一方、猪飼隆明は富田の自焼説について糧米や薪炭の焼失の事実から見て頷けないとした(猪飼隆明 2001「第三章第二節 西南戦争」『新熊本市史 通史編 第五巻 近代Ⅰ』熊本市)。また、延焼説は市中と天守の燃え上がる時間があまりに接近していることと西南の風であることから根拠が薄いとし、放火説は理論的には理解できるが、それを納得させる事実は片鱗も見ることができないとしている。最も可能性があるのは失火説であるが、検討の余地はあると結んだ。なお、猪飼は城下の炎上について、鎮台が戦闘に備えて故意に放火する「射界の清掃」が行なわれたことを指摘している。

これに対し、富田は炎上の諸説の根拠となった史料を検証し、特に炎上に直面した児玉源太郎による「熊本城籠城談」の内容が事実と齟齬することを詳細に示し、炎上当時に富岡権令から「本日十一時十分鎮台自焼セリ」と電報が打たれたのちに、鎮台でその事実が隠蔽・歪曲された可能性を指摘している(富田紘一 2017「熊本城炎上の謎を探る」『熊本城 復刊第百号記念号』熊本城顕彰会)。

平成 29 年(2017)に西南戦争 140 周年を記念して開催されたシンポジウムでは、「熊本城炎上の謎に迫る!」と題し文献史学・考古学・軍事戦略などの各分野から炎上の原因を取り上げた。天守の炎上をリアルタイムで伝

えた電信資料によれば、炎上の第一報は自焼であり、のちに不審火として扱われるようになったことが明らかとなった(佐藤雅恵 2017「電信資料からみた熊本城炎上」『西南戦争 140 周年シンポジウム　熊本城炎上の謎に迫る！』熊本市)。また、本丸御殿の出土品のうち、小広間から出土したものに比熱資料が多いことを示し、鎮台司令部が置かれた空間で失火の可能性が高い場所ではないことと、放火のために侵入することは困難であることを指摘している(美濃雅朗 2017「出土品からみた熊本城炎上」『西南戦争140 周年シンポジウム　熊本城炎上の謎に迫る！』熊本市)。

2. 遺構からのアプローチ

(1)建造物

ここでは、熊本城に現存し重要文化財に指定されている 13 の建造物(宇土櫓・田子櫓・七間櫓・十四間櫓・四間櫓・源之進櫓・東十八間櫓・五間櫓・不開門・平櫓・監物櫓・長塀)のほか、現存しないが礎石などの遺構や絵図・指図で確かめられる天守・本丸御殿などの焼失した城郭及び城下の建造物を対象とする。

①熊本城総論

建築史としての日本の城郭の研究は、天守が登場する近世を主な対象としている。城郭建築を建築史の側から推し進めてきたのは、藤岡通夫・城戸久らであった。彼らは、主に第二次世界大戦前に行なった研究をもとに昭和 40 年代からその集大成をしている(藤岡通夫 1969「城郭編」『「近世建築史論集」中央公論美術出版、城戸久 1972『城と民家』毎日新聞社、城戸久 1981『名古屋城と天守建築』名著出版　ほか)。

熊本城について、まず藤岡は大天守は瓦銘からみて慶長 4 年(1599)とし、慶長 6 年以降に小天守の増築と論じた(藤岡通夫 1941「熊本城天守復原考」『建築学会論文集 22』日本建築学会、同 1969『近世建築史論集』中央公論美術出版)。北野隆は、宇土櫓は『肥後国年歴』で外側の西出丸の戌亥櫓棟札に慶長 7 年と伝えられるので慶長 7 年頃、慶長 12 年に完成したのは石垣普請、天守・櫓などで、本丸御殿は大木文書・下川文書から慶長 15 年と造営経過を整理している(北野隆 1981「熊本城の宇土櫓について」『建築学会論文報告集 308』日本建築学会)。

城郭を構築する要素として石塁、特に石垣は土木的な意味からも、また建築の基礎としても重要な意味をもっている。しかし、この面の研究は建築史の分野からはほとんど研究されていない。わずかに天守などの建築年代を判定する際に積み方の手法が判定されてきた。しかし、例えば、城郭の本丸・二の丸・三の丸と建設してゆく過程は、石垣の技法の判断が一つのより所となるわけで、この面から城郭の建設過程を考察する必要がある、と指摘した(渡辺勝彦 1988「学界展望　城郭」『建築史学 10』建築史学会)。

平成元年(1989)に半解体修理を終えた宇土櫓の報告書は、築城年代と縄張りについて石垣調査の結果を加えた手法を採り、第 1 次熊本城(天正から 文禄)、第 2 次熊本城(慶長 3 年から 5 年)、第 3 次熊本城(慶長 12 年に完成)との造営経過の区分を提案した(矢野和之・細川道夫 1990『重要文化財 熊本城宇土櫓保存修理工事報告書』熊本市)。

その後、北野は熊本城の歴史として加藤清正書状などを加えて慶長 5 年(1600)に天守をはじめいくつかの建物が工事中であった経過を示す(平井聖監修・北野隆著 1993『城郭・侍屋敷古図集成　熊本城』至文堂)。

さらに、小野将史・北野隆は『肥後熊本城略図』(山口県文書館蔵)を見いだし、加藤忠広が肥後を相続した直後の慶長 17 年(1612)6 月の様相を示すと考定した(小野将史・北野隆 2002「毛利家文庫の絵図「[肥後熊本城略図]」について　加藤氏時代の熊本城に関する研究(その 1)」『建築学会論文報告集 561』日本建築学会)。その考察によると、慶長 17 年当時、熊本城は現在の耕作櫓門の入口が石垣で閉ざされていたため、城内の総ての動線が東竹の丸を経由して城の東側から本丸に入っており、同時に西出丸の整備が進んでいて西向きに変りつつあった。また、小天守は見えず、独立天守の形式であるが、本丸・二の丸の五階櫓(数寄屋丸五階櫓は不明)や西出丸の三階櫓が存在していて熊本城の主要な櫓の構成がすでに完成していた、とした(小野将史・北野隆 2003「加藤清正代末期の熊本城について　加藤氏時代の熊本城に関する研究(その 2)」『建築学会論文報告集 566』日本建築学会)。そして、山田本「肥後宇土軍記」をもとに小天守は宇土城天守を移築した可能性が高く、肥後熊本城略図の様相とあわせて移築の時期を慶長 17 年から元和元年の間と論じた(小野将史・北野隆 2004「加藤忠広による熊本城の改修と熊本城小天守について　加藤

氏時代の熊本城に関する研究(その3)」『建築学会論文報告集576』日本建築学会)。

なお、全体の建物、郭の構成を論じたものとしては、藤岡の解説書がある(藤岡通夫 1976『熊本城』中央公論美術出版)。また、城郭建築史の概説で熊本城に触れたものとしては、内藤のものなどがある(内藤昌 1979『城の日本史』日本放送出版協会)。

また、修理工事については、平櫓(文化財保存計画協会編 1980『重要文化財熊本城平櫓修理工事報告書』熊本市)をはじめ、源之進櫓、監物櫓、長塀、不開門、田子櫓、十四間櫓、七間櫓、四間櫓、東十八間櫓・北十八間櫓・五間櫓の報告書がそれぞれ刊行されている。また、昭和29～32年度の宇土櫓、昭和33年の源之進櫓・四間櫓・十四間櫓・七間櫓・田子櫓、昭和35～37年の東十八間櫓・北十八間櫓・五間櫓の修理については資料がまとめられている(熊本市 2016『特別史跡熊本城跡総括報告書 整備事業編』)。

熊本城の建築史分野からの研究は概ね、天守をはじめ個別の建物について議論されてきているので、以下各建物について述べる。

②天守について

昭和のはじめに熊本城址保存会が再建を計画し、その設計案が資料として示された(坂本新八 1931「熊本城天守閣設計に就いて」『建築雑誌』日本建築学会)。しかし、復原に推定部分が多く、藤岡通夫は見いだした寛政10年(1798)の天守平面図などを基に改めて復原、瓦銘の年代などを入れて総合的に考察した(藤岡通夫 1941「熊本城天守復原考」『建築学会論文集 22』日本建築学会)。形態については、大天守は初期望楼型の外観・構造と判定し、小天守に書院造の平面に注目して初期の形式と純軍事化した時代の設備を過渡期の手法と評価した。造営経過については、その後の知見も加味して、大天守は瓦銘からみて慶長4年(1599)とし、慶長6年以降の小天守の増築を示したが、完成時期は早くて慶長10年頃とみていた(藤岡通夫 1969「熊本城天守復原考」『近世建築史論集』中央公論美術出版、同 1988「加藤清正ゆかりの熊本城天守の再建」『城と城下町』中央公論美術出版)。復原の内容は、模型を木造、縮尺1/10でつくり、柱・梁はじめ部材を詳細に再現した高い精度のものである。

北野は、既に述べたように天守が慶長7年(1602)頃完成していたとした(北野隆 1981「熊本城の宇土櫓について」『建築学会論文報告集 308』日本建築学会)。そして小天守は山田本「肥後宇土軍記」をもとに宇土城天守を移築した可能性が高く、肥後熊本城略図の様相とあわせて移築の時期を慶長17年(1612)から元和元年(1615)の間と示した(小野将史・北野隆 2004「加藤忠広による熊本城の改修と熊本城小天守について 加藤氏時代の熊本城に関する研究(その3)」『建築学会論文報告集 576』日本建築学会)。小天守の前身は宇土城天守との想定はあったが(宮上茂隆 1989「熊本城天守小天守および古天守の造営移築について」『建築学会大会学術講演梗概集(九州)』日本建築学会)、史料にもとづいてその可能性を論じた。

なお、熊本城天守について規模を他の城のものと比べて大き過ぎるなどとして、慶長12～15年頃とする研究もある(宮上茂隆 1989「熊本城天守小天守および古天守の造営移築について」『建築学会大会学術講演梗概集(九州)』日本建築学会、矢野和之・細川道夫 1990「熊本城内建造物の建立年代について」『重要文化財 熊本城宇土櫓保存修理工事報告書』熊本市)。

③宇土櫓について

宇土櫓は、江戸時代から三の天守と呼ばれ、現存する建物の中で最も注目される。宇土櫓については、かつて城戸久が平面・構造・外容から慶長6～12年(1601～1607)の築城時につくられたと示し、移建を否定して、その呼称が江戸時代中期に与えられたことを推察した(城戸久 1943「熊本城宇土櫓造営年次私考」『建築学会論文集 30』日本建築学会)。北野は、その経緯を新出史料を駆使し詳細に明らかにする。「宇士一」との呼称は江戸中期からのもので、「肥州録」の宇土櫓・宇土三階櫓などの呼称と、江戸時代末期の絵図に見える櫓の順序に着目し加藤左衛門屋敷まわりの櫓「宇士」は、宇土関係役所であったことに因むとの結論を導いている。そして、「肥後国年歴」

に出丸の戌亥櫓の棟札が出て慶長 7 年(1602)完成とあるので、より内側で重要な位置にある宇土櫓はこの前に完成したとみている(北野隆 1981「熊本城の宇土櫓について」『建築学会論文報告集 308』日本建築学会)。

また、大天守がつくられる前の天守を移築したものとの想定があるが(宮上茂隆 1989「熊本城天守小天守および古天守の造営移築について」『建築学会大会学術講演梗概集(九州)』日本建築学会)、平成修理に際する部分解体の結果、移築の痕跡があまりないと報告されている(矢野和之・細川温夫 1990「宇土櫓の創建について」『重要文化財 熊本城宇土櫓保存修理工事報告書』熊本市)。なお、修理の際の報告書は慶長 3～5 年の第 2 次熊本城天守と想定しているが、事情は詳らかでない。

西和夫は、5 階の側柱を 4 階の柱が支えていないなど、構造が慶長 16 年(1611)完成の松江城天守と似ると指摘する(西和夫 2014『松江城再発見　天守、城、そして城下町』松江市)。

④その他の城内建築について

熊本城は多聞櫓・塀をよく遺している。これらのうち監物櫓については、寛永 11 年(1633)の「肥後国熊本城之絵図」に見え、元禄 3 年(1690)に屋根葺替、安政 7 年(1860)に大修理を受け、昭和 30 年(1955)に解体修理に至った。残った櫓の中でも当初からのものの一つで、櫓を代表すると評価されている(北野隆 1982「熊本城監物櫓」『日本建築史基礎資料集成十五　城郭 II』中央公論美術出版、熊本市 2016「昭和 28・29・30 年度重要文化財熊本城監物櫓保存工事実施報告書」『特別史跡熊本城跡総括報告書　整備事業編』)。

宇土櫓の他の重要文化財建造物は、昭和 28 年度から 36 年度にかけて文化財保護委員会によって保存修理が進められ、昭和 37 年度に熊本市が重要文化財建造物の管理団体に指定されてからも昭和 52 年度の平櫓・長塀屋根葺替・部分修理工事に始まり、昭和 59 年の東十八間櫓・北十八間櫓・五間櫓の屋根葺替・部分修理まで修理工事が行われた。修理に際する調査によって発見・解明された事項などによって形態、造営経緯が明らかにされ、修理工事報告書に記されている。そのあらましを以下に掲げておく。

源之進櫓は安政 6 年(1859)に大修理(棟札、以下()内は根拠資料)、四間櫓は慶応 2 年(1866)に再建(棟札)、十四間櫓は天保 15 年(1844)に再建(棟札)、七間櫓は安政 4 年(1857)に修理(柱墨書)、田子櫓は慶応元年(1865)に再建(懸魚墨書)、東十八間櫓は文久元年(1861)に大改修ないしは再建(棟札ほか)、不開門は慶応 2 年(1866)に大修理または再建(棟札)で、元禄・宝永の年代銘の瓦が発見され、江戸時代の絵図にも見えるので慶長創建の頃から存在とみるのが妥当である。平櫓は寛永 10 年(1633)に再建(木札)、その後も安政 7 年(1860)まで修理あるいは再建(瓦銘)で、監物櫓は既に述べたように安政 7 年(1860)に大修理(棟札)があった。

長塀も、寛永 11 年(1633)の「肥後国熊本城之絵図」に見え、寛永 11 年の作事で連続した塀になったもので、江戸時代初期の意匠を示している(北野隆 1982「熊本城長塀」『日本建築史基礎資料集成十五　城郭 II』中央公論美術出版)。

各曲輪に三階櫓・五階櫓が並び立つ様態は、熊本城の特徴である。各曲輪の三階櫓・五階櫓については、寛永 9 年以降に大きな改築はなく加藤氏時代に既に存在していたとされ、その形態が示され、御裏五階櫓・飯田丸五階櫓・数寄屋丸五階櫓の復原図がつくられている(北野隆 1993「熊本城の天守と櫓」『城郭・侍屋敷古図集成 熊本城』至文堂、小野将史・北野隆 2001「熊本城における「五階櫓」と「三階櫓」の名称について」『建築学会大会学術講演集』日本建築学会)。

熊本城の殿舎については、平左衛門丸にあった加藤平左衛門屋敷が材木覚帳などから御広間・御書院・御居間・御化粧間・御上・御台所から構成され、覚帳の平面・小屋伏・材木寸法の記録から、彩色された建具を立てる御広間、数寄屋風の御書院、御上の復原案がつくられている(北野隆 1973「近世初期(慶長期))武家屋敷の一例について；熊本城内加藤平左衛門屋敷の場合」『建築学会論文報告集 213』日本建築学会、同 1993「熊本城本丸御殿と侍屋敷」『城郭・侍屋敷古図集成　熊本城』至文堂)。

また、本丸御殿については、「御天守密書」(永青文庫蔵)に室名・畳数・画題・絵師があり、明和 6 年(1769)頃の

「御城内御絵図」などをもとに復原案が用意された(北野隆 1993「熊本城本丸御殿と侍屋敷」『城郭・侍屋敷古図集成　熊本城』至文堂、同 1994「特異な形態の本丸御殿」『歴史群像名城シリーズ 2　熊本城』学習研究社)。こうした成果をもとに、発掘調査の結果と合わせて本丸御殿大広間・大台所・数寄屋が復元整備された(熊本市熊本城総合事務所 2009『特別史跡熊本城跡　本丸御殿復元整備事業報告書―大広間・大台所・数寄屋―』)。

⑤城下の武士住宅について

熊本城下は西南戦争で焼かれているが、「西南之役家屋焼失調」をもとに武士住宅の様相が明らかにされている。下級武士住宅では規模の大きいものは表座敷・奥座敷があり、小さくなると表座敷のみになる(北野隆 1982「江戸時代末期における熊本城下町の武士住宅について」『日本建築学会九州支部研究報告 26』日本建築学会)。そして、29 例の敷地を特定し、武士の身分や地域ごとの住宅や屋敷構えを捉え、長屋門が立ち並ぶ景観の通り、通り土間をもつ 2 階建ての瓦葺住宅が少なくない通りなど状況を明らかにした(松田治子・伊東龍一 2012「熊本城下における武家住宅に関する研究 ;「西南之役家屋焼失調」の再検討」『建築学会大会学術講演梗概集』日本建築学会)。

(2) 記念物

ここで言う記念物は、土地に記念された文化財という意味で、熊本城跡の本質的価値の中心となっている縄張りや石垣などのほか、地表に設置された有形の石造物や石垣の裏栗として転用された石造物についての研究を紹介する。

① 縄張り(城郭平面構造)について

城郭は、その語義に都市を囲繞する「曲輪・郭(くるわ)」としての意味を持ち、近世都市の全体を城郭として扱う都市史的な研究も城郭研究に含まれる。都市図や都市の構成、その発展過程に関する研究などがこれにあたり、都市計画の分野を含めて進捗している。この都市史を建築史の分野からいち早く対象としたのは藤岡通夫で(藤岡通夫 1952『城と城下町』中央公論美術出版)、実際に近世城下を定量的な処理で比較した研究もある(油浅耕三 1987「正保絵図による城の内郭面積の規模に関する考察」『名古屋工業大学学報 39』名古屋工業大学)。正保絵図の領域を現代の地図に投影して城内と城下それぞれの面積を測り、その相関を求めていて、熊本城の内郭の面積は大きい部類となっている。また、熊本城下の変遷を 353 枚の城下絵図について描法や料紙寸法から編年して、道路の拡幅が元禄期だけでなく、遡った寛文期にも大火による焼失範囲で行なわれたことなどが明らかにされている(尾崎翔太・伊東龍一 2015「熊本城下絵図の作製年代の再検討と寛文・元禄・宝暦期の道路拡幅に関する分析」『建築学会九州支部研究報告 54』日本建築学会、同 2015「寛文期の大火による熊本城下の道路拡幅・新設に関する分析」『建築学会大会学術講演梗概集』日本建築学会)。

一方、城は本丸や二の丸、三の丸といった求心的な構造をした城郭の核心部分と、惣構と呼ばれるような防衛も担っていた城郭外縁部の城下部分からなるのが普通で、これを軍事的な縄張り研究や考古学的な観点で分析する城郭史の研究がある。

まず、中世期の隈本城の縄張りについて触れておく。昭和 50 年代前半に古城は茶臼山南西の現熊本県立第一高等学校敷地、千葉城は茶臼山北東の旧 NHK 熊本放送局敷地を遺跡地に比定した研究がある(熊本県教育委員会編 1978『熊本県の中世城跡』熊本県教育委員会、阿蘇品保夫ほか 1979『日本城郭体系』18　新人物往来社)。その後、古城については本丸跡(高校寄宿舎・同窓会館敷地)・旧二ノ丸跡(高校体育館敷地)・旧三ノ丸跡(高校校舎敷地)とし、千葉城は本丸(旧 NHK 熊本放送局敷地)・二ノ丸(旧県立図書館敷地)・三ノ丸(旧 JT 敷地)と具体的に曲輪の名称(機能)が推定されている(工藤敬一ほか 1985『熊本県の地名』日本歴史地名大系　平凡社、大田幸博 1996「古城」「千葉城」『新熊本市史』史料編　考古資料　熊本市)。いずれも地形上の特徴や段差などに依拠した縄張り推定に留まるものである。

さて、近世熊本城の本丸部分の縄張り変遷について早く考察したものに矢野和之・細川道夫の研究がある(矢野和之・細川道夫1990『重要文化財 熊本城宇土櫓保存修理工事報告書』熊本市)。まず地形復原を試み、①古城の石垣部分は深い所で 7mの盛土で、中世城郭ではなく加藤氏入国時の築造で、②中世の熊本城は現在の国立病院付近か、藤崎宮跡かのいずれか、とした。そのうえで、石垣の築造順序、加藤清正の書状、加藤氏時代の絵図を照合して第1次から第3次にわたって熊本城が築城されたと指摘した。

第1次熊本城は、現在の古城部分を本丸、二の丸、三の丸とし、新町を惣構とする城で、天正から文禄にかけての築城。第2次熊本城は、慶長3年(1598)から慶長5年(1600)に築城が始まった新城(現在の熊本城本丸)部分で、古城を居住用、新城を詰の城として戦闘(原文では先頭)用と籠城用という機能分担を想定した。第3次熊本城は、関ヶ原の戦い後の慶長6年に小西領を含む54万石となり築城が再開され同12年に完成した現在の城城で、天守もこの時の竣工とした。

特に第2次熊本城縄張りでは復原図をあげて次のように指摘している。①大手は南の元札櫓門で、東に廻り、東(三の櫓門)から本丸に入る。②新城のとりあえずの天守は御裏五階櫓で、天守台(独立天守)はその後の造営。③御裏五階櫓に接続して櫓門があり、この下の隠虎口(江戸期の石門)から二の丸へと脱出できる。④「西の丸」(平左衛門丸のこと)は清正の普段のすまいの場所で、頬当御門は第2次熊本城までは搦手口で、第3次熊本城で正門に変更となった。⑤西櫓門は、古城と結ぶルートの虎口で、東櫓門は豊後ルートの虎口であった。⑥大手を西入に変更した時に西出丸をつくり、⑦宇土櫓部分はまだ大走りでその下部は土手であったとした。

一方、北野隆は、臼杵市図書館蔵の「肥後熊本城図」について、慶長12年(1607)に加藤清正によって完成した頃の熊本城を表した絵図とした上で、この絵図では頬当御門部分には土橋がなく空堀となっていて、他の熊本城の絵図とは大きく異なる点に注目する。平左衛門丸が西出丸と空堀で隔てられているので、平左衛門丸への通路は南の地蔵櫓門からだったとする。また、当時は西大手門もなく、出丸は石垣で閉ざされていたとする。このことから、加藤氏時代の熊本城(の本丸)は、東櫓門を大手門とする東向きで古坪井の侍町と連絡し、搦手門は西櫓門で古城の御殿と通じていたと結論する(北野隆 1994「「肥後熊本城図」にみる加藤氏時代の縄張」『歴史群像名城シリーズ 熊本城』学習研究社)。また、この縄張りを変更した後の絵図が「先公加藤氏屋舗割之図」で、西大手門や頬当御門が新しく設けられて西向きに変化し、坪井川の橋が4ヵ所から7ヵ所に増え、慶長17年(1612)の3支城の破却を契機に、城内と城下町の改造があり、西大手門・頬当門・耕作櫓門はその時に新造された城門とした。

城郭の出入り口にみられる「折れ」と「空間」の関係から織豊系城郭の発展過程を検討した千田嘉博は、「熊本城では、防御に強い内枡形を用いて、戦時には縮め切る出入り口と、外枡形を連ねて、戦時に攻め出すことを意識した出入り口を明瞭に分けていて、折れと空間を重層的に展開する熊本城の出入り口タイプを近世城郭の基本原理を採用した代表とした(初出論文は千田嘉博 1987「織豊系城郭の構造」『史林第70巻第2号』史学研究会、のちに同 2000『織豊系城郭の形成』東京大学出版会に改訂して収録)。千田が指摘した内枡形を用いた出入り口は、西出丸から数寄屋丸櫓門のルートなどであり、外枡形を連ねた出入り口は、札櫓門から元札櫓門のルートである。

九州大名の城郭の縄張りを検討した木島孝之は、肥後半国領主時代の天正18年(1590)から本格的普請が開始され、天正19年には城下集落も建設、朝鮮出兵の期間中も継続中で、天正20年(1592)当時も「本丸・惣構の多くの箇所で、石垣をはじめとする土木工事がかなり進行していたと考えられる」とし、乃美家蔵とされる加藤氏触書写から熊本城普請の完了は慶長12年(1607)で、清正の強い統制の下に遂行されたとした(木島孝之 2001『城郭の縄張り構造と大名権力』九州大学出版会)。その縄張りは、高石垣による総石垣造、枡形虎口、横矢掛り、瓦葺塗り込めの建築物等、織豊系の縄張り技術が多く用いられ、それらの技術が有機的に結合することで本丸への求心性が貫徹されているとした。

縄張りや城下の形成に関わる河川付替えを考察したものに鈴木喬・富田紘一の研究がある。坪井川については、内坪井での発掘調査結果から坪井川の原流路は内坪井と外坪井の境にある水堀付近で、昭和11年(1936)に廃川となった旧坪井川の流路は慶長6年から12年の築城時の付替えと指摘されている(鈴木喬・富田紘一 1976『旧坪井

川畔遺跡調査報告書』熊本城調査委員会、富田紘一 2000「熊本の三河川と城下町の形成」『市史研究 くまもと』11 号 熊本市)。また、慶長国絵図に見られる白川の蛇行表現を基に慶長 12 年(1607)・同 13 年(1608)頃に白川流路の直線化があり、現況のように坪井川を船場方面に流すとともに、熊本城飯田丸直下を流れていた白川の旧河川敷が埋め立てられて竹の丸や桜馬場の侍屋敷が造成され、城郭外縁縄張りと惣構・城下の形成に大きく関係していたことを論証した(富田紘一 1996「白川・坪井川流路と城下町の形成」『市史研究 くまもと』7 号 熊本市)。さらに白川付替え前の長六橋の位置についても、「熊本屋鋪割下絵図」にある山崎西端の「古長六町」西側に比定して隈本城の概念図を作成し、熊本城と城下の形成に大きく関わる井芹川と坪井川の原流路を推定する。井芹川の原流路は明確にできないが、白川との合流点は古町南部付近とする一方、隈本城の築城にあたって背割り堤によって白川と分流されて水運に利用されたと推定した(富田紘一 2000「熊本の三河川と城下町の形成」『市史研究 くまもと』11 号 熊本市)。

②石垣について

熊本城の石垣に関する研究調査の嚆矢は、現在「二様の石垣」と呼ばれる石垣に着目した熊本市役所の技術職員たちで、昭和 6 年(1931)に刊行された『熊本市史』の編纂で、都市計画係の技師たちが城内 8 ヵ所の石垣の断面測量を実施している(熊本市都市計画係大塚技師ほか 1931「挿図」『熊本市史』熊本市)。技師たちは、著しく異なる「二様の石垣」について石工に参考意見を求め、構築の手法が全く別の技術体系の石工による後代の補築と推定している。

戦後になると土木史研究者による本格的な石垣研究が始まる。桑原文夫は、熊本城内の主要地点 23 ヵ所の精密な勾配の実測値を測量し、現存遺構と加賀前田家の穴太の石垣構築技術書「後藤家文書」記載の石垣勾配技法との相関関係を考究している(桑原文夫 1984「熊本城の石垣勾配」『日本工業大学研究報告』14 号 日本工業大学)。

同様に全国的観点で城郭石垣の研究を進めていた北垣聰一郎は、熊本城の「二様の石垣」に着目し、新期の石垣を氏の石垣編年Ⅲ期(寛永～正保年間)に位置づけして、Ⅱ期(慶長・元和年間)石垣である古期石垣の外側に寛永になって郭内を拡張するために付設された石垣という見解を示した(北垣聰一郎 1987『石垣普請』法政大学出版会)。また、顕著なノリ返し勾配の特徴をもつ「清正流石垣」について、「重要な検討課題を有しながら、今日まで普請の立場で本格的な調査・研究が乏しかった」とし、「隅角部の石材の用い方(穴太積み)の特徴をもって石積みの成立時期を検討すべき」としている(北垣聰一郎 1989「熊本城石垣の変遷について」『津田秀夫先生古稀記念 封建社会と近代』同朋舎出版)。さらに細川家穴生の野口家本を原本とする「石垣秘伝書」について、穴太の技術を説いたもので、石垣遺構にノリ返し勾配が確認できるのは熊本城の特徴で、近世初頭の石垣構築技術の上でも、様式的にも完成された一つの到達点であり、城郭変遷の基準指標とした(北垣聰一郎 2014「近世城郭石垣における勾配のノリ・ソリについて」『小和田哲男先生古稀記念論集 戦国武将と城』サンライズ出版)。

宇土櫓の成立過程を明らかにする一環で石垣の編年をおこなった矢野和之・細川道夫は、天正 18 年(1590)に始まる古城の石垣を A^0(期)、新城となる茶臼山上部の石垣をA(期)、本丸下部の高さ 20m の高石垣や宇土櫓台、数寄屋丸五階櫓台・西出丸・新堀櫓門付近・下馬橋南などを B^0(期)・B(期)とし、二の丸の百間石垣・二の丸櫓門・小天守台を C^0(期)・C(期)に、櫨方三階櫓台は文政 5 年(1822)の修理、飯田丸五階櫓台は幕末期の修理と考えてD(期)とした(矢野和之・細川道夫『重要文化財 熊本城宇土櫓保存修理工事報告書』熊本市)。

北野隆は、石垣の勾配曲線の比較から「二様の石垣」の古期石垣を天正期から文禄期の「穴太積み」、新期石垣を慶長期の「清正流石垣」とし、新期石垣を加藤氏時代の所産としたが(北野隆 2000『歴史群像名城シリーズ 熊本城』学習研究社)、その後、古期石垣を慶長初期に、新期石垣を「慶長期以降の元和から寛永期」と修正している(小野将史・北野隆 2003「加藤時代の末期の熊本城―加藤時代の熊本城に関する研究(その 2)―」『日本建築学会計画系論文集 第 566 号』日本建築学会)。

熊本城の全体の石垣を通観した富田紘一は、石垣全体の傾斜と出隅の積み方・石材の形態から 6 類に様式区分して、史料を勘案のうえⅠ期を慶長 4 年(1599)、Ⅱ期を慶長 5 年(1600)、Ⅲ期を慶長 6 年(1601)前半、Ⅳ期を慶

長 12 年(1607)まで、Ⅴ期を加藤忠広の慶長 16 年(1611)から、Ⅵ期を細川氏入国以降と編年した(富田紘一・富田紘二 2000～2008『熊本城 石垣に歴史を探る』1～29『熊本城』復刊 37 号～70 号)。

高瀬哲郎は、大天守台の石垣が規合は下方がゆるやかで中位から上方にかけてかなり強く反り上がる独特の勾配の採用から、清正自身が高度な技術を保持していたとし、算木積みを意識的に採用していないとも指摘する。類例としては萩城跡の天守台をあげる(高瀬哲郎 1994「九州に於ける近世城郭の石垣について(その一)」『先史学・考古学論究』龍田考古会)。

全国各地の大名城郭の石垣を天下普請も含めた技術面から比較・検討した市川浩文は、基本的に富田の編年観を踏襲するが、天守周辺の古期石垣(A‐1・2 類)を慶長 4～5 年に比定し、田子櫓下石垣(B‐1 類)、宇土櫓下石垣(B‐2 類)の 2 つは慶長 12 年までの成立、小天守台や平御櫓の石垣(B‐3 類)を白川改修後の慶長後半～元和期に比定している(市川浩文 2012「諸大名家の石垣　加藤家(肥後)」『城郭石垣の技術と組織』石川県金沢城調査研究所)。黒田家や細川家の石垣技術と比較して、算木積みの導入が遅れる一方で、大天守台の「ノリ返し」に代表される「強い反り」からなる勾配や「割加工石材の多用」が始築期段階からみられ、全国的にも技術的に先行する部分を合わせ持つ点が大きな特徴とし、この独自性の強い技術は文禄期の西生浦倭城や肥前名護屋城にその初現が求められるとしている。

平成 19 年度に完成した本丸御殿の復元事業では、復元年代の設定について検討がなされ、慶長 15 年(1610)に大広間の造営があり、細川忠利時代の寛永 10～12 年(1633～35)にかけて修復がなされたとされた。ただし、慶長期に創建された「昭君之間」「若松之間」の西側部分が石垣より跳ね出すことになる点については、「石垣の拡張時期を含めて今後の研究に委ねたい」とした(熊本城総合事務所編 2009『特別史跡熊本城跡 本丸御殿復元整備事業報告書』熊本市)。この点について、史料にある忠利入国直後の御殿改造は中向の建物である「中之家」に限られたもので、御殿障壁画の作者や慶長 17 年(1612)の絵図に描かれている二の丸御門周辺の石垣技術に類似するという点から、御殿建築を載せる「二様の石垣」の拡張部分は細川忠利時代のものではなく、大広間造営の慶長 15 年(加藤清正時代)にはあらかじめ完成していたという見解がある(鶴嶋俊彦 2019「熊本城の「二様の石垣」の築造年代」『熊本城調査研究センター年報 5』熊本城調査研究センター)。

さて、熊本地震後の石垣復旧を契機として、史料から江戸時代の石垣修復個所を抽出し、修復された石垣の技術の検討が始まっている。修復石垣は、当初石垣と比較して間詰石の減少や築石サイズの小型化があり、築石の加工度や横目地の通り方から、修復技術を①17 世紀代から 18 世紀初頭、②18 世紀前葉から後葉、③18 世紀末葉から 19 世紀前葉の時期に 3 区分が可能と提示されている(嘉村哲也・木下泰葉・下高大輔・関根章義 2019「熊本城の江戸期修復石垣の様相―彦根城と仙台城との比較から修復石垣の変遷を考える―」『熊本城調査研究センター年報 5』熊本城調査研究センター)。また、彦根城や仙台城での修復石垣の事例と比較を行ない、石垣修復が全国一律の様相で変遷するものではなく、必ずしも城郭石垣の修復が発展的変遷を示すものではないと指摘する。

一方、土木工学・地盤工学から熊本城跡を対象とした研究も始まっており、そのいくつかを紹介する。橋本隆雄は示力線法による石垣の安定性の計算を行ない、水平震度の増大に伴い石垣の安定性が低下することを再現し、石塁や地盤の有無などの石垣形状が安定性に影響を及ぼすことを確認した。さらに、石垣の変状が積み石の滑動や並進などに起因することを想定して安定性評価の方法確立が今後の課題とした(橋本隆雄 2018「示力線による熊本城石垣の安定性照査」『土木学会年次学術講演会講演概要集』土木学会)。山中稔は石垣部の緩み域検出手法として加振伝播速度に着目し、①鉄筋挿入による挿入長さの把握、②画像解析による石垣前面に生じている隙間の面積割合の算出、③石垣断面測量に基づく孕み出し指数の算出といった特性のデータと加振伝播速度の相関について検討を行なっている。その結果、いずれの場合も膨らみとの比例反比例関係が確認され、加振伝播速度が石垣の緩み域検出手法としての可能性を示すとした(山中稔 2019「被災石垣における加振伝播速度からの緩み域検出の試み」『熊本城調査研究センター年報 5』熊本城調査研究センター)。

このほか、レーザー距離計による被災石垣の形状計測による再現可能な形状分布図作成の提案、石垣を石塁・

半石塁・無石塁の3タイプに分け個別要素法によるモデル化を行い、動的挙動の数値解析によって石垣の崩壊状態を再現して城郭石垣の崩壊原因を探る考察や、築石構造物表面の変状を3軸加速度センサーを搭載した通信モジュールを取り付けてモニタリングするシステム構築など、長崎大学チームの取り組みが始まっている(杉本知史ほか2019「熊本城被災石垣の簡易調査法の提案と変状分析に関する研究」「城郭石垣の動的挙動の数値解析によるモデル化と定量的評価」「熊本城内における変状発生石垣の遠隔モニタリングシステムの構築」『熊本城調査研究センター年報5』熊本城調査研究センター)。

③石造物について

富田紘一は城内の石造物について、本丸内の地蔵櫓門跡付近・東櫓門跡から三間櫓跡・平櫓前の3ヵ所に中世の石造物が集中することを指摘し、多くの中世石造物が築城や一部庭園にも利用された結果としている(富田紘一1984「考古学からみた茶臼山とその周辺」『隈本古城史』熊本県立第一高等学校)。また、城内の石造物は紀年銘では文明16年(1484)の六地蔵幢から天正9年(1581)の地輪まであり、板碑では大永2年(1522)～天文5年(1536)まで、五輪塔では天文4年(1535)～天正9年(1581)まであり城普請への転用物かどうかは不明の場合が多いが、集中する上記2ヵ所は築城当初から設置されていたと推定し、造塔と築城の時間差は23年～117年で、築城時は生々しい供養碑や墓塔だったことから築城が最優先とされた結果とする。一方、前川清一は、加藤清正の築城で、城の周辺や近くにあったものを積極的に活用する「石狩り」が実施された結果とし、階段への石塔転用ついて、石質が柔らかい凝灰岩は石垣への転用を避けた結果としている(前川清一1996「熊本城内の石造物群」『新熊本市史 史料編 第1巻 考古資料』熊本市)。

なお、熊本城跡の経年劣化した石垣の修復では、石垣背後の裏込めから石塔の部材が出土する場合が多い。美濃口雅朗は、こうした裏込め石に転用された飯田丸石垣と西出丸から出土した石造物について報告している(美濃口雅朗2017「熊本城飯田丸出土の石造物」『熊本城調査研究センター年報3』熊本城調査研究センター)。出土状態から組み合わせが不明な五輪塔は、空風輪・火輪・水輪について型式的位置付けによって14世紀後半～15世紀前半の1類、15世紀中頃～16世紀代の2類、16世紀代の3類・4類に編年している。石材石質について、安山岩使用の事例は県央地区の特徴とする。また、出土した宝篋印塔の塔身は熊本市内2例目の「菊鹿型塔身」で至徳元年(1384)の銘文があることから菊鹿地域からの搬入と推定している。

なお、熊本地震で被災した重要文化財長塀の修復に伴う発掘調査を契機に、度々の被災と修復の履歴をもつ長塀の多様な控柱石の観察から、長塀の修復履歴と控柱石の分類との対応を行ない、最も古い型式の控柱石が明治22年(1889)熊本地震以前のもので、西南戦争後に建造された官軍墓地の墓標と類似することから、その影響下で成立した型式と推定している(北原治2018「長塀の控柱石について」『熊本城調査研究センター年報4』熊本城調査研究センター)。

3. 遺物からのアプローチ

城跡から出土する遺物には多様なものがある。城郭建築で一般的な屋根材の瓦は大量に消費され、被災や修復にあたって大量に古材が投棄され代わって新材が補われた。陶磁器類も一般的には使用時代が短い消費財で、やはり大量に出土している。このほか武器や明治期の鎮台軍用品、建材としての木材や板ガラス、銭貨といったものがある。ここでは代表的な遺物である瓦と陶磁器を中心にその研究史を紹介する。

①瓦について

熊本県の史蹟調査委員の下林繁夫が陸軍司令部や加藤神社、第一師範学校が所蔵する熊本城の硫瓦(軒丸瓦)2種と華瓦(軒平瓦)5種を紹介している(下林繁夫1926「熊本縣下に於ける古代礎石と古瓦」『熊本縣史蹟名勝天然記念物調査報告 第三冊』熊本県)。桔梗紋のある軒丸瓦・軒平瓦の組合せを築城当時ものとし、またこの種の瓦が宇土櫓に稀に用いられているとする。なお、幅高の桔梗紋軒平瓦には金箔が置かれているとあり注目される。

戦後になり行われた学術的な調査として不開門内に保管されていた瓦の調査がある(文化財保存計画協会編 1981『重要文化財熊本城不開門修理工事報告書』熊本市)。慶長四年銘軒平瓦(滴水瓦)などの朝鮮瓦について天守所用瓦とし、宇土城でも慶長十三年銘のものが出土しており、その使用建物に関心を示すとともに、その他の軒平瓦の中には肥前名護屋城出土軒平瓦に類似するものがあることに注目する。軒丸瓦では、桔梗紋のものが加藤時代で、巴紋のものには肥前名護屋城のそれと類似したものがあり、(熊本城の)創建時のものが存在するとした。そのほか、桐紋の軒丸瓦があること、光芒文の軒丸瓦は類品が宇土城跡にあることを指摘する。とくに光芒文軒丸瓦の使用先について、出土量が慶長四年銘滴水瓦と同数で瓦当径が大型であること、丸瓦部との接合部が鈍角であることから、朝鮮瓦と組みになって天守に使用されたものと推定している。このほか、宇土櫓の修理に伴い古材の鬼瓦19枚のデザインと技法によって編年が実施されており、制作年代の特定はできていないが、鬼瓦中央に用いられた九曜紋が一般的な九曜から周囲の丸が小さい細川九曜に徐々に変化する傾向が確認されている(文化財保存計画協会編 1990『重要文化財 熊本城宇土櫓保存修理工事報告書』熊本市)。

熊本城内から出土する瓦について、初めて総合的に触れたものとして、西出丸の発掘調査に伴い報告された野田和美の報告がある(野田和美 1999「出土瓦の様相と今後の課題」『特別史跡熊本城跡 石垣保存修理工事・発掘調査報告書』熊本市教育委員会)。軒丸瓦については、李朝系の重ね日差し文、桐紋、桔梗紋、三巴紋、九曜紋に分類し、軒平瓦は李朝系軒平瓦のほか、中心飾りによって三葉文、立木様文、桐様文、笹紋、桔梗紋、九曜紋に大別している。李朝系の軒丸と軒平の組み合わせは朝鮮で製作された可能性はないとし、宇土城出土の軒平瓦との同笵の可能性を指摘する。滴水瓦の瓦当にある所謂「金烏玉兎」文様は、梵字を裏返しした文字と推定する。

一方、熊本城跡や佐敷城跡、および国内や朝鮮の高麗時代や李朝時代の瓦との比較から李朝系瓦の特徴を考察したものとして美濃口紀子の先駆的研究がある(美濃口紀子 1998「熊本城湯都度の李朝系軒丸瓦 ―いわゆる「日足紋瓦」をめぐる問題―」『織豊城郭』第5号 織豊期城郭研究会)。美濃口は、熊本城出土例を中心とした李朝系瓦の観察を通して①全国に出土する李朝系瓦の導入状況が地域や大名によってさまざまであること、②李朝瓦に特有とされてきた「折り曲げ技法」以外の李朝瓦が存在すること、③国内で使用された事例はステイタス・シンボルとしての性格が強いこと、④接合角度は葺き替えの規模に左右されること、⑤熊本城に出土する李朝系軒丸瓦の紋様は朝鮮の伝統的モチーフに由来し、「日足紋」という名称が不適切であること、以上5点を指摘した。続けて美濃口は、熊本城跡や佐敷城跡の李朝瓦や李朝系瓦の系譜を考察して編年を考えている。(美濃口紀子(白木原和美監修)2004「織豊城郭における李朝瓦の移入と展開―佐敷城跡出土のいわゆる李朝瓦を中心として―」『佐敷城跡』芦北町教育委員会)。佐敷城軒丸瓦(A-Ⅱ-a1)と熊本城軒丸瓦(B-Ⅱ-a1)が同紋品で、熊本城軒丸瓦(B-Ⅱ-a2)と宇土城軒丸瓦(B-Ⅱ-a2)も同紋品で、その型式変化から佐敷城➡熊本城➡熊本城・宇土城という先後関係にあるとした。なお、佐敷城跡出土の光芒紋の軒丸瓦について、蔚山の慶尚左兵営城跡出土の軒丸瓦と同笵瓦であることを高正龍が確認している(高正龍 2015「蔚山慶尚左兵営城と熊本佐敷城の同笵瓦―豊臣秀吉の朝鮮侵略と「朝鮮瓦」の伝播 2―」『東アジア瓦研究』第4号 東アジア瓦研究会)。

全国的視点から近世瓦の編年を行った山崎信二は、熊本県内の熊本城ほかの諸城や瓦窯から出土した瓦の特徴を述べたうえで年代比定を行っている(山崎信二 2008『近世瓦の研究』同成社)。まず山崎は、肥後国でのコビキA(糸切り痕)からコビキB(鉄線切り)の移行期について、慶長5～7年(1600～1602)頃まで残り、慶長8・9年頃消滅するとし、コビキBの採用が他地域よりも遅れるとしている。次に城郭ごとの瓦の編年を行う中で、熊本城では「近世Ⅱ期(1582～1591)」の瓦として隈本城(古城)関係の桐紋軒丸瓦と均整唐草文軒平瓦をあげる。「近世Ⅲ期(1592～1615)」の瓦の代表として「慶長四年」銘滴水瓦をあげ、AからEの同文の5種があり、A・Bの2種が慶長4年のもので、他は慶長末期以降のものとした。このほか、「近世Ⅴ期(1657～1682)」での九曜紋唐草文軒平瓦3種の文様変遷を指摘し、「近世Ⅵ期(1682～1724)」に目板瓦の出現としている。なお山崎は、肥後の瓦を朝鮮瓦との関係から熊本城と宇土城の滴水瓦の製作技法は日本の技法で製作されたものとしている。

瓦に見られる年号・製作地・製作者などを刻印した瓦の整理・分析を木下泰葉が行なっている(木下泰葉 2014「刻

印」『熊本城跡発掘調査報告書―飯田丸の調査―』熊本城調査研究センター)。年号入りのものでは 17 世紀から 18 世紀初頭の事例が多く、工人の好みなのか瓦の葺き替えの集中かは不明としながら、災害に起因した修復の可能性も示唆する。「小山」「土山」といった刻印は、瓦の製造地を指したもので、猿渡家・北村家・福田家・芦原家・坂上家といった「瓦師」についても紹介している。なお、瓦師については『肥後讃史総攬』(松本雅明監修 1983『肥後讃史総攬』鶴屋百貨店)に記載されている。

飯田丸と本丸御殿から出土した文字を使用している軒平瓦の紹介と評価を行なった金田一精の考察がある(金田一精 2016「熊本城跡出土の文字瓦 1」『熊本城調査研究センター年報 2』熊本城調査研究センター)。鏡文字となった「文禄四年拾月一日」「天正十八年」があり、発注者が年号を意識していた半面、仕上がりを正字とする意識が薄かったと指摘し、とくに「天正十八年」軒平瓦は、熊本城用として製作された可能性のほか、寺院等の使用瓦を持ち込んだ可能性を指摘している。また、この時期の瓦は古城用に製作されたもので、それらが新城から出土することから古城から新城への瓦の移動を示唆するとしている。

熊本城出土の軒先瓦を中心とした編年を試みたものに、美濃口紀子の一連の研究がある(美濃口紀子 2017「熊本城出土の近世瓦―刻印瓦と瓦師を中心に―」『第 66 回理蔵文化財研究集会 幕藩体制下の瓦 ―近世都市遺跡における生産と流通―』埋蔵文化財研究集会、同 2018「九州地方の城郭瓦の様相―熊本城出土紀年銘瓦の集成を中心に―」『続 織豊期城郭瓦研究の新視点』(織豊期城郭研究会 2018 年度 京都研究集会)織豊期城郭研究会、同 2019「熊本城瓦編年の立案に向けて―瓦研究の到達点と課題の整理―」『織豊城郭』織豊期城郭研究会)。紀年銘瓦や普請・作事の記録といった絶対年代資料と寺院出土資料との比較を行い、出土品の一括資料の先後関係などの相対年代資料とでクロスチェックした仕事で、山崎信二の全国編年(山崎 2008『近世瓦の研究』同成社)との関係を考慮し、加藤時代は熊本城瓦 1 期から熊本城瓦 4 期に分け、細川時代を熊本城瓦 5 期から熊本城瓦 9 期に、その後を熊本城瓦 10 期に区分し、藩主・熊本城に関する出来事・肥後国内の出来事と対比させた年表を作成して熊本城瓦の編年確立のための作業としている。

また、熊本城跡出土の滴水瓦の瓦当文様と銘文に着目して編年を検討した関根章義の研究がある(関根章義 2019「熊本城跡天守出土「慶長四年」銘滴水瓦の基礎的研究―瓦当文様を中心に―」『熊本城調査研究センター年報 5』熊本城調査研究センター)。古写真では大小天守・西大手門・新三丁目門などの限られた建造物での使用があげられるが、出土地点は本丸内の各所に広範に確認されていることを指摘する。次に瓦当文様を円文と雲形文の組み合わせから考察して瓦当文様の分類を行ない、銘文も同様に分類を行なったうえで、「慶長四年」銘滴水瓦の変遷試案を提示し、瓦当笵が 20 種あることや、2 系統に枝分かれすることを指摘する。

②陶磁器について

美濃口紀子は、現在、県営野球場となっている藤崎八旛宮跡の土地利用変遷を整理したうえで、野球場建設に伴う事前調査によって出土した遺物のうち陶磁器を中心とした再整理を行なっている(美濃口紀子 2015「藤崎八旛宮跡出土遺物の研究―藤崎第県営野球場とその周辺の遺構の変遷―」『熊本博物館報』27 号 熊本博物館)。

飯田丸曲輪内の調査で出土した陶磁器の分析を行った美濃口雅朗は、16 世紀末～17 世紀前半と 19 世紀初頭～中頃にピークがあり、曲輪利用の空白期間の存在に留意する。一方、近代以降の出土品では、網田焼皿や英国ドーソン窯産硬質陶器小皿、不明壺に注目する一方、西南戦争関連武器類の出土状況を「熊本鎮台戦闘日記」の記述と照合して兵卒の配備と戦闘のあり方を復元し、曲輪内における銃弾の供給の実態について考察している(美濃口雅朗 2014「第 5 章 2 遺物」『熊本城跡発掘調査報告書―飯田丸の調査―』熊本城調査研究センター)。また、現千葉城町の熊本国税局跡地から出土した 18 世紀末から 19 世紀中頃の陶磁器を含む造成土とこれを掘り込む土坑 SK02 を確認し、明治 10 年(1877)から同 12 年(1879)に埋没した本丸御殿出土の一括遺物と比較して実年代が近似する資料として報告し天幕用の鉄製ペグ、軍馬用の鉄製轡、鉄製缶詰といった鎮台の用品のほか、一括して大量に購入したとみられる食器に注目している(美濃口雅朗 2017「熊本城出土の近代陶磁器一括資料―新出資料の紹介―」

『熊本城調査研究センター年報 3』熊本城調査研究センター)。さらに、熊本城本丸御殿と熊本城下の古町遺跡出土の陶磁器を比較して生産地と消費地の関係を分析した美濃口雅朗の研究がある(美濃口雅朗 2017「熊本城・城下周辺における肥後産陶磁器の使用」『熊本のやきもの』佐賀県立九州陶磁文化館)。熊本城本丸御殿の場合、生産地によって購入された器種が異なり選択的な購入があったが、城下の古町遺跡ではそうした傾向がないこと、生産地としては網田焼や松尾焼が多く、本丸御殿では 19 世紀前半代から後葉の日用雑器に網田焼の同一形態品が複数あることを指摘している。また、明治 10 年代に熊本鎮台倉庫だった二の丸での確認調査で出土品について、購入先として網田焼が多い理由を流通コストと地元の経済振興が考慮されたものとした。

このほか、美濃口は熊本鎮台本営となっていた本丸御殿出土品の分析から、小広間から出土したものに比熱資料が多いことから火元は鎮台司令部として使用されていた小広間三階櫓付近と推定し、鎮台司令部が置かれた空間で失火の可能性が高い場所ではないことと、放火のために侵入することは困難であることを指摘している(美濃口雅朗 2018「出土品からみた熊本城炎上」『西南戦争 140 年シンポジウム記録集　熊本城炎上の謎に迫る！』熊本市)。上記の美濃口による本丸御殿出土の陶磁器類や軍用品などに関する研究は、市街戦「健軍・保田窪の戦い」で構築された塹壕の出土陶磁器との比較など、広範に分布する西南戦争戦跡の考古学的手法による社会史研究へと深化が始まっている(美濃口雅朗「西南戦争の陶磁器」佐々木達夫編『陶磁器の考古学』第 11 巻　雄山閣)。

なお、奉行丸で確認された年代不明の「崩落痕」や「17 世紀前葉から中葉に飯田丸での遺物量が激減する事象について、寛永 2 年の熊本地震に起因した事象であるという指摘がある(齋藤友里恵 2019『寛永熊本地震の考古学的検討』『新潟史学』78 号　新潟史学会)。「崩落痕」と推定された断面には滑落面がなく、層序の状態も崩落とするには不自然で、曲輪造成の痕跡である可能性もあるので引き続き検討の余地がある。

3表　熊本城関連論文目録一覧表

凡例
一、熊本城および城下に関する刊行物は膨大であるため、一覧表では学術論文・研究ノート・著作などに限定し、現時点で把握できたものについて、年代の古いものから順に並べた。
一、収録の下限は令和元年(2019)12月末日までとした。

	筆者	タイトル	掲載誌名	号数	発行元	発行年
1	第六師団司令部	熊本城史梗概			第六師団司令部	1901
2	帝国聯隊史刊行会	歩兵第十三聯隊史			帝国聯隊史刊行会	1923
3	熊本城史編纂委員	熊本城史梗概　改訂再版			帝国在郷軍人会熊本支部	1925
4	下林繁夫	熊本縣下に於ける古代礎石と古瓦	熊本縣史蹟名勝天然記念物調査報告	3	熊本縣	1926
5	熊本城趾保存会	加藤清正と熊本城			熊本城趾保存会	1927
6	熊本城趾保存会	熊本城史梗概			熊本城趾保存会	1927
7	熊本城趾保存会	熊本城史略			熊本城趾保存会	1927
8	肥後史談会	西南役と熊本城			熊本城趾保存会	1929
9	坂本新八	熊本城天守閣設計に就て	建築雑誌	545	日本建築学会	1931
10	平野流香	熊本市史			熊本市	1932
11	大類伸・鳥羽正雄	日本城郭史			雄山閣	1936
12	下林繁夫	熊本城に於ける国宝建造物　上・中・下	熊本城	1-1～3	熊本城趾保存会	1940
13	平野流香	熊本城の構造　上・中・下	熊本城	1-1～3	熊本城趾保存会	1940
14	中野尾山	熊本城懐古　1～15	熊本城	1-1～2-6	熊本城趾保存会	1940・1941
15	藤岡通夫	宇土櫓の特徴	熊本城	1-7	熊本城趾保存会	1940
16	熊本城趾保存会	西南役寫眞物語 (1) ～(26)	熊本城	2-2～4-11	熊本城趾保存会	1941～1943
17	内柴御風	熊本城追憶拾遺記 (1)～(10)	熊本城	2-2～3-2	熊本城趾保存会	1941・1942
18	城戸久	宇土櫓の建築に就いて	熊本城	2-9	熊本城趾保存会	1941
19	藤岡通夫	熊本城天守復原考	建築學會論文集	22	日本建築学会	1941
20	藤岡通夫	熊本城天守復原考(1)～(6)	熊本城	3-5～10	熊本城趾保存会	1942
21	小島勝貞	明治十年熊本篭城回顧			熊本城保存会	1942
22	城戸久	熊本城宇土櫓造営年次私考	建築學會論文集	30	日本建築学会	1943
23	日本城郭協会	熊本城とその周辺			西沢弘文堂	1961
24	熊本県教育委員会	『藤崎台』			熊本県教育委員会	1961
25	下田曲水編	天守閣再建記念熊本城今昔記			熊本市役所観光課	1962
26	熊本市	重要文化財細川家舟屋形修理工事報告書			熊本市	1963
27	西村護	熊本城の石垣について	熊本地誌会誌	29	熊本大学	1968
28	藤岡通夫	近世建築史論集			中央公論美術出版	1969
29	鳥羽正雄	日本城郭辞典			東京堂出版	1971
30	熊本市教育委員会	熊本市北部地区文化財調査報告			熊本市教育委員会	1971
31	熊本県美術館建設準備室	熊本城二の丸跡史蹟調査報告書－県立美術館建設予定地－			熊本県美術館建設準備室	1972
32	熊本城公園管理事務所	特別史跡 熊本城			熊本市	1973
33	北野隆	近世初期（慶長期）武家屋敷の一例について：熊本城内加藤平左ェ門屋敷の場合	日本建築学会論文報告集	213	日本建築学会	1973
34	熊本県立美術館建設準備室	熊本県立美術館建設予定地樹木調査予定地			熊本県立美術館建設準備室	1973
35	熊本博物館建設準備室	熊本市古京町二の丸跡調査報告書―熊本博物館建設予定地―			熊本博物館建設準備室	1974
36	熊本洋学校教師館復元工事報告書編集委員会	熊本洋学校教師館（ジェーンズ邸）移築復元工事報告書			熊本市教育委員会	1974

37	鈴木喬	熊本の城	熊本の風土とこころ	10	熊本日日新聞社	1975
38	熊本城調査委員会	熊本城跡　旧坪井川畔遺跡調査報告書―昭和50年度―			熊本城調査委員会	1976
39	藤岡通夫	熊本城			中央公論美術出版	1976
40	熊本城調査委員会	特別史跡熊本城跡　二の丸調査報告書			熊本城調査委員会	1976
41	北野隆	熊本城内加藤平左エ門屋敷の書院について；近世初期武家屋敷における数寄屋風書院の研究	学術講演梗概集	52	日本建築学会	1977
42	荒木精之	冨重利平作品集			冨重利平作品集刊行会	1977
43	熊本市教育委員会	熊本城跡二の丸御門虎口環境整備工事報告書			熊本市教育委員会	1977
44	熊本県教育委員会	熊本県の中世城跡			熊本県教育委員会	1978
45	磯村幸男・阿蘇品保夫・森下功・三木靖	日本城郭大系18　福岡・熊本・鹿児島			新人物往来社	1978
46	工兵第六連隊史編纂委員会	工兵第六連隊史			工六会	1978
47	北野隆、原田聰明	熊本城内本丸殿舎について；大広間,猿楽の間,耕作の間の殿舎について	日本建築学会研究報告中国・九州支部計画系	4	日本建築学会	1978
48	熊本城調査委員会	熊本城三の丸砂薬師付近　遺構調査報告書			熊本城調査委員会	1978
49	保存科学研究会	重要文化財熊本城平櫓修理工事(屋根葺替、部分修理)報告書			熊本市	1978
50	北野隆、岡田健	熊本城内加藤平左エ門屋敷御上の復元について	日本建築学会研究報告九州支部計画系	24	日本建築学会	1979
51	森山恒雄	加藤清正と小西行長の明暗	新・熊本の歴史	4	熊本日日新聞社	1979
52	松本寿三郎	城下町・五ケ町・在町	新・熊本の歴史	4	熊本日日新聞社	1979
53	森下功	熊本城	日本城郭体系(福岡・熊本・鹿児島)	18	新人物往来社	1979
54	熊本県立美術館	肥後の近世絵画史概説	第四回　熊本の美術　肥後の近世絵画		熊本県立美術館	1979
55	内藤昌	城の日本史			日本放送出版協会	1979
56	熊本市	重要文化財熊本城監物櫓・長塀修理工事(屋根葺替、部分修理)報告書			熊本市	1979
57	熊本市教育委員会	熊本城三の丸森本櫓跡漆畑遺跡調査報告書			熊本市教育委員会	1979
58	熊本城調査委員会	熊本城二の丸・三の丸遺跡調査報告書			熊本城調査委員会	1979
59	熊本市教育委員会	熊本城不開門仮道復元工事報告書			熊本市教育委員会	1980
60	熊本城研究会	熊本城三の丸・二の丸遺跡調査報告書			熊本城研究会	1980
61	文化財保存計画協会	重要文化財熊本城櫓之進櫓修理工事(屋根葺替、部分修理)報告書			熊本市	1980
62	文化財保存計画協会	重要文化財熊本城不開門修理工事報告書			熊本市	1981
63	熊本市	熊本城城郭模型製作記録			熊本市	1981
64	北野隆	熊本城の宇土櫓について	日本建築学会論文報告集	308	日本建築学会	1981
65	北野隆	江戸末期における熊本城下町の武士住宅について	日本建築学会九州支部報告	26	日本建築学会	1982
66	太田博太郎・平井聖	日本建築史基礎資料集成十五　城郭Ⅱ			中央公論美術出版	1982
67	熊本市教育委員会	熊本城文献調査報告書			熊本市教育委員会	1982
68	熊本大学工学部建築学教室 北野研究室	熊本城管理棟新築に伴う　熊本城数寄屋丸調査報告書			熊本大学工学部建築学教室 北野研究室	1983
69	北野隆	熊本県における武士住宅の遺構について	日本建築学会研究報告　九州支部2　計画系	27	日本建築学会	1983
70	文化財保存計画協会	重要文化財熊本城田子櫓他四棟修理工事(屋根葺替、部分修理)報告書			熊本市	1983
71	桑原文夫	熊本城の石垣勾配	日本工業大学研究報告	14	日本工業大学	1984
72	鎌田浩	熊本藩の町政機構―特に熊本城下町について	幕藩国家の法と支配　高柳真三先生頌寿記念		有斐閣	1984
73	田邊哲夫	序章　隈本古城史概説	隈本古城史		熊本県立第一高等学校	1984
74	富田紘一	考古学からみた茶臼山とその周辺	隈本古城史		熊本県立第一高等学校	1984

75	工藤敬一	藤崎八幡宮と宮内荘	隈本古城史		熊本県立第一高等学校	1984
76	森下功	茶臼山隈本之絵図	隈本古城史		熊本県立第一高等学校	1984
77	阿蘇品保夫	出田・鹿子木・城氏	隈本古城史		熊本県立第一高等学校	1984
78	森山恒雄	佐々成政	隈本古城史		熊本県立第一高等学校	1984
79	森山恒雄	加藤清正	隈本古城史		熊本県立第一高等学校	1984
80	太田幸博	中世の城から近世の城へ	隈本古城史		熊本県立第一高等学校	1984
81	松本寿三郎	細川藩時代	隈本古城史		熊本県立第一高等学校	1984
82	北野隆	熊本城宇土櫓について	学術講演梗概集F		日本建築学会	1985
83	熊本市教育委員会	熊本城西出丸発掘調査概要			熊本市教育委員会	1985
84	熊本県教育委員会	古城横穴墓群			熊本県教育委員会	1985
85	文化財保存計画協会	重要文化財熊本城東十八間櫓・北十八間櫓・五間櫓修理工事報告書			熊本市	1985
86	九州砲兵概史編纂委員会	九州砲兵概史			山吹会	1986
87	星田義治、阪田康徳、荒牧昭二郎、中山洋、岩下信照	熊本城石垣の合理性と曲面擁壁の力学的考察	九州東海大学紀要 工学部	13	九州東海大学	1987
88	北垣聰一郎	石垣普請			法政大学出版局	1987
89	千田嘉博	織豊系城郭の構造	史林	70	史学研究会	1987
90	熊本市教育委員会	美術館南側石垣修理保存工事報告書			熊本市教育委員会	1987
91	藤岡通夫	城と城下町			中央公論美術出版	1988
92	渡辺勝彦	学界展望 城郭	建築史学	10	建築史学会	1988
93	熊本開発研究センター	フィールド・ミュージアム熊本城 明日の熊本城城を考える			熊本開発研究センター	1989
94	宮上茂隆	熊本城天守小天守および古天守の造営移築について	学術講演梗概集F		日本建築学会	1989
95	北垣聰一郎	熊本城石垣の変遷について	封建社会と近代		関西大学津田秀夫先生古希記念会	1989
96	本多孝・上妻公・花立剛	ウォッチング熊本城	新・熊始学		熊本日日新聞社	1990
97	文化財保存計画協会	重要文化財 熊本城宇土櫓保存修理工事報告書			熊本市	1990
98	大塚虎之助	唯今戦争始メ候 電報にみる西南役			熊本日日新聞情報文化センター	1991
99	増田民男	熊本城 熊本城史跡概見図	熊本城 復刊	1	熊本城顕彰会	1991
100	鈴木喬	熊本城物語(1)～(12)	熊本城 復刊	1～16	熊本城顕彰会	1991～1994
101	富田紘一	熊本 古写真物語(1)～(60)	熊本城 復刊	1～62	熊本城顕彰会	1991～2006
102	小島慈貞	熊本城史梗概(1)～(20)	熊本城 復刊	3～26	熊本城顕彰会	1991～1997
103	増田民男	西南戦争で使用された銃砲	熊本城 復刊	2	熊本城顕彰会	1991
104	増田民男	わが国大砲の沿革	熊本城 復刊	3	熊本城顕彰会	1991
105	増田民男	鎮台砲兵	熊本城 復刊	4	熊本城顕彰会	1991
106	鈴木喬	隈本城から熊本城へ	熊本城を科学する		熊本大学	1992
107	富田紘一	消えた熊本城を探る	熊本城を科学する		熊本大学	1992
108	森山恒雄	築城への道	熊本城を科学する		熊本大学	1992
109	森山恒雄	加藤家と武将	熊本城を科学する		熊本大学	1992
110	北野隆	近世の城とは	熊本城を科学する		熊本大学	1992
111	北野隆	縄張りと石垣	熊本城を科学する		熊本大学	1992

112	北野隆	天守の謎	熊本城を科学する		熊本大学	1992
113	松本寿三郎	殿と家臣	熊本城を科学する		熊本大学	1992
114	松本寿三郎	侍と町人	熊本城を科学する		熊本大学	1992
115	今江正知	花と侍―肥後の名花―	熊本城を科学する		熊本大学	1992
116	猪飼隆明	天守閣炎上	熊本城を科学する		熊本大学	1992
117	古江研也	熊本城をめぐる文学	熊本城を科学する		熊本大学	1992
118	西岡鐵夫・今江正知	熊本城、謎解きの道	熊本城を科学する		熊本大学	1992
119	北野隆	近世初期の武家屋敷に関する研究：熊本城内加藤平左エ門屋敷の広間について	日本建築学会研究報告九州支部計画系	33	日本建築学会	1992
120	本田秀人	熊本城下町の研究―新町の町屋と町人	市史研究くまもと	3	熊本市	1992
121	熊本県教育委員会	熊本県文化財調査報告書第125集　熊本県未指定文化財遺産報告Ⅰ－建造物編(建築物・眼鏡橋・石造物)－			熊本県教育委員会	1992
122	原口長之・鈴木喬	物語・加藤清正(1)～(34)	熊本城　復刊	7～55	熊本城顕彰会	1992～2004
123	富田紘一	古写真に探る熊本城と城下町			肥後上代文化研究会	1993
124	北野隆	城郭・侍屋敷古図集成　熊本城			至文堂	1993
125	森山恒雄ほか	安藤英男編　加藤清正のすべて			新人物往来社	1993
126	森山恒雄	加藤清正伝記「続撰清正記」の成立とその追加集の紹介(一)	熊本大学文学部紀要　人文科学	42	熊本大学	1993
127	鈴木喬	熊本城内そぞろ歩き(1)～(3)	熊本城　復刊	9～11	熊本城顕彰会	1993
128	高瀬哲郎	九州に於ける近世城郭の石垣について(その一)	先史学・考古学論究		龍田考古会	1994
129	北野隆・鈴木喬	歴史群像名城シリーズ　熊本城			学習研究社	1994
130	熊本大学埋蔵文化財調査室	熊本大学構内遺跡発掘調査報告Ⅰ(1994・1995年度)			熊本大学埋蔵文化財調査室	2003
131	森山恒雄	隈本から熊本城へ	入門　江戸時代の熊本		三章文庫	1994
132	増田民男	熊本城内漫歩(1)～(11)	熊本城　復刊	15～30	熊本城顕彰会	1994～1998
133	北野隆	加藤氏代の熊本城について：その2・熊本城の天守・小天守・各櫓について	日本建築学会研究報告九州支部計画系	34	日本建築学会	1994
134	熊本市教育委員会	熊本市の文化財			熊本市教育委員会	1994
135	富田紘一・富田紘次	熊本城の石垣刻印	熊本城　復刊	17～36	熊本城顕彰会	1995～1999
136	北野隆	加藤氏代の熊本城について：その1・熊本城の縄張りについて	日本建築学会研究報告九州支部計画系	35	日本建築学会	1995
137	富田紘一	白川・坪井川流路考	熊本城　復刊	19	熊本城顕彰会	1995
138	上村重次	「新研究」城内板碑と相似の図像碑	熊本城　復刊	20	熊本城顕彰会	1996
139	勇知之	熊本城篭城			新地方派文学会	1996
140	堀江保也、北野隆	熊本城の五階櫓に関する研究	日本建築学会研究報告中国・九州支部計画系	10	日本建築学会	1996
141	北野隆	熊本城内の茶場空間について	日本建築学会学術講演梗概集		日本建築学会	1996
142	富田紘一	白川・坪井川流路と城下町の形成	市史研究くまもと	7	熊本市	1996
143	松崎範子	近世熊本町の造酒屋	市史研究くまもと	7	熊本市	1996
144	前川清一	熊本城内の石造物	新熊本市史　史料編	1	熊本市	1996
145	大田幸博	古城	新熊本市史　史料編	1	熊本市	1996
146	大田幸博	千葉城	新熊本市史　史料編	1	熊本市	1996
147	熊本市	熊本県指定重要文化財 旧細川刑部邸 移築工事報告書			熊本市	1996
148	上村重次	追補・城内板碑と相似の図像碑	熊本城　復刊	21	熊本城顕彰会	1996

149	上村重次	再追補・城内板碑と相似の図像碑	熊本城　復刊	22	熊本城顕彰会	1996
150	鈴木喬	熊本隊士の記録(1)～(3)	熊本城　復刊	24～27	熊本城顕彰会	1996・1997
151	熊本開発研究センター	熊本城復元・整備調査報告書			熊本開発研究センター	1997
152	熊本開発研究センター	熊本城復元・整備調査報告書 別冊			熊本開発研究センター	1997
153	美濃口紀子	熊本城出土の李朝系軒丸瓦―いわゆる「目足紋瓦」をめぐる問題―	織豊城郭	5	織豊期城郭研究会	1998
154	柳田快明	今川了俊の肥後攻略(南北朝期隈本城をめぐって)	新熊本市史　通史編	2	熊本市	1998
155	柳田快明	今川了俊の解任と室町幕府支配(「くまもとの城」と武朝懐柔)	新熊本市史　通史編	2	熊本市	1998
156	阿蘇品保夫	菊池能運と熊本(千葉城と出田氏)	新熊本市史　通史編	2	熊本市	1998
157	阿蘇品保夫	菊池義武と隈本(隈本城と重治)	新熊本市史　通史編	2	熊本市	1998
158	大田幸博	熊本市域の中世城	新熊本市史　通史編	2	熊本市	1998
159	白峰旬	日本近世城郭史の研究			校倉書房	1998
160	富田紘一	熊本城炎上の謎を考える	熊本博物館報	11	熊本博物館	1999
161	熊本市教育委員会	特別史跡 熊本城跡 石垣保存修理工事・発掘調査報告書			熊本市教育委員会	1999
162	増田民男	城内兵舎の変遷を辿る	熊本城　復刊	33	熊本城顕彰会	1999
163	増田民男	熊本城を歩く(1)～(11)	熊本城　復刊	34～45	熊本城顕彰会	1999～2002
164	富田紘一	熊本三河川と城下町の形成	市史研究くまもと	11	熊本市	2000
165	柳田快明	南北朝から戦国期の「隈本城」を考える	市史研究くまもと	11	熊本市	2000
166	松崎範子	熊本藩における旅人問屋の整備と城下商人の商業経営について	市史研究くまもと	11	熊本市	2000
167	古賀優作	熊本城下町町人の経営と生活	熊本史学	76・77	熊本史学会	2000
168	千田嘉博	織豊系城郭の形成			東京大学出版会	2000
169	富田紘一・富田紘次	熊本城石垣に歴史を探る(1)～(37)	熊本城　復刊	37～70	熊本城顕彰会	2000～2008
170	森山恒雄	佐々・加藤の政治	新熊本市史　通史編	3	熊本市	2001
171	小野将史、北野隆	熊本城における「五階櫓」と「三階櫓」の名称について	学術講演梗概集F-2		日本建築学会	2001
172	小野将史、北野隆	熊本城の三階櫓について：由輪間における櫓名称と構造の関係	日本建築学会研究報告九州支部計画系	40	日本建築学会	2001
173	木島孝之	城郭の縄張り構造と大名権力			九州大学出版会	2001
174	猪飼隆明	西南戦争	新熊本市史　通史編	5	熊本市	2001
175	三澤純	戦後処理と復興―山崎町と京町の場合	新熊本市史　通史編	5	熊本市	2001
176	瀬戸弦誠	徴兵制度の実施と熊本鎮台	新熊本市史　通史編	5	熊本市	2001
177	瀬戸弦誠	第六師団の成立と警察制度の確立	新熊本市史　通史編	5	熊本市	2001
178	小野将史、北野隆	毛利家文庫の絵図「[肥後熊本城略図]」について：加藤氏時代の熊本城に関する研究(その1)	日本建築学会計画系論文集	67	日本建築学会	2002
179	北垣聰一郎	伝統技術からみた城郭石垣の勾配について	関西大学考古学研究室50周年記念考古学論叢		関西大学考古学研究室開設五拾周年記念考古学論叢刊行会	2002
180	勇知之	熊本城攻撃 西南戦争の明暗			もぐら書房	2002
181	大田幸博	熊本市内に所在する中世城の諸問題	市史研究くまもと	13	熊本市	2002
182	山内由紀	近世後期熊本町における窮民救済	熊本史学	80・81	熊本史学会	2002
183	増田隆實	西南戦争における熊本鎮撃の活動(1)～(7)	熊本城　復刊	46～52	熊本城顕彰会	2002
184	鈴木喬	隈本城から熊本城へ(1)～(3)	熊本城　復刊	47～49	熊本城顕彰会	2002・2003
185	大倉隆二	花ひらく絵画等の芸術	新熊本市史　通史編	4	熊本市	2003

186	小野将史、北野隆	加藤清正代末期の熊本城について：加藤氏時代の熊本城に関する研究(その2)	日本建築学会計画系論文集	68	日本建築学会	2003
187	美濃口紀子	熊本城瓦復元模型製作の試み	熊本博物館館報	15	熊本市立熊本博物館	2003
188	西田一彦・西形達明・玉野富雄・森本浩行	城郭石垣断面形状の設計法とその数式表示に関する考察	土木学会論文集	750	土木学会	2003
189	北垣聰一郎	石垣秘伝書　北川作兵衛			北垣聰一郎	2003
190	大田垂博	肥後の中世城	熊本歴史叢書3　乱世を駆け抜けた武士たち		熊日出版	2003
191	西島眞理子、北野隆	肥後藩御本陣に関する研究：高田家(薩摩屋敷)について	日本建築学会研究報告　九州支部3　計画系	42	日本建築学会	2003
192	米満泉	肥後藩御用絵師杉谷行直の新出画稿と熊本城本丸御殿障壁画について	デアルテ	20	西日本文化協会	2004
193	小野将史、北野隆	加藤忠広による熊本城の改修と熊本城小天守について：加藤氏時代の熊本城に関する研究(その3)	日本建築学会計画系論文集	69	日本建築学会	2004
194	美濃口紀子・白木原和美	織豊城郭における李朝瓦の移入と展開―佐敷城出土のいわゆる李朝系瓦を中心として―	佐敷城跡		芦北町教育委員会	2004
195	大塚虎之助	熊本城と通信(1)～(6)	熊本城　復刊	54～59	熊本城顕彰会	2004・2005
196	佐藤伸二	八代前川堤防の古石垣　新発見の八代城下石垣の刻印	熊本城　復刊	56	熊本城顕彰会	2004
197	北野隆	熊本城本丸御殿(大広間)の復元について	建築史学	45	建築史学会	2005
198	脇坂淳	熊本城本丸御殿の障壁画―昭君の間,若松の間の復元にちなんで	京都教育大学紀要	106	京都教育大学	2005
199	富田紘一	本覚院墓の出土遺物	熊本城　復刊	60	熊本城顕彰会	2005
200	熊本市教育委員会	特別史跡 熊本城跡 西出丸一帯復元整備工事報告書			熊本市教育委員会	2005
201	熊本市	熊本城飯田丸一帯復元整備事業報告書			熊本市	2005
202	勇知之	「人」あり熊本城物語			もぐら書房	2006
203	吉村豊雄	加藤氏の権力と領国体制　―清正期を中心に―	谷川健一編『加藤清正　築城と治水』		冨山房インターナショナル	2006
204	富田紘一	加藤清正の熊本築城と白川・坪井川大改修	谷川健一編『加藤清正　築城と治水』		冨山房インターナショナル	2006
205	北野隆	加藤時代の熊本城について	谷川健一編『加藤清正　築城と治水』		冨山房インターナショナル	2006
206	金田一精	熊本城跡本丸の御殿の発掘調査	谷川健一編『加藤清正　築城と治水』		冨山房インターナショナル	2006
207	高橋実	熊本藩の文書記録管理システムとその特質(その1)	国文学資料館紀要　アーカイブス篇	2		2006
208	富田紘一	熊本城　歴史と探訪(1)～(33)	熊本城　復刊	63～95	熊本城顕彰会	2006～2014
209	美濃口紀子	熊本城築城400年祭特別展示　発掘された本丸御殿			熊本博物館	2007
210	木村義倫・西田靖子	熊本城の植物	Terra自然研究舎		熊本博物館植物同好会	2007
211	田中康弘	特別史跡熊本城跡本丸御殿大広間―本丸御殿の障壁画	文建協通信	88	文建協通信	2007
212	北島万次	加藤清正　朝鮮侵略の実像			吉川弘文館	2007
213	北野　隆	加藤時代の熊本城について	熊本城築城400年記念 激動の三代展　―加藤清正・忠弘・細川忠利の時代―		熊本県立美術館	2007
214	小川原正道	西南戦争　西郷隆盛と日本最後の内戦			中公新書	2007
215	小崎龍也	加藤清正と細工町	熊本城　復刊	67	熊本城顕彰会	2007
216	小田省三	熊城石採取地「独鈷山」をめぐって	熊本城　復刊	67	熊本城顕彰会	2007
217	高橋実	熊本藩の文書記録管理システムとその特質(その2)	国文学資料館紀要　アーカイブス篇	3		2007
218	水野勝之・福田正秀	加藤清正「妻子」の研究			ブイツーソリューション	2007
219	山崎信二	近世瓦の研究			同成社	2008
220	富田紘一	定本　熊本城			郷土出版	2008
221	木島孝之	熊本城	日本名城百選		小学館	2008

222	富田紘一	熊本城みてある記			熊本市広報課	2008
223	平井聖監修	よみがえる熊本城			翌水社	2008
224	富田紘一	熊本城　歴史と魅力			熊本城顕彰会	2008
225	九州文化財研究所	加藤清正の城域と文化遺産の活用－熊本城築城400年にさせて－			九州文化財研究所	2008
226	猪飼隆明	西南戦争　戦争の大義と動員される民衆			吉川弘文館	2008
227	澤田平	熊本城は歴史の宝庫	熊本城　復刊	69	熊本城顕彰会	2008
228	小崎龍也	茶臼山と清正公	熊本城　復刊	70	熊本城顕彰会	2008
229	水野勝之・福田正秀	加藤清正の妻子(1)～(11)	熊本城　復刊	71～81	熊本城顕彰会	2009
230	内山幹生	明治十年、熊本城の攻防	海路	7	「海路」編集委員会	2009
231	北野隆	熊本城―加藤氏代を中心として	海路	7	「海路」編集委員会	2009
232	松崎範子	近世城下町の財政システムと町人	熊本大学社会文化研究	7	熊本大学	2009
233	白峰旬	寛永九年の肥後国熊本城受け取りについて―「細川家史料」の内容分析から―	城郭研究室年報	19	姫路市立城郭研究室	2010
234	白峰旬	江戸大名のお引っ越し			新人物往来社	2010
235	富田紘一	熊本城の歴史と魅力	日本病院会雑誌	57	日本病院会	2010
236	高瀬直紀、伊藤重剛	旧熊本城下町の街路に関する研究(1)：江戸期の地図の復元	日本建築学会研究報告九州支部編	49	日本建築学会	2010
237	高瀬直紀、伊藤重剛	旧熊本城下町の街路に関する研究(2)：街路幅の分析	日本建築学会研究報告九州支部編	49	日本建築学会	2010
238	下田誠至	よみがえる熊本城－熊本城復元整備とまちづくり―	アーバン・アドバンス	51	名古屋まちづくり公社名古屋都市センター	2010
239	松本寿三郎	加藤清正と肥後	加藤清正と本妙寺の至宝展		加藤清正と本妙寺の至宝展実行委員会	2010
240	上高原聡	加藤領肥後一国統治期の支城体制について―一国一城体制の考察―	熊本史学	92	熊本史学会	2010
241	本田秀人	近世都市熊本の社会			熊本出版文化会館	2010
242	村田眞理	熊本城下町の年中行事(1)～(12)・番外	熊本城　復刊	79～93	熊本城顕彰会	2010～2014
243	村上豊喜	熊本城前史　中世の隈本城	熊本城	80～95	熊本城顕彰会	2010～2014
244	木越隆三	全国に残る石垣秘伝書	金沢城石垣構築技術史料Ⅱ		石川県金沢城調査研究所	2011
245	高瀬直紀、伊藤重剛	旧熊本城下町の街路に関する研究(3)：京町・慶川地区	日本建築学会研究報告九州支部編	50	日本建築学会	2011
246	加藤理文	熊本城を極める			サンライズ出版	2011
247	北野隆	永青文庫所蔵の「絵図・地図・指図」－景観と建築	永青文庫叢書　細川家文書　絵図・地図・指図Ⅰ		吉川弘文館	2011
248	松崎範子	熊本城下町における窮民の救済と社会保障	熊本史学	93・94	熊本史学会	2011
249	福田正秀	肥後加藤家改易の研究	熊本城　復刊	82～95	熊本城顕彰会	2011～2014
250	熊本市教育委員会	熊本城跡　桜馬場地区			熊本市教育委員会	2011
251	荒川章二	第六師団の歴史と地域社会―熊本近代史研究会共同研究「第六師団の総合的研究」にさせて	第六師団と軍都熊本		熊本出版文化会館	2011
252	永野公寿	軍都熊本の成立	第六師団と軍都熊本		熊本出版文化会館	2011
253	松田治子、伊東龍一	熊本城下における武家住宅に関する研究：「西南之役家屋焼失調」の再検討	学術講演梗概集 建築歴史・意匠		日本建築学会	2012
254	松田治子、伊東龍一	熊本城下における寛文5年(1665)の大火前後の下屋敷に関する研究：細川刑部少輔の下屋敷を中心に	日本建築学会北海道支部研究報告集	85	日本建築学会	2012
255	松崎範子	近世城下町の運営と町人			清文堂出版	2012
256	山崎荘太郎・伊藤重剛	旧陸軍第六師団煉瓦造兵器庫の建築に関する研究	日本建築学会九州支部研究報告	51	日本建築学会	2012
257	北野隆	熊本城の構造と魅力	構造強度に関する講演会講演集	54	日本機械学会	2012
258	市川浩文	九州における近世城郭石垣の変遷について(2)－黒田家・細川家・加藤家の石垣構築技術と公儀普請－	金沢城史料叢書	16	石川県金沢城調査研究所	2012

259	市川浩文	諸大名家の石垣　加藤家(肥後)	金沢城史料叢書	16	石川県金沢城調査研究所	2012
260	福西大輔	加藤清正公信仰―人を神に祀る習俗―			岩田書院	2012
261	水野勝之・福田正秀	続　加藤清正「妻子」の研究			ブイツーソリューション	2012
262	稲葉継陽	加藤清正の歴史的位置	生誕450年記念展 加藤清正		生誕450年　加藤清正展実行委員会	2012
263	中野　等	文禄・慶長の役と加藤清正	生誕450年記念展 加藤清正		生誕450年　加藤清正展実行委員会	2012
264	福西大輔	清正公信仰の成立と展開	生誕450年記念展 加藤清正		生誕450年　加藤清正展実行委員会	2012
265	山田貴司	関ケ原合戦前後における加藤清正の動向	生誕450年記念展 加藤清正		生誕450年　加藤清正展実行委員会	2012
266	稲葉継陽	加藤清正の歴史的位置	生誕四五〇年記念展　加藤清正		生誕四五〇年加藤清正展実行委員会	2012
267	熊本県教育委員会	熊本城遺跡群古城上段			熊本県教育委員会	2012
268	高瀬直紀、伊藤重剛	旧熊本城下町の街路に関する研究(4)：新町・古町地区	日本建築学会研究報告九州支部編	51	日本建築学会	2012
269	高瀬直紀、伊藤重剛	旧熊本城下町の街路に関する研究(5)山崎・高田原地区(歴史・意匠)	日本建築学会研究報告九州支部編	52	日本建築学会	2013
270	熊本日日新聞社編	加藤清正の生涯　古文書が語る実像			熊本日日新聞社	2013
271	中野等	唐入り(文禄の役)における加藤清正の動向	九州文化史研究所紀要	56	九州大学附属図書館付設記録資料館九州文化史資料部門	2013
272	花岡興史	江戸幕府の城郭政策にみる「元和一国一城令」	熊本史学	97	熊本史学会	2013
273	久保由美子	城下町・熊本の街区要素の一考察	熊本都市政策	2	熊本市都市政策研究所	2013
274	山田貴司	加藤清正論の現在地	シリーズ・織豊大名の研究2　加藤清正		戎光祥出版	2014
275	美濃口紀子	熊本博物館所在地における遺構の変遷	熊本博物館館報	26	熊本博物館	2014
276	村田眞理	藩校の武芸所　東榭・西榭	熊本城　復刊	93	熊本城顕彰会	2014
277	村田眞理	熊本城の記憶(1)(2)	熊本城　復刊	94・95	熊本城顕彰会	2014
278	花岡興史	大名城郭普請許可制にみる幕藩関係と政治機構―寛永―七年の八代城普請許可を中心に―	中近世の領主支配と民間社会		熊本出版文化会館	2014
279	久保由美子	熊本城下・新町地区における勢毛の広場化の考察	熊本都市政策	3	熊本市都市政策研究所	2014
280	西和夫	松江城再発見　天守、城、そして城下町			松江市	2014
281	北垣聰一郎	近世城郭石垣における勾配のノリ・ソリについて	小和田哲夫先生古稀記念論集　戦国武将と城		サンライズ出版	2014
282	熊本城調査研究センター	熊本城跡発掘調査報告書1―飯田丸の調査―			熊本市熊本城調査研究センター	2014
283	熊本県教育委員会	熊本城跡遺跡群　熊本県文化財調査報告第303集			熊本県教育委員会	2014
284	甲元眞之	熊本城関連遺跡群	熊本城跡遺跡群　熊本県文化財調査報告第303集		熊本県教育委員会	2014
285	北野隆	建築学的に見た高麗門	熊本城跡遺跡群　熊本県文化財調査報告第303集		熊本県教育委員会	2014
286	松本寿三郎	絵図に見る熊本城惣構	熊本城跡遺跡群　熊本県文化財調査報告第303集		熊本県教育委員会	2014
287	稲葉継陽	文献史料から見た熊本城の惣構と高麗門	熊本城跡遺跡群　熊本県文化財調査報告第303集		熊本県教育委員会	2014
288	高瀬哲郎	高麗門一帯の石造構造について	熊本城跡遺跡群　熊本県文化財調査報告第303集		熊本県教育委員会	2014
289	高正龍	蔚山慶尚道左兵営城と熊本佐敷城の同笵瓦―豊臣秀吉の朝鮮侵略と朝鮮瓦の伝播2―	東アジア瓦研究	4	東アジア瓦研究会	2015
290	木下泰葉	熊本城の「御城内御絵図」	熊本城調査研究センター年報	1	熊本城調査研究センター	2015
291	鶴嶋俊彦	新史料「熊本城郭及市街之圖」	熊本城調査研究センター年報	1	熊本城調査研究センター	2015
292	美濃口紀子	藤崎八旗宮跡出土遺物の研究―藤崎台県営野球場とその周辺の遺構の変遷―	熊本博物館館報	27	熊本博物館	2015
293	尾崎翔太、伊東龍一	熊本城下絵図の作製年代の再検討と寛文・元禄・宝暦期の道路拡幅に関する分析	日本建築学会研究報告九州支部編	54	日本建築学会	2015
294	尾崎翔太、伊東龍一	寛文期の大火による熊本城下の道路拡幅・新設に関する分析	学術講演梗概集 建築歴史・意匠		日本建築学会	2015
295	富田紘一	熊本城炎上の謎を探る	熊本城　復刊百号記念号		熊本城顕彰会	2015
296	富田紘一	医学校教師マンスフェルトの古写真―熊本城と城下町―	新肥後学講座　明治の熊本		熊本日日新聞社	2015

297	猪飼隆明	鎮西鎮台から第六師団へ	新肥後学講座　明治の熊本		熊本日日新聞社	2015
298	大浪和弥・島津亮二・山田貴司・金子拓編	加藤清正文書目録	東京大学史料編纂所研究成果報告2014-1		大浪和弥・島津亮二・山田貴司・金子拓	2015
299	山田貴司	文禄・慶長の役と加藤清正の領国支配―「際限なき軍役」の模相とその影響	中世熊本の地域権力と社会		高志書院	2015
300	金田一精	熊本城出土の文字瓦1	熊本城調査研究センター年報	2	熊本城調査研究センター	2016
301	木下泰葉	寛永期の熊本城本丸御殿と「地震屋」	熊本城調査研究センター年報	2	熊本城調査研究センター	2016
302	山田貴司	熊本城普請の開始時期とその政治的背景	チャリティシンポジウム　今だからこそ、熊本城を考える―紙上報告編―		大阪大谷大学	2016
303	後藤典子	近世初期、熊本城の被災と修復	kumamoto	16	くまもと文化振興会	2016
304	榎上拓也、横尾泰広、保田真之、加藤誉之、小田三千夫	斜め空中写真による熊本城の被害把握と三次元モデル作成	写真測量とリモートセンシング	55	日本写真測量学会	2016
305	福田光治	熊本城城壁石垣曲線形態の時代変遷と安定性	地盤改良シンポジウム論文集	12	日本材料学会	2016
306	金子浩史	雪舟流と狩野派―細川家御用絵師の位置とその深淵―	開館四十周年記念展雪舟流と狩野派		熊本県立美術館	2016
307	熊本市	特別史跡熊本城跡　馬具櫓復元整備事業報告書			熊本市	2016
308	熊本城調査研究センター	熊本城跡発掘調査報告書2－本丸御殿の調査－			熊本城調査研究センター	2016
309	熊本城調査研究センター	熊本城発掘調査報告書3－石垣修理工事と工事に伴う調査－			熊本城調査研究センター	2016
310	熊本城調査研究センター	特別史跡熊本城跡総括報告書　整備事業編			熊本市	2016
311	山田貴司	総説　肥後熊本震災史論	震災と復興のメモリー@熊本		熊本県立美術館	2017
312	美濃口雅朗	熊本城飯田丸出土の石造物	熊本城調査研究センター年報	3	熊本城調査研究センター	2017
313	美濃口雅朗	熊本城出土の近代陶磁器一括資料―新出資料の紹介―	熊本城調査研究センター年報	3	熊本城調査研究センター	2017
314	鈴木淳	西南戦争の舞台熊本城	西南戦争140年記念シンポジウム記録集		熊本市	2017
315	富田紘一	鎮台の記録からみた熊本城炎上	西南戦争140年記念シンポジウム記録集		熊本市	2017
316	佐藤恵理	電信資料からみた熊本城炎上	西南戦争140年記念シンポジウム記録集		熊本市	2017
317	美濃口雅朗	出土品からみた熊本城炎上	西南戦争140年記念シンポジウム記録集		熊本市	2017
318	齋藤達志	軍事戦略からみた熊本城炎上	西南戦争140年記念シンポジウム記録集		熊本市	2017
319	美濃口雅朗	熊本城・城下周辺における肥後産陶磁の使用	図録 熊本のやきもの		佐賀県立九州陶磁文化館	2017
320	小山倫史、菊本純、橋本涼太、桑島流音	平成28年(2016年)熊本地震における熊本城の城郭石垣の被害調査およびその分析	社会安全学研究	7	関西大学社会安全学部	2017
321	小山倫史、菊本純、橋本涼太、桑島流音	平成28年(2016年)熊本地震における石積構造物の被害の調査と分析:熊本城の城郭石垣	岩の力学国内シンポジウム講演論文集	14	岩の力学連合会	2017
322	橋本陸雄、石作克也	3次元レーザスキャナを用いた熊本城石垣等の変状分析	土木学会年次学術講演会講演概要集	72	土木学会	2017
323	友野哲彦	熊本城の価値と被災による地域経済への影響	商大論集	68	兵庫県立大学神戸商科キャンパス学術研究会	2017
324	福田光治	熊本地震で崩壊した熊本城石垣の復興と必要最小限補強オーセンティシティ	土木史研究講演集	37	土木学会	2017
325	稲葉継陽	加藤清正と熊本城下町	大学的熊本ガイド		昭和堂	2017
326	美濃口紀子	熊本城出土の近世瓦 ―刻印瓦と瓦師を中心に―	幕藩体制下の瓦 ―近世都市遺跡における生産と流通―		埋蔵文化財研究集会	2017
327	後藤典子	細川忠利期における熊本城普請―近世初期の城普請・公儀普請・地方普請―	熊本大学文学部附属永青文庫研究センター年報	8	熊本大学文学部附属永青文庫研究センター	2017
328	橋本陸雄、斉藤猛	電気探査及び表面波探査による熊本城石垣等の地盤調査	地盤工学研究発表会発表講演集	52	地盤工学会	2017
329	福田光治	熊本城城壁石垣曲線形態の時代変遷と安定性	地盤改良シンポジウム論文集	12	日本材料学会	2017
330	勝田俊弥、荷宇静、大脇聖、杉本和史	平成28年熊本地震における熊本城の被災箇石構造物に関する研究	土木学会年次学術講演会講演概要集	72	土木学会	2017
331	山尾敏孝	特別史跡熊本城址の地震被害状況と崩壊要因の検討	無機マテリアル学会学術講演会講演要旨集	135	無機マテリアル学会	2017
332	杉本和史、山中稔	熊本城の被災地盤構造物の調査報告	自然災害科学総合シンポジウム要旨集	54	京都大学防災研究所自然災害研究協議会	2017
333	勇知之	新編入あり熊本城			書肆月耿舎	2017
334	後藤典子	熊本城の被災修復と細川忠利			熊本日日新聞社	2017

335	後藤典子	熊本城の被災修復と細川忠利―近世初期の居城普請・公儀普請・地方普請			熊本日日新聞社	2017
336	熊本城調査研究センター	熊本城跡発掘調査報告書4 ―熊本博物館増改築工事に伴う三の丸地区の発掘調査―			熊本城調査研究センター	2017
337	北原治	長塀の控柱石について	熊本城調査研究センター年報	4	熊本城調査研究センター	2018
338	上野圭一・金井慎司・山川真朋・坂本秀平	熊本城西出丸出土遺物の自然科学分析	熊本城調査研究センター年報	4	熊本城調査研究センター	2018
339	岡本真也・鶴嶋俊彦	古城南西隅櫓石垣の保存修理	熊本城調査研究センター年報	4	熊本城調査研究センター	2018
340	金子岳史	加藤清正御用絵師・狩野言信について	麦下遊楽　奥平俊六先生退職記念論文集	2	奥平俊六先生退職記念論文集編集委員会	2018
341	美濃口紀子	九州地方の城郭瓦の様相―熊本城出土紀年銘瓦の集成を中心に―	織豊期城郭資料集成Ⅳ　続　織豊期城郭瓦研究の新視点		織豊期城郭研究会	2018
342	今村直樹	廃藩置県後の細川家当主所用甲冑と旧家臣	永青文庫研究	1	永青文庫研究センター	2018
343	橋本路雄	示力藤による熊本城石垣の安定性照査	土木学会年次学術講演会公演概要集		土木学会	2018
344	稲葉継陽	細川忠利―ポスト戦国世代の国づくり			吉川弘文館	2018
345	吉丸良治	花畑屏敷四百年と参勤交代			熊日出版	2018
346	美濃口紀子	熊本城天守の礎石について―昭和35年天守閣再建に伴う礎石発見・移設の経緯―	先史学・考古学論究　考古学研究室創設45周年記念論文集	7	龍田考古会	2019
347	光成準治	九州の関ヶ原			戎光祥出版	2019
348	美濃口紀子	特別史跡熊本城跡「高麗門・御成道跡」の再検証―検出された「根固め遺構」とは本当に「高麗門」の跡なのか―	史叢	20	熊本歴史学研究会	2019
349	美濃口紀子	熊本城瓦編年の立案に向けて―瓦研究の到達点と課題の整理	織豊城郭	19	織豊期城郭研究会	2019
350	鶴嶋俊彦	熊本城の「二様の石垣」の築造年代	熊本城調査研究センター年報	5	熊本城調査研究センター	2019
351	嘉村哲也・木下泰葉・下高大輔・関根章義	熊本城の江戸期修復石垣の様相―歩根城と仙台城の比較から修復石垣の変遷を考える―	熊本城調査研究センター年報	5	熊本城調査研究センター	2019
352	山中稔	被災石垣における加振伝播速度からの緩み域検出の試み	熊本城調査研究センター年報	5	熊本城調査研究センター	2019
353	草野奈菜・杉本知史	熊本城の被災石垣の備基調査手法の提案と変状分析に関する研究	熊本城調査研究センター年報	5	熊本城調査研究センター	2019
354	勝田衛弥・杉本和史	城郭石垣の動的挙動の数値解析によるモデル化と定量的評価	熊本城調査研究センター年報	5	熊本城調査研究センター	2019
355	石塚洋一・杉本知史	熊本城内における変状発生石垣の遠隔モニタリングシステムの構築	熊本城調査研究センター年報	5	熊本城調査研究センター	2019
356	関根章義	熊本城跡天守出土「慶長四年」銘満水瓦の基礎的研究―瓦当文様を中心に―	熊本城調査研究センター年報	5	熊本城調査研究センター	2019
357	熊本城調査研究センター―	特別史跡熊本城跡総括報告書　歴史資料編			熊本市	2019
358	美濃口雅朗	西南戦争の考古学	陶磁器の考古学	11	雄山閣	2019
359	美濃口雅朗	墓石の考古学　九州地方	季刊考古学	149	雄山閣	2019
360	嘉村哲也	九州地方　熊本城跡	織豊期城郭資料集成Ⅴ　戦国・織豊期城郭の石垣(戦国・織豊期城郭等石垣基準資料集成)		織豊期城郭研究会	2019
361	齋藤友里恵	寛永熊本地震の考古学的検討	新潟史学	78	新潟史学会	2019
362	木山貴満・竹原明里	熊本城特別公開記念　特別展　追憶の熊本			熊本博物館	2019
363	島充	熊本城絶筆再現記			新紀元社	2019
364	鶴嶋俊彦	熊本城の普請史	熊本城大天守外観復旧記念 熊本城と武の世界		熊本城大天守外観復旧記念展実行委員会	2019
365	山田貴司	熊本城の普請開始時期とその政治・軍事的背景	熊本城大天守外観復旧記念 熊本城と武の世界		熊本城大天守外観復旧記念展実行委員会	2019
366	今村直樹	細川家歴代当主の甲冑と幕末維新期の熊本城	熊本城大天守外観復旧記念 熊本城と武の世界		熊本城大天守外観復旧記念展実行委員会	2019
367	相模　智雄	御蔵所の空間構成の特徴と形成要因：―近世期の熊本藩御蔵所の空間構成に関する研究(その1)―	日本建築学会計画系論文集	84 (759)	日本建築学会	2019

第 4 章　発掘調査成果の概要

第 1 節　発掘調査史

調査は昭和 35 年(1960)の天守再建を皮切りとするが、この時は検出された礎石の配置図作成が主眼であったため、調査件数には含めていない [1]。発掘調査の始まりは三の丸地区の藤崎台県営野球場（以下藤崎台）の建設である。これより約 60 年間にわたって、多くの調査が積み重ねられてきた。しかしながら、昭和 30 年代は各種櫓の再建、旧熊本地方合同庁舎（以下、合同庁舎）、熊本県立第一高等学校（以下、第一高校）、熊本県営熊本城プールなどの施設が熊本城内に建設されたものの、本格的な発掘調査は行なわれていない。昭和 43 年(1968)、熊本県立第二高等学校が現在の二の丸芝生広場から移転したのを契機に、二の丸・三の丸地区の整備が進んだ。同時期に熊本市立熊本博物館・熊本県立美術館本館が建設され、建設に伴う発掘調査も行なわれるようになった。

発掘調査報告書が刊行されていないものでも、熊本市教育委員会刊行の『熊本市埋蔵文化財調査年報』や『新熊本市史』などで調査の概要を知ることができる。発掘調査は、熊本県教育委員会・熊本市教育委員会が主体者であるが、初期には熊本県立美術館準備室・熊本博物館準備室など事業に対応した特別組織のほか、熊本城研究会・熊本城調査委員会など県市合同による調査組織も存在した。ほか、肥後考古学会・熊本大学工学部北野研究室など、団体・大学研究室による調査も行なわれた。調査原因は史跡整備に伴うものが大多数であるが、古城地区では学校や病院などの公共施設に伴う調査が多い。昭和 57 年(1982)に『特別史跡熊本城跡保存管理計画策定報告書』が刊行されて以降、整備・復元に先立つ発掘調査が行なわれるようになった。昭和 58 年(1983)の数寄屋丸二階御広間復元整備、平成元年(1989)からの西出丸整備、それ以降の飯田丸復元整備、本丸御殿復元整備などに伴う発掘調査を行なった。また、石垣整備でも発掘を伴う事前調査を行なうようになっている。平成 25 年(2013)の熊本城調査研究センター設置後も同様である。

第 2 節　発掘調査の内容

第 1 項　本章の目的

本章は、対象範囲における発掘調査について今後の熊本城調査研究の基礎資料とするために、報告書などが刊行されている調査の集成を行なった。

第 2 項　対象範囲

本章では、発掘調査報告書、年報、『新熊本市史』などで報告されているものを対象とした。その範囲は、熊本城旧城域を基本とし、参考資料として城下の発掘調査事例を加えた。

便宜上、平成 30 年(2018)に策定された「特別史跡熊本城跡保存活用計画」の地区区分を参考にした。第 4 章第 3 節以降の項目と地区区分に基づき、各地区の調査概要をまとめた。項目と地区区分は以下のとおりである。

- 第 1 項：本丸地区
- 第 2 項：二の丸地区
- 第 3 項：三の丸地区
- 第 4 項：古城地区
- 第 5 項：千葉城地区
- 第 6 項：城下 [2]（参考）

なお、城下は城郭を理解する上で重要なものであるため、参考資料として挙げている。惣構内の新町地区は「城下」に含めた。また、本丸地区は調査件数が多いため、便宜上、各曲輪単位で細目を設けてまとめた。

以下体裁を整えるにあたり、諸条件を以下のように定めた。

1. 各曲輪の分け方・櫓の名称については、江戸中期に作成された「御城内御絵図」（熊本市蔵）を基準とした。
2. 現存する建造物と現存しない建造物建造物を区別するために、現存しない建造物については、名称の後ろに“跡”と付けた。
3. 「御城内御絵図」に名称の記載がないものについては、発掘調査時の調査前の所見を歴史的名称の参考とした。
4. 各発掘調査地の歴史的名称が不明で現在、他の建築構造物がある場合に関しては、場所をわかりやすくするために便宜上、名称を（）カッコ内に記述した。
5. 各調査において確認された遺構及び遺物について記載した。そのため、解釈については引用せず、事実のみを記載した。
6. 掲載した図版のキャプションの後ろには図版の元図が掲載されている図版番号を（）カッコ内に記入した。
7. 図版は本報告書に掲載するにあたり、縮小したため文字の拡大・レイアウトの変更をした。
8. 出典とした報告書の文章を基本的には引用しているが、一部本章内で文末表現や用語の統一をした方が良い箇所があり、一部文章を改変したが、解釈の変更はない。

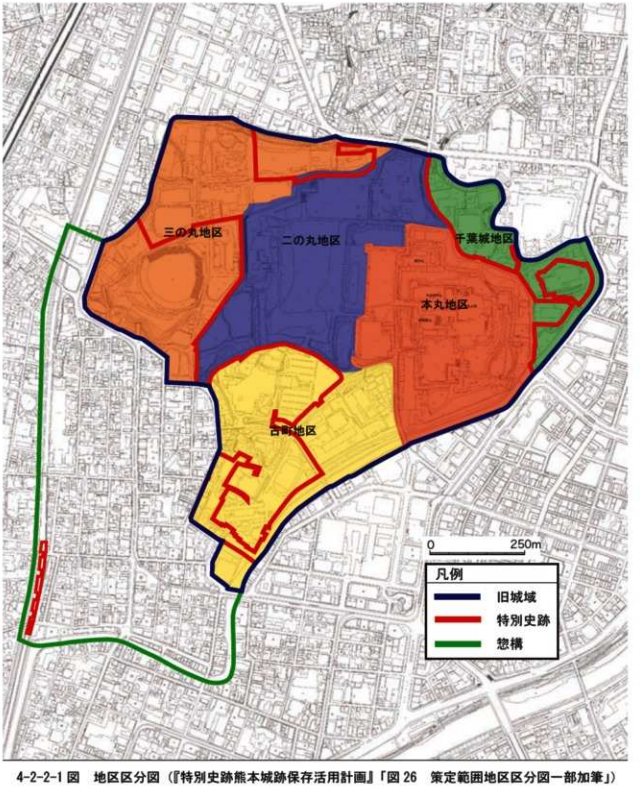
---

[1] 天守台礎石は報告書として刊行されていないが、2019年熊本市刊行の『特別史跡熊本城跡総括報告書 歴史資料編』に「67 熊本城天守台礎石実測図」の実測図が一点、「112 大天守礎石」「113 小天守礎石」の写真資料が2点掲載されている。
[2] 城下の範囲は『平山城肥後国熊本廻絵図』（熊本県立図書館蔵）を参考にして、絵図上の範囲内についてまとめた。

発掘調査一覧

			項目		調査年	掲載報告書
本丸地区	本丸上段	1	本丸御殿跡	大広間 御台所 小姓部屋 湯殿 長之間 雛地 西廊下 小広間 長局櫓 天守廊下	1999～2006	熊本市教育委員会『熊本市埋蔵文化財調査年報第4号』2001 熊本市教育委員会『熊本市埋蔵文化財調査年報第5号』2003 熊本市教育委員会『熊本市埋蔵文化財調査年報第6号』2004 熊本市教育委員会『熊本市埋蔵文化財調査年報第7号』2005 熊本市教育委員会『熊本市埋蔵文化財調査年報第9号』2007 熊本市熊本城調査研究センター 『熊本城跡発掘調査報告書2～本丸御殿の調査～　第1･2･3分冊』2016
		2	御裏五階櫓跡		2004 ･2008～2009	熊本市教育委員会『熊本市埋蔵文化財調査年報第8号』2008 熊本市教育委員会『熊本市埋蔵文化財調査年報第12号』2010 熊本市熊本城調査研究センター 『熊本城跡発掘調査報告書3～石垣修理工事と工事に伴う調査～　第2分冊』2016
	平左衛門丸	3	宇土櫓		1988	熊本市『重要文化財　熊本城宇土櫓保存修理工事報告書』1990
		4	北側塀跡		2012～2013	熊本市教育委員会『熊本市埋蔵文化財調査年報第16号』2014
		5	頼当御門跡		2012	熊本市教育委員会『熊本市埋蔵文化財調査年報第16号』2014
	数寄屋丸	6	数寄屋丸二階御広間跡		1983	熊本大学工学部建築学教室　北野研究室 『熊本城管理棟新築に伴う熊本城数寄屋丸調査報告書』1983
	西竹の丸～（飯田丸～）	7	百間櫓跡		1998～2001	熊本市『熊本城飯田丸一帯復元整備事業報告書』2005 熊本市熊本城調査研究センター『熊本城跡発掘調査報告書1･飯田丸の調査･』2014
		8	西櫓門跡			
		9	鉄炮蔵跡			
		10	飯田丸五階櫓跡			
		11	隅櫓跡･塀跡			
	東竹の丸	12	不開門		1976･1978	熊本市教育委員会『熊本城不開門坂道復元工事報告書』1980
					1980	熊本市『重要文化財熊本城不開門修理工事報告書』1981
	竹の丸	13	長塀		1977～1978	熊本市『重要文化財熊本城監物櫓･長塀修理工事（屋根葺替、部分修理）報告書』1979
		14	要人櫓跡		2004～2005	熊本市『熊本城飯田丸一帯復元整備事業報告書』2005 熊本市教育委員会『熊本市埋蔵文化財調査年報第8号』2008
		15	元礼櫓跡		2003	熊本市熊本城調査研究センター 『熊本城発掘調査報告書3～石垣修理工事と工事に伴う調査～　第1分冊』2016
		16	茶櫓跡			
		17	花頭櫓口冠木門跡		2009～2010	熊本市『特別史跡熊本城跡　馬具櫓復元整備事業報告書』2016
		18	馬具櫓跡			
		19	絵塀跡			
	西出丸	20	西大手門跡		2001	熊本市教育委員会『特別史跡　熊本城跡　西出丸一帯復元整備工事報告書』2005
	奉行丸	21	南大手門跡		1997	熊本市教育委員会『特別史跡　熊本城跡　石垣保存修理工事･発掘調査報告書』1999 熊本市教育委員会『特別史跡　熊本城跡　西出丸一帯復元整備工事報告書』2005
		22	奉行所跡		1984･1985	熊本市教育委員会『熊本城西出丸発掘調査概要』1985
		23	御客方櫓跡		1989 ･1993～1996	熊本市教育委員会『特別史跡　熊本城跡　石垣保存修理工事･発掘調査報告書』1999
		24	井戸方櫓跡			
		25	米中櫓跡		1994 ･1995～1996	
					1998～1999	熊本市教育委員会『特別史跡　熊本城跡　西出丸一帯復元整備工事報告書』2005
		26	元太鼓櫓跡		1998	熊本市教育委員会『特別史跡　熊本城跡　西出丸一帯復元整備工事報告書』2005
	雁方丸					掲載報告書なし

二の丸地区	27	櫓根盛跡横穴群	1969	熊本市教育委員会『熊本市北部地区文化財調査報告』1971
	28	米田郭跡 （二の丸惣し広場）	1972	熊本城調査委員会『特別史跡熊本城跡　二の丸調査報告書』1976
	29	監物櫓（新櫓櫓）	1979	熊本市『重要文化財　熊本城監物櫓・長櫓修理工事（屋根葺替部分修理）報告書』1979
	30	仲御堂 （二の丸芝生広場）	1975	熊本城調査委員会『熊本城二の丸・三の丸遺跡調査報告書』1979
	31	田中・住江郭跡 （熊本県立美術館）	1972	熊本県美術館建設準備室 『熊本城二の丸跡史跡調査報告書−県立美術館建設予定地−』1972
			1977	熊本城研究会『熊本城三の丸・二の丸遺跡調査報告書』1980
			1985～1986	熊本市教育委員会『美術館南側石垣修理保存工事報告書』1987
	32	松井山城預櫓跡	2005～2006	熊本市教育委員会『熊本市埋蔵文化財調査年報第9号』2007 熊本城調査研究センター 『熊本城跡発掘調査報告書3−石垣修理工事と工事に伴う調査−第2分冊』2016
	33	二の丸御門跡	1975	熊本城調査委員会『特別史跡熊本城跡　二の丸調査報告書』1976 熊本市教育委員会『熊本城跡二の丸御門虎口環境整備工事報告書』1977
			1996	熊本市教育委員会『特別史跡　熊本城跡　石垣保存修理工事・発掘調査報告書』1999
			2007～2008	熊本市教育委員会『熊本市埋蔵文化財調査年報第11号』2009 熊本城調査研究センター 『熊本城跡発掘調査報告書3−石垣修理工事と工事に伴う調査−第2分冊』2016
三の丸地区	34	（藤崎台）	1959～1960	熊本県教育委員会『藤崎台』1961
	35	二の丸御蔵形跡 （熊本市立熊本博物館）	1973	熊本博物館建設準備室 『熊本市立双葉二の丸跡調査報告書−熊本博物館建設予定地−』1974
			2014・2015	熊本市熊本城調査研究センター 『熊本城跡発掘調査報告書4 −熊本博物館増改築工事に伴う三の丸地区の発掘調査−』2017
	36	（砂蔵郭坂周辺）	1979	熊本城調査委員会『熊本城三の丸砂蔵郭付近　遺構調査報告書』1978
	37	二の丸御屋形跡	1979	熊本市教育委員会『熊本城三の丸森本櫓跡漆畑遺跡調査報告書』1979 熊本城研究会『熊本城三の丸・二の丸遺跡調査報告書』1980
	38	御膳蔵跡		
	39	森本櫓跡		
	40	（藤崎台北側）		
古城地区	41	古城横穴	1969	熊本市教育委員会『昭和44年度熊本市北部地区文化財調査報告書』1971
			1982～1983	熊本県教育委員会『古城横穴墓群』1985 熊本市　『新熊本市史　通史編第二巻　中世』1998
	42	（熊本県立第一高等学校 校庭の石水路）	1980	熊本県教育庁『隈本古城史』1984
	43	（熊本県立第一高等学校 体育倉庫の 旧軍事施設）	1981	熊本県教育庁『隈本古城史』1984
	44	（熊本県立第一高等学校 セミナーハウス 地鎮予定地）	1990	熊本市『新熊本市史　通史編第二巻　中世』1998
	45	（熊本県立第一高等学校 校長官舎地鎮予定地）	1992	熊本市『新熊本市史　通史編第二巻　中世』1998
	46	古城上段（国立病院）	2002～2003	熊本県教育委員会『熊本遺跡群古城上段』2012
	47	板馬櫓	2008～2009	熊本市教育委員会『熊本市埋蔵文化財調査年報第12号』2010 熊本市教育委員会『熊本市埋蔵文化財調査年報第13号』2011 熊本市教育委員会『熊本城跡　板馬場地区』2011
			2015～2016	熊本城調査研究センター『熊本城調査研究センター年報1』2015
千葉城地区	48	千葉城横穴	1962	熊本市教育委員会『昭和44年度熊本市北部地区文化財調査報告書』1971
	49	千葉城放け穴	1962	
	50	田坪井川畔遺跡	1975	熊本城調査委員会『熊本城跡　田坪井川畔遺跡調査報告書−昭和50年度−』1975
城下		熊本城跡遺跡群		熊本県教育委員会『熊本城跡遺跡群』2014
	参考	古町遺跡		熊本市教育委員会『古町遺跡Ⅰ』2003 熊本市教育委員会『熊本市埋蔵文化財調査年報　第4号　平成11年度』2001 熊本市教育委員会『熊本市埋蔵文化財調査年報　第5号　平成12年度～平成13年度』2003 熊本市教育委員会『熊本市埋蔵文化財調査年報　第8号　平成16年度』2006 熊本市教育委員会『熊本市埋蔵文化財調査年報　第9号　平成17年度』2007 熊本市教育委員会『熊本市埋蔵文化財調査年報　第11号　平成19年度』2009 熊本市教育委員会『熊本市埋蔵文化財調査年報　第13号　平成21年度』2011 熊本市教育委員会『熊本市埋蔵文化財調査年報　第14号　平成22年度』2012 熊本市教育委員会『熊本市埋蔵文化財調査年報　第17号　平成25年度』2015
		船場町遺跡		熊本市教育委員会『熊本市埋蔵文化財調査年報　第3号　平成9年度・平成10年度』2000 熊本市教育委員会『熊本市埋蔵文化財調査年報　第4号　平成11年度』2001 熊本市教育委員会『熊本市埋蔵文化財調査年報　第8号　平成16年度』2006
		新馬場遺跡		熊本市教育委員会『熊本市埋蔵文化財調査年報　第9号　平成17年度』2007
		山崎古墳		熊本市教育委員会『熊本市埋蔵文化財調査年報　第19号　平成27年度』　2017
		伝大道寺跡遺跡群		熊本市教育委員会『熊本市埋蔵文化財調査年報　第3号　平成9年度・平成10年度』2000 熊本市教育委員会『熊本市埋蔵文化財調査年報　第4号　平成11年度』2001 熊本県教育委員会『伝大道寺跡遺跡群2』2013 熊本市教育委員会『熊本市埋蔵文化財調査年報　第17号　平成25年度』2015 熊本県教育委員会『伝大道寺跡遺跡群2』2016
		京町台遺跡群		熊本市教育委員会『熊本市埋蔵文化財調査年報　第1号　昭和63年度～平成3年度』1995 熊本市教育委員会『熊本市埋蔵文化財調査年報　第2号　平成4年度～平成8年度』1999
				熊本大学埋蔵文化財調査室『熊本大学構内遺跡発掘調査報告Ⅰ　(1994・1995年度)　』2003
				熊本大学埋蔵文化財調査室『熊本大学構内遺跡発掘調査報告Ⅴ　(1998・2007年度)　』2009

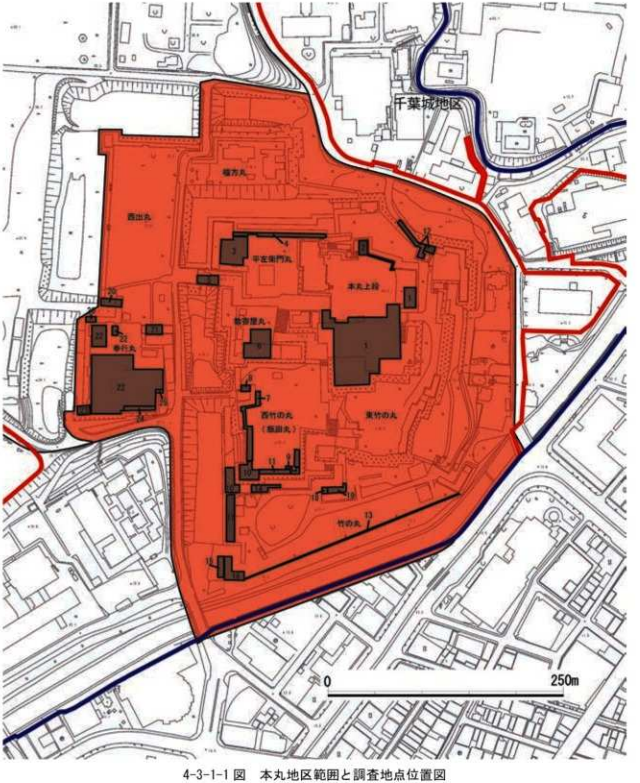


4-2-2-1 図　地区区分図（『特別史跡熊本城跡保存活用計画』「図 26　策定範囲地区区分図一部加筆」）

第３節　各地区の概要と調査成果

第１項　本丸地区

本章第２節第２項で述べたように本丸地区は調査地点が多数あるため、各曲輪でまとめた。

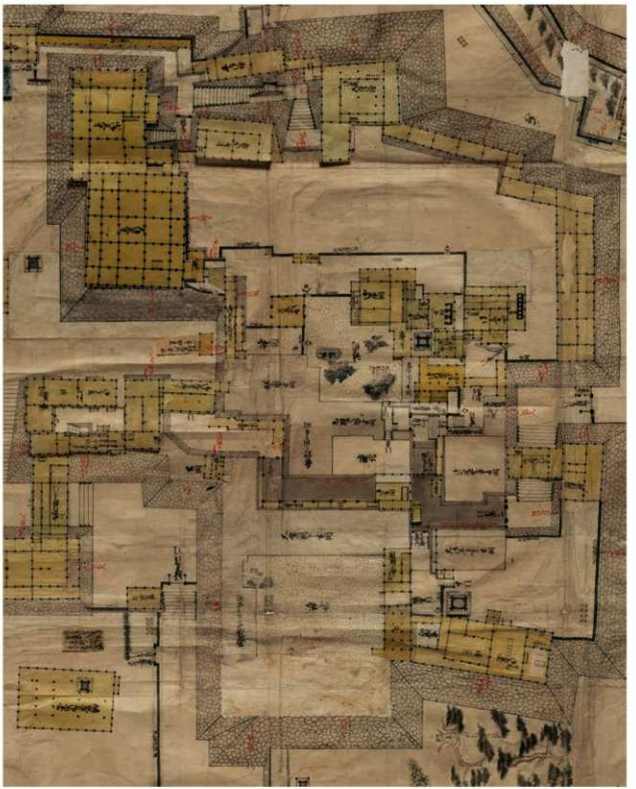


4-3-1-1 図　本丸地区範囲と調査地点位置図

【本丸上段】

(1)概要

本丸地区のなかでも最も早くに形成されたとみられる曲輪で、天守・本丸御殿などの主要な建物がある。寛永6～8年(1629～31)頃に作成された「熊本屋鋪割下絵図」(熊本県立図書館蔵)には「御本丸」とある[1]。寛永11年(1634)の「肥後国熊本城廻普請仕度所絵図」(熊本県立図書館蔵)には、本丸上段部分のみに「本丸」と記し、平左衛門丸・数寄屋丸・飯田丸・東竹の丸には「二丸」と記していることから[2]、近世初期には本丸上段のみを「本



4-3-1-2 図　御城内御絵図(熊本市蔵)本丸上段部分

丸」と呼んだと考えられる。正保城絵図の控と推定される「平山城肥後国熊本城廻絵図」（熊本県立図書館蔵）には「本丸　東西四拾四間　南北八拾一間」と規模が記される[3]。

本丸上段には天守・本丸御殿のほか、御裏五階櫓・トキ櫓・長局櫓・御天守廊下・耕作櫓門などの主要な建物が密集している。以下、明和6年(1769)頃の「御城内御絵図」（熊本市蔵）(4-3-1-2図)に基づき建物の概要を述べる。

熊本城の大天守は3重6階地下1階で、石垣上に腕木を組んで張り出させることで、天守台の平面形に影響され[4]、建物の1階平面をつくって階を重ね、初重・2重ともに入母屋の屋根を重ねる望楼型天守である(4-3-1-

4-3-1-3図　数寄屋丸から見た大小天守（冨重写真所蔵）

3図)。加藤清正書状によると、慶長5年(1600)には大天守の建築がほぼ完成していた[4]。大天守南東に出入り口となる2階建ての附櫓があり、本丸御殿と御天守廊下で接続していた。清正の死後、息子の忠広の時代に増築された小天守も望楼型で、大天守と小天守は平面上1階でつながっていた。

加藤時代は本丸御殿が藩主の居住空間としても利用されたが、細川家が入国すると寛永14年(1637)には藩主は花畑屋敷に移り、以降国許屋敷とした。本丸御殿は、全国の城郭のなかでも地下通路を持ち、そこに御殿へ入る正式な門が設けられるという点で、特異な形式をしている。「御城内御絵図」には記載がないが、本報告書では闇御門から入った大広間下の地下通路を「闇り通路」と呼称する。闇り通路の内部は、闇御門から通路なかほどの四ツ辻まで、南側の石垣に沿って警固所が続く。四ツ辻には門と番所が置かれており、御殿内部へは、警固所から連続している階段を上る。階段の先は、御殿の正式な入口である御玄関で、闇り通路と大広間1階の間にある中2階のような形になっている。御玄関からさらに階段を上がれば、御殿内部の鑑之間に出る。一方、階段から中段を通り、右手の階段を上れば式台之間へと出る。

大広間は2列の構成となっており、南側は式台之間から西に向って鑑之間・梅之間・桜之間・桐之間・若松之間が続く。桐之間部分は3階建てである。広間で最も格式の高い部屋である昭君之間が若松之間の北に位置する。昭君之間の東には帳台之御間、御家老間、雪之間を置く。また、昭君之間の北側には蘇鉄之間があり、西には御数寄屋

(茶室)と猿牽之間、火打之間を通って耕作櫓門へ続いている。蘇鉄広間東には団扇之間があり、中奥にあたる吉野之間・九曜之間・波之間・松之間へと続いていた。

大広間棟の東側には、大御台所や御膳立之間が位置する。大御台所にはイロリ・竈があり、上部は煙出しの吹き抜け構造、一部は2階が設けられている。また、「御城内御絵図」には描かれていないが、建物の立面を表した「御城図」(永青文庫蔵)には、大御台所から三階櫓へ繋がる瓦葺の建物が描かれており[5]、「御城内御絵図」が作成される以前に解体されたと考えられる。大御台所の北側には御小姓部屋・御小姓部屋廊下があり、さらに北側の御祈祷所に廊下で繋がっている。御祈祷所から北には御居間・御風呂屋・御裏御台所などが続き、藩主の居住空間としての性格が強い。「御城図」では御居間の北側に瓦葺の建物が描かれているが、これものちに解体されたとみえる。また、「御城図」では御居間と御宝蔵は廊下続きとなっているが、「御城内御絵図」では塀の表現であり、塀の内側は樹木や溜水のある露地となっている。

御居間から廊下を南に向うと囲炉裏之間があり、西に九曜之間がある。中奥の上段の間である松之間の西奥の階段を上がると札之間があり、ここを通ると天守へと続く御天守廊下に出る。天守へ向うルートは松之間から札之間を通るもののほかに、火打之間から階段を上り御家老間から耕作櫓門内の御天守廊下、札之間を通るもの、御弓蔵の御天守方入口多門を通った先の階段から御天守方口之間に至り、御家老之間、御天守廊下、札之間を通るもの、御数寄屋丸櫓門から入り長櫓の中を通って数寄屋丸の五階櫓、御広間、地蔵御櫓門から御天守方口之間に至り、前述した御家老之間、御天守廊下、札之間を通るものなど、複数のルートが存在するが、札之間から御天守廊下を通り大天守に至るという点はいずれも共通している。小天守の地階に入る階段が、外観復元されている天守への入口の下にあるが、ここは天守に入る正式なルートではなかった。

小天守東の石段を下ると北側の石垣上に平櫓、南側の石垣上にはトキ櫓が建つ。平櫓は御裏五階櫓と建物続きとなっている。平櫓の下は石門と呼ばれる、隧道となった矮小な石垣内の通路がある。御裏五階櫓は穴蔵を持ち、一階は梁間6間半、桁行8間半の規模である。五階櫓の南には埋櫓門、東には石垣の上に多聞櫓が長局櫓まで続く。

大広間の南側は中庭となっており、中庭の東に麒麟之間が建つ。「御城内御絵図」では麒麟之間の名称しか見えないが、この絵図とそう時期を経ずに作成されたと考えられる「御天守密書」(永青文庫蔵)には「麒麟御間」24 畳、「長御間」48 畳と記される[6]。部屋の大きさから、壁で仕切られた北側が麒麟之間、南側が長之間である。中庭の南に小広間、三階櫓、そして西廊下が西に続く。長之間の東には月見御台所があり、ここには月見櫓と呼ばれる 2 階櫓があった。古写真では通常の櫓と異なり、方形造の特徴的な形をしている。

慶応3年(1867)に奉行丸に置かれた御奉行所から本丸御殿に 12 局が移り「政府」と定められた[7]。その際、御殿内の部屋は各部局の執務室として利用され、月見櫓下の部屋には御郡方御米銀方・寺社方御米銀方・小物成方の三局が置かれた。明治3年(1870)6月に「政府」は「熊本藩庁」と改められるが、翌月には本丸御殿から花畑屋敷へ移転した[8]。

明治4年(1871)の廃藩置県後、熊本に鎮台が置かれ、明治7年(1874)には鎮台本営は本丸に移った。明治10年(1877)までには御裏五階櫓が解体されたとみられる。本丸御殿は鎮台が執務室として利用したが、明治10年2月19日、西南戦争開戦直前の火災で天守・本丸御殿などの本丸上段の主要な建物は焼失した。明治11年には天守台前に平屋コの字型の鎮台本営が建築され、その後再び平屋で新築されたが、明治25年(1892)に焼失し再築、大正6年(1917)には平屋から2階建てに新築された。明治22年(1889)熊本地震(金峰山地震)では天守台や闇り通路内の数カ所で石垣崩落の被害が生じた。明治28年(1895)頃とみられる写真には積み直しが完了した様子が写っている(4-3-1-4 図)。天守台前にあった第六師団司令部の建物は、太平洋戦争後に熊本女子大学が仮校舎として利用した後、昭和27年(1952)に熊本市立熊本博物館として開館した。昭和35年(1960)には天守が鉄骨鉄筋コンクリート造で外観復元を行ない、それに伴って天守台前の熊本博物館は移転し、建物は解体された

4-3-1-4 図　裏五階櫓跡から見た天守台と宇土櫓（冨重写真所蔵）

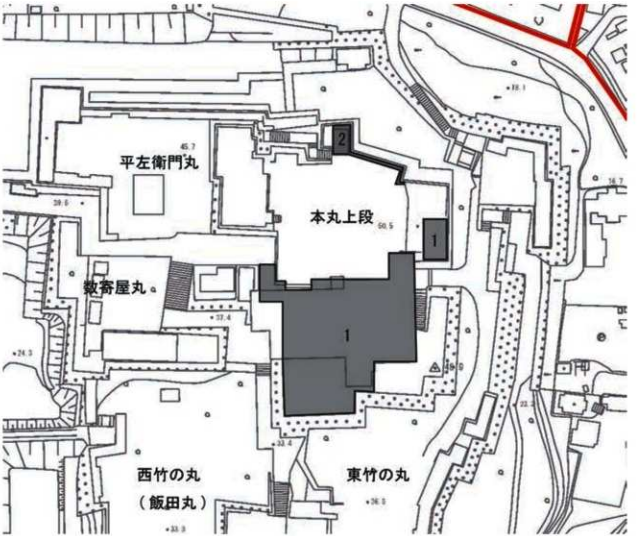
4-3-1-5 図　解体される天守閣前の熊本博物館（熊本市蔵）

(4-3-1-5 図)。平成 20 年(2008)には築城 400 年を記念して、本丸御殿大広間・数寄屋・台所棟が木造復元された。

---

[1] 『特別史跡熊本城跡総括報告書歴史資料編　絵図・地図・写真』熊本市　2019　5～10 頁
[2] 註 1 報告書 11～16 頁
[3] 註 1 報告書 33～38 頁
[4] 群馬県立歴史博物館寄託「加藤清正書状」　『特別史跡熊本城跡総括報告書歴史資料編　史料・解説』所収 52 号文書
[5] 註 1 報告書 47～68 頁
[6] 註 4 報告書所収 182 号文書
[7] 永青文庫蔵「慶応三年十二月御奉行所并御問続之局同御本丸御座敷内引移被仰付候一件」　註 4 報告書所収 198 号文書
[8] 細川家編纂所『改訂肥後藩国事史料　復刻版』國書刊行会　1974　註 4 報告書所収 206 号文書

(2) 発掘調査成果



1 本丸御殿跡：大広間　大御台所　御小姓部屋　間り通路　長之間　露地　西廊下　小広間（三階御櫓含む）
長局櫓　御天守廊下　その他・トレンチ

2 御裏五階櫓跡

4-3-1-6 図　本丸上段調査地点位置図

＜1 本丸御殿跡＞

報 告 書：熊本市熊本城総合事務所『特別史跡熊本城跡　本丸御殿復元整備事業報告書－大広間・大台所・数寄屋－』2009 年

熊本市熊本城調査研究センター『熊本城跡発掘調査報告書 2－本丸御殿の調査－』2016 年

調査期間：平成 11 年(1999) 5 月～平成 18 年(2006) 3 月

調査面積：約 5200 ㎡

調査主体：熊本市教育委員会

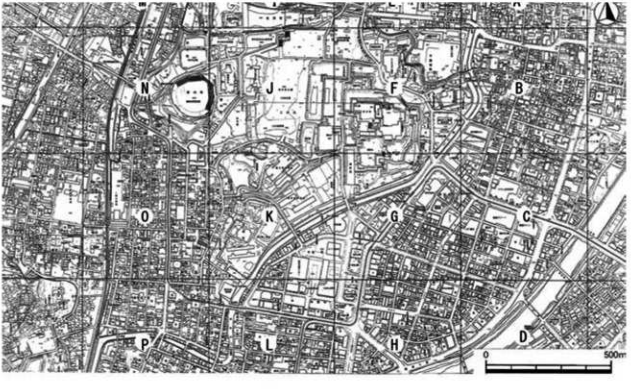
・調査に至る経緯

熊本市では、平成 9 年度に「熊本城復元整備計画」を策定し、史実に基づいた建造物・遺構の復元・修理を行なうことを決定した。この「復元整備計画」は短期・中期・長期に分けて、短期スケジュールの最終段階となる第 3 期に本丸中枢部の規模及び景観を再現するための本丸御殿一帯復元整備事業が計画された。本丸御殿建物群のうち、中心となる大広間棟と大御台所棟を復元する計画で、対象範囲の発掘調査が行なわれた。発掘調査後、石垣保存修理を行ない、大広間・大御台所・数寄屋などの建造物復元を中心として残存遺構の保存修理及び平面表示などの環境整備を実施している。

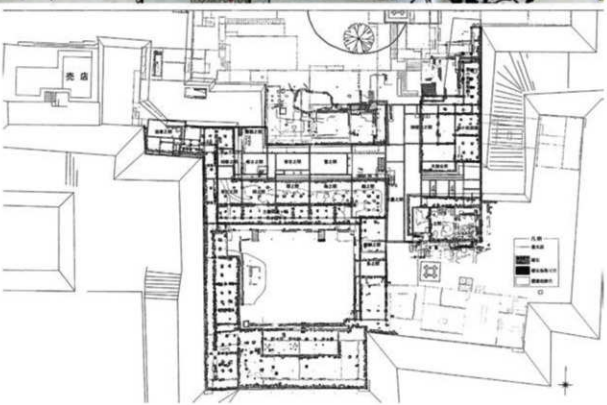
・調査の方法

調査グリッドは、縮尺 2500 分の 1 の地図上において日本測地系座標を基に設定した。まず、熊本城城全体を覆うように 500 m× 500 m の大グリッドを設けてＡ～Ｍのアルファベットを冠し、それぞれのグリッド中に 5 m× 5 m の小グリッドを設定して北から南、東から西へ 1 ～ 100 の番号をつけ、アルファベットの大グリッド名と小グリッドの数字 2 つを組み合わせてグリッド名とした(例 :A100 － 100 グリッド)。

調査区内では、主に明治 10 年(1877) 2 月 19 日の火災後の片づけや、明治 22 年(1789)熊本地震後の修理、昭和 50 年代にかけての新たな建物の基礎掘り、配管などの作業で掘削が繰り返されており、礎石や溝の石材の抜き取りや転用も行なわれていた。

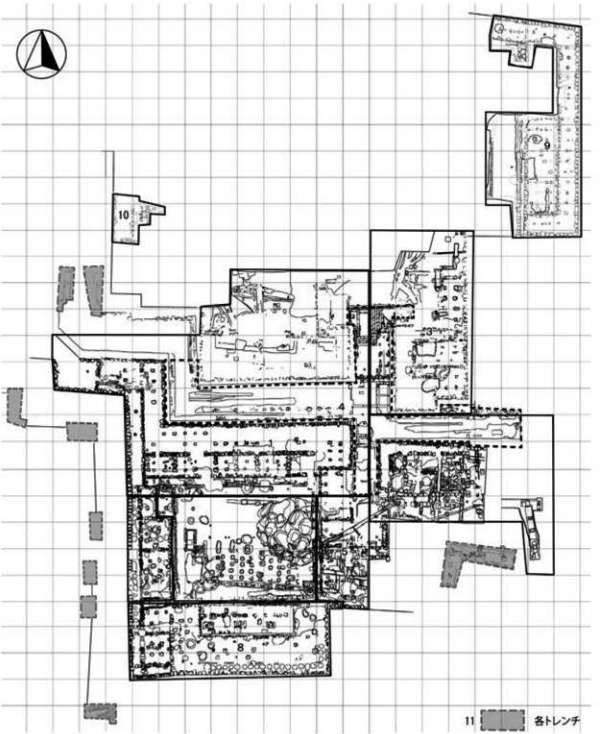


4-3-1-7 図　広域グリッド配置図(第 29 図)



4-3-1-8 図　昭和 36 年写「御城内御絵図」（しろはく古地図と城の博物館富原文庫蔵）本丸御殿部分拡大・遺構復元図（第 15 図 -1・第 28 図）

これらの攪乱を受けていない部分にはⅢ層が残存し、建物遺構と共に大量の瓦片や建築金物などの金属製品、炭化した部材片などの御殿建物に伴う遺物のほか、熊本鎮台に関連する軍用品などがまとまって出土した。火災の影響で遺物は変色・変形したものが多く、礎石や石垣にも表面の剥離や割れ、欠損が目立った。



1 大広間　2 大御台所　3 御小姓部屋　4 闇り通路　5 長之間　6 露地
7 西廊下　8 小広間（三階櫓含む）　9 長局御櫓　10 御天守廊下　11 その他・トレンチ
SD溝状遺構　SK土坑　ST甕　SB建物　SLカマド　SP小穴　SX不明遺構

4-3-1-9 図　調査区名と掲載順序及び遺構名（第 33 図）

基本層序

基本土層はⅠ～Ⅳ層に大別した。

Ⅰ層：現代の表土・攪乱層。砂礫・瓦片などを含む黒褐色～暗褐色土。

Ⅱ層：近代～現代の堆積土。主として明治初期(明治 10 年)以降の堆積土。客土が主と思われる。
　　砂礫・瓦片などを大量に含む黒褐色～暗褐色土で、部分的には礫を多く含む。

Ⅲ層：明治 10 年 2 月 19 日の焼土。漆喰・壁土・屋根土に起因する土が主で、砂も目立つ。
　　炭化材・瓦・金属製品を多量に含む。

Ⅳ層：焼失以前の土を一括している。トレンチ調査など、調査した部分はごく限られている。

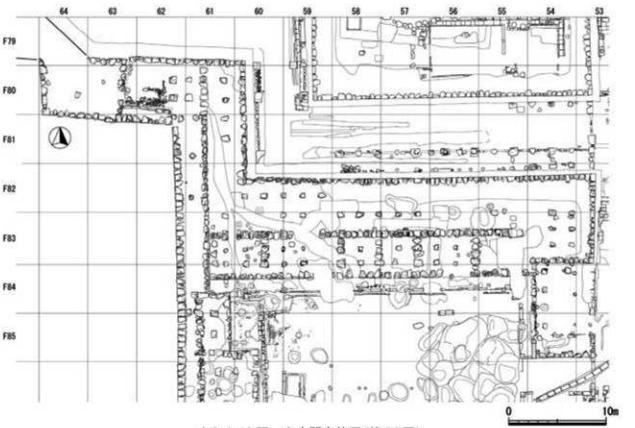
・調査の概要

遺構

調査区は、主要建物である大広間棟・大御台所棟と、それから派生する建物で分けた。大広間棟には、大広間に続いて大広間北側に展開する本丸御殿建物群を入れ、大御台所棟は北側の御小姓部屋を分離した。記述は、大広間・大御台所・御小姓部屋・闇り通路・長之間・露地・西廊下・小広間(三階櫓含む)・長局御櫓・御天守廊下・各トレンチの順で行なう。なお、闇り通路は、通路としての機能を含んだ現代の名称である。史料中には、その入り口である門が「闇門」「クラガリ御門」「闇り櫓御門」と記されているが、通路本体部分の名称はまだ見出せない。本報告書では、便宜上「闇り通路」と記述した。

1 大広間(4-3-1-10 図～ 4-3-1-14 図)

広間と露地の境は縁先の土台として高さ 40 ㎝の石垣があり、闇り通路南側石垣との間には大広間の基礎である礎石と東西・南北方向に並ぶ礎石列が残存していた。中央の東西方向の礎石列は広間と縁側の間仕切りに相当するものであり、闇り通路の南側石垣天端から南へ約 6 mの位置で検出した。広間部分の基準柱間寸法は礎石間の芯心距離と絵図の柱間から 6 尺 5 寸(約 2 m)と推測した。縁先の土台石垣の南側に

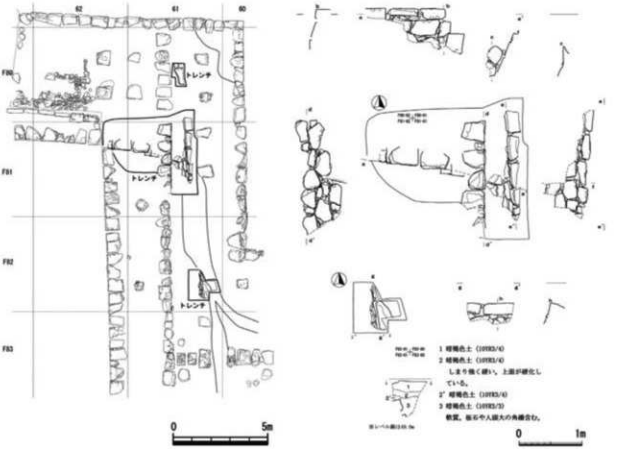


4-3-1-10 図　大広間全体図(第 34 図)

は濡れ縁の先端を支える安山岩製の縁束石を検出した。一辺が 46 ㎝の方形を呈し、上面には丁寧な面取りが施されている。縁束石と組み合わされた雨落ち溝は露地の四周に配され、雨水は露地南西隅に集めて西廊下を経て飯田丸側へ排水されていた。露地では縁側から降りる階段の土台石を検出した。

西側の拭板に相当する部分では高さ約 1 m、幅約 3 mの腰石垣を検出した。腰石垣は西面の高石垣の入隅部分まで続き、入隅から西へ折れた高石垣沿いと猿牽之間に当たる一画の石垣は、拭板の腰石垣より 30 ㎝ほど高く構築されていた。拭板東面石垣の延長線上には礎石列を検出した。周辺の独立礎石も残存していたが、猿牽之間の遺構は高圧線埋設などによる攪乱を受けており、残っていなかった。

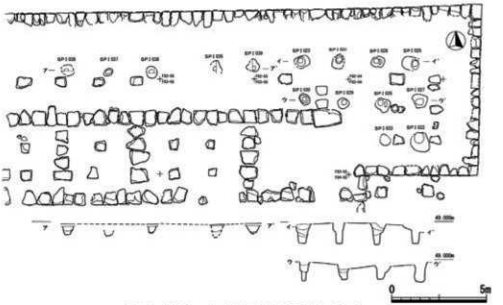
拭板腰石垣の東側で、いわゆる「二様の石垣」(以下「二様」)の旧石垣の検出を試み、F80 ～ 82-61 グリッドにトレンチを設定した(第 47･48 図)。北側 2 ヵ所のトレンチで、本丸御殿の礎石に伴う遺構面より約 60 ㎝下部分に西向きの石積みを 2 段検出し、「二様」の旧石垣が昭君之間下まで続く可能性を確認した。拭板北端の石垣解体修理工事の際には、数寄屋棟南面の高石垣が先述のトレンチで検出した石積みに載ることも確認した。ただ、闇櫓御門北側の通路上で行なわれた配管設備工事の際には石垣は検出しておらず、石垣より北側の状況は不明である。



4-3-1-11 図　二様石垣トレンチ位置図･二様石垣トレンチ(第 47･48 図)

鶴之間･梅之間･桜之間に相当する一帯では、礎石に伴う遺構面を 5 ～ 20 ㎝掘り下げた部分で柱穴を検出した(SP Ⅰ 023･025 ～ 038)。柱穴の直径は 40 ～ 100 ㎝で、直径 30 ～ 40 ㎝の抜き取り痕跡や基底面に 25 ㎝角の柱痕跡が確認された例もあった。深さは、東側の 10 基(SP Ⅰ 023･025 ～ 033)で 80 ～ 110 ㎝、西側の 5 基(SP Ⅰ 034 ～ 038)では 50 ～ 60 ㎝であった。15 基の柱穴の間隔は 6 尺 5 寸(約 2 m)で、東側の 10 基については東西･南北両方向への展開がみられ、柱痕跡なども認められたことから、少なくとも南北 2 間、東西 3 間以上の掘立柱建物が存在したものと推測している。埋土中の出土遺物がほとんどなく、明確

な時期は不明であるが、柱穴の配置が石垣の軸に平行し、石垣天端との間隔が北・東面で同じことなどから、石垣の構築後に建てられたものと想定している。



4-3-1-12 図　大広間平・断面図(第 46 図)

大広間北側建物群(4-3-1-13 図・4-3-1-14 図)

遺構表示のために、天守前広場の大銀杏付近を北限として大広間北側の本丸御殿建物群の調査を行なった。

吉野之間・波之間と九曜之間・松之間の一部を調査したが、遺構面が浅いことと、売店などが設けられていたため遺構の残存状況は不良である。

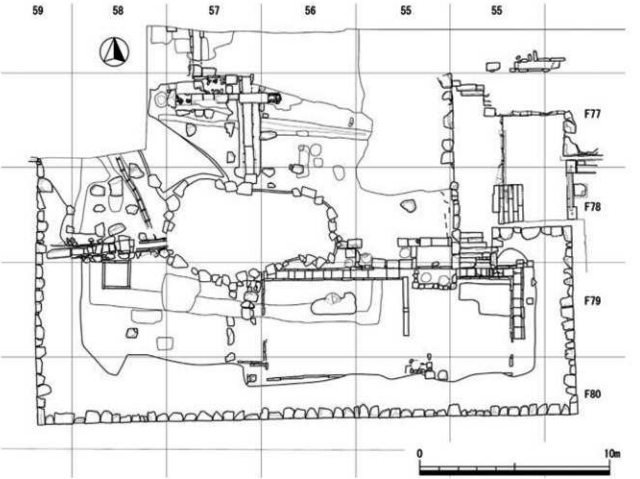
闇り通路北側の南面石垣は大広間棟の1階梁が乗る部分だが、明治22年熊本地震で崩れてしまったため、天端石の本来の状況は不明である。石垣は、現況の東・西・南の天端からそれぞれ約 2 m内側まで積み直しており、積み直しの際に充填された栗石が遺構面上に露出していた。闇り通路の石垣の観察からは、下 1 ～ 2 段を残して積み直しされている。

大広間と九曜之間の間の露地からは相当量の瓦が出土した。また露地には便所の可能性が高い明治期の遺構(SJ)が複数埋設されていた。

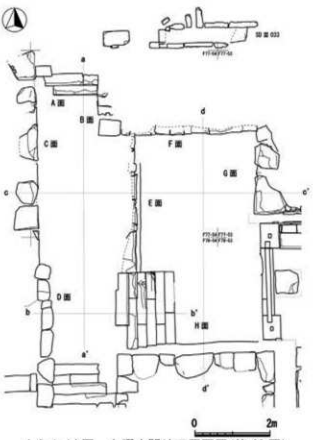
露地の北側と東側では雨落ち溝を確認した。両遺構ともに凝灰岩の板石を組み合わせた溝である。遺構の残存状態が悪く排水経路は不明瞭である。

吉野之間は、間仕切りにより仕切られて南北に長い部屋が東西方向に並ぶ構造である。明治 22 年熊本地震での崩落、近現代の撹乱が激しく、焼失時の地表面はほぼ残存していない。南側は礎石もほとんど残存せず、抜き痕も不明瞭である。波之間は、吉野之間北側の部屋で吉野之間とは同じ棟である。吉野之間と鍵型に接しているが、礎石などが残存していないため、部屋境の基礎構造は不明。九曜之間側も大半は撹乱されて礎石などは残存していない。九曜之間も大半の礎石は残存せず抜き痕も確認できていない。九曜之間下では南北方向の溝を確認した。焼土が堆積していることから、溝自体は焼失時開渠であったようで、底面の勾配から、南側へ水を誘導したと判断している。

九曜之間東側には、闇り通路から続く地下部分がある。九曜之間下門から西に続く地下構造で、5.6 m四方の土間と北西端と南西端に地上へ上がる石製の階段が付く。多門を介して九曜之間北側地上へ通じて、南側は多門を介して九曜之間南側の露地へ通じている。



4-3-1-13 図　大広間北側全体図(第 49 図)

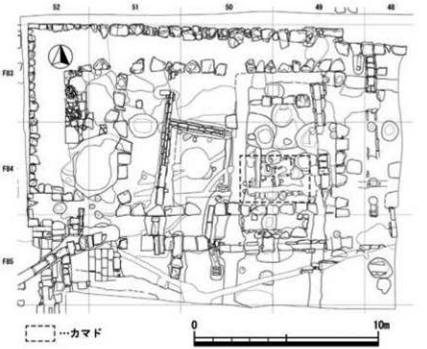


4-3-1-14 図　九曜之間地下平面図(第 60 図)

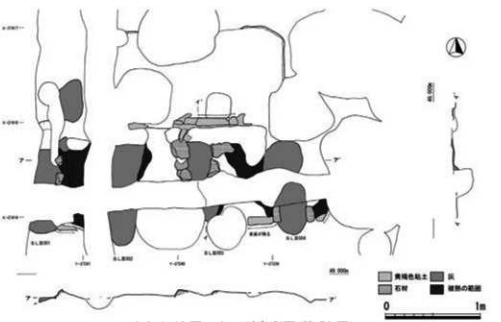
2 大御台所(4-3-1-15 図・4-3-1-16 図)

大御台所棟は、大広間棟と同じく闇り通路上をまたいでおり、内部は、南端に土間・闇り通路上に「イロリ」、その北側に大御台所・御膳立乃間・御小姓部屋と続く。大御台所調査区の北西の出隅から西面にかけての石垣は、明治 22 年熊本地震によって崩落し積み直されている。近代以降の掘削で焼失時の地表面まで撹乱された部分が多く、礎石の抜き取りもみられたが、口の字形に安山岩の礎石列が残存していた。遺構と「御城内御絵図」との比較から、東・南側の礎石列が大御台所の壁の土台、北・西側が土間の間仕切りに相当すると想定している。土間には硬化面が広がり、南東部でカマドの痕跡と思われる灰溜を 4 ヵ所検出した。灰溜周辺の粘土や被熱の痕跡から、焚口を南に向けたカマドが存在したと想定している。

大御台所南には雨落ち溝が検出された。この雨落ち溝は長之間側から大御台所南側を東へ延び南に折れて南側石垣から東竹之丸へ排水する構造になっている。



4-3-1-15 図　大御台所全体図(第 64 図)



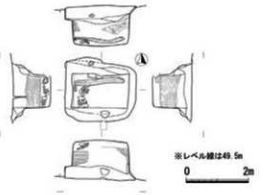
4-3-1-16 図　カマド実測図(第 70 図)

3 御小姓部屋(4-3-1-17図～4-3-1-19図)

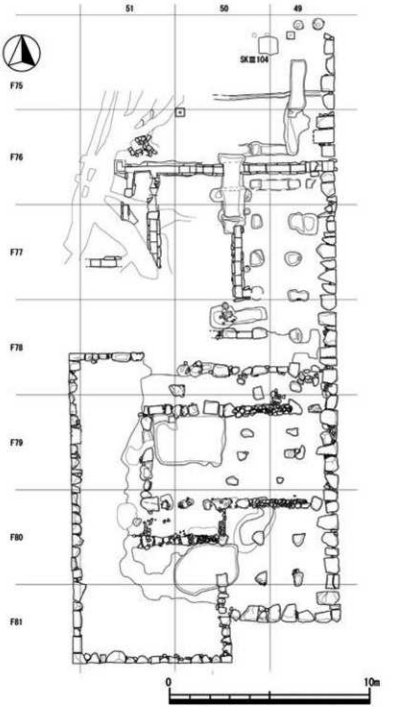
御小姓部屋とした調査区は、大御台所棟の北側に当たり、闇り通路の四ツ辻北東の石垣上の部分を指す。闇り通路をまたぐ大御台所の一部もこの調査区に入る。大御台所と棟続きの建物は小姓部屋・御小姓部屋までで、御小姓部屋廊下は大御台所棟から北へ派生した建物であり、さらに北側の入隅までを塞ぐように細長い建物が建てられている。

調査の結果、遺構としては建物の礎石・礎石抜き痕・雨落ち溝を確認した。御小姓部屋廊下から北側はⅢ層の残存もなく、ほとんどの礎石が抜かれていた。建物の北端で便所の可能性がある遺構を2基検出した。また西側から土坑(SKⅢ104)を1基検出した。平面形は歪な隅丸長方形で、検出面での大きさは、長軸110㎝、短軸95㎝で、東面と南面に段を持ち、下段に東西約90㎝×南北50～65㎝のやや歪な長方形の板囲いの構造物を設けている。板で囲んでいるが、底面に木質などは認められず、素掘りである。板は炭化して一部崩落しており、板で囲まれた部分の本来の深さは不明瞭である。蓋があったかも不明瞭で、内部からは急須などの陶磁器や魚骨・二枚貝が出土した。検出面からの深さは50～60㎝である。

御小姓部屋廊下は、部屋境部分の礎石は礎石列となっており、束柱ではなく木土台をまわした上で床束を設けていたようである。なお、礎石列上に割石を並べたものがみられた。地盤沈下または土台の腐食を挿石して補強したものか。小姓部屋では独立した礎石が6基みられた。いずれも小ぶりの礎石で、部屋境に合わない。また、配置も南北の正位に乗らず、並びの軸は東へ



4-3-1-17図　SKⅢ104（第78図）



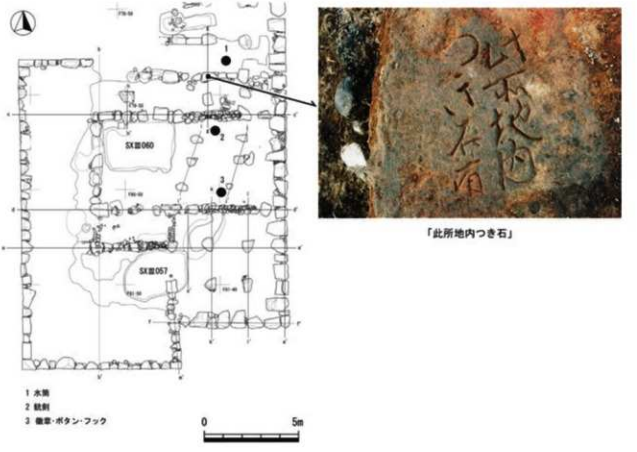
4-3-1-18図　御小姓部屋全体図(第74図)

約 20 度傾いている。

膳立之間は、大半が明治 22 年熊本地震で崩落した部分に当たる。御小姓部屋との境の礎石列以西は崩れて積み直されたようで、焼土や焼失時の地表面も残存していない。

南端石垣は鍵状に折れるが、南に突出した部分が古く、入隅から東側が拡張部分である。地震では旧石垣部分が崩落したようで、拡張部分は焼失後から現在に至るまで大きな改変は無いようである。ただし拡張部分の石垣は焼損が激しく、上面の発掘調査終了後に解体修理が行なわれている。その際に拡張部分で埋没していた旧石垣を検出した。検出した範囲は、高さ・幅ともに 2.5 m程である。地震で崩落した石垣は、積み直しの際に栗石を石垣上面まで充填し、土を貼り直していないため、石垣上面の観察では崩落部分が栗石の露出部分として観察できる。その範囲は、最大で石垣天端から 4 m の部分にまで達している。

小姓部屋調査区の出土遺物として特筆されるのは、小姓部屋廊下から出土した金属製の水筒と、小姓部屋から出土した徽章・ボタン・ホックで、それぞれ固まって出土した。焼土と混在しており、焼失時に地表面から離れていたものが落下した可能性が高い。また、小姓部屋廊下南端の礎石列に「此所地内つき石有」と陰刻した凝灰岩を確認した。御小姓部屋廊下や大御台所棟が乗る石垣は、石垣の重複関係から東側に拡張されたことが明らかである。重複がみられる南側の入隅の延長が陰刻した石の方向であり、この石の下に旧石垣があることを示したものである可能性が高い。



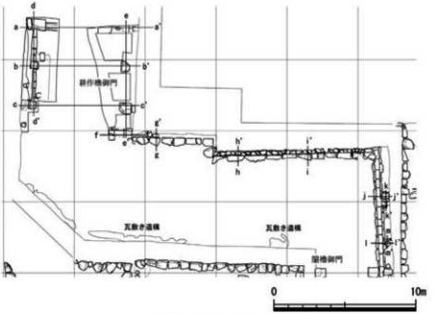
4-3-1-19 図　御小姓部屋平面図(第 80 図)

4 闇り通路(4-3-1-20 図～4-3-1-28 図)

○耕作櫓門―闇櫓門間

本丸御殿周辺の外構工事に伴い、耕作櫓門―闇櫓門間の遺構残存状況を確認した。闇櫓門の北側では、吉野之間西面の石垣に沿って幅 30 ㎝、深さ 20 ㎝の溝が検出された。溝は、闇櫓門北側対面の石垣に沿って続いていたが、耕作櫓門下の出隅では北へ折れず、直進して暗渠となっていた。

耕作櫓御門下の通路面に開渠はみられなかったが、蘇鉄之間から猿牽之間・火打之間下では、御殿の雨落ちを受けるための瓦敷き遺構が検出された。瓦を、小口を上にして立てて埋め込んだもので、蘇鉄之間下では幅広く、東西長 1.2 m、奥行 1 mの範囲に平瓦が敷かれていた。闇櫓御門の唐破風や屋根からの雨水が集中する部分に敷かれている。



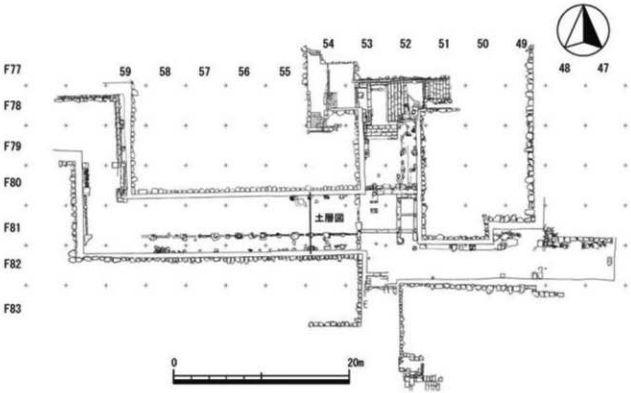
4-3-1-20 図　耕作櫓門・闇櫓門間平面図(第 84 図)

○闇り通路

大広間棟と大御台所棟の地下にある平面十字形の地下通路である。大広間棟北西側に北へ開口する闇櫓門から入り、御玄関や四ツ辻と呼ばれる十字路から本丸御殿各所に向かう連絡路である。全面に渡って大量の瓦・焼土・炭化材が出土した。いずれも上部構造である大広間・大御台所などを構成した材と、通路の構造材である。1 階床梁や地階柱などの大型の部材はみられない。多量の炭化材が残存していることから大型の部材が完全燃焼したとは考えにくい。また、生焼けの部材が相当数みられたことから、大型の部材が腐敗したとも考えにくいため、焼失後に燃え残った大型の部材は片付けられたと想定している。

闇櫓門から入る経路で解説する。闇櫓門は東西方向の門で、北側に開口する。幅は約 5.5 m。近・現代の配管や配線が通路中央を通っており、旧地表面が大きくえぐられていたが、門礎は残存していた。

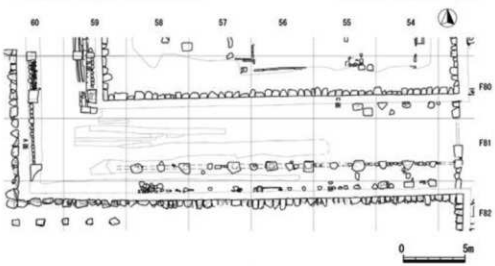
闇櫓門を入り、南に約 4.2 mで通路は直角に東へ曲がる。西端から四ツ辻閘門まで約 35 m、幅約 7 mの東西通路で、北面石垣裾からから北～1 間の部分に大広間の 1 階床梁を支える地階柱が並んでいた。柱は四ツ辻手前の玄関まで 9 本存在したと想定されるが、通路の折れた部分の礎石は残存していない。残存した地階柱礎石上には炭化材、漆喰根巻きがみられる。根巻きの通路側には、小石をちりばめた漆喰化粧が施されている。出土した地階柱礎石上の炭化した柱材だが、いずれも平面形は四隅を面取りした方形で、1 辺が 35 ～ 50 ㎝ほどである。地階柱と南壁の間は、上框状の構造であったようで、炭化した框材が柱と柱をつなぐように出土し、部分的に框の下の蹴込み板や地覆状の材がみられた。小ぶりの安山岩礎石上には束柱が残存するものがあり、框を支え、蹴込み板をつないでいたものと想定している。框材には、根太と思われる直交して南北方向に向く材が付属するものもある。「御城内御絵図」では西から 4 石目付近まで警固所で、5 石目から 8 石目までは、御玄関に上がるための式台で、上框からさらに北側に突出した框が設けられていた。



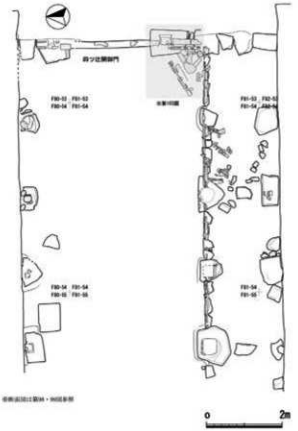
4-3-1-21 図　閘り通路全体図(第 87 図)

「四ツ辻西側　炭化材出土状況(東より)」

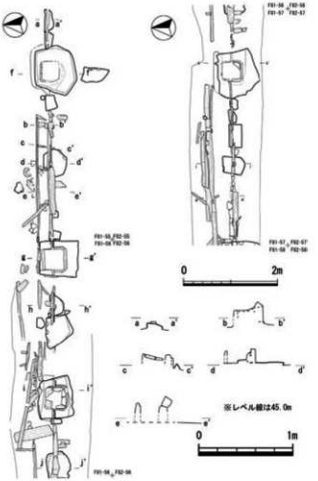
「四ツ辻西側　炭化材出土状況」



4-3-1-22 図　閘り通路礎石検出状況(第 92 図)



4-3-1-23 図　式台平面・断面図(第 100 図)



4-3-1-24 図　御玄関平面図(第 102 図)

炭化材の出土状況としては、5 石目から 8 石目手前まで、上がり框から 30 ㎝北に厚さ 3 ～ 5 ㎝ほどの板材が東西方向に連なり、この板材に根太と思われる細長い板材が釘で固定され、上がり框とをつないでいた。「御城内御絵図」(熊本市蔵)に表現された式台の構造が良好に残存していた。8 石目から四ツ辻開御門までは御玄関という中地階の構造物が設けられていた。藩主が大広間に入る際には、式台から階段で中地階の御玄関に上がり、さらに階段で鶴乃間と式台之間に入っていた。この中地階の構造物を支えるために、8 石目から東は、南北面石垣沿いにも礎石が置かれ、柱が建てられていた。

闇櫓門から四ツ辻開門までの通路からは大量の瓦や炭化材が出土した。地階柱の礎石や周囲の石垣も焼損が激しい。大広間から落下した構造材は、炭化材・瓦・金具であり、さらに大広間内に置かれていたものも混在していた。四ツ辻開門西側で出土した大量のボタンやフックは、鶴之間・式台之間・御玄関付近に置かれていたものが落下したのであろう。臺印・裁縫セット・T 字形工具なども出土している。落下したものではなく、通路に置かれていたと判断できるものもとして、北側石垣裾に整然と並べられていた炭化材がある。地表面に接しており、落下した焼土・炭化材などに覆われていた。

御玄関の東は十字状の交差点であり、四ツ辻と呼ばれている。「御城内御絵図」によれば、四ツ辻への西側の入口としては四ツ辻開門があり、その脇門本体の炭化材が残存していた。鏡柱に挿した肘壷金物と、それと組合されたが肘金物が格子状の炭化材に挿さっていた。四ツ辻のほぼ全面が焼失前に客土で覆われていたため、門の礎石も埋没していた。

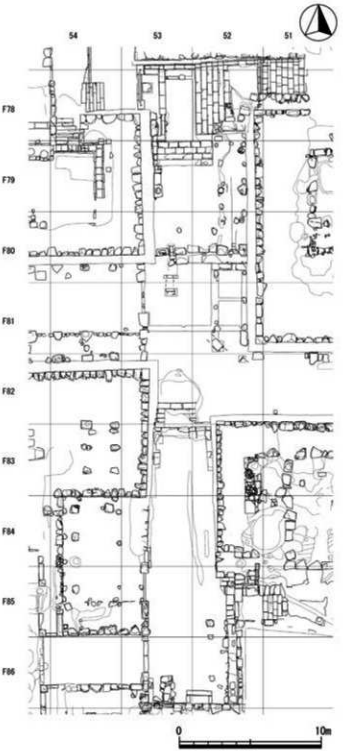
四ツ辻から南に折れると大御台所・長之間・月見御台所へ向かうが、その手前に四ツ辻脇南開門がある。「御城内御絵図」によると、四ツ辻脇南開門は西寄りに門がつき、門の北側と南側に階段を伴う。門の周辺から南側の塀重門前の露地にかけての一帯は焼失前に客土が行なわれ、焼失時に階段は埋没していた。

四ツ辻から北に折れると、四ツ辻脇北開門がある。四ツ辻脇北開門の南側には2段の石階段が検出されたが、下段は埋没していた。焼失前に客土が行なわれ、四ツ辻の北東隅には番所跡の礎石も埋没していた。四ツ辻脇北開門大扉の西側扉の下桟が戸当りの石に当たった状態で残っており、焼失時には扉が開かれた状態であったことがわかる。

四ツ辻の通路面は北開門から北へ約6mの部分まではほぼ平坦で、そこから天守台前の平場と同じ高さに上るまでに3ヵ所の階段を検出した。最初の石階段は凝灰岩製で、四ツ辻の通路から6段(高低差約1.2m)上った場所に奥行き約5.5mの平場がある。正面に石垣があり、通路はここで左右に分かれてT字路となる。平場から東側は、中途に平場のある凝灰岩製の石階段で、御小姓部屋廊下の西へ出る。T字路の西端には九曜之間下門の礎石、その奥に南側の中露地、北側の天守側の露地へ上る安山岩製の石階段を検出した。門の礎石上には両端に八双金物が装着された炭化した部材が残っており、門の留め栓金物も出土した。

四ツ辻より北側の排水は、一番目多門側から北側の石垣裾を通り、闇り通路の西側石垣に沿って四ツ辻脇北開門の脇戸下を潜って走る溝によって処理されていた。北開門の南側では暗渠になっており、四ツ辻を斜めに横断して一ノ開御門へ向かい、一ノ開門から外は開渠になっていた。

四ツ辻から東側の一ノ開門側は大御台所の地下部分である。四ツ辻から一ノ開門まで約16mで、幅は4.5～6m前後である。焼失後、盛土をして整地を行ない、四ツ辻から一ノ開門に向かって下がる勾配が付けられていた。一ノ開門の礎石は、南側の脇柱礎石以外は全て抜かれていた。控柱礎石は北側の鏡柱に対応するものと、南側脇柱に対応するものを確認した。一ノ開門の外は、階段と思われる石列が一部残存していたが、この階段をなくすような土盛が行なわれている。



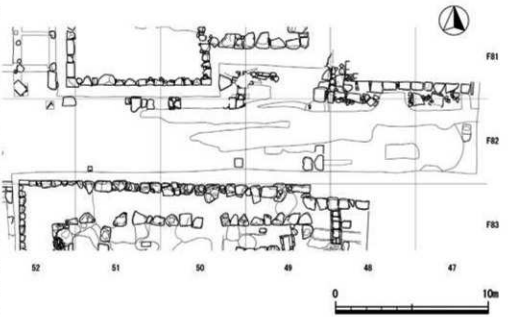
4-3-1-25図　闇り通路南北平面図(第107図)

一ノ開門の外は、北へ折れて二ノ櫓門へ向かう。二ノ櫓門へは階段で降りるが、現在の階段は過去の整備で通過の便をよくするために設けられたものである。闇り通路北側から誘導されてきた雨水は、東側へ向かって北側の石垣沿いを暗渠で通され、一ノ開門外へ排出される。

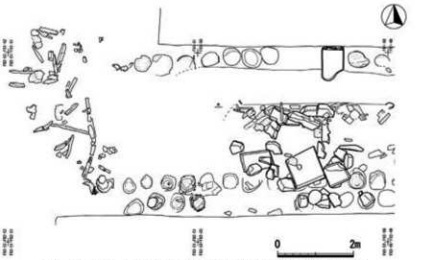
闇り通路東側からも炭化材が多く出土した。特筆すべきは大御台所から落下したイロリを構成していたと

想定される凝灰岩製の板石である。

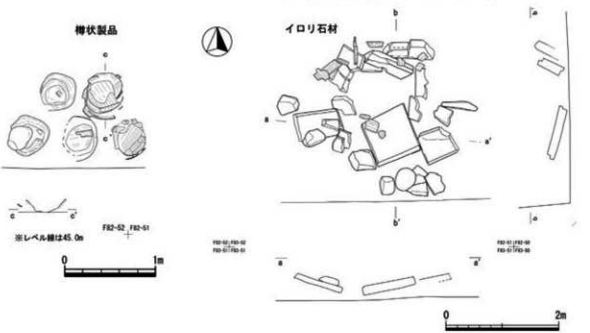
長辺の側石とみられる刳り込みのある板石や、底石とみられる板石が出土した。これらの石材の一部は復元整備の際に再現したイロリに使用している。また、通路上の南北の壁際で円形の炭化材が並べられていた状態で出土した。蓋と籠状のものは確認できたが、全体像は不明瞭である。本来は円筒型で樽状のものであったと想定している。直径は 35 ～ 40 ㎝程である。



4-3-1-26 図　間り通路東全体図(第 121 図)



4-3-1-27 図　間り通路東炭化材等出土状況(第 122 図)

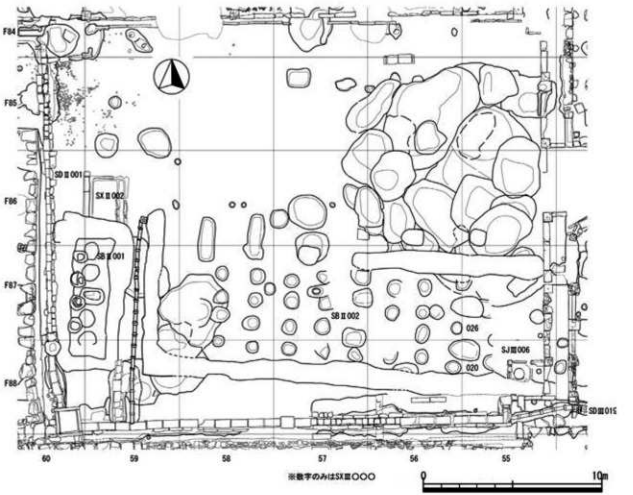


4-3-1-28 図　遺物出土状況(第 125 図)

5 長之間(4-3-1-29 図)

長之間北端の麒麟之間下土間に当たる部分では、遺構面が大広間石垣の天端から 1.3 m 下がっており、単独の礎石と土間の硬化面を検出した。塀重門では、東西の敷居石の高低差が 40 ㎝あり、硬化した路面が西から東へ下る斜面となっていた。西側の敷居石の延長から露地に面して安山岩の延石が続いており、間に縁先を支える束石が 4 m 間隔で置かれていた。塀重門の南側には、長之間の礎石を検出した。長之間では、東西両側面の礎石の間に幅 30 ～ 40 ㎝の地覆石が並んでおり、礎石には 22 ～ 23 ㎝角の柱当たり、西側の地覆石には幅 20 ㎝の段差が認められた。建物の内側には単独の礎石も残存しており、柱間間隔は 6 尺 5 寸(約 2 m)である。

4-3-1-29 図　長之間全体図(第 134 図)



4-3-1-30 図　露地全体図(第 140 図)

6 露地(4-3-1-30 図・4-3-1-31 図)

検出された露地面は、大広間・西廊下・小広間の土台となった石垣の天端よりも 1 ～ 1.6 m低く、表面には径 2 ～ 5 ㎝の化粧玉石がみられた。建物の近くでは、焼け落ちた部材の影響で地表面が赤色あるいは黒色に変化している部分が認められた。

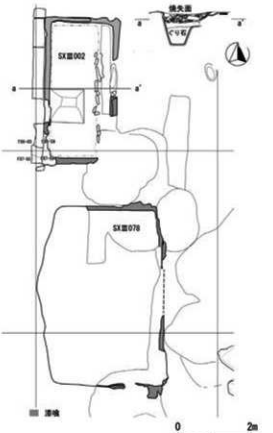
梅之間の南側で階段の桁受けの土台石が検出された。西廊下前の露地では南北 4 m、東西 2 mの長方形の漆喰槽を検出した。「御城内御絵図」にみられる水槽様の遺構である。漆喰槽は全面に漆喰が塗られており、東西両側縁に沿って幅 30 ㎝の凝灰岩が敷かれていた。トレンチを設定して埋土の一部を掘り下げたところ、深さは 1.5 mで、東側に幅 30 ㎝の段を有する。埋土の上面には被熱の痕跡が認められ、焼失前に埋められたようである。漆喰槽の南側では、幅 20 ㎝の漆喰による区画が南北 5 m、東西 3.4 mの規模で検出される部分があり、より古い漆喰槽が埋没しているものと想定している。

この他に露地では、近代以降の土坑群や建物跡と思われる遺構を検出した。土坑群(SK Ⅲ 051 ～ 077)は露地の北東部に集中しており、ほぼ近世瓦片のみで埋没していた。Ⅱ層中位から掘り込まれた瓦の廃棄坑で、掘削・埋没時期に大きな差は無いものと考えている。建物跡は複数あり、いずれもⅡ層上面からの掘り込みである。他にも全容の不明な溝状遺構も多数検出した。

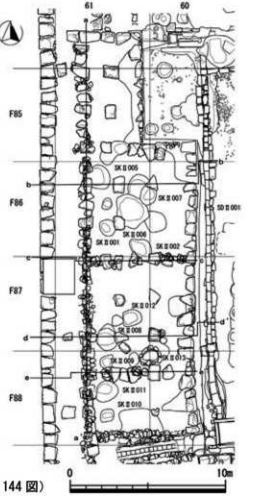
7 西廊下(4-3-1-32 図)

露地の西側に位置する。検出した石塁の規模は、大広間の縁先に当たる部分から南側へ約 5 m分は天端上面の東西幅が 5.5 m、それより南側は東西幅 8.2 mである。

石塁東面における石垣の高さは 1.6 mで、石塁上には独立礎石と東西・南北方向の礎石列が残存していた。遺構の配置と「御城内御絵図」との比較から、礎石列はそれぞれ廊下と部屋の間仕切り位置に相当し、礎石の間隔は 6 尺 5 寸(約 2 m)と推測している。石垣天端の高さは北から南へ徐々に低くなっており、標高は北端で 49.8 m、南端では 49.2 mである。また、石垣に対して裏込めの栗石と礎石が大きく沈んでおり、礎石列上では割石を多数検出した。



4-3-1-31 図　SXⅡ002・SXⅢ078（第 143 図）



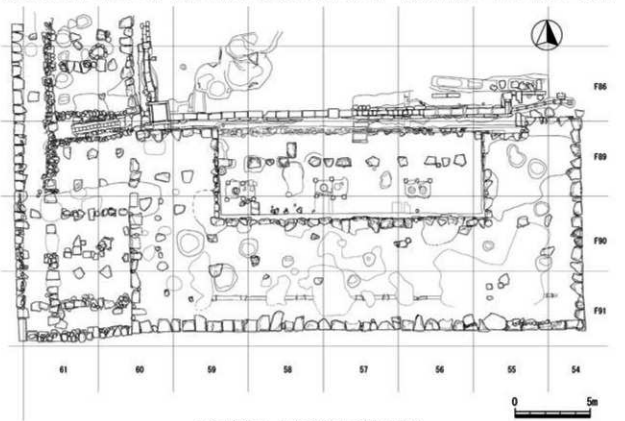
4-3-1-32 図　西廊下全体図(第 144 図)

8 小広間(4-3-1-33 図～ 4-3-1-35 図)

小広間は、大広間と露地を挟んで対面する建物。調査前は公園整備による日本庭園が設けられていた。調査では、長方形の建物に対して「コ」の字形の櫓台を検出した。

小広間西端は、北から 2 間× 3 間の部屋が二間、3 間× 3 間の部屋が一間の配置で、西端の小広間三階櫓へつながる。一部の礎石の残存がみられた。小広間三階櫓の礎石の一部と、南北方向の間仕切りの礎石と思われる。櫓台の内側は、東西 17.8 m、南北 5.5 m の穴蔵であった。穴蔵の内部は、検出した礎石も含め周囲の石垣も被熱による焼損が激しい。闇り通路と同様に、周囲を囲まれた中に上部構造物が落下したことで、被熱が周囲より激しかったためと想定している。炭化材の残存も闇り通路に次ぐ量である。穴蔵周辺の石垣は、南面の残存状態は比較的良好だが、天端石ははずされた部分が目立った。東面の石垣は、北隅を中心に築石・栗石が大きく外されている。北西側も天端石は全て外されていた。穴蔵の床面は、焼失時、全面に土間タタキが施されていた。この面で、露地との間仕切り石列・礎石・埋設甕を検出した。間仕切りから南へ約 2 m で床束と思われる東西方向に並ぶ礎石を検出した。この礎石は、小広間の間仕切りに相当する部分と思われる。間仕切りの北側には露地の四周に巡らせた雨落ち溝を検出したが、間仕切りから雨落ち溝付近で大量の板ガラスが出土した。地表面に密着しているものもあり、小広間の北面には板ガラスが使用されていたと想定している。

露地の南西角に当たる部分には雨落ち溝がつながるマスが設けられていた。一辺 135 ～ 150 cmの凝灰岩板石を組み合わせたもので、露地の雨水などを集約し、SD Ⅲ 027 へ流し飯田丸側へ排出するものである。



4-3-1-33 図　小広間全体図(第 147 図)

○小広間三階櫓

小広間三階櫓は、本丸の南西端の西廊下と小広間の角に設けられた櫓である。小広間櫓台西に拡張された二様の石垣上にある。調査前まで公園整備による藤棚や石碑などがあり、それらの基礎により旧地表面や礎石が撹乱されて、一部の礎石は抜かれている。調査の結果、焼土の残存状況は良好で、石垣・礎石・栗石の焼損が激しいことを確認した。

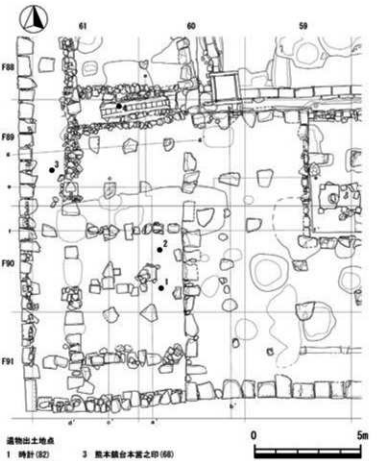
三階櫓南端の石垣は、小広間土台石垣と拡張石垣東端では約 40 ㎝の高低差がある。この段差は、小広間土台が北へ向かうにつれて下がり三階櫓の北側では小広間側との高低差はほぼ無くなる。

三階櫓の内側 3 間四方は、礎石が石列になっている。このうち東側の列は小広間櫓台西端に乗る。西側の石列は西廊下から連続している。東側の列を除き挿石が乗る。挿石は安山岩と凝灰岩を使用している。

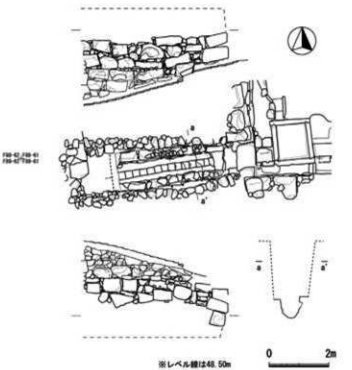
挿石は南側の天端石上にもみられ、西側の天端石上にも一部みられる。3 間四方の内側は、独立した礎石を 4 石検出した。一部は栗石に埋まっていた。いずれも安山岩製で、束柱の基礎になる礎石であろう。挿石がみられるものもある。

西廊下と小広間の境に排水溝(SDⅢ027)を確認した。露地南西隅のマスからつながるものである。機能時は、建物の下を通って露地の雨水を飯田丸側へ排水していた。西廊下土台石垣上面での幅は、東側で約 1.1 m、西側で約 1.4 m。西廊下土台石垣上面からの深さは、上流側で約 2 m、下流側で約 3.3 m。約 18 度の傾斜で西側へ下がっている。西廊下土台石垣東側裾から 4.8 m までは開渠だが、それ以西は暗渠となり、西廊下西面石垣に開口している。

三階櫓から西廊下の南側にかけては、特殊な遺物が出土した。三階御櫓からは短射銃と時計、西廊下からは「熊本鎮台本営之印」の印章が出土した。印章に関しては、石製であり焼失時の熱で破損していた。SD Ⅲ 027 の焼土層からは拳銃が出土した。本来は上の建物内にあったものである。



4-3-1-34 図　三階櫓付近(第 159 図)



4-3-1-35 図　SDⅢ027（第 166 図）

9 長局櫓(4-3-1-36 図・4-3-1-37 図)

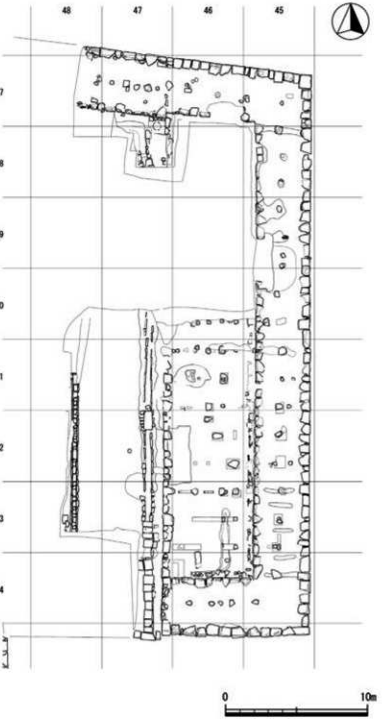
長局櫓は、「御城内御絵図」の内容と現状石垣から南北 20 間(約 40 m)、東西 5 間(約 10 m)の平櫓と推測されている。本丸御殿復元整備に伴う電気室など設置の必要性から、櫓の半分を外観復元した。発掘調査は、外観復元を行なった櫓の南側 2 分の 1 と、北側の櫓台上面を対象とした。調査の結果、全面に焼土層(Ⅲ層)がみられ、検出遺構に被熱の痕跡が認められたこと、焼土中から明治初期の軍用品が多数出土したことから、天守や本丸御殿と同じく明治 10 年(1878)の火災で焼失したことを確認した。

櫓の土台となる櫓台は平面形が「コ」の字形を呈し、石垣で囲まれた部分に穴蔵状の床下が存在する。櫓台上面では約 2 m(6 尺 5 寸)の間隔で並ぶ礎石状の石を検出したが、石材の形状や大きさは不揃いで凝灰岩が目立ち、自然面の残る割石もみられた。

石の下に本来の礎石と思われる安山岩が検出されたものがあり、上位の石は石垣裏込めの沈下などで高さを調整した挿石と思われる。櫓の西壁の土台は安山岩の石列で、約 2 m 毎に入る大ぶりの石は、「御城内御絵図」の柱位置に相当する。石列の西側には櫓の雨落ち溝を検出した。櫓の南面石垣の排水口へつながると想定している。北側は櫓台に沿って折れ、西へ続く。

床下部分では、櫓台石垣の裾に沿って木土台のものと思われる炭化材が残存しており、直下に安山岩による礎石を検出した。梁間方向に安山岩が約 1 m の間隔で並ぶ部分が 4 ヵ所(4 列)あり、石の上面には一辺の長さが 10 ～ 20cm の炭化した柱材が残存していた。安山岩の並びに沿って厚さ 10cm の壁の裾部も検出されており、「御城内御絵図」にみられる間仕切りに使われた礎石である。

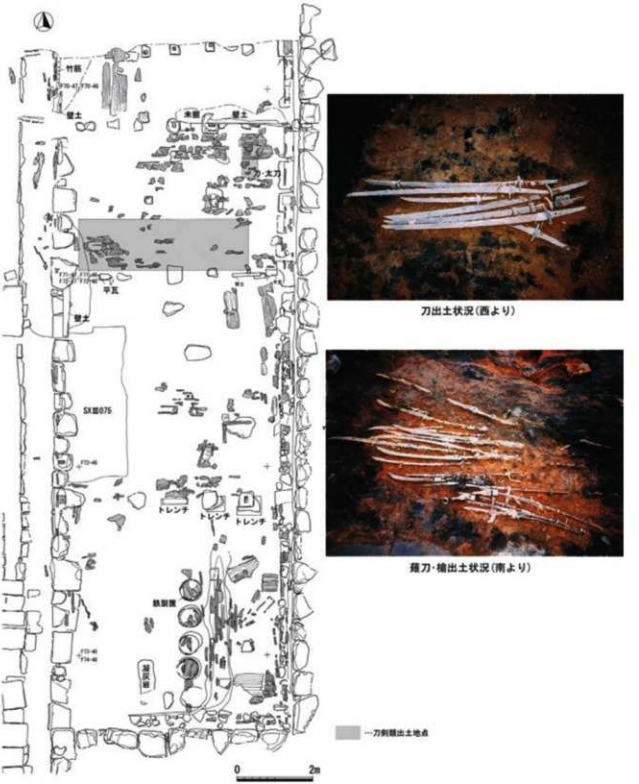
床下では特筆すべき遺物の出土状況が見られた。F71-46 グリッドで、刀剣類と火縄銃の部品などが多量に出土したのである。刀・槍と薙刀類、火縄銃の部品と、それぞれ種類別にまとまって出土し、刀は太刀が 2 振、刀 4 振、脇差 2 振の計 8 振、槍・薙刀・長巻類は合わせて 30 本(振)近い数である。槍・薙刀類は床下部分の



4-3-1-36 図　長局櫓全体図(第 167 図)

間仕切りに沿うような状態で出土した。直下に板状の炭化材が出土したため、本来は屋内にあったものと想定している。他にも底板と思われる炭化材と鉄製の箍が出土した。箍は5セット検出され、床下に樽状の容器が置かれていたものと推測しているが、本来の形状や内容物は不明である。この他に、洋式小銃の銃剣やストーブの破片、草鞋など、多様なものが長局櫓から出土した。

焼失後の長局櫓跡には、客土(Ⅱ層)上に建物が建てられていたようである。建物の基礎と思われる礎石の並びを検出した。



刀出土状況(西より)

薙刀・槍出土状況(南より)

4-3-1-37図　長局櫓炭化材出土状況(第172・173図)

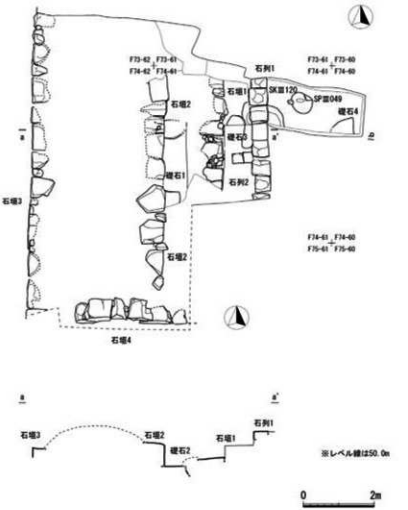
10 御天守廊下(4-3-1-38 図)

現況では、御天守廊下部分は天守前広場と同じ高さだが、本来は天守前広場より高い石垣があり、その上に建物が乗っていた。調査は、仮設通路土台部分のみで、調査後も遺構は保護されている。

検出した遺構は、南北方向の石垣3条(石垣1～3)、東西方向の石垣1条(石垣4)、南北方向の石列1条(石列1)、東西方向の石列1条(石列2)、礎石4個(礎石1～4)である。石垣1は安山岩による石垣である。調査区内で約3mの長さを検出したが、どのように調査区外へ伸びるのかは確認できていない。面を東に向け、角礫や川原石の裏込めを伴う。上面のみの検出で、深さの確認は行なっていない。石垣1東面から西へ1.7mで検出した石垣2は安山岩による石垣である。検出は1段だが、この石垣に先行する礎石(礎石1･2)が石垣下に食い込んでおり、この石垣が根石と考えられる。南北に6mの長さを検出し、北側はさらに北へ延びる。石垣3は、現在の天守前広場西端の石垣上端である。石垣2と石垣3間は栗石で、栗石の頂部から石垣3の天端までは50～60cmほど下がっている。調査区南端で検出した石垣4は、南に面を向けた安山岩による石垣であり、2段を検出した。西端は1ないし2石分の築石が外されており、石垣3とどのように重複していたのかは不明。東端は攪乱により破壊されており、石垣1との重複も不明。石列1は、表土とその下位の現代の整地層中に安山岩を並べたもので、現表土上面に一部露出していた。石列2は、板状に加工された石を並べたもの。2石を検出した。

礎石は4石検出した。礎石1･2は、石垣2に接して検出した。いずれも石垣2下に食い込んでおり、同じ性格であると判断している。礎石1･2の芯心間は2m。礎石3･4は、石垣1を埋めた整地層に置かれており、上面の高さもほぼ同じで、一連の建物の礎石の可能性が高い。芯心間は3m。この礎石3･4を埋めて石列2は設けられている。

これらの遺構は重複関係にあり、認識できた前後関係をまとめる。最も先行するものは、礎石1･2と、石垣2･3である。石垣2･3は、御天守廊下土台石垣であり、検出面での幅は約3.7m。石垣2に先行する礎石1･2は、御天守廊下以前の建物に付随する可能性もあるが、石垣2構築時に撤去されなかった点と、石垣2との親和性から石垣2構築時に置かれた可能性が高いと考えている。次に石垣2の約1.7m東側に石垣1が設けられ、石垣2と礎石1･2は栗石で埋められる。石垣1･3の検出面での幅は両端間で5.4m。石垣1が設けられた段階で、礎石1･2は機能を失ったと考えられる。石垣1は、この拡張によるもので、石垣4



4-3-1-38 図　御天守廊下平面･断面図(178 図)

と一連のものであったと想定する。石垣 1･4 を設けた後に礎石 3･4 が置かれ、さらに礎石 3･4 を埋めて石列 2 が設けられている。この石列 2 上に焼土層がある。

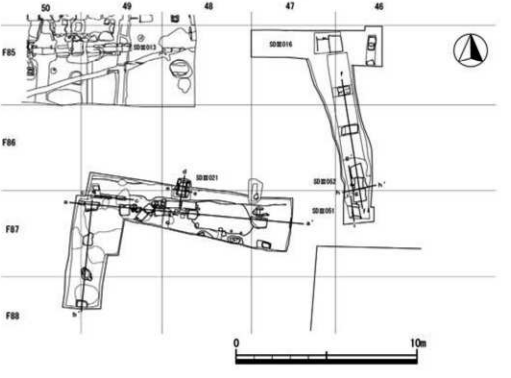
11 その他・トレンチ(4-3-1-39 ～ 46 図)

○月見御台所トレンチ

月見御台所の遺構を確認するため、東西・南北にそれぞれ L 字形のトレンチを設定した。現地表面の標高は約 49 m である。表土と現代の攪乱を除去した時点で遺構が露出したため、Ⅲ層は掘り下げていない。東西方向のトレンチで安山岩の礎石を検出した。月見御台所の北壁と間仕切りの土台の一部と想定している。礎石には被熱によるひび割れや剥離が認められたため、月見御台所も明治 10 年の火災で焼失したと想定した。検出した礎石から推測した柱間間隔は 6 尺 5 寸(約 2 m)であった。

南北トレンチでは、大御台所調査区の雨落ち溝の延長である暗渠を確認した。月見御台所東側石垣南面の排出口へ通じている。

本丸御殿西側石垣の拡張状況をみるために、西側石垣裾に 6 ヵ所トレンチを設定した。トレンチの名称はグリッド名を冠している。

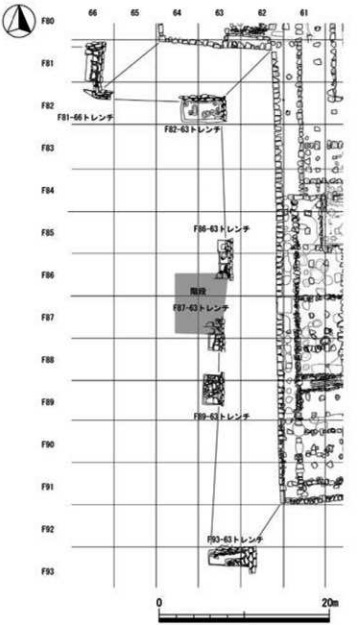


4-3-1-39 図　月見御台所トレンチ(第 179 図)

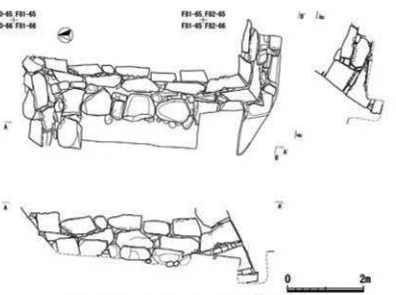
○F81-66 トレンチ(4-3-1-40 図・4-3-1-41 図)

猿牽之間下の石垣裾に設定したトレンチである。猿牽之間下出隅の石垣は、布目崩しで積まれ、築石の形状が不安定なものが多い。北側の入隅の観察では、地蔵門側からの石垣との新旧関係はない。調査時この石垣裾には安山岩の置石が露出していた。この置石は猿牽之間下出隅から北方向に並び、さらに地蔵門側の東西方向の石垣裾にも並んでいる。トレンチ調査の結果、現地表面から 40 ～ 50 cm 下で、風化凝灰岩層と灰白色粘質土を確認した。出隅の根石がこの層におさまっており、石垣構築時の基盤層になると判断した。砕石等を含む表土下には、瓦を含む黒褐色土とその下に瓦を含む暗褐色土を確認した。置石は黒褐色土中に収まる。よって、置石は石垣構築後のある段階に補強のために置かれた可能性が高い。置石の裾には川原石の根石が用いられている。

出隅には置石がなく、灰白色粘質土上面で石垣裾の掘形の可能性がある掘り込みラインを確認した。掘下げたところ、露出していた一番下の築石裾で安山岩の間詰石を確認した。これが根石となるようで、底面の標高は 35.4 m である。



4-3-1-40 図　トレンチ位置図(第 181 図)



4-3-1-41 図　F81-66 トレンチ(第 182 図)

○ F82-63 トレンチ(4-3-1-40 図・4-3-1-42 図)

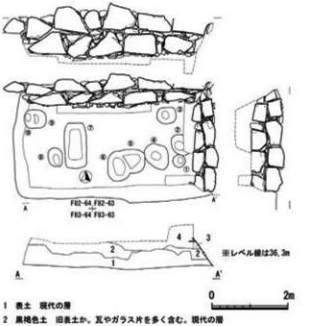
本丸御殿数寄屋下の入隅に設けたトレンチである。土層・根石を確認した。遺構はピットを 10 基確認したが、掘り込み面や埋土から大半は現代のものと想定している。この入隅の石垣は重複関係がみられ、数寄屋下の東西石垣に大広間側の南北石垣が乗る格好が観察できる。東西石垣の根石底面には間詰石がみられるが、南北石垣の底面にはみられない。東西石垣は 1 石、南北石垣は 2 石分が埋まっていた。東西・南北石垣ともに根石の下は軟質の風化凝灰岩である。

○ F86-63 トレンチ(4-3-1-40 図・4-3-1-43 図)

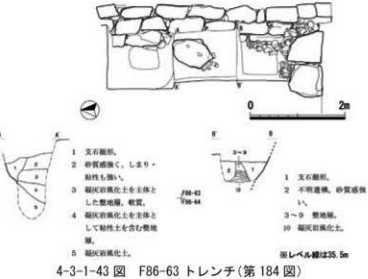
西廊下石垣の裾で階段の北東側に、南北方向に設定したトレンチである。現地表下 1.4 m まで土層の観察を行なった。また、南端は階段の天端石の裏側(北側)を現地表下 60 cm まで掘削し、土層の確認をした。石垣は、現地表下に 2 段埋まっており、築石下にわずかに間詰石がみられた。築石の下部の標高は築石の下部は軟質の風化凝灰岩で、出土遺物はなく自然堆積か人為層かの判断ができていない。風化凝灰岩は西へ斜めに下がっており、その上に現地表面近くまで整地が行なわれている。南側の階段付近では、この整地層を切り込んで石垣根石付近に礫を入れている。礫は、階段の踏石の裏から連続しており、石垣の構築・整地―礫・階段の構築順が想定できる。

○ F87-63 トレンチ(4-3-1-40 図・4-3-1-44 図)

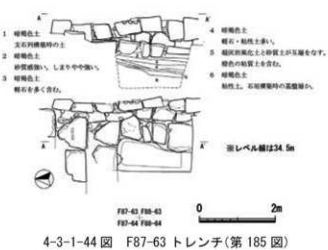
階段下の東端に設定したトレンチである。表土直下で、埋没した階段の踏石を 1 段分検出した。埋没した階段踏石は 1 段のみで、その南には石垣沿いの安山岩置石がみられる。置石は 1 段で、その下は厚さ 30 ～ 50 cm の版築土と、厚さ 30 ～ 60 cm の暗褐色土。いずれも整地層で、北から南へ緩やかに傾斜している。



4-3-1-42 図　F82-63 トレンチ(第 183 図)



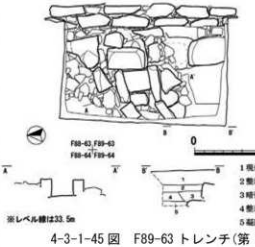
4-3-1-43 図　F86-63 トレンチ(第 184 図)



4-3-1-44 図　F87-63 トレンチ(第 185 図)

○F89-63 トレンチ(4-3-1-40図・4-3-1-45図)

本丸御殿上からの排水口直下にトレンチを設定した。検出遺構は石垣裾の置石と溝である。排水口直下には、安山岩が敷かれている。敷石が上面を揃えて配されており、東端は石垣に接している。敷石の範囲は南北 140 ㎝、東西 170 ㎝ほどで、南西に向かって緩やかに下がっており、雨水を南西方向に誘導していた可能性がある。なお、この安山岩以下は掘削していないため、これが当初のものかは不明。石垣裾には、敷石に乗る格好で安山岩置石が並べられている。石垣築造当時のものではない。

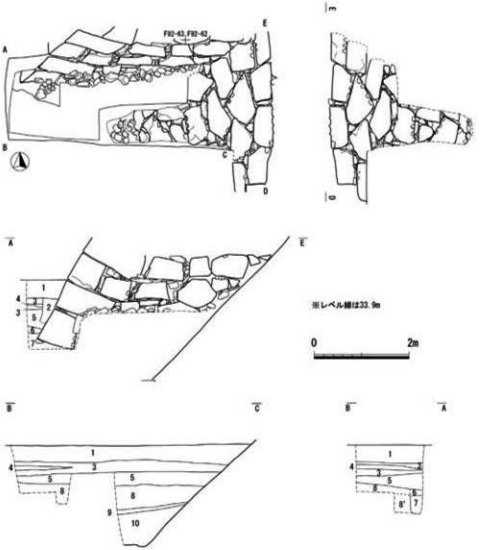


4-3-1-45 図　F89-63 トレンチ(第 186 図)

○ F93-63 トレンチ(4-3-1-40 図・4-3-1-46 図)

二様の石垣裾部にトレンチを設定した。小広間三階櫓石垣裾の西側出隅から東側入隅までで、東西約 4.8 m、南北 1.7 m。入隅での新旧石垣の重複については、東側の古い石垣を旧石垣、西側の新しい石垣を新石垣として区別する。新石垣の出隅は現在地表に露出しているものの下に築石 2 石を検出した。出隅は算木積みだが、間詰石を多用している。根石となる下位の築石下にもわずかに間詰石がみられた。その他には明瞭な基礎構造はみられなかった。

現地表面から根石までは 120 ～ 140 ㎝。旧石垣は、現地表下 220 ㎝で根石を検出した。現地表下 40 ㎝は現代の整地層(1 層)で混入物の多い客土である。その下に 25 ～ 50 ㎝程の厚さで砂質土と粘質土の互層をなす整地層(2 層)がみられる。2 層の下には凝灰岩風化土を主体とした整地土(3 層)がみられる。約 130 ㎝の厚さがあり、混入物の差があり互層を成している。新石垣根石掘形は 3 層上位まで掘り込まれており、根石を設置した後で 2 層の整地が行なわれたようである。2 層の上位には灰白色粘質土を多く含む。下位には礫が多くなる。3 層の下には角礫の集中がみられ、旧石垣の根石はその角礫の上に乗っている。角礫の範囲はトレンチ底の 60 ㎝× 60 ㎝程度を確認したのみで、分布範囲や厚さなどは確認していないが、旧石垣の基礎地業で、3 層は旧石垣段階の整地層と考えている。



4-3-1-46 図　F93-63 トレンチ(第 187･189 図)

2. 出土遺物

瓦

①軒丸瓦(4-3-1-47 図･4-3-1-48 図)

本丸御殿の発掘調査では、三巴文･日足文(李朝系)･桐紋･桔梗紋･釘抜紋･九曜紋が出土した。

○三巴文軒丸瓦(3 ～ 18)

巴の回転方向、珠文の数、巴の頭の形状、巴の長さで分けた。Ⅲ層中から一定量出土し、2 次焼成を受けたものもあるため、本丸御殿で使用されていた可能性が高い。

○日足文軒丸瓦(19 ～ 21)

3 点出土し、うち 1 点がⅢ層から出土した。

○桐紋軒丸瓦(22)

1 点確認した。22 は、飯田丸出土の桐紋軒丸瓦との対比から五三の桐で、名護屋城出土桐紋軒丸瓦Ⅱ -1 b 類と同笵の可能性がある。

○桔梗紋軒丸瓦(23 ～ 31)
桔梗紋だけのものと、桔梗紋の周囲に珠文が入るものに大別され、前者は、花弁が接し輪郭が直線的なものと、花弁が接し輪郭が丸みを持つもの、花弁同士が離れ丸みを持つものに分かれる。後者は、珠文の数でさらに分かれる。
○釘抜紋軒丸瓦(33)
細川家の家老である米田家の家紋。文様の表面はミガキに近い丁寧なナデが施されている。瓦当面には細かな砂がみられる。
○九曜紋軒丸瓦(35 ～ 51)
細川家の家紋である九曜紋は、本来星を表したものとされる。中心の大きな珠文とそれを囲む 8 つの珠文で構成される文様区と、周縁で瓦当を形成する。笵の差を見出しにくい文様であり、飯田丸では瓦当内区径－中心曜径－周曜径の差で 26 群に分けた。本丸御殿のⅢ層からも九曜紋軒丸瓦は大量に出土している。焼失時の本丸御殿の大半は九曜紋軒丸瓦であったと言える。しかし、焼損しているものが多く計測値が不安定である。製作技法の中で、瓦当側縁・瓦当裏面のナデ調整仕上げ、丸瓦接合面のカキヤブリはほとんどの九曜紋軒丸瓦に共通する。
②軒平瓦(4-3-1-48 図・4-3-1-49 図)
本丸御殿では、宝珠文、桐紋、三葉文、立木文、蓮華文、鳥文、笹紋、半菊文、三巴文、釘抜紋、卍文、桔梗紋、九曜紋などの軒平瓦が出土した。瓦当文様に分けて記述する。瓦当の形成については、平瓦凸面に粘土を足し、平瓦端部と足した粘土が瓦当面になるものを顎貼り付け技法と呼ぶ。今回報告する資料は全て顎貼り付け技法であった。
○宝珠文軒平瓦(53)
中心飾に宝珠文を用い、左右に唐草文を配する。宝珠の中心のやや下から 3 回反転する唐草が伸びる。瓦当は顎貼り付け技法で、接合面にカキヤブリがみられる。瓦当面はほぼ未調整で瓦当上端に面取りを施す。
○桐紋軒平瓦(54)
中心飾に桐紋を用い、左右に唐草を配する。飯田丸出土瓦では文様の違いから 3 種類に分かれたが、本丸御殿からは 1 点のみが出土した。飯田丸の分類で桐紋軒平瓦Aとしたものである。平瓦凹面には凸型台の痕跡の可能性がある模骨状の凹凸と、横方向のナデ調整がみられる。
○下三葉文軒平瓦(55 ～ 57)
中心飾に下方に向いた三葉文を用い、左右に唐草を配する。三葉文に分類しているが、桐文の葉の意匠と近似することから、桐紋に近いものと想定している。本丸御殿では、2 種類が出土した。
○上三葉文軒平瓦(58 ～ 68)
中心飾に上を向いた三葉文を用い、左右に唐草を配する。バリエーションは多く、飯田丸では 5 種類に大別し、さらに 9 種類に分けた。本丸御殿でも飯田丸の分類を用いた。
○立木文軒平瓦(69)
中心飾に枝分かれする植物のような文様を用い、左右に唐草を配する。瓦当面が完形の資料は無く、全体の文様構成は不明。破片から復元すると、唐草は中心飾の下から蔓が波打ちながら伸び、先端で下向きに小さく巻き、子葉は上下に一つずつ直線的に出ているようである。飯田丸では唐草の太さから 2 分できたが、69 は太い唐草である。瓦当は顎貼り付け技法で、顎部のナデは強い。瓦当上端の面取りは大きく斜めに切られている。
○蓮華文軒平瓦(70 ～ 72)
中心飾にハスの花のような文様を用い、左右に唐草を配する。唐草の違いで 2 種類に分けた。

○鳥文軒平瓦(74 ～ 76)

中心飾に鳥を抽象化したような文様を用い、さらに左右に唐草を配する。中心飾の違いで 2 種類に分けたが、飯田丸と異なる 76 を鳥紋軒平瓦Cとする。

○笹紋軒平瓦(77)

中心飾に笹紋を用い、左右に唐草を配する。飯田丸では文様の違いで 3 種類に分けた。

○半菊文軒平瓦(78)

中心飾に菊の花を半裁したような文様を用い、左右に唐草を配する。

○桔梗紋軒平瓦(83 ～ 93)

加藤家の家紋である桔梗紋を中心飾に用い、左右に唐草を配する。

○九曜紋軒平瓦(97 ～ 144)

細川家の家紋である九曜紋を中心飾に用い、左右に唐草を配する。飯田丸では、唐草の違いで、A～Oの 15 種類に大別した。本丸御殿ではNを確認していないが、新たな文様構成のPを加えている。これらの大別は系統を示すものもある。大別はさらに細かく分かれる。

○その他(79 ～ 82)

梅鉢紋軒平瓦・三巴文を中心飾りとする軒平瓦・釘抜紋を中心飾とする軒平瓦・卍文を中心飾とする軒平瓦が出土した。

③滴水瓦(4-3-1-49 図 145 ～ 167)

Ⅱ層や露地の土坑群からの出土が多く、Ⅲ層からの出土例は無い。よって本丸御殿には使用されていなかったと判断した。

④鬼瓦・隅木鬼瓦など(4-3-1-50 図・4-3-1-51 図)

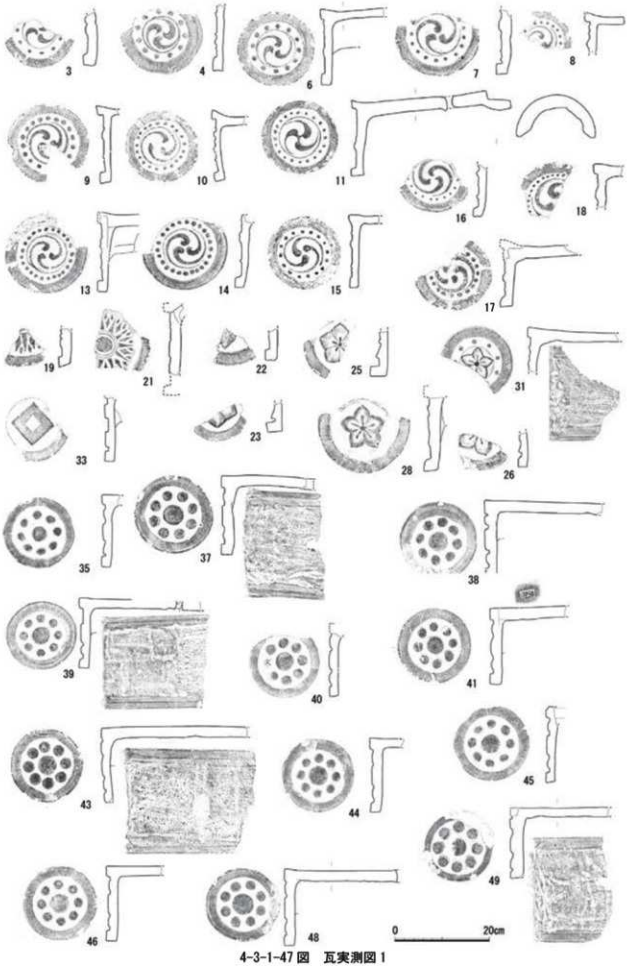
171・172・173 は九曜文の大型鬼瓦である。171・172 は接合する部分があり、同一個体である。文様構成からは 173 も同一個体もしくはセットで作られた可能性が高い。173 は大御台所の鬼瓦復元の祖形となっている。174 は長局櫓出土の九曜紋鬼瓦である。Ⅱ層出土で元位置ではないが被熱している。表面右下に「少」の刻印がある。175 は桔梗紋鬼瓦である。被熱している。177 は鬼瓦の向かって左足である。小倉城で出土した九曜紋鬼瓦に似た意匠である。187 ～ 190 は裏面にヘラ描き文字のある瓦である。187 は九曜紋鬼瓦裏面に引き手を挟んで「天明八□」「申三月北村」と書かれている。189 は文様不明の鬼瓦である。「文政」の文字が読める。190 は焼成後にヘラ描きしたものである。「三月吉日」と読める。194 は九曜紋の隅木蓋瓦である。釘穴はない。裏面に「元文四年戊未五月上旬土山瓦師四郎兵衛」のヘラ描きがある。195 は桔梗文の隅木蓋瓦である。被熱している。197 は亀を模した留蓋。表面をナデ調整した後でヘラ描きにより施文している。

⑤鯱(4-3-1-51 図 198 ～ 200)

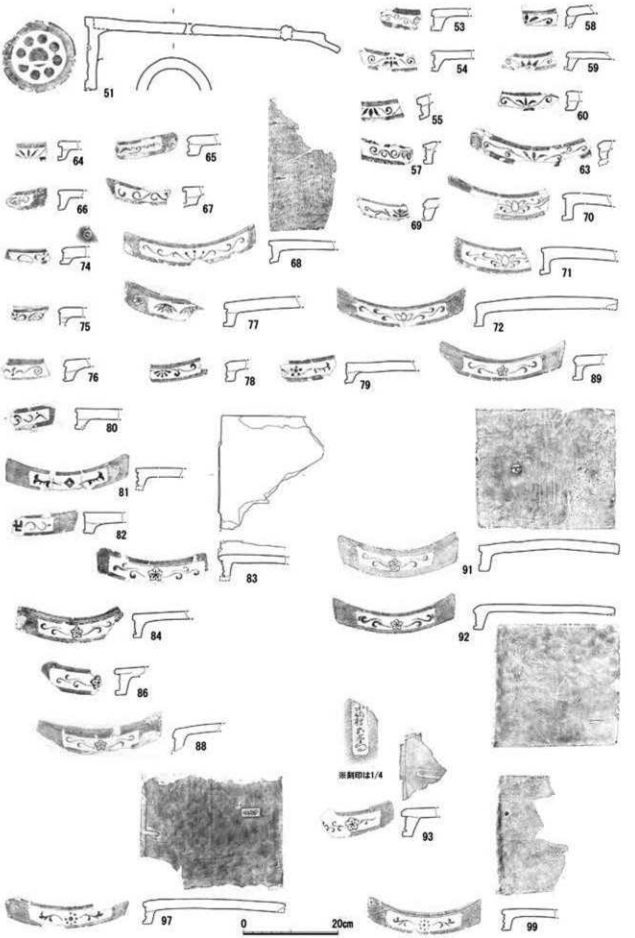
耳の部分・尾鰭・鰭が出土した。闇り通路のⅢ層から出土したが、被熱はしていない。

⑥その他の瓦(4-3-1-51 図・4-3-1-52 図・4-3-1-53 図 202 ～ 230)

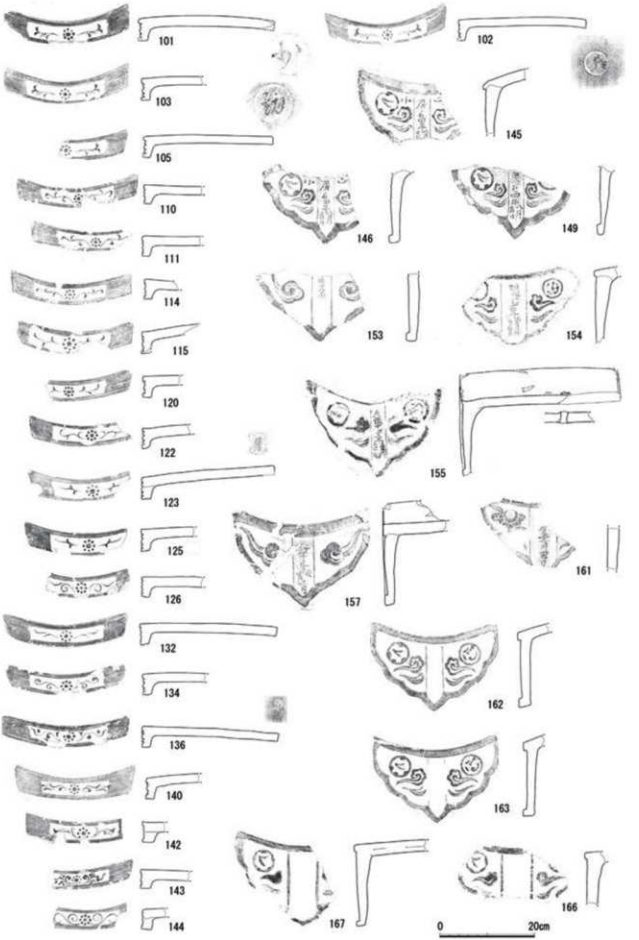
九曜紋鳥衾・雁振瓦・掛平瓦・掛丸瓦・九曜紋水板瓦・谷軒平瓦・板塀瓦・桔梗紋の飾瓦などが出土した。特殊なものとして棟に使用された瓦と思われる平面箱形の瓦が出土した。「小山村五右衛門」の刻印がみられる。



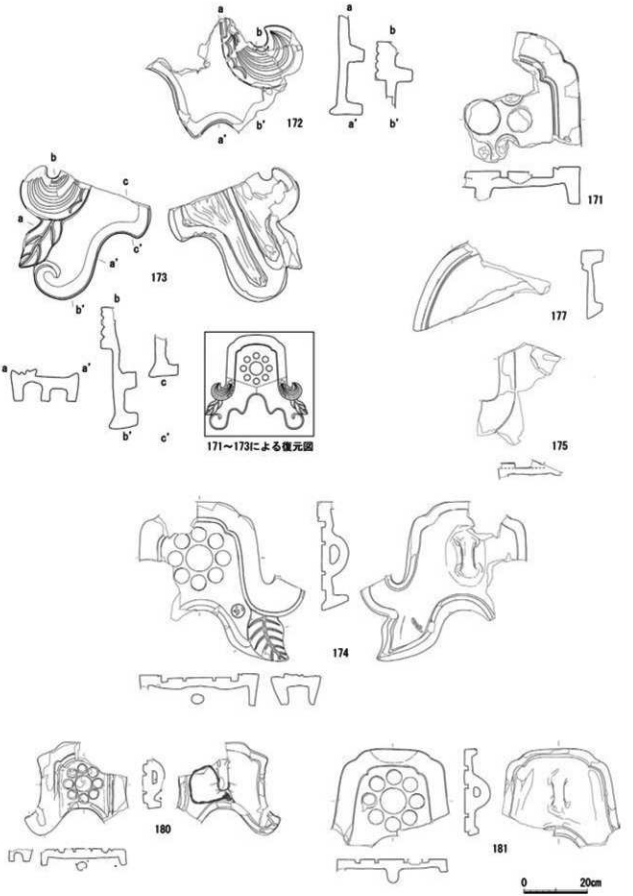
4-3-1-47図　瓦実測図Ⅰ



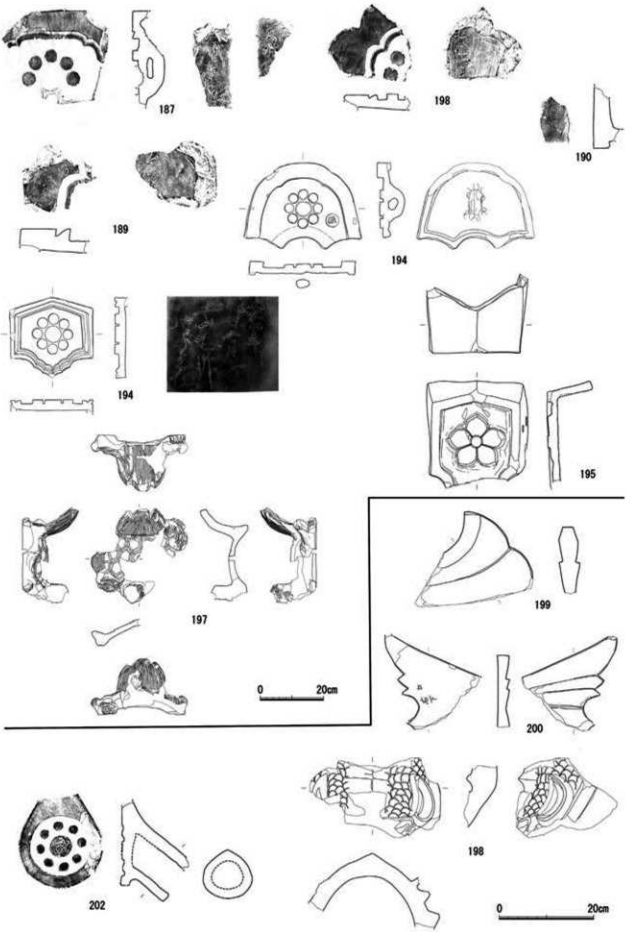
4-3-1-48 図　瓦実測図 2



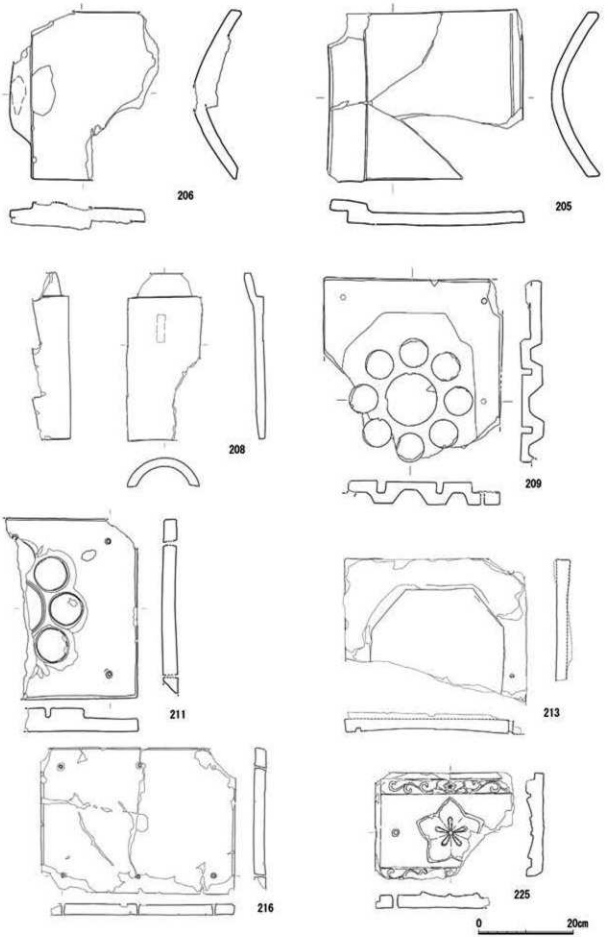
4-3-1-49図　瓦実測図3



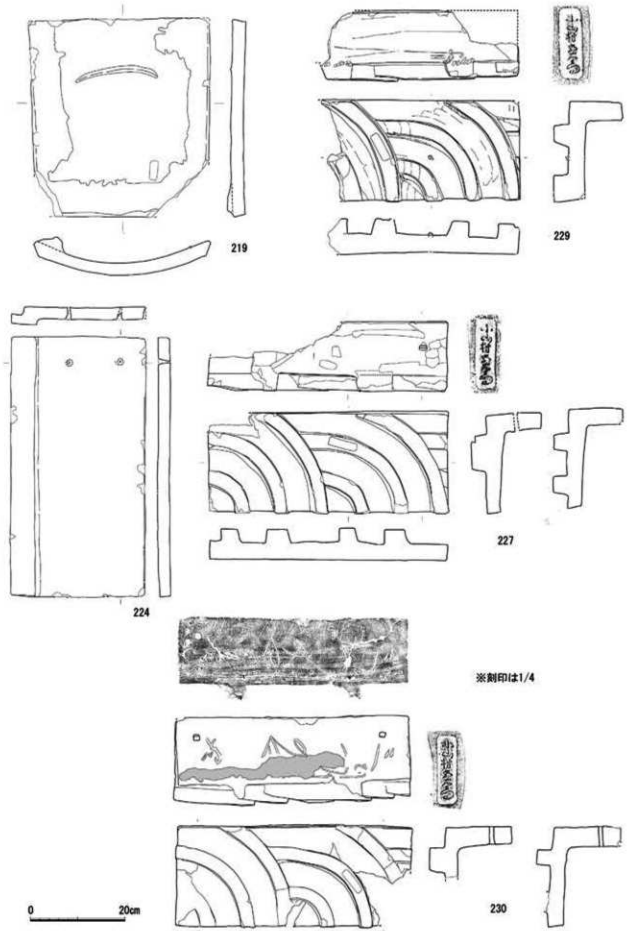
4-3-1-50 図　瓦実測図 4



4-3-1-51図　瓦実測図5



4-3-1-52 図　瓦実測図 6



4-3-1-53 図　瓦実測図 7

刻印(4-3-1-55 図～ 4-3-1-57 図)

主にⅢ層出土の瓦の刻印を集成した。出土した位置から、葺かれていたと考えられる建物に分類した。同じ名前の刻印であっても、多数の笵が存在するため、同一の名前のすべての笵の刻印を掲載することはせず、代表的なものを掲載した。また、判読できなかった文字を□・[ ]で示した。また、判読できなかったものについても、同文と思われる刻印から文字が比定できるものについては( )で示した。

①本丸御殿の刻印瓦の構成

刻印の種類

本丸御殿跡から出土した瓦の刻印は種類が多岐にわたっており、主に製作者・製作地・年号を示している。以下に、瓦が葺かれていた建物別の刻印の特徴について述べる。

○大広間

Ⅲ層から出土した瓦のうち、刻印のあるものは 1051 点である。このうち、「源」の刻印を持つ瓦が最も多い 127 点で、続いて「五」が 75 点、「二郎太」が 62 点であった。

○九曜之間・吉野之間

刻印のあるものは 334 点である。他所より目板瓦が多く出土した。目板瓦には正徳年間の年号のある刻印もあり、この頃何らかの作事が行なわれたと考えられる。本丸御殿の建物の立面を描いた「御城図」によれば、九曜之間・吉野之間といった中奥の建物は桧皮葺で描かれるが、その後瓦葺となった可能性もある。大広間同様、最も多いのは「源」の 22 点であるが、続いて「四郎」17 点、「五右衛門」15 点が続く。また、他所に比べ「御用」と「平」、「土山清四郎」の刻印のある瓦が多く出土している。

○猿牽之間・御数寄屋

刻印のあるものは 130 点である。最も多いのは「二郎太」の 14 点で、次に「源」13 点が続く。

④大御台所

刻印のあるものは 409 点である。「源」が最も多い 57 点、続いて「五」47 点、「二郎太」27 点、「五郎」23 点が続く。

⑤御小姓部屋

刻印のあるものは 396 点である。九曜之間・吉野之間と同じく、目板瓦が多く出土した。最も多いのは「源」の 55 点で、続いて「五」の 34 点が続く。また、他所と比較して「土山三介」、「源左衛門」、「仁右衛門」の刻印のある瓦が多い。

⑥長之間

刻印のあるものは 283 点である。最も多いのは「源」の 29 点で、続いて「五」26 点、「少」23 点、「二郎」20 点が続く。

⑦西廊下

刻印のあるものは 58 点である。瓦の総数は少ないが、他所と同様に「源」が多いようである。また、「大坂大塚七兵衛」の刻印が 1 点出土した。

⑧小広間

刻印のあるものは 210 点である。最も多いのは「五右衛門」の 24 点、次いで「二郎太」・「少」が 12 点ずつ出土した。

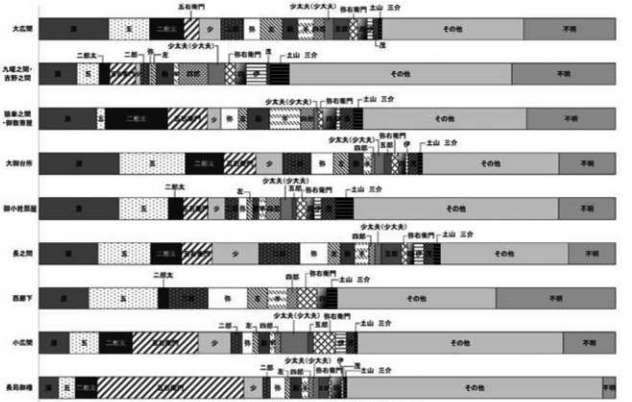
⑨長局櫓

刻印のあるものは 1737 点である。長局櫓の場合、瓦の総数が多いことも関係するだろうが、他所と刻印の種類の構成が異なっている。最も多い「五右衛門」は 442 点と突出しており、続いて「左 [ ]」237 点、「四郎兵衛」120 点となる。「五右衛門」の刻印の笵は同一のものが使用されている。また、「左 [ ]」や「一

右衛門」は他所でほぼ見られず、長局櫓の葺き替えの際、特定の工人に短期間に発注された可能性が考えられる。

⑩御天守廊下

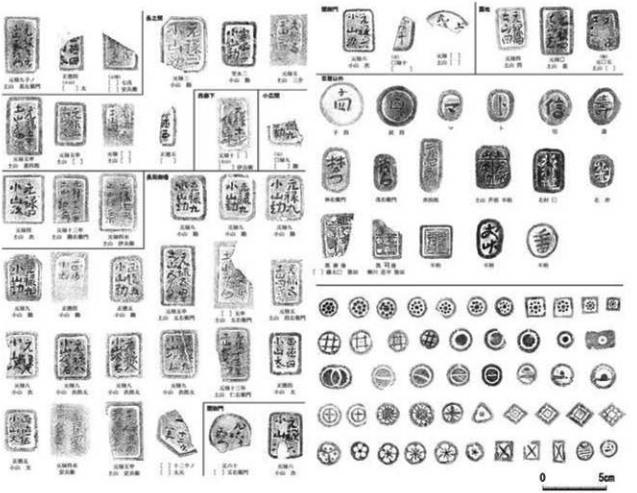
今回の調査で確認された瓦のうち、刻印のあったものは4点のみである。刻印の種類としては「五郎」2点、「二郎」1点、「土山三介」1点であった。



4-3-1-54 図　建物別出土瓦刻印(第 250 図)

4-3-1-55 図　出土瓦刻印拓本 1(第 239 ～ 242 図)

4-3-1-56 図　出土瓦刻印拓本 2(第 243 ～ 246 図)



4-3-1-57 図　出土瓦刻印拓本 3(第 247･248 図)

陶磁器類

報告は出土区画ごとに、以下①～⑥の順序で行なう。

①18 世紀中葉以前の資料(出土量が少ないこと、土層･遺構の埋没時期を示すものではないことから、これらをまとめている)。

②遺構出土資料。

③Ⅰ･Ⅱ層出土の資料で 18 世紀末～ 19 世紀後葉の型式。

④Ⅲ層出土資料、明らかに被熱した資料(①で扱った 18 世紀中葉以前の資料を除く)。

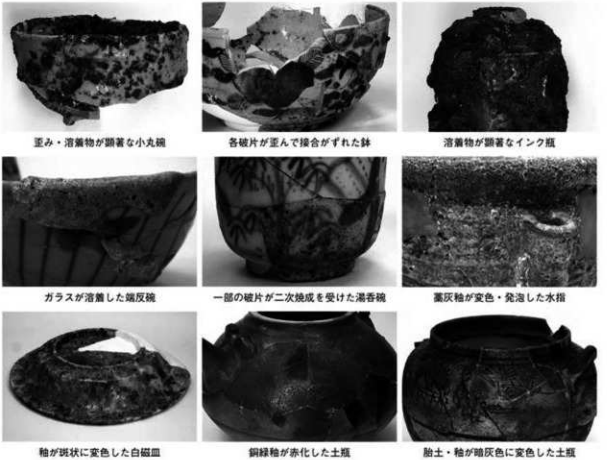
⑤Ⅳ層出土資料。

⑥明らかに 19 世紀末以降に埋没した遺構の出土資料、Ⅰ･Ⅱ層出土資料で 19 世紀末以降の型式。

上記のうち、報告の主体は②～④である。18 世紀末～ 19 世紀後葉の型式であるが、その殆どは 19 世紀第 2･第 3 四半に位置付けられる。④で扱うⅢ層は、明治 10 年(1877) 2 月 19 日の本丸御殿(鎮台本営)焼失に伴う焼土などを多量に含んでおり、焼失時の埋没土、あるいは焼失から間も無い時期の整地土と判断され、絶対年代を判断するうえでの鍵層と捉えられる。加えて、Ⅰ･Ⅱ層出土資料のうち、明らかに被熱したものについても④で扱う。それは、被熱の原因が本丸御殿焼失によるものである可能性が極めて高いため、後の土地利用の過程により原位置を保ってはいないものの、本来はⅢ層に帰属すべき、すなわち、時間属性においてⅢ層出土資料と同等に扱うべき資料と判断したためである。②の遺構出土のうち、明らかに焼失時の埋没と判断される一括資料は、御小姓部屋 SK Ⅲ 104･西廊下 SD Ⅲ 027 である。

被熱の有無は、以下の条件により認定した。

①明らかに変形する。②釉が発泡する。③釉の変色が認められる(銅緑釉を施す資料において顕著であり釉色が赤化する)。④溶着物が認められる。④表面の剥落が著しい。これら要素の確認により、土中に埋没していたための汚れ・劣化などと弁別ができるものと考える。



4-3-1-58 図　被熱陶磁器写真(第 307 図)

各区画の陶磁器類(特色ある遺物について抜粋した。)

大広間出土資料(4-3-1-59 図・4-3-1-60 図)

a 硬質陶器ローゼット：イギリス産。型成形、胎土は浅黄色。透明度の高い灰釉を施し(貫通孔内も施釉)底部は釉を拭き取る。本遺跡出土の他のローゼットに共通する。本資料は底部に 2 ヵ所の刻印(陰刻)が認められ、円形と菱形を組み合わせた刻印は登録商標(REGISTRATION MARK)で、この形状のものは 1842 ～ 83 年のイギリス製品において、特許登録済みを示し、3 年間の特許権侵害を防ぐために付されたものという。登録商標内の文字と配列は生産年月日などを表し、1869 年 10 月 27 日に製造されたことがわかる。もう 1 つの刻印は、小さい十字形を呈するものであるが、何を示すものか不明である。

b 磁器染付鉢：肥前系。焼継が認められる。焼継印は淡い発色のガラス質剤で、「白川町ロヵ」改行「とうふや□」(□は「一」ヵ)と記している。白川町は、現在は使用されていない町名で、明治 13 年(1880)の「熊本全圖」などによれば、現在の新屋敷 1 丁目、明午橋付近にあたる。

c 陶製ドアノブ：イギリス産の可能性が高い。複数の発色がマーブル模様に見える胎土で、異なる発色の土を揉み込んだ練り上げ手、絞胎様の製品である。本資料は金属性の軸が無く、これを装着した痕跡も認められない。未使用品と考えられる。

d 土師質輪羽口：熊本市二本木遺跡群の調査事例において本資料と同様の下位が裾広がりの形態の輪羽口

は 18 世紀末以降と確認されている。「甚七」の刻印は 20 世紀以降に汎用される記銘ではないと思われる。

e 磁器色絵小坏：瀬戸美濃産。鮮やかな発色の呉須で上絵付けをしたもので、所謂江戸絵付。本丸御殿の調査では他に大御台所出土がある。主文は転写、字銘「盛川流不息」

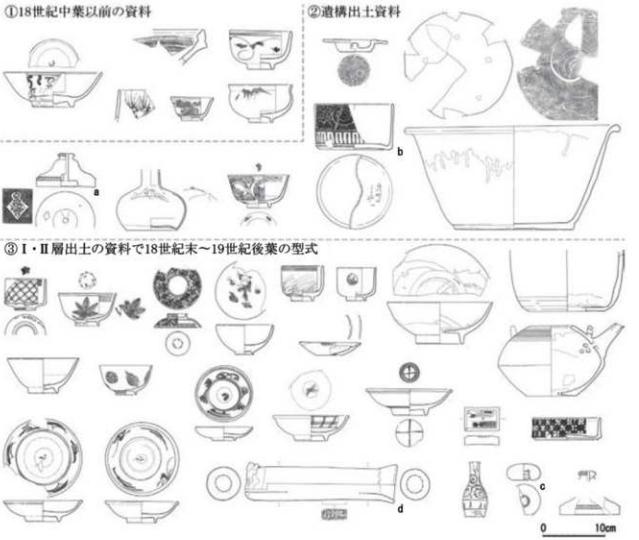
f 磁器釉下彩蓋付鉢：肥前。化学コバルトを主体とし、これに緑色(酸化クロム)・淡赤色(小円子)を加えて施文したものである。注目されるのはⅢ層出土という点で、同じく長之間の多彩磁器もⅢ層出土である。釉下彩磁器の生産初期における製品と評価される。

g 白磁合子：肥前系。出土した内、幾つかの身には小斑状の化学コバルト飛沫の付着を確認した。同じ工房において染付などの他形態の製作をしていた状況を反映するとともに、製作時期の上限(1870 年以降)を示すものといえる。他の大区画出土の白磁合子身についても同様の付着が認められるものがある。

h 陶器小水注：関西系。食卓調味料容器とみられるもので、本調査では他に小片数点が出土したが、図掲できたものは本資料のみである。

i 土師質角形火鉢：在地？。外側面のみに炭素の吸着が認められるが、吸着が部分的であること、胎土が通常の瓦質製品のように明灰色系の色調ではなく淡い橙色系の発色であることから、本報告では、焼成形態を土師質として扱った。同形態例は、熊本城下の古町遺跡 1 次調査 242 号遺構に認められる。

j 磁器色絵軍坏：ゴム版絵付で「…事変記念」銘が認められる。この「事変」について想定されるのは、満州事変昭和 6 年(1931)・第一次上海事変昭和 7 年(1932)・日華事変昭和 12 年(1937)などであり、概ね 1930 年代の産品と考えられる。



4-3-1-59 図　大広間出土陶磁器実測図 1

4-3-1-60 図　大広間出土陶磁器実測図 2

大御台所出土資料(4-3-1-61 図)

a 陶器窯道具？：平面C字形の陶器。用途不明、窯道具(テストピース？)の可能性。熊本城における陶磁器の購入形態を示唆する資料である。

b 白磁合子身：外底(露胎部)に墨書「幕僚」が認められ、本資料が近代以降の産品であることを示している。

c 磁器染付筒形碗：肥前系。線描・塗りともに丁寧な手描きの葵紋(約 120 度ごとに 3 単位、2 単位が残存)が認められ、器壁が薄い上手品。熊本藩 9 代藩主細川斉樹正室、一橋治済女の紀姫(享和 2 年(1802)婚姻)の婚礼調度品の可能性があり、その時期と本資料の型式とは合致。江戸住まいの正室の調度品がどのような経緯で国元の本丸御殿にもたらされたのかは不明だが、葵紋碗の存在理由として最も相応しいと考えたい。

d 青磁火入：肥前系。たがね書きで「惣」が刻まれている。器種や文字内容からみて、徳利などに施される通常の釘書き・たがね書きとは異なる意図で刻まれたものと考えられる。

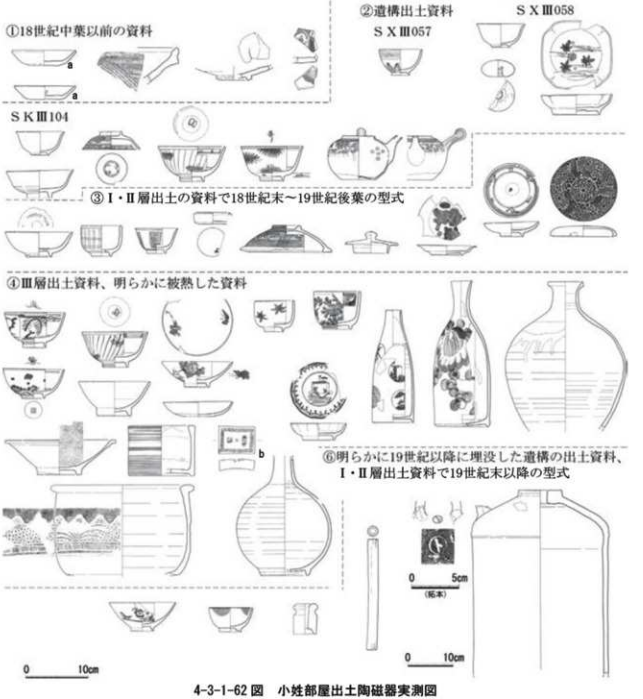
4-3-1-61 図　大御台所出土陶磁器実測図

小姓部屋出土資料(4-3-1-62 図)

a 土師器坏：18 世紀前半以前の土師器供膳具の編年は確立していないが、熊本城下の土師器坏出土事例から時期を想定した。肥前Ⅰ並行期には外底が糸切り離し後ヘラケズリ調整のものが出現し、肥前Ⅳ並行期前半には糸切り離し後未調整のものは認めらないようになり器壁が薄くなる。このことから 18 世紀代には降らない資料とした。

b 磁器染付水滴：内面の観察から製作工程が明らかである。①本体の型に粘土を詰め、内側から指で押しながら外形・器壁厚を整える。②整形過程で表裏両面に細かい布目が付いた粘土底板を嵌めて本体を塞ぐ。③外面から穿孔を施す。なお、出土した水滴の製作技法は一律ではなく、異なる技法もみられる。

c 陶器焼酎瓶：焼酎瓶には白化粧後透明釉を施すもの、鉄釉を施し肩部に重ね焼きの際の泥漿が塗布されるものの 2 種がみられ、概ね大正・昭和期の所産と考えている。産地は不明、刻印の○内「ト」は同様のものが大正 13 年(1924)頃の常滑焼の問屋「丸登合資会社」を示すという事例が認められる。



4-3-1-62 図　小姓部屋出土陶磁器実測図

長之間出土資料(4-3-1-63 図・4-3-1-64 図)

a 焼締陶器建水？：備前焼？。明赤褐色～褐灰色を呈し、黄白色粒を多く含む胎土の焼締陶器で、東南アジア製品に近似するが、胎土がパサつかない、鉄泥刷毛塗りするなどの点をから備前焼の可能性が高い。17 世紀前半。

b 土師器坏：詳細な時期不明。前述(御小姓部屋出土 a)の理由から 18 世紀以降の所産とみる。

c 硬質陶器縁皿：銅版転写によるプリントウェアである。本資料の同形態品はオランダのマーストリヒト陶器、ペトゥルス・レグゥー窯(1855 ～ 70 年製)である。文様パターンは Honc で楼閣を描いた東洋的な風景図である。

d 陶器茶入：八代焼？。象嵌。八代焼にしては象嵌文がやや粗く、彫り込んだ縁辺の線がギザギザした雑な施文は、熊本県内の小代焼の象嵌文品にも近いが、水簸した胎土を重視し八代焼の可能性が高いとみている。

e 陶器土瓶：肥前産。白土＋銅緑釉。同形態が同グリッドから出土した。いずれも未使用品で外面下位に煤などの付着は認められない。弦耳の孔が釉により塞がれた状態で、未だ弦を通していない資料もある。

4-3-1-63 図　長之間出土陶磁器実測図 1

4-3-1-64 図　長之間出土陶磁器実測図 2

露地出土資料(4-3-1-65 図～ 4-3-1-67 図)

遺構出土資料は、西南戦争後に構築された廃棄土坑・建物などの遺構が多く、重複して存在する。点数は多いが、主体の 19 世紀中頃～後葉の資料が遺構の埋没時期を反映するものか判断は難しい。出土点数が多いＳＫⅢ 098 資料は、19 世紀末以降の型式も僅かにみられ、遺構の埋没時期を示す可能性も高い。ＳＫⅢ 098 に近接する他の遺構出土の小片や周辺のグリッド(Ⅰ・Ⅱ層)出土の小片と接合したものが多く、これらを一括廃棄資料と捉えるには躊躇があることも付記しておく。

a 陶器鉢：中国南部産。胎土は赤褐色～灰色を呈し、黄白色粒を多く含む。明代か。

b 陶器不明壷：用途不明の壷である。管見の限りでは熊本城跡以外の事例は無く、限定された状況・時期において製作された可能性が高いとみられる資料。2 形態に大別される。

c 陶器火入：龍門司焼。本遺跡での龍門司焼出土例は極少なく、器種は火入に限定される。龍門司焼製品は将来品の可能性も考えられる。

d 磁器染付碗：肥前系。体部に化学コバルトで「ハマヒロヤキ」銘。この名称の意味は不明である。天草に浜平焼があるが、近年創業の陶器窯で該当しない。寛政年間以降、肥前系磁器の主原料となった天草陶石の産出地に浜平があることから、浜平の陶石で焼いた「ハマヒロヤキ」という意味と考えられる。

e 白磁合子身：肥前系。外底に墨書が認められる。「熊本鎮台」(e-1)は本資料が鎮台設置時期(明治 5～22 年(1872～88))に使用されたことを、「賣芩」(e-2)は本資料が薬盒として使用された可能性を示すものである。

f 陶器飴壷？：上野焼？。明灰色のやや粗い胎土で鉄釉を施し、底部は糸切り離し。本資料は県内における初報告例だが、未報告資料に熊本市二本木遺跡群 15 次調査区の出土例がある。小倉城下で購入した土産品の容器が持ち込まれたと考えられる。

g 白磁戸車：肥前系。使用箇所は不明だが、本丸御殿の建材として相応しい大形品といえる。

4-3-1-65 図　露地出土陶磁器実測図 1

4-3-1-66 図　露地出土陶磁器実測図 2

4-3-1-67 図　露地出土陶磁器実測図 3

西廊下出土資料(4-3-1-68 図･4-3-1-69 図)

ＳＤⅢ 027 出土資料は、埋没状況から明治 10 年(1877)の本丸御殿(鎮台本営)焼失時における一括廃絶資料と判断される。

a 陶器小坏･急須蓋･身：八代焼。象嵌。小坏と急須身の象嵌文様は違うがセットの可能性を評価できる。

b 紫泥陶器急須蓋：関西産。摘みが本体とは別づくりで可動(回転)する。ただし、焼成後に嵌め込んだものではなく、取り外すことはできない。製作技法は不明である。

c 白磁水滴：肥前系。内面の観察から①～④の製作工程が想定される。①本体の型に粘土を詰め、内側から指で押しながら形･器厚を整えた後、粗いナデ調整を施す。②型から外し、外面から穿孔する。③穿孔により内面側に突き出た粘土のはみ出しを粗く除去する。④外面細かい布目･内面ナデ調整の粘土底板を嵌めて本体を塞ぐ。前述した水滴(小姓部屋出土 b)とは異なる技法である。

4-3-1-68 図　西廊下出土陶磁器実測図 1

4-3-1-69 図　西廊下出土陶磁器実測図 2

小広間出土資料(4-3-1-70 図)

a 磁器染付碗：肥前系。湯呑碗とみられ、線描･塗りとも丁寧な手描きによる杏葉紋である。杏葉紋の製品が存在する理由としては、熊本藩 12 代藩主細川斉久正室、鍋島直正女の宏子姫(慶応 2 年(1866)婚姻)の婚礼調度品であったとみた場合、その時期と本資料の年代観とは合致する。

b 陶器水指：小代焼。白土掛け流し(白流れ釉)と灰釉とを施しており、当該期小代焼の特徴を良く示す。

c 陶器小坏：萩焼。本報告における萩焼の唯一例である。

d 炻器瓶：ヨーロッパ製。塩釉。ライン炻器の報告事例に近似する器形。挽き上げ痕が明瞭である。

e 紫泥陶器小壷：関西産。茶入か。外底中央に「孟」の陰印刻が認められ、「臣」が続く可能性もある。

f 炻器インク瓶：イギリス産。汐留遺跡に類例が認められる。15 点は F90-59 グリッドからの出土であり、偏在性が認められる。また、全て被熱しており、溶融物の付着が顕著なものが多い。

g 陶器ドアノブ：イギリス産？。被熱の痕跡が著しく、凹部には金属軸が溶けたものとみられる溶融塊が詰まっており使用品であった。すなわち、焼失直前時の本丸御殿(鎮台本営)の内装が洋式化されていた可能性を示している。

4-3-1-70 図　小広間出土陶磁器実測図 1

4-3-1-71 図　小広間出土陶磁器実測図 2

長局櫓出土資料(4-3-1-72 図)

a 陶器壷：タイ産(メナム・ノイ窯)。接合はしなかったものの、同一個体とみられる破片多数が同一グリッドから出土した。

b 瓦質壷：精緻なつくりで、外面の炭素吸着は斑がなく、内面には黒漆を刷毛塗りしている。桐の貼付文は、細川家家紋の五七桐(足利将軍家からの拝領紋)とみられる。この桐紋は、妙解寺跡細川家墓所の入口門の装飾や初代藩主忠利墓霊屋の屋根の露盤の装飾など、格式を強調すべき場所において限定的に使用されるものと捉えられる。本資料の用途は不明だが、本丸御殿における藩主家用の調度品であった可能性を指摘できる。

c 磁器染付端反碗：肥前系。同器形・同文様の碗が F68-45 グリッドから多数出土した。34 点中 27 点は一括性が評価される資料である。恐らくはセットで一括購入・保管されていた一群であり、製作時の同時性も考慮される。ただし、絵付け顔料は、呉須のみで描かれているもの・線描きは呉須で塗りは化学コバルトが用いているものがある。このことは、近代初期の化学コバルト普及期における過渡的な様相を示すとともに、絵付け工程において、線描きと塗りが分化していたことを示すと考えられる。

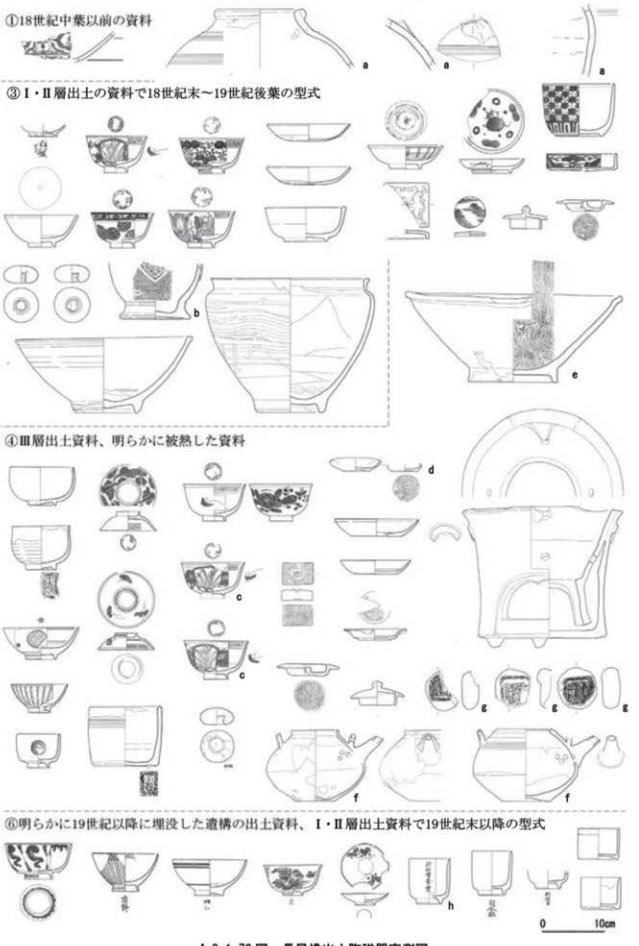
d 土師質耳皿：在地？。本丸御殿の調査における唯一の事例。時期認定が不安定だが、器壁が薄い。箸置きとして使用か。

e 陶器擂鉢：肥前。鉄釉。肥前Ⅴ期に後出する型式とみられる。

f 陶器土瓶：肥前産。いずれも外面下位に煤付着などが認められず、未使用品の可能性が高い。

g 土師質不明土製品：大坂産？。焼成は悪く軟質で、円板形の正面に陰刻印が認められる。刻印は、全て原体が異なるものの、角枠内に屋号・名前が記されている点は共通しており、「大坂」・「高田屋」の恐らくは商標が認められる。平面形状と刻印の位置・形状は焼塩壷蓋に共通するが、断面形状からその可能性を強調することは難しい。

h 磁器色絵湯呑碗：軍用食器。上絵付けにて旧陸軍の階級が手描きされている。「判任官食堂」銘によって、下級官吏の食堂があったことが明らかであるように、階級によって使用・保管場所が分けられていたと考えられる。



4-3-1-72 図　長局櫓出土陶磁器実測図

その他のトレンチ出土資料(4-3-1-73 図)

御天守廊下トレンチ出土資料

磁器色絵湯呑碗と白磁鉢(軍用食器)が出土した。ともに 20 世紀代の所産である。

二様の石垣下トレンチ出土資料

a 縄文土器深鉢：縄文時代後期後葉～晩期前半の深鉢である。

b 青白磁合子身：胎土・釉色ともが灰色味を帯び、やや粗質であることから福建省産の可能性が高い。

二階櫓トレンチ出土資料

c 磁器染付手焙り：本丸御殿の調査における唯一の事例である。

御天守片口之間トレンチ出土資料

d 陶器着彩人形：関西系。布袋。眉のみを鉄釉で描いている。

天守前北築山トレンチ出土資料

白磁薬瓶：産地不明

4-3-1-73 図　その他のトレンチ出土陶磁器実測図

建築金物・調度金物・その他(4-3-1-74 図～4-3-1-80 図)

大広間棟周辺(9～118)

9～19 は目鎹・違い鎹である。大広間周縁部に比較的多く、九曜之間東側からも多く出土した。37～40 は肘壷金物である。37 は四ツ辻一之開御門、38・39 は九曜之間下、40 が若松之間付近で出土した。いずれも大門の金物には小さい。41～48 は門周りに使われる金物で、44 以外は四ツ辻周辺で出土した。44 は、九曜之間下の門跡で、八双金物が装着した状態の桟と共に出土した。50・51 は扉の金物である。家老之間下の通路で出土した。六葉の釘隠しは大広間で最も多く出土した。66・70 は襖の、67・69 は小襖の引手。66・67・69 は昭君之間・若松之間付近、70 は麒麟之間出土した。71・73～76 は文様入りの板金物。81・82・84・86 は折釘である。掛金の折れが逆向きのものもあり、組み合わせて使うものであろう。九曜之間下でまとまって出土している。83・85 も掛金である。88 は銅製で、細かな鏈目が認められる。調度品に使われたものか。90・91・93・94 は掛金である。92 は軸吊り金物である。寸法から、比較的小さな扉等に使用されたものと思われる。95・97 は八双金物で、文様・寸法からみて一組の金物と考えている。101～118 は、調度類に使用された金物。明治 10 年の火災時には鎮台の本営として使用されていたため、これらの遺物には調度類や生活用品などには軍が使用していた製品も含まれる。

大御台所(139～151)。

143 は銅製の掛金で、座金に細工が入る。144～146・149 も含め、調度類に使用されたものか。147 は六葉の座金である。大広間の六葉金物よりも径が小さく、猪の目も穿たれていない。

御小姓部屋(152～187)

152～182 は建築金物が主体。152 は六葉座金で、寸法は大広間の六葉金物に近い。牡丹様の花紋をあしらっている。153・154 は襖引手である。163～170 は閂巻金物である。一番近い四ツ辻脇北開御門のものか。171 は閂受金物で、ガイドの金物が抜けている。181 は輪掛金で、扉の引手と思われる。186・187 は金てこである。四ツ辻北東隅の石垣際で大量の石炭バケツと共に出土したもので鎮台が城内での作業に使用した道具類を保管していたものと思われる。

長之間(188～216)

188～208 は建築と調度類に使用された金物が主体である。198 は釘隠しの菊座であり、鍍金の痕跡がある。200 は襖、201 は小襖の引手と考えている。208 は鐶付きの座金である。209～214 は生活用品。215 は樋受け、216 は樋である。塀重門東側の露地で出土した。

露地(226～240)

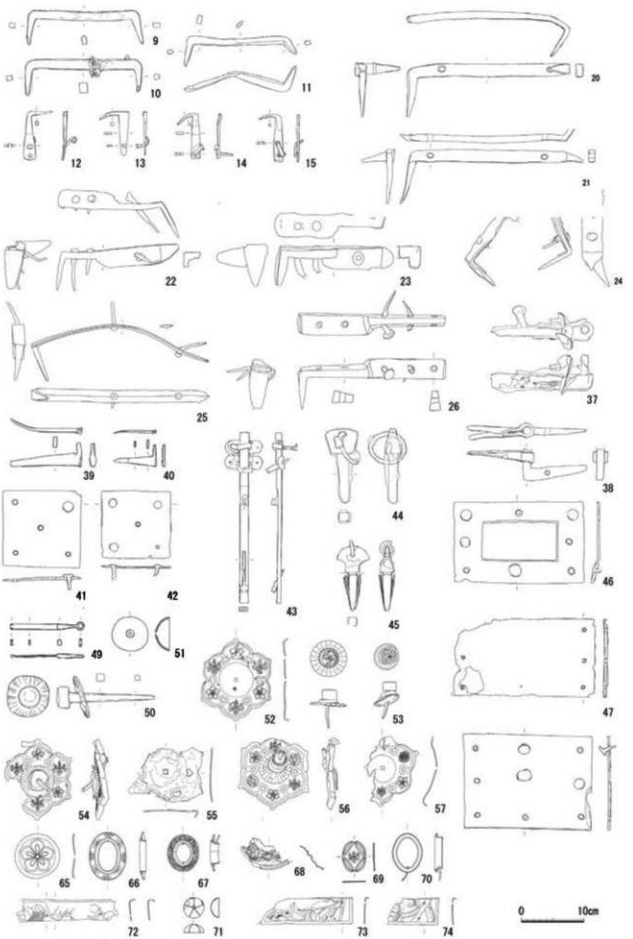
露地には明瞭なⅢ層が存在せず、焼失時の原位置を保つ遺物は確認できていない。230～233 は、錠と鍵がまとまって出土した。238 はろうそくを立てる灯火具である。239 は矢である。幅が 5 ㎝で、近世の石垣の矢痕より小さい。

三階櫓を含む小広間(247～317)

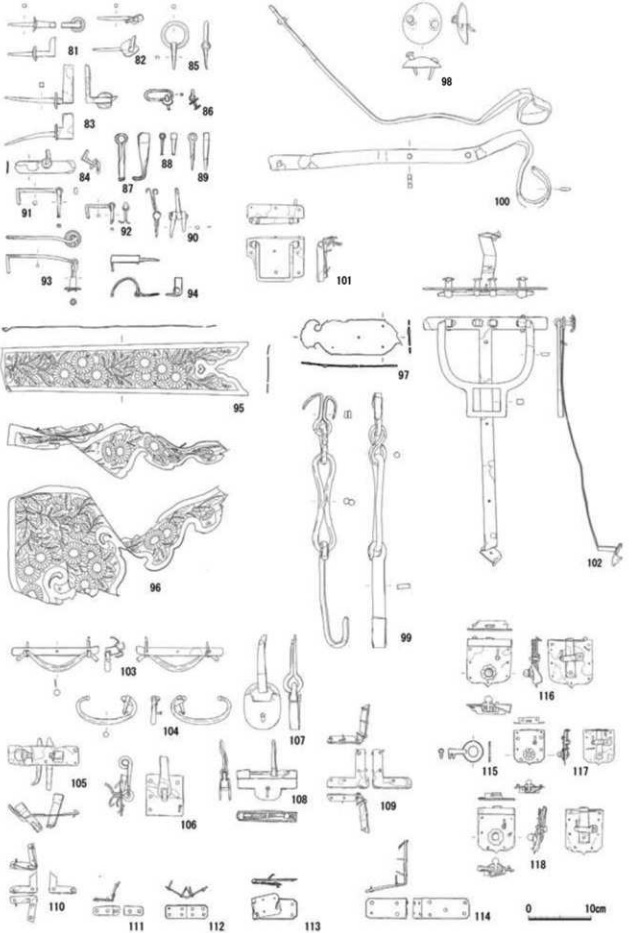
小広間では、特に調度類の金物が大量に出土した。247・248 は長持の持手、249～254 は箪笥など調度類の引手である。265 は縦框に鋲で固定する蝶番で、建具などに使用されたものと推測している。268～282・285～289 も調度類の金物である。283 は、出土した突出した錠の鍵の中では最大である。284 は栓錠とされるものか。304～317 は生活用品である。313 は布を裁断する裁ち包丁と考えている。

長局櫓(327～359)

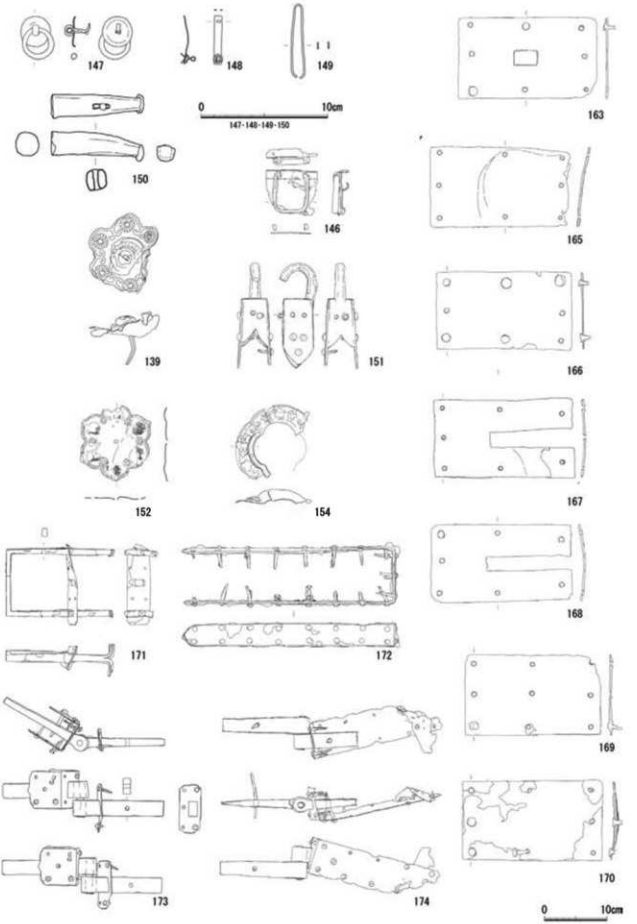
長局櫓の出土遺物では、武器類が特徴的である。328～335・338～344 は建築金物、327・337・345～350 は調度類の金物である。351～357 は生活用品・工具の類。358 は先端が潰れているが、釘の一種か。359 は持手のようだが、用途は不明である。



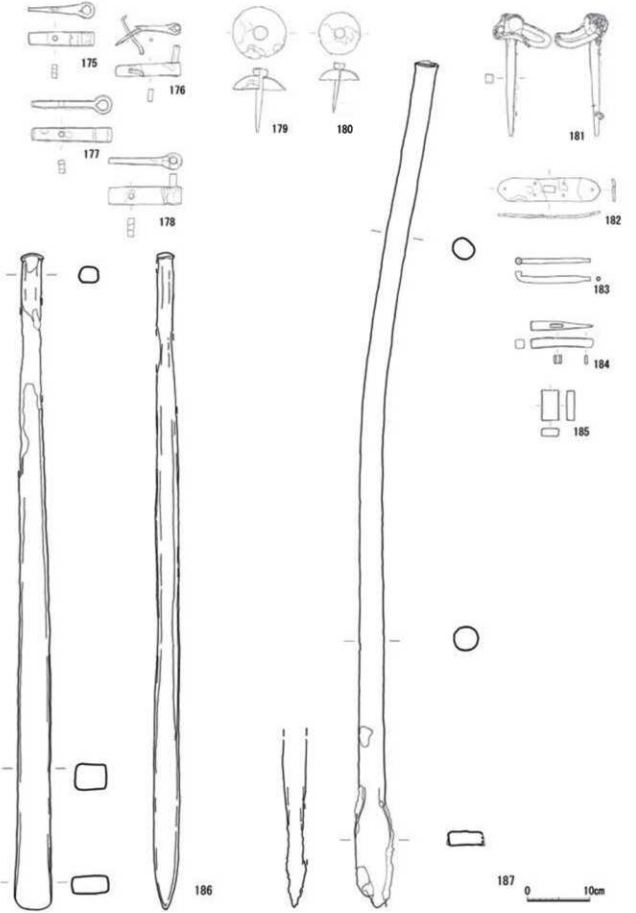
4-3-1-74 図　建築金物・調度金物・その他実測図 1



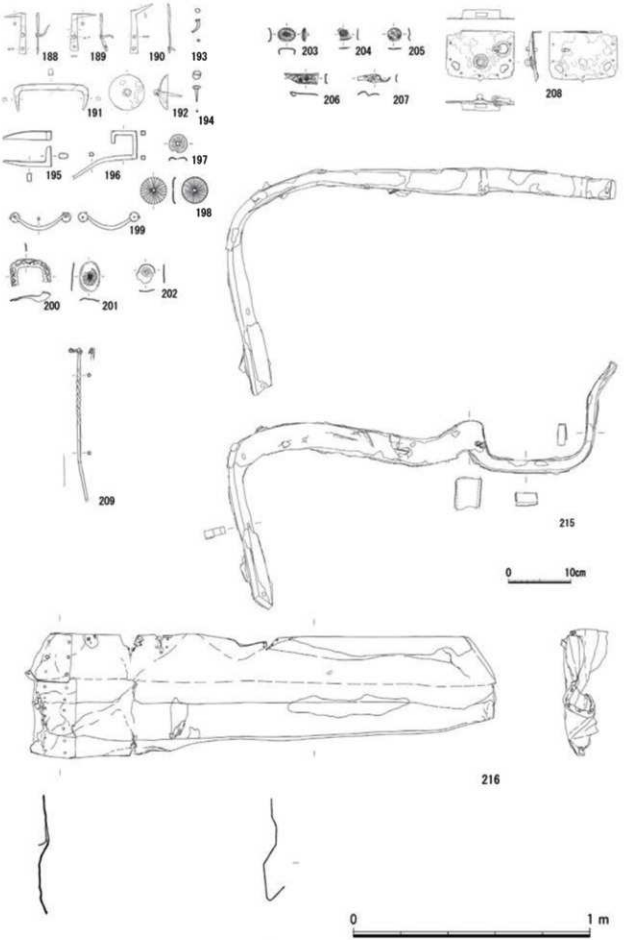
4-3-1-75 図　建築金物・調度金物・その他実測図 2



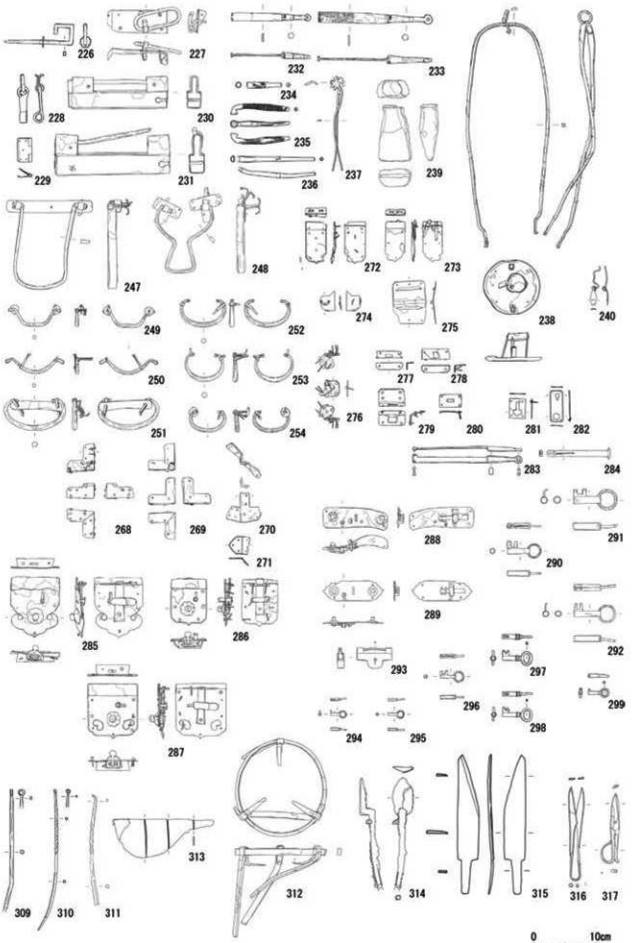
4-3-1-76 図　建築金物・調度金物・その他実測図 3



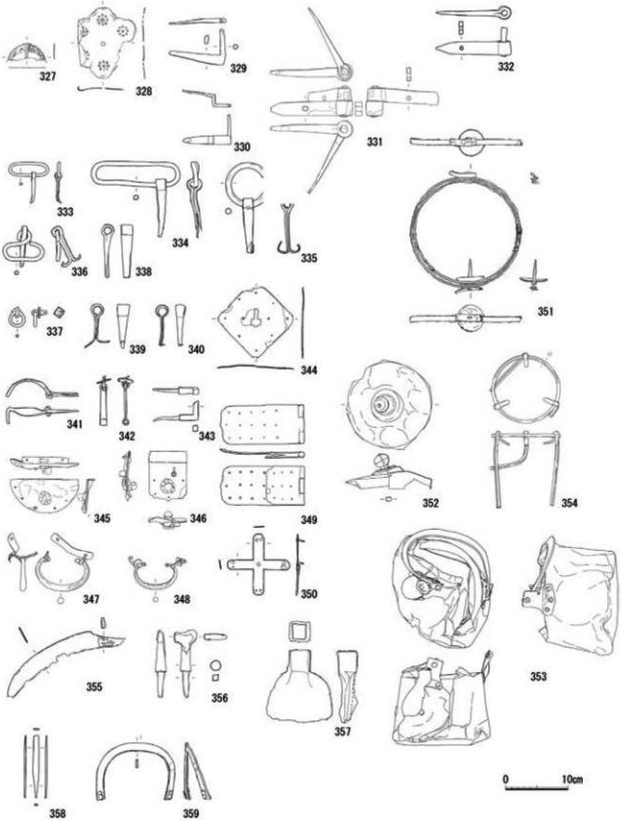
4-3-1-77 図　建築金物・調度金物・その他実測図 4



4-3-1-78 図　建築金物・調度金物・その他実測図 5



4-3-1-79 図　建築金物・調度金物・その他実測図 6

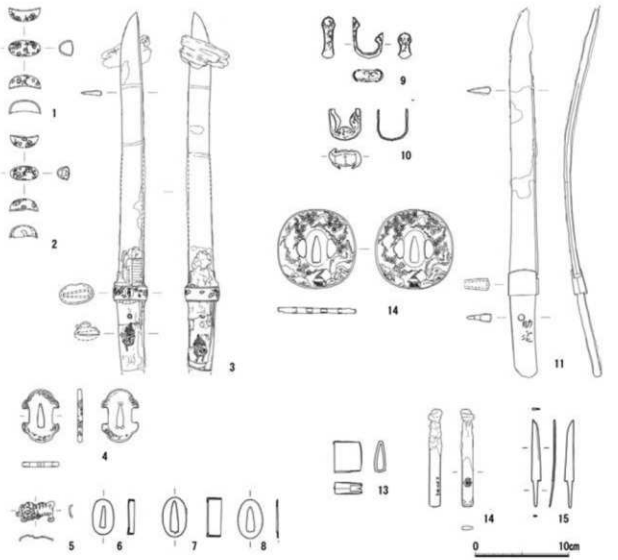


4-3-1-80 図　建築金物・調度金物・その他実測図 7

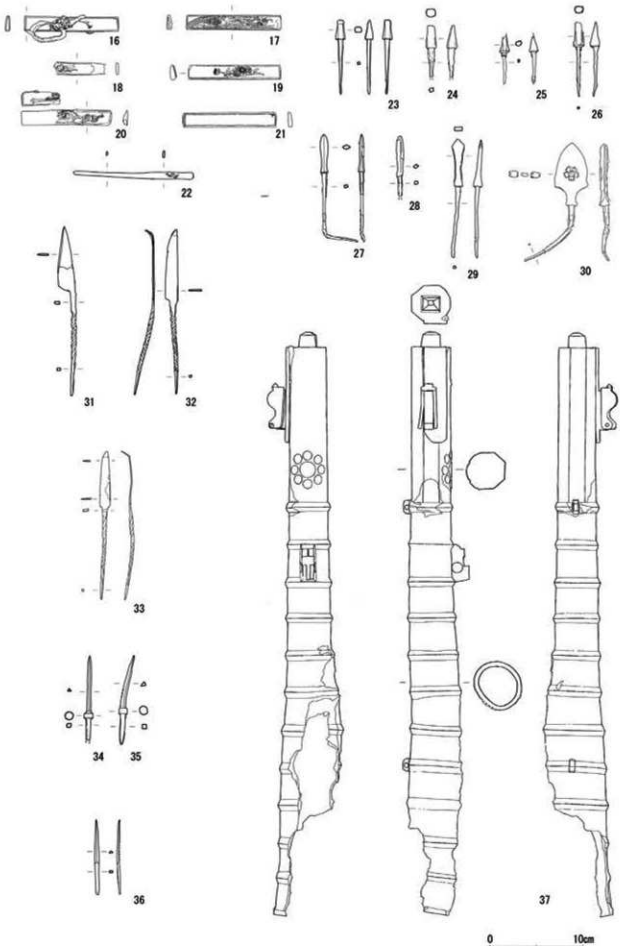
近世武器(4-3-1-81 図～ 4-3-1-86 図)

1･2 は金銅に銀で象嵌を施した柄頭である。3 に伴うものと思われるが、出土時には分離していた。3 には柄木地の木質と柄巻が残る。目貫の材質は銅で、鍍金が認められる。縁の中央に「民國(花押)」の銘が入る。刀装具の出土は、後述する長局櫓に次いで大広間に多く(4 ～ 7･14･16 ～ 19)、そのほとんどが闇り通路上の、特に家老之間･帳台之御間下に集中する。14 の小柄には柘植吉勝(花押)の銘が入る。8･10 ～ 13･15･22 の刀装具は小広間で出土した。11 の脇差と 12 の鍔は一括で出土した。11 は茎に「助定」銘が入り、12 には鍍金が認められる。16･17･19 ～ 21 の小柄にも鍍金がみられる。鉄鏃は大広間(23･24･27)、御小姓部屋(25)、小広間(26･29)、大御台所(28)、露地(30)、長局櫓(104)で出土し、鏃頭形が最も多い。小刀とした 31 ～ 33 は、小広間に多くみられた。34 ～ 36 は断面が三角形を呈し、それほど鋭利ではないが先端が尖っている。鉄鏃か。37 は九曜紋を配した火縄銃である。昭君之間で出土した。銅製で、実用品ではないと思われる。

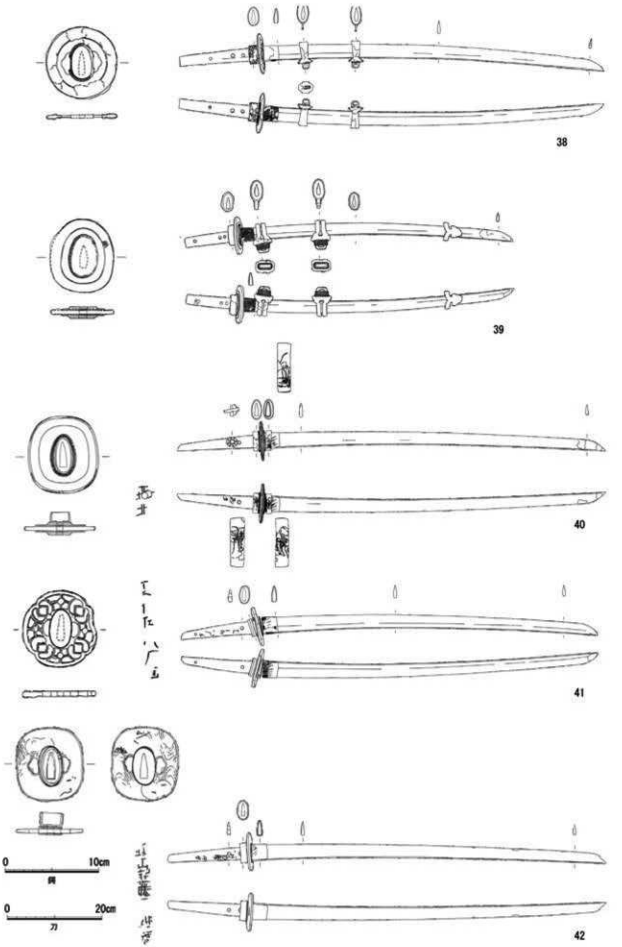
38 ～ 93 は、長局櫓で出土した武器類である。櫓の一画で、火縄銃や洋式小銃の部品などと共に出土した。38･39 は太刀、40 ～ 43 は刀、44 は脇差である。残り 1 本の刀と合わせて計 8 本がまとまって出土した。45 ～ 50･52 は薙刀、51 は長巻。53 ～ 63 は槍で、60 ～ 63 は十文字槍。薙刀･槍共に刀装具は銅を主体とし、責金具や逆輪には金･銀を使用した猪の目や花文、三つ葉などの細工がみられる。67 ～ 93 の目貫は、肉眼では鍍金は認められない。出土地点から、いくつかは 38 ～ 44 に伴うものと考えられる。



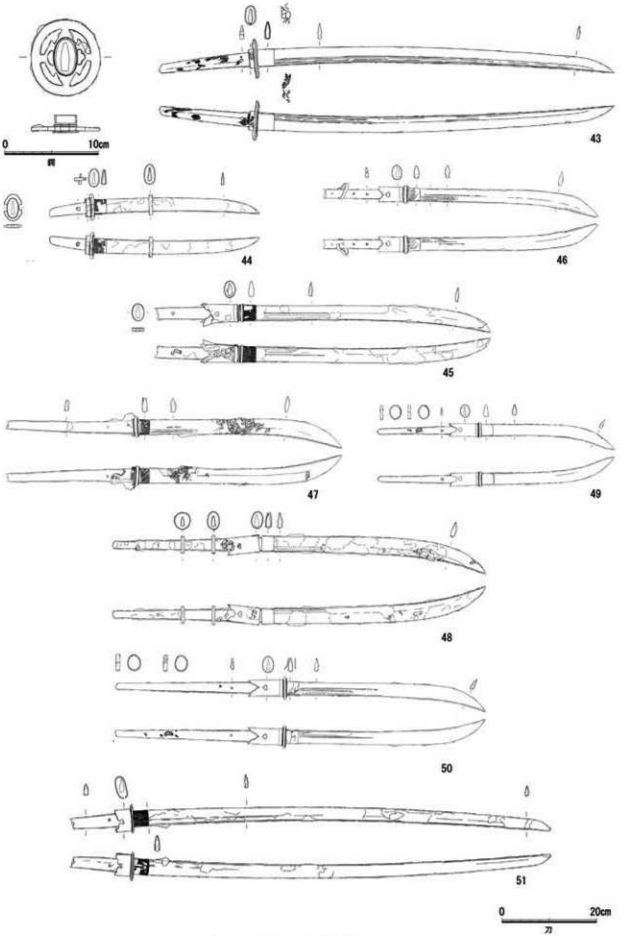
4-3-1-81 図　近世武器実測図 1



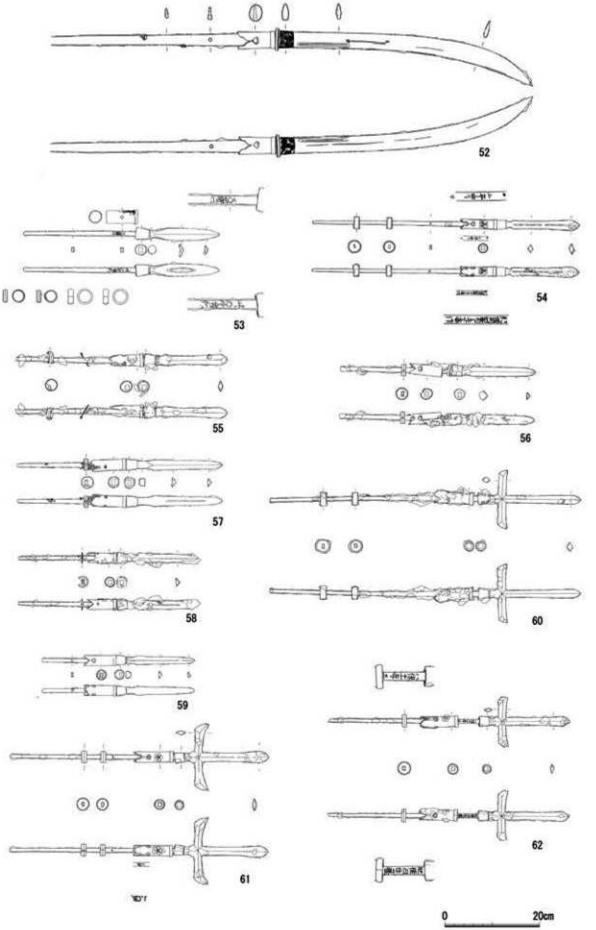
4-3-1-82 図　近世武器実測図 2



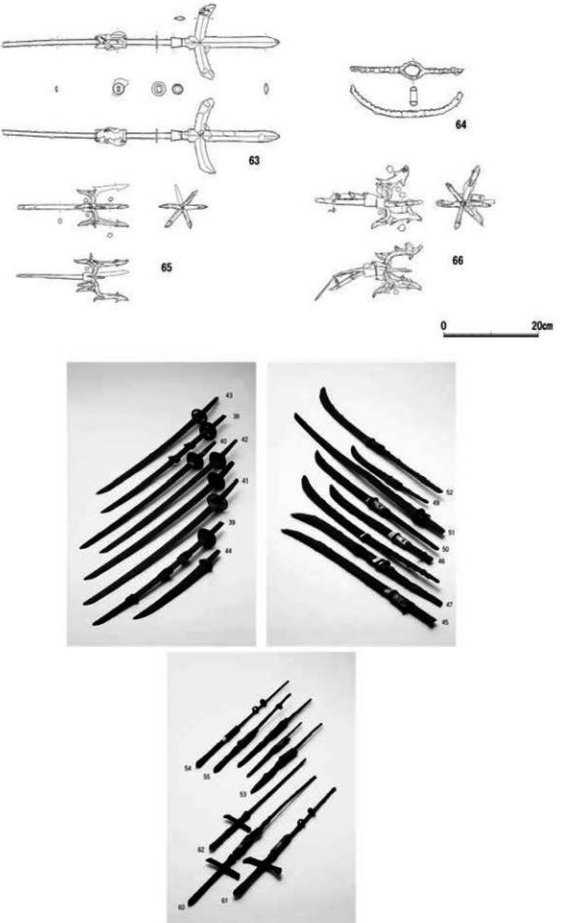
4-3-1-83 図　近世武器実測図 3



4-3-1-84 図　近世武器実測図 4



4-3-1-85 図　近世武器実測図 5



4-3-1-86 図　近世武器実測図 6・近世武器写真

近代武器・軍用品(4-3-1-87 図～ 4-3-1-91 図)

本丸御殿の発掘調査で出土した近代以降の武器・軍用品を中心に報告する。取り扱う範囲は、本丸御殿が焼失した明治 10 年(1877)前後とし、Ⅲ層出土のものを中心に報告する。

1・2 は正帽日章。3 は、明治 8 年布告の略帽の星章。出土した全てが兵卒用の銅製であった。4 は一般兵用軍帽星章と考えられる。5 は、陸軍下士勤功章である。中央に桜と周囲には桜葉が意匠として施されている。6 から 15 は軍服用釦である。6 から 9 は裏足釦で、主に外部に晒され目立つ部分に使用されている釦である。8・9 の中央には漢数字が表現されているが、これは聯隊番号を示すものである。なお 1 点だけ、陶製の桜の裏足釦が出土した。10 から 15 は表穴釦。16 から 22 は鉤製品。16 は尾錠用金具。7・18 はスプリングホック。19 は鉤金具。20 は鼓金。21・22 は装飾用鉤金具でＳ字形フックとした。23 から 27 はバックル。28 は将官及び参謀将校が用いる飾緒の金具。紐の両端部分に付属されるので、2 個 1 組で用いられる。29 は踵鉄。靴底に釘で打ちつけるので本来は 2 個 1 組である。30 は拍車。31 はゴーグルで、容器に収納された形で出土した。33 は兵士個人の認識票。「室園末吉」と刻まれている。34・35 は双眼鏡である。36・37 は水筒。

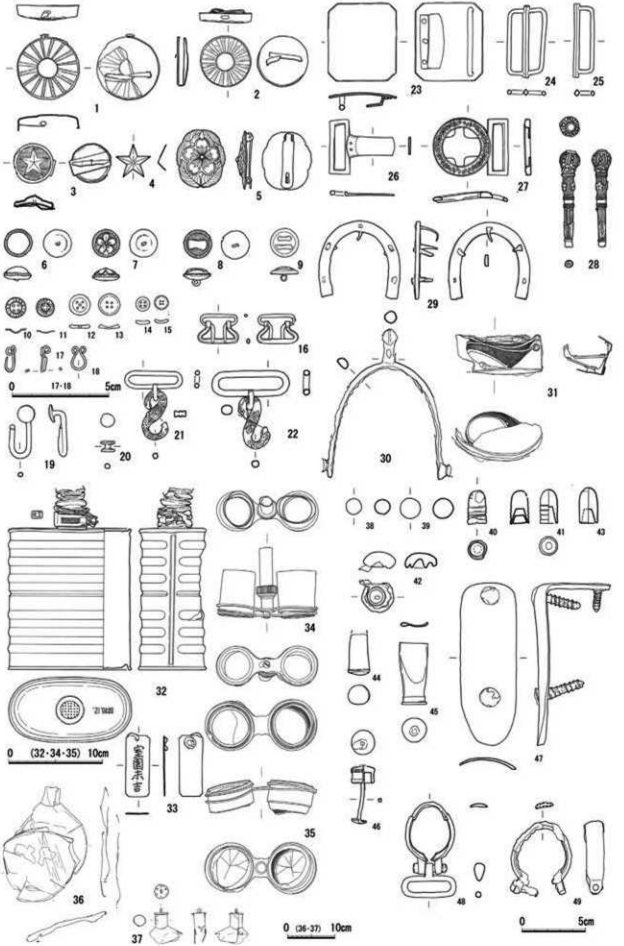
38・39 は火縄銃の弾。40 から 45 は幕末以降輸入された小銃用の銃弾と薬莢。40・41 はスナイドル銃の弾。40 の弾底凹部には、陶製のプラグが確認された。42・43 はエンフールド銃の弾。44 はスペンサー銃の薬莢で、45 はスナイドル銃の薬莢。48・49 は環帯。50 は床尾下部に付く負いひも環。51 は朔杖で、主に銃身内部の掃除用具。52 は打金の機構。53 は管打式銃に用いられる雷管。54 は小銃銃身先端に付く金具の銃床キャップである。55 から 59 は銃剣に関連する遺物である。56 はヤタガン形銃剣本体である。57・58 はヤタガン形銃剣の鞘金具である。57 は鯉口で 58 は鐺である。59 も銃剣である。60 から 62 は拳銃関連品である。60 は Smith&WessonModel2Army (S&W №2)。小広間三階櫓脇の排水溝内から、弾薬筒の装填時のように銃身を上方向へ折った状態で出土した。61 は 60 用の 22 インチ口径リムファイヤーの薬莢。62 はル・フォショウ拳銃のピン打式薬莢。63 は、正剣用鐺。明治 8 年布告では将官以上の鐺装飾に用いられている。

64 から 69 は火砲に関連する遺物である。64 から 66 は四斤砲弾の破片である。67 は 20 ドイム臼砲弾片。68・69 は摩擦管。68 は摩擦管環線(ワイヤーループ)が無い(使用済み) L 字形摩擦管、69 は環線が残存する(未使用) I 字形摩擦管。

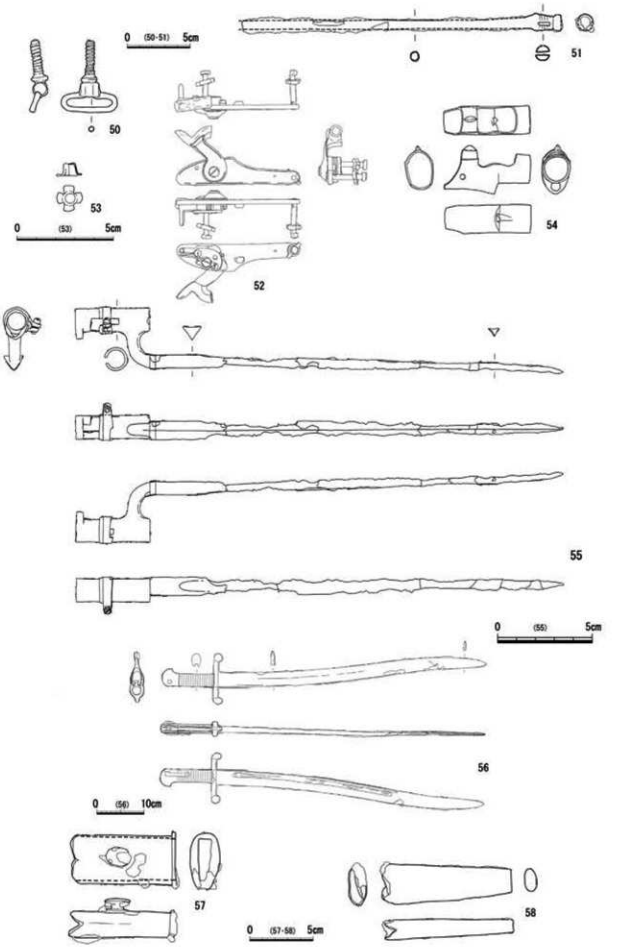
70 から 74 は、馬具に関連する遺物である。70 は頭絡金具で、轡部分を中心に良好な状態で確認された。71 は鐙。72 から 74 は蹄鉄。72 や 74 のように蹄釘で 2 個 1 組の形で出土しているものが多い。73・74 は後蹄鉄。

75 から 79 は、小銃の手入れ用工具に関連する遺物である。76 は銃身内部掃除用のブラシ。76・77 は T 字形工具、78・79 は三ツ又工具。T 字形工具・三ツ又工具とも外火式前装銃(ゲベール銃・エンフィールド銃など)の分解・結合に用いられたものと考えられる。

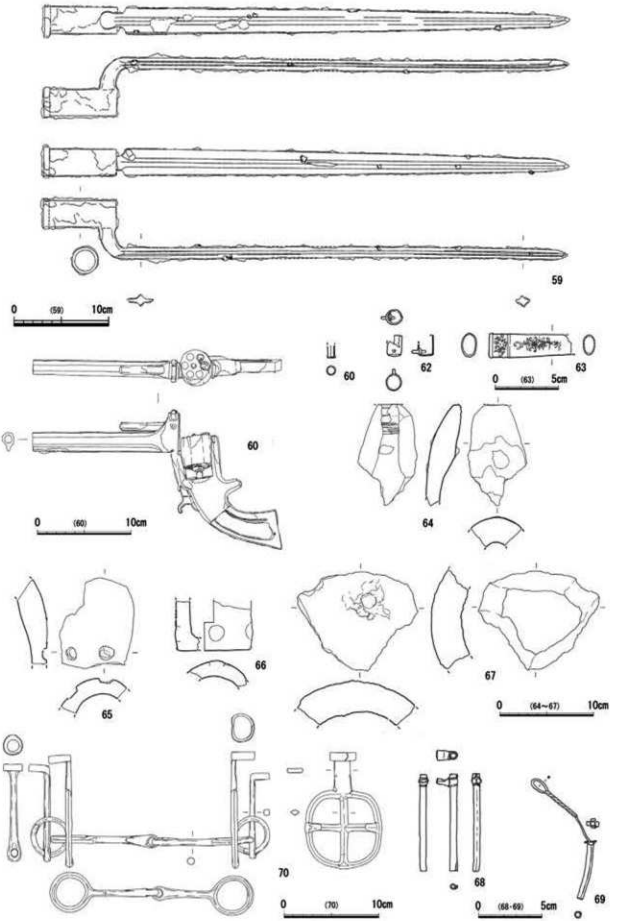
80 は文鎮。表面には「武庫」と刻まれている。81 は熊本鎮台の印章で、「臺印」と記されている。82 は時計と考えられるが、被熱が著しく不明な部分が多い。83 から 85 はストーブの装飾部分である。83 には「ABEND (ROTH) BRO SN.Y. 187 ○」と会社名と西暦が記されている。
86 はバケツである。87 は短射銃。短射銃の中でも極端に砲身が短い。



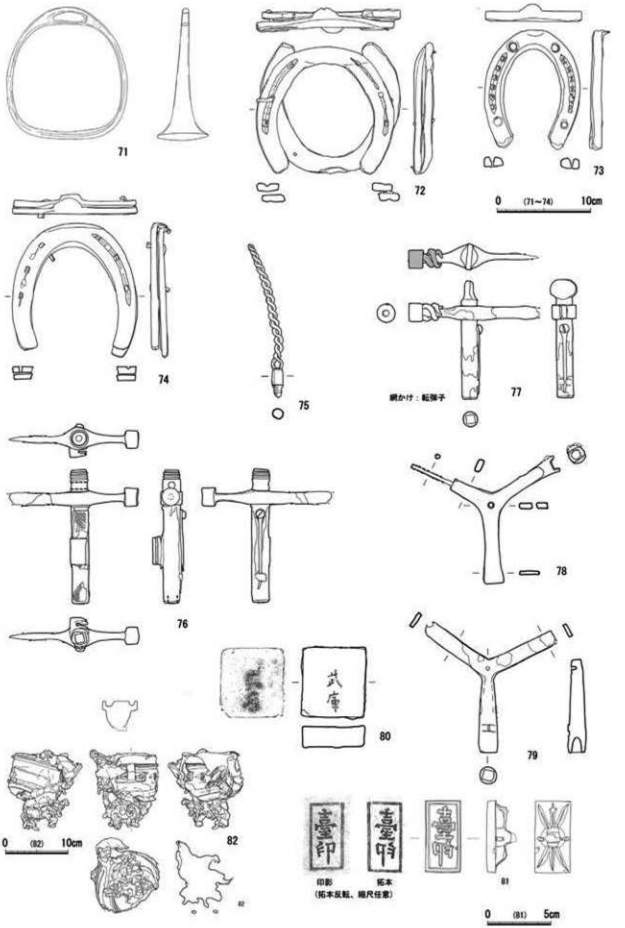
4-3-1-87 図　近代武器・軍用品実測図 1



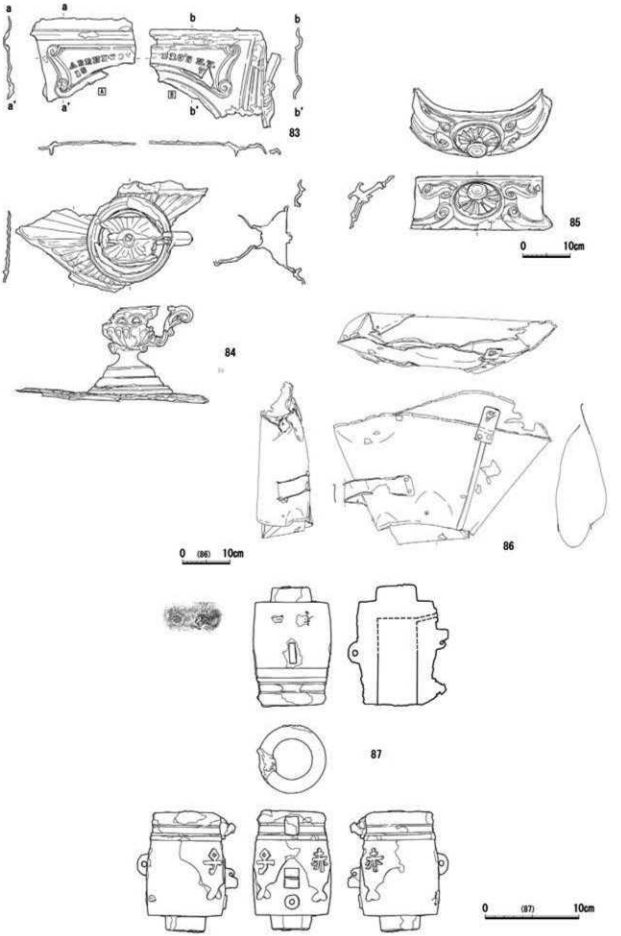
4-3-1-88図　近代武器・軍用品実測図2



4-3-1-89 図　近代武器・軍用品実測図 3



4-3-1-90 図　近代武器・軍用品実測図 4



4-3-1-91 図　近代武器・軍用品実測図 5

○近代武器・軍用品出土状況から見た本丸御殿

小広間からは Smith & Wesson №2 本体や時計、短射銃など、特殊な遺物の出土が目立つ。石製の「熊本鎮台本営之位印」も小広間から出土した。金属印章の「臺印」は、元は大広間にあったものである。大広間では釦の出土多く、特に万単位での銅製・貝製・ガラス製釦、スプリングホックの出土は際立っている。またT字形工具が多く出土した。大御台所も、銅製・貝製・ガラス製釦、スプリングホックが数多く出土した。大御台所棟である御小姓部屋・大御台所からは、帽目章が数多く出土した。加えて鼓金の出土が際立って多い。水筒も御小姓部屋からまとまって出土した。バケツが闇り通路よりまとまって出土したが、焼失前の位置が御小姓部屋なのかは判然としない。長之間からは、鐔鉄がまとまって出土しているが、これは焼失後に廃棄されたものである。長局櫓では、銃口蓋、銃剣本体、銃部品、が多く出土した。日章や釦の出土は無いが、ストーブなど季節利用の道具が出土した。注目される遺物として「武庫」と記された文鎮が出土している。

大分類	中分類	小分類	細分類	大広間	大御台所	御小姓部屋	長之間	櫓櫓	西櫓下	小広間	長局櫓櫓	元櫓台所	小櫓台長屋	合計
軍器	軍服	釦	釦掌	45	125	(298)	7	2		2				(480)
			星章	(180)	(47)	(76)	7	25	1	(3)				(340)
			バッジ	1							1			2
			兵定釦	無定	(1,255)	(140)	(563)	(33)	(22)		(4)			(2,017)
				桜	(46)	(15)	(1)	(11)	1		(6)			(80)
				五字	3	1								4
			兵穴釦	銅	(10,072)	(576)	(472)	1	(3)		(2)			(11,125)
				貝	18,549	296	1,627	27	14		6			21,519
				ガラス	24,259	362	2,235	12	16		19			26,897
		帽	スプリングホック	銅	(25,016)	(92)	(36)				(1)			(25,146)
			スプリングホック	輪	(19,961)	(147)	(61)		3		1			(20,174)
			尾錠用金具		(163)	(173)	3	(2)	(3)		11			(357)
			鼓金具		(277)	(671)	(21)	(4)	4	1	2		1	(1,005)
			S字形フック			1						10		11
			鐔金		(2,112)	9	(566)	(11)	96					(2,796)
		装具	バックル		5						5			10
			鼻緒金具		4									4
		銃	銃鼓		168	19	179	13	168		9		1	497
			引金		3		2				1			6
	その他		武器図		1									1
			双眼鏡		3									3
			唐杖台				1							1
			水筒				2							2
			ゴーグル					1						1
武器	銃	小銃	弾	丸鉛弾	10		8		1	1	1	3		24
				スナイドル	2			1						3
				ユンフィールド	3		2							5
			薬莢	スペンサー	6				2	15	16			39
				スナイドル	23	6	9	34	7	1	5	1	1	85
			銃口蓋		6	5	14	3		1	1	19		49
			雷管		6	2	1	15	4		2	1		31
			部品	撃茎付	1					1	1	1		4
				銃床キャップ		1								1
				床尾板		2					1	7		10
				鼓金			2							2
				槍尻							2	2		4
				打金の残骸								4		4
		銃剣	本体				2					2		4
			部品	鐔、柄口	2	5						21		28
		弾筒	本体	S&W本体							1			1
			薬莢	S&W薬莢	3			3	1		2			9
				ホ・フィッシャ薬莢	5									5
	刀剣	槍	部品	鐔							1			1
	大砲	大砲	弾	四斤臼砲弾	9	1	2	5	3	2	4	2		28
				20ドイムロ砲弾	1							1		2
			導線	I字形	25	37	4	47	179	33	116	1	38	4	485
				L字形			2	1	49		1				53
			手榴弾		10	5			5	3	9	1	1		34
	馬具		鞍鐙金具		1	1	25							27
			鞍		1									1
			鐙具			42		190						232
	その他	工具	銃ブラシ		1	2	3		3			2		11
			T字形工具		10	1					2	1		20
			ニップル工具		1							2		3
			印章		1									1
	その他		バケツ				2							2
			時計								1			1
			短大刀剣								1			1
			文鎮									1		1
			ストーブ									3		3

4-3-1-92 図　近代武器・軍用品出土位置

※(数字)は地点番号1個の重さから例外出した数

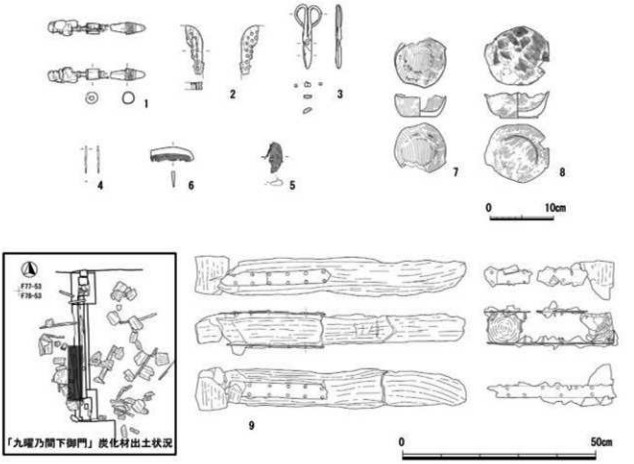
有機質製品(4-3-1-93 図・4-3-1-94 図)

Ⅲ層を中心に有機質の遺物が出土した。多くは炭化した状態である。

1～6はF81-56グリッドで出土した携帯用の裁縫セットである。闇り通路の折り重なった炭化材の中からそれぞれの長軸を揃えて密着して出土し、本来は何らかの容器に入れられていた可能性が高い。1は針入れを兼ねた糸巻。2はブラシ、3は洋鋏、4は針と思われる細長い金属製品。1の周辺で2～3本出土した。本来は1の中に収納した状態であったと思われる。5は糸。6は櫛。7・8は木製の椀である。9は「九曜之間下御門」から出土した門扉の下框である。南側の扉材で、四隅を八双金物で挟み込んでいる。図の左側が北を向いて出土した。10はゴザまたは畳の表面である。闇り通路からは、畳床の可能性のある炭化した繊維が出土したが、畳表はほとんどみられなかった。11はワラジ。長局櫓から出土した。この他にもムシロやナワも出土した(付編2参照)。

12は闇り通路から出土した炭化材である。天井竿の一部と思われる。現存法量は高さ14㎝、幅9.5㎝。いわゆる猿頬の刳り込みがみられ、広間の天井が猿頬の竿縁であったことがわかる資料である。焼失時に大広間から落下した上、現代の配管工事で攪乱された部分から出土したものであり、大広間内での使用部位を限定するのは困難である。13は布である。闇り通路の焼土中から多く出土した。特に集中した場所はないが、素材と思われる布の塊がF81-52グリッドのⅢ層から出土した。

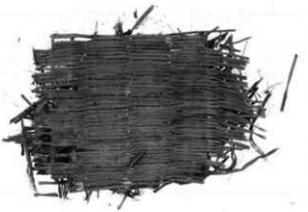
製品ではないが、注目される有機質遺物として炭化米がある。炭化米については焼失理由の根拠に挙げられている。本丸御殿の調査では、調査区内の各所から炭化米の出土がみられたが、まとまった量が集中する箇所はない。



4-3-1-93 図　有機質製品実測図

7

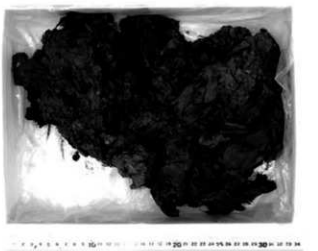
8



10

11

12



13

4-3-1-94 図　有機質製品写真

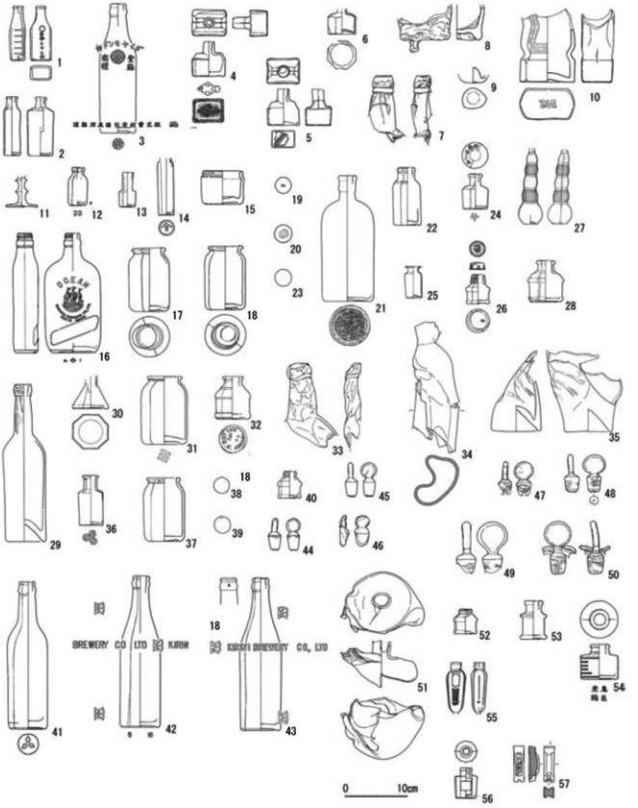
ガラス製品(容器) (4-3-1-95 図)

出土層位と被熱などの観察から、以下の資料を本丸御殿(鎮台本営)焼失以前の産品と捉える。

薬瓶 :25・50a・51　　薬瓶共栓 :44 ～ 49・50 b

インク瓶 :4・5・30　　インク瓶？:6

ワイン瓶 :7・29・33・35　　洋酒瓶 :8 ～ 10・34　　脚付杯 :11



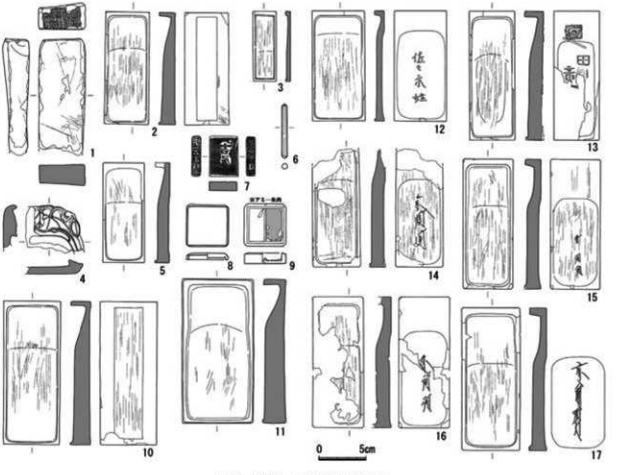
4-3-1-95 図　ガラス製品実測図

石製品(4-3-1-96 図～ 4-3-1-98 図)

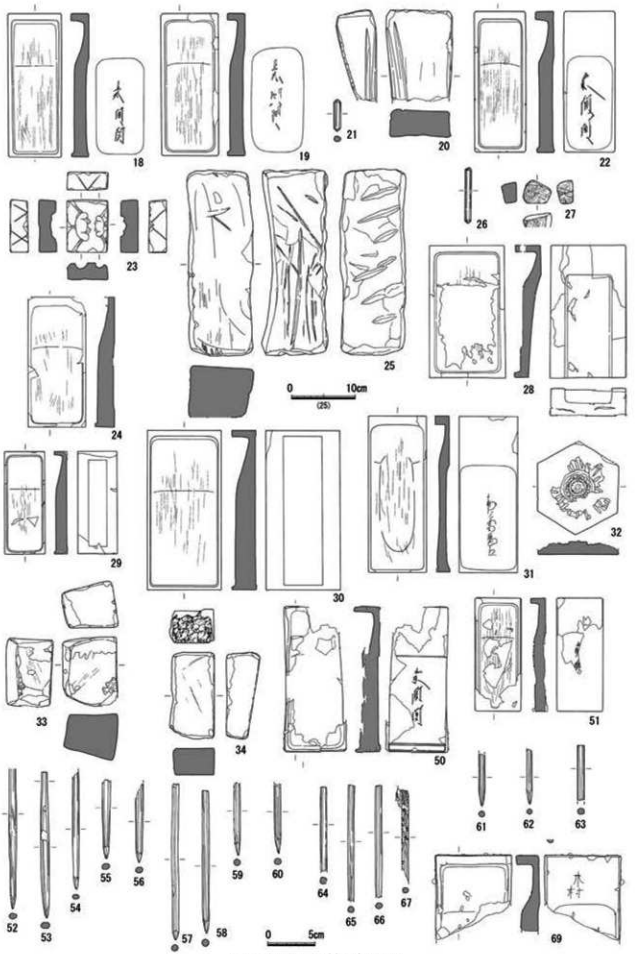
石製品の出土総数は 502 点であり、特に石硯(218 点)・石筆(223 点)の点数が卓越する。出土属性(Ⅲ層出土)や被熱状況から西南戦争以前と判断できる資料も多い。特に注目されるのは小広間三階櫓跡Ⅲ層から出土した印章である。

印章「熊本鎮台本營之印」(68)

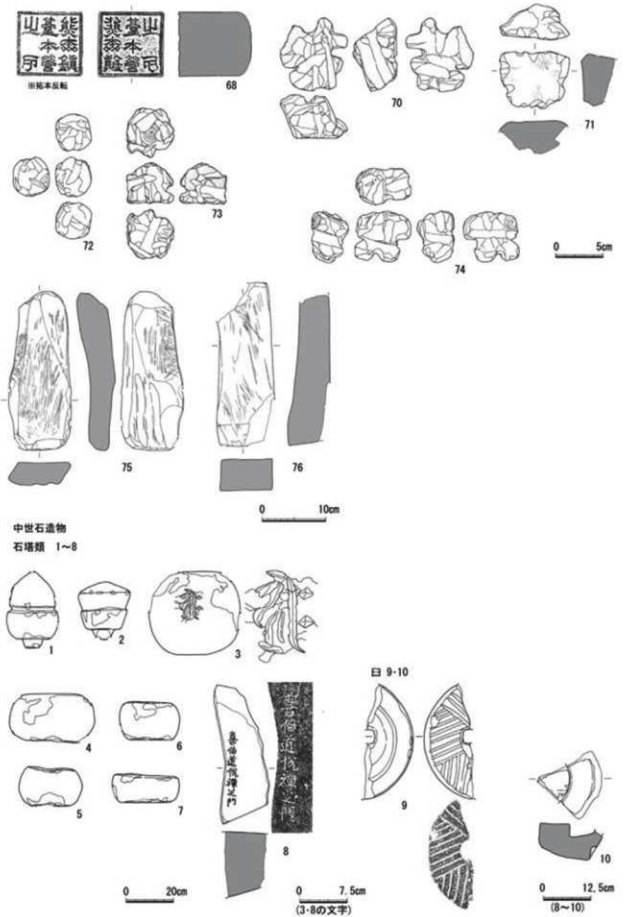
上面を丸く加工した方柱形を呈する蛇紋岩製の印章である。印面は、粗く平滑化した後(凸部に粗い擦痕が残る)、隷書にて「熊本鎮台本營之印」を彫り出している。印刀彫りの断面は片薬研形である。熊本の「本」と本営の「本」とでは字体が異なっており、これは二者を弁別する意識によるものとみられる。他の面は研磨調整であるが、整形時の条痕も部分的に残っており、特に上面において明確である。表面の色調は、破砕後に被熱したため、その程度により異なっており、黒色化した部分はより強く被熱したものとみられる。本資料は小広間三階櫓跡、F89-60 グリッドⅢ層からの出土である。これは小広間が鎮台本営のなかでも管理的な執務を行なう場であった可能性が高いことを示している。なお、本印章が押印された文書は現状では未発見である。



4-3-1-96 図　石製品実測図 1



4-3-1-97 図　石製品実測図 2



4-3-1-98 図　石製品実測図 3

動物遺存体について

出土状況を層・遺構毎に記述する。Ⅰ層の資料数は少ない。F84-54 グリッドでウマが出土した。F80-58 グリッドで出土したイヌは、現代の埋葬で、ほぼ全身骨が残存していた。Ⅱ層はマダイを含むタイ科・シイラ・ハタなどの魚類が広範囲で出土した。切断痕も認められる資料が多く、食材であったものと考えられる。Ⅱ層は客土で元位置は不明だが、同種の資料がⅢ層からも出土し、西南戦争以降の軍の食糧として持ち込まれたものと考えられる。Ⅲ層からは魚類が中心に出土した。鶴之間と麒麟之間の境付近(F84-54 グリッド)からやや集中して出土した。長局櫓でウシの足、御小姓部屋でシイラが出土したが量は少なく、その場で加工されたかどうかは不明である。切断痕もあり、西南戦争以降の軍の食糧として持ち込まれたものと考えられる。Ⅳ層は焼失前の土層だが、トレンチ調査がほとんどで、掘削は小規模で限定的である。F88-55 グリッドでキジと思われる資料が出土したが、切断痕も不明瞭で、食糧かどうかは不明瞭である。F85-52 グリッドではマダイが出土した。

続いて遺構出土資料について記述する。SJⅢ001・002 は、小広間穴蔵で検出した埋設甕で、便所の可能性が高い遺構と判断している。SJⅢ001 からはタイ科の魚骨、SJⅢ002 からはタイ科とシイラ科の魚骨が出土した。大きさから便中のものとは考えにくく、食糧残滓をSJⅢ001・002 に廃棄したものと判断している。この遺構は小広間焼失により埋没しており、焼失前に使用されていたと判断できる。大御台所周辺のSDⅢ005・008・010・016 から、タイ科・シイラ科の魚骨が出土した。大御台所で調理されたものの残滓の可能性もある。SKⅢ049・057・059・071 は露地から検出された土坑群である。内部からマダイ・ウシなどが出土した。この土坑群は、建物焼失後の露地にⅡ層が形成された後で掘り込まれた廃棄坑で、内部からは瓦を中心とした廃棄物が出土した。遺構の形成時期は、近代から現代初頭と想定している。他にも御小姓部屋の礎石抜き取り跡(SKⅢ109)からウシ、大広間棟北側のSXⅢ054 とした池から大型獣の骨が出土した。いずれも現代に形成された遺構である。

この他に、貝類も多く出土した。大半はⅡ・Ⅲ層からの出土で魚類と同じ傾向を示している。食糧として城内に持ち込まれた可能性が高い。中にはイタヤガイを使用した貝杓と思われる道具の一部もある。

今回の調査で注目されるのは御小姓部屋のSXⅢ057 である。「熱河・河北聖戦記念碑」の設置及び撤去と樹木の抜根の際に形成されたものと思われる。遺構は調査前に重機によって形成されたものと思われるが、この遺構の内部と周辺から、ダチョウとキリンと思われる骨が出土した。出土状況からは、SXⅢ057 付近にあったものがSXⅢ057 形成時に混入したものと判断できる。記念碑と樹木は、少なくとも昭和 33(1958)年の航空写真に写っており、動物骨はそれ以前から埋没していたものと思われる。

銭貨

御小姓部屋SJⅢ025 の便槽甕の内部から寛永通宝 34 点がまとまって出土した。これらのうち 26 点は明らかな被熱資料であり、本丸御殿焼失時に便槽内に落ち込んだものと考えられる。他、出土状況から一括性を評価し得る資料は無いが、同一グリッドから多量に出土した以下の事例がある。

大広間 F81-58 グリッド：寛永通宝　Ⅲ層(御殿焼失に伴う土層)出土 44 点。長之間 F85-54 グリッド：寛永通宝 46 点・中国銭 2 点・仙台通宝 1 点・不明穴銭 2 点…Ⅲ層出土 41 点。天保通宝 9 点…全てⅢ層出土。明治 9 年以前造の近代銭 2 点…2 点とも明らかに被熱。小広間 F89-56 グリッド：天保通宝 53 点(537 ～589) …全てⅢ層出土。寛永通宝 19 点。明治 9 年以前造の近代貨幣 3 点。

○注目される銭貨

中国銭で注目されるのは、利用通宝・洪化通宝の稀少例 2 点である。嶋谷氏のご教示によれば、ともに清朝の中国平定前の三藩時代に鋳造された銭貨であり、利用通宝は全国でも初例になると思われる。洪化通宝は堺環濠都市遺跡(SKT43 地点)の近世墓群出土の六道銭に事例があるという。仙台通宝は天明 4 ～ 8 年(1784 ～ 1788)、仙台藩が鋳造した方形方孔の鉄銭である。

＜2 御裏五階櫓跡＞

(平成 16 年(2004))

報 告 書：熊本市熊本城調査研究センター『熊本城跡発掘調査報告書 3- 石垣修理工事と工事に伴う調査 - 第 2 分冊』2016

調査期間：平成 16 年(2004) 10 月 1 日～同年 10 月 22 日

調査面積：約 30 ㎡

調査主体：熊本市教育委員会

報告書と調査主体については、平成 20 年(2008)～平成 21 年(2009)の調査も同じである。

・調査にいたる経緯

御裏五階櫓跡に建てられていた便所が老朽化したため、既設便所の解体と建築工事が行なわれることになり、工事予定地を対象とした発掘調査が行なわれた。

・調査の方法

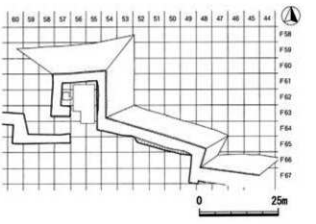
調査グリッドは、縮尺 2500 分の 1 の地図上において日本測地系座標を基に設定された。まず、熊本城域全体を覆うように 500 m× 500 mの大グリッドを設けてA～Mのアルファベットを冠し、それぞれの大グリッド中に 5 m× 5 mの小グリッドを設定して北から南、東から西へ 1 ～ 100 の番号をつけ、アルファベットの大グリッド名と小グリッドの数字 2 つを組み合わせてグリッド名とした。(例: A 100-100 グリッド)

既設便所の解体による発生土を重機で除去しながら遺物を採集し、遺物包含層の掘り下げと遺構の検出は人力で行なった。

・調査の概要

調査区は南以外の三方を現況で幅約 3 m、高さ約 2 mの櫓台に囲まれており、御裏五階櫓の穴蔵跡に相当する。工事対象範囲の内、南側約 2 分の 1 は既設便所の便槽によって完全に破壊されており、東側にも東西 3 m×南北 4 m程の便槽跡を検出した。既設便所の解体工事による発生土(Ⅰ層)の下には、近世瓦の破片や漆喰片を含む暗褐色土(Ⅱ層)が 15 ㎝程の厚さで堆積しており、この暗褐色土の下位に御裏五階櫓の遺構が残存していた。

北側の石垣裾に残存していた遺構面の中央と西側に礎石様の石列、東側に単独の礎石を検出した。石材は主に安山岩が使用されている。東側の礎石の表面には一辺の長さが 20 ～ 22 ㎝の柱痕跡が、中央の石列上には東西幅約 30 ㎝の建築材の痕跡が連続して認められた。西側石列の北端以外の 5 石は、未加工の礫が使われており、遺構面上で明瞭な掘形のプランが確認されたことから、安山岩を使用した礎石より新しく据えられている。中央石列の北から 3 石目は西側が沈んでおり、建築材の痕跡に沿うように座る凝灰岩の板石が検出されている。櫓跡の遺構面上には小舞掻の圧痕が入る大きな漆喰の破片や小片が散見し、炭化材の小片が集中する部分もあったが、石垣も含めて明瞭な被熱の痕跡は認められなかった。



4-3-1-99 図　グリッド配置図(第 160 図)

(平成 20 年(2008) ～平成 21 年(2009))

調査期間：平成 20 年(2008) 10 月 23 日～平成 21 年(2009) 2 月 13 日

調査面積：約 140 ㎡

・調査に至る経緯

御裏五階櫓跡の東側と長局櫓跡を繋ぐ多聞櫓跡の石垣の調査に伴い発掘調査が行なわれた。

・調査の方法

保存修理工事対象の石垣に沿って調査区を設定した。調査区内に小規模なトレンチを 3 ヵ所設定して土層の状況を確認し、表土の上位を重機で除去した。遺構検出とトレンチの掘り下げなどは人力で行なわれた。

調査グリッドは、平成 16 年調査時と同じ方法でグリッド及びグリッド名を設定した。

・調査の概要

基本層序は以下のとおりである。

Ⅰ層：表土

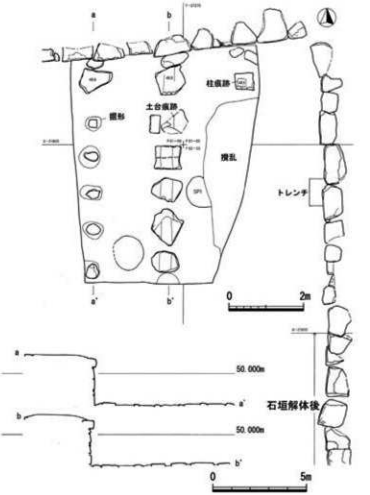
Ⅱ層：暗褐色土(10YR　3/3)近～現代の二次堆積土

Ⅲ層：明褐色土(7.5YR　5/6)明治 10 年の火災による焼土(長局櫓に近い櫓台上のみ存在)

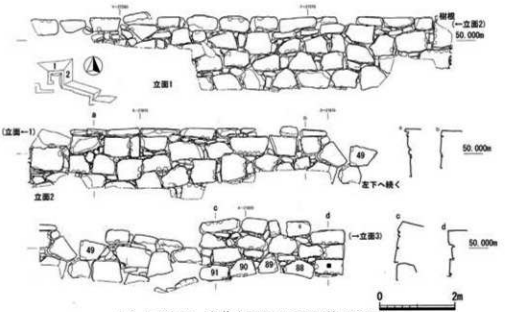
Ⅱ層の下位で近代以降の配石、設備配管などと近世期の凝灰岩製の雨落ち溝を検出した。SX01 は主に長手面を表にして煉瓦を積み、平面コの字形に組んだもので、残存部分の長さは東西方向で 1.2 m、南北方向が 0.85 mである。最も残りのいい部分で煉瓦を 6 段、約 0.5 mの高さに積んでいた。安山岩を主体とする割栗石の集石が 0.8 ～ 1.6 mの幅で帯状に続き、鉤型に折れる部分がみられた。本丸御殿跡で検出された同様の集石遺構は、下位に礎石や石垣等から転用した石材や栗石が入る溝状の掘り込みを伴う。

調査区南東部では、幅 15 cmの凝灰岩が平面 L 字形に並んでおり、北東隅の部分を検出した。F65-49 グリッドの南端で検出した SD05 は、長局櫓から続く凝灰岩製の溝である。開渠で、検出時には SB03 のものと同じ割栗石で埋没していた。SD も凝灰岩製の溝で、一連の遺構である。SJ07・08 は埋甕で、SD06 の廃絶時または以後に埋設されている。

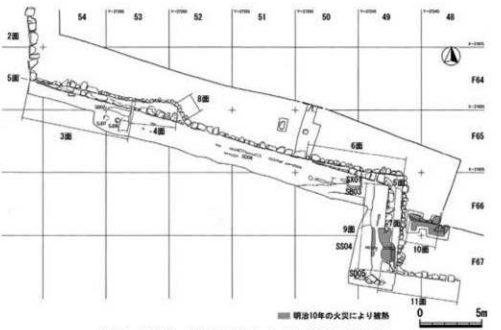
東側の櫓台上のトレンチで検出した腰石垣の被熱による破損がみられたが、F65-50 グリッドの櫓台上に設定したトレンチで検出した礎石には火災の痕跡がみられなかった。



4-3-1-100 図　穴蔵平面図・断面図(第 165 図)



4-3-1-101 図　穴蔵立面図・断面図(第 166 図)



4-3-1-102 図　遺構配置図　東側石垣(第 167 図)

出土遺物

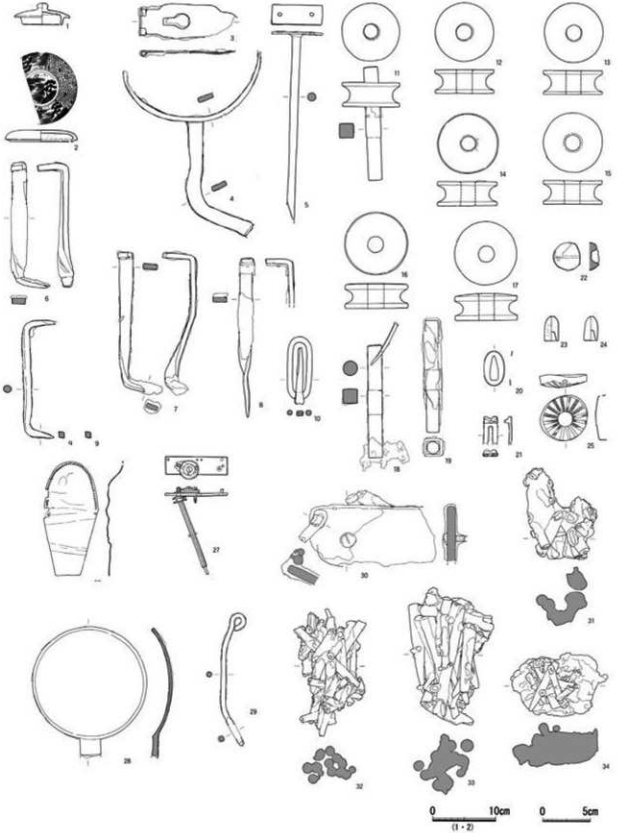
陶磁器は肥前産陶器の土瓶蓋、肥前系磁器染付の鉢・段重蓋が出土した。

瓦は、三巴文や九曜紋が施された軒丸瓦、桔梗紋・九曜紋が施された軒平瓦が出土した。九曜紋・三巴文が施された軒目板桟瓦は、キラコの付着が認められる。その他にも瓦頭端部が残存する滴水瓦、近代瓦が出土した。

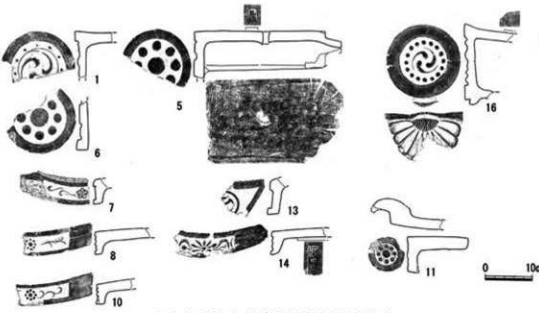
金属製品については、建築関係の製品、武器関係品、被服関係品が出土した。建築関係の製品は、戸締り金具や受け金物は洋風建築に伴う建築関係の製品が出土した。その他、鉄の溶融物が出土した。二次的な被熱を受けたものが多く、被膜状の鉄の溶融物・鉄滓状の溶融物・焼土粒・別固体の金属製品などが付着している。

武器関係品は、鋳バリとその線上に不整が認められる鉄製の火縄銃弾、圏溝が無く、弾底凹部断面形が台形を呈する形態の鉛製エンフィールド銃弾が出土した。

被服関係品は、明治 8 年(1875)制の銅製の正帽日章と革靴の部品が出土した。



4-3-1-103 図　陶磁器・金属製品実測図(第 180 ～ 182 図)



4-3-1-104 図　瓦実測図(第 183･184 図)

4-3-1-105 図　瓦刻印拓影(第 185･186 図)

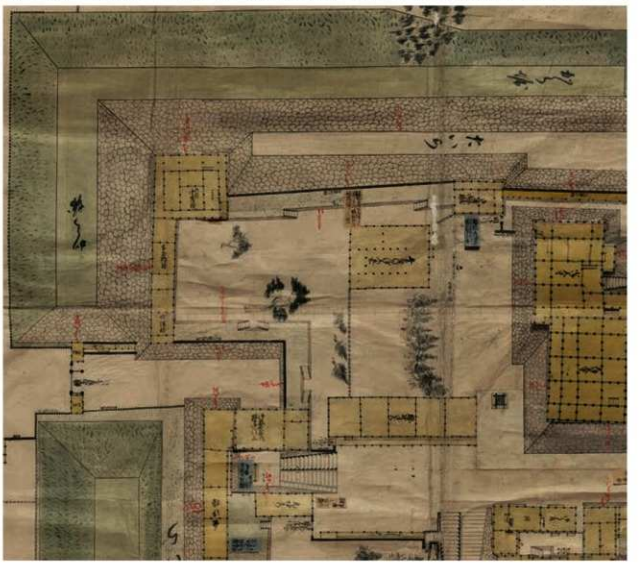
【平左衛門丸】

(1)概要

天守の西側に位置する曲輪で、北西隅には唯一現存する5階櫓である宇土櫓がある。「熊本屋鋪割下絵図」(熊本県立図書館蔵)では「加藤平左衛門尉屋敷」と記されるように、加藤家重臣の屋敷が配された[1]。加藤平左衛門尉屋敷は広間・書院・居間・台所・化粧の間・御上などの建物からなっており[2]、細川家の入国後にも残っていたが、寛永14年(1637)に解体された。解体時に作成された部材の寸法・数量の記録や指図が残っており、慶長年間の建物構造を伝える重要な史料である[3]。

平左衛門丸の呼称は寛文6年(1666)の「御城分間」(永青文庫蔵)に「御天守西ノ御丸」とあり[4]、享保年間頃の「隈本御城之事」に「元平左衛門丸」と見えるようになる[5]。明和6年(1769)頃の「御城内御絵図」(熊本市蔵)にも「平左衛門丸」と記されるようになることから、曲輪名が「平左衛門丸」と定着するのは18世紀半ば頃と考えられる。

平左衛門丸の規模は「平山城肥後国熊本城廻絵図」(熊本県立図書館蔵)には「本丸　東西三十九間　南北三十五間」とある[6]。西と北は空堀で西出丸と隔てている。「御城内御絵図」(4-3-1-106図)によると、西出丸から平左衛門丸の入口には頬当御門が位置した。さらに奥の桝形には数寄屋丸櫓門があった。桝形を抜けて平左衛門丸に入ると、左に6間×9間の腰掛蔵があった。この頬当御門から数寄屋丸櫓門を通って隠御門に至る道は、二の丸から本丸への正式なルートでもあった。腰掛蔵西の階段から石垣に上ると数寄屋丸櫓門内部に入ることがで



4-3-1-106図　御城内御絵図(熊本市蔵)　平左衛門丸部分

き、数寄屋丸長櫓や数寄屋丸五階櫓、二階御広間、地蔵櫓門、御天守方口之間、耕作櫓門、札之間を経て本丸御殿や天守へ建物続きに移動することができた。平左衛門丸の曲輪内には前述した腰掛蔵のほかに宇土櫓・御肴部屋櫓・平左衛門丸台所があった。宇土櫓は3重5階で、1階は梁間8間、桁行9間の規模で、3間半×5間の穴蔵をもつ。五階櫓の南に向かって続櫓が付いている。また、宇土櫓から御肴部屋櫓に向かって当初は廊下塀があったが、「御城内御絵図」によると明和5年(1768)に「籠塀」としたとある。曲輪の北西に御肴部屋櫓があり、小天守台北には幅1間、長さ22間の廊下塀が続いていた。また、御肴部屋櫓のすぐ南には小天守に向かう開御門があった。曲輪の内部には8間×10間の平左衛門丸台所があり、台所の東西は柵らしきもので囲まれていた。

明治4年(1871)7月に平左衛門丸に錦山神社が遷宮しており、この時までに平左衛門丸台所や御腰蔵は解体され、鳥居や神社建物が建てられた(4-3-1-107図)。また、頬当御門から平左衛門丸までの通路は参道となり、特に頬当御門付近は門が撤去され、錦山神社鳥居と参詣人を目当てにした茶店などが並んでいた(4-3-1-108図)。明治7年(1874)に鎮台本営が本丸に移転すると、多くの参詣者が城内に入り管理上の問題が生じ、同年末に錦山神社は京町に移転し、神社に伴う建物は解体された。明治8年(1875)に宇土櫓から撮影された古写真(口絵4)では、神社建物が解体され更地となった様子が見える。

明治10年(1877)の西南戦争では宇土櫓は焼失を逃れ、戦中は鎮台司令部が置かれた。明治17年(1884)には宇土櫓の修理が実施され、同年銘の鬼瓦2個が見つかっている[7]。この修理では窓の位置や形状の変更、高欄の形状変更、石落の変更などが実施され、旧状が大きく改変された。明治22年(1889)熊本地震では、頬当御門周辺で甚大な被害が生じたほか、宇土櫓にも壁破損などの被害があった[8]。地震被害を受けた箇所は陸軍によって復旧され、そのうち頬当御門周辺の桝形は旧来の石垣より低く積み直されたことが古写真で確認できる[9]。その後、宇土櫓は大正末期に著しく破損した状態となり、大正15年(1926)に熊本城趾保存会が発足して募金活動を

4-3-1-107図　平左衛門丸の錦山神社(長崎大学付属図書館蔵)

4-3-1-108 図　頬当御門前から見た大天守(長崎大学付属図書館蔵)

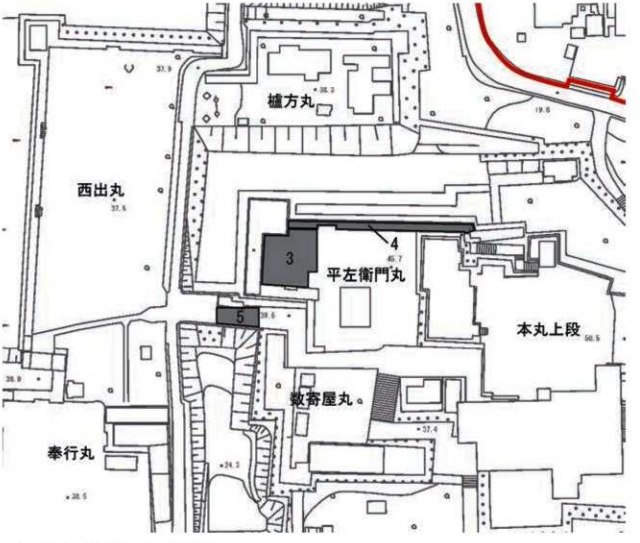
行ない、昭和 2 年(1926)に解体修理が実施された[10]。その際に基礎をコンクリート造とし、内部に鉄骨製の筋交いが設けられた。また、屋根には当時第六師団司令部が所有していた青銅製の鯱が載せられた。修理後に東から撮影した写真では、続櫓の中央部に出入口と階段が見え、曲輪内には池とテニスコートが見える[11]。宇土櫓については、昭和 8 年(1933)に国宝に指定され、昭和 25 年(1950)の文化財保護法成立により国宝から重要文化財へ指定名称が変更された。また、昭和 31 年(1956)に五階櫓の半解体及び続櫓の解体修理を行ない、旧軍時代の改変を当初の形式に戻し、昭和 60 年度から平成元年度にかけても五階櫓の半解体修理を実施している。

なお、昭和 35 年(1960)に天守が外観復元されると、天守台で出土した礎石を平左衛門丸に移し、露出展示を行なっていた。また、同年には宇土櫓から天守閣に向かって石垣上と、宇土櫓続櫓西側にはコンクリートブロック造の塀が建築されたが、前者は解体され、平成 22 年(2010)塀復元のための発掘調査が行なわれた。

---

[1] 『特別史跡熊本城跡総括報告書歴史資料編　絵図・地図・写真』熊本市　2019　5～10 頁
[2] 北野隆編『城郭・侍屋敷古図集成　熊本城』至文堂　1993　246～253 頁
[3] 永青文庫蔵　『特別史跡熊本城跡総括報告書歴史資料編　史料・解説』所収 199･120･122 号文書
[4] 註 3 報告書所収 165 号文書
[5] 熊本県立図書館蔵上妻文庫　註 3 報告書所収 173 号文書
[6] 熊本県立図書館蔵　註 1 報告書 33～38 頁
[7] 『重要文化財熊本城宇土櫓保存修理工事報告書』熊本市　1990
[8] 宮内公文書館蔵『震災ニ関スル諸報告』　註 3 報告書 356 号文書
[9] 冨重写真所蔵　註 1 報告書 205 頁
[10] 註 7 に同じ
[11] 註 1 報告書 210 頁

(2)発掘調査成果



3. 宇土櫓　4. 北側塀跡　5. 頬当御門跡

4-3-1-109 図　平左衛門丸調査地点位置図

＜3 宇土櫓＞

報 告 書：熊本市『重要文化財　熊本城宇土櫓保存修理工事報告書』1990

調査期間：平成元年(1988)

調査面積：不明

調査主体：熊本市教育委員会

・調査にいたる経緯

昭和 58 年(1983)の 1 月から 3 月に蟻害調査が行なわれた。この結果、宇土櫓の 3 重部分と続櫓の 2 重部分を中心とした南側に蟻害が著しく、危険な状態であると判明した。昭和 60 年度から昭和 63 年度までの四年計画で補助事業として行なうことが決定し、半解体修理に着手された。発掘調査は、表土すき取り工事に伴い行なわれた。

・調査の方法

不明

・**調査の概要**

層序は以下の通りになる。

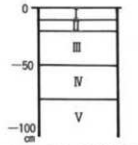
第Ⅰ層　表土：小砂利などを含む

第Ⅱ層　橙色土層：硬化面を形成　昭和期の整地層

第Ⅲ層　暗褐色土層：瓦を多量に含む

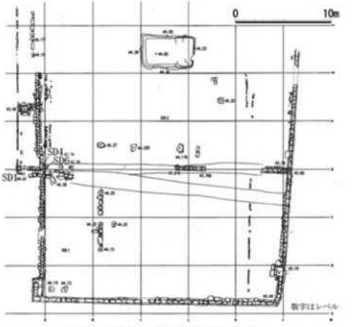
第Ⅳ層　明灰褐色土層：明治期の整地層

第Ⅴ層　橙色土層：細川期の整地層



4-3-1-110 図　基本土層模式図（10 図）

調査地は、4 期の整地層に大別することができる。第 1 期は明灰褐色土もしくは黄褐色土を用いており、非常にしまりが強い。部分的に、黒褐色土がブロック状に混入している。遺物をほとんど含んでいない。調査地東側では、第 2 期の整地層の下に自然堆積とみられる黒褐色土層が確認されており、上面が硬化していることから、第 1 期に相当する面であるとみられる。しかし、調査区内においては、ほとんどが盛土の部分である。第 2 期は主として橙色土を用いており、しまりはさほど強くない。加藤期の瓦を多く含み、細川期のものが殆どみられない。第 3 期は主に明灰褐色土を用いているが、しまりが弱く、階段部分では大きく落ち込んでいる。部分的に瓦を多量に含む黒褐色土・暗褐色土がみられる。第 4 期は、明治以降、昭和に至るものであり、種々雑多な土・小砂利がみられ、瓦・漆喰などを大量に含む。



4-3-1-111 図　遺構平面図（13 図）

幾度となく整地が繰り返されているうえ、北西部・南東部を中心に撹乱が激しいため、溝を除いてはあまり良好な残存状態ではない。特に西側では 10 ～ 15 m四方にわたって、明治期の大規模な撹乱が認められた。このほか各時期にわたって廃材の埋め込みが行なわれている。検出された遺構は、溝・礎石群・池状遺構・石列・瓦列である。

SD1 は、調査区ほぼ中央を南北に横切る排水溝である。側石は安山岩であり、底石は切石の凝灰岩製である。南端で SD2 に接続している。遺物はほとんど出土しない。SD2 は南側の石垣に沿った排水溝である。全体的には凝灰岩製の切石を用いる。瓦、近世陶磁器が出土している。SD3 は、統櫓から二階櫓部分に沿っている排水溝である。排水溝の内側は漆喰で目張りが施されている。白漆喰、鼠漆喰、瓦などを大量に含む。SD4 は宇土櫓の前から東に伸びる排水溝である。側石・底石ともに凝灰岩の切石を使用しているが、側石の形態には部分的な差異がある。全ての溝の最下層にあたり、「慶長四年八月吉日」の銘をもつ朝鮮系軒平瓦（滴水瓦）が大量に含まれていた。SD6 は、SD1 同様調査区中央部を南北に横切る排水溝である。側石・底石ともに凝灰岩製の切石を使用している。溝内は徹底的に破壊され、大量の瓦で埋められている。

4-3-1-112 図　主要遺構（溝）断面図（12 図）

4-3-1-113 図　出土遺物写真

＜4 北側塀跡＞

報 告 書：熊本市教育委員会『熊本市埋蔵文化財調査年報 第16号』2014

調査期間：平成22年(2010)4月1日～平成23年(2011)3月26日

調査面積：約900㎡

調査主体：熊本市教育委員会

・調査に至る経緯

平左衛門丸北側塀の復元に伴う遺構確認調査である。

・調査の方法

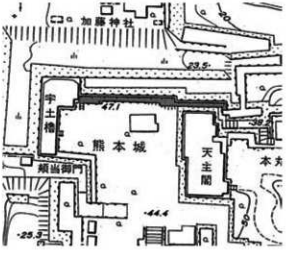
不明

・調査の概要

宇土櫓から御肴部屋櫓跡までの石垣では、現況より約1.5m下の部分に古い時期の天端が確認された。

・出土遺物

遺物は、近世の様相は瓦・陶磁器・金属製品である。近代の様相は陶磁器・金属製品である。



4-3-1-114 図　調査区位置図

＜5 頬当御門跡＞

報 告 書：熊本市教育委員会『熊本市埋蔵文化財調査年報 第16号』2014

調査期間：平成22年(2010) 9月7日～同年11月30日

調査面積：約60㎡

調査主体：熊本市教育委員会

・調査に至る経緯

頬当御門事務所棟の移設に先立つ、遺構確認調査である。

・調査の方法

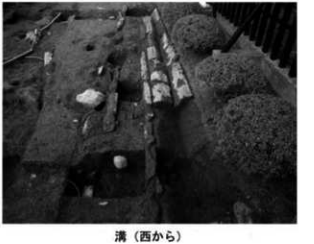
不明

・調査の概要

料金所の新設部分では、表土下に電気・水道などの埋設管が何本も通っていた。管路以外の部分も近代以降に撹乱を受けていたが、近世の整地あるいは自然堆積層である明黄褐色砂質土が部分的に残存しており、通路の南端に沿って東西方向に走る凝灰岩の溝が2条検出された。断面形がV字形を呈する溝は、古い遺構から転用した石材も使用しており、近代以降の設置である。もう1条は近世期の可能性がある。土坑は、出土遺物から見て幕末から明治初期に埋没したものである。門西側の調査区も後世の撹乱が激しく、門礎などの遺構は検出されなかった。

遺物は、近世の瓦や陶磁器、建築金具と近代の陶磁器・金属製品が出土した。

料金所新設部分（東から）



溝（西から）

4-3-1-115図　調査状況写真

【数寄屋丸】

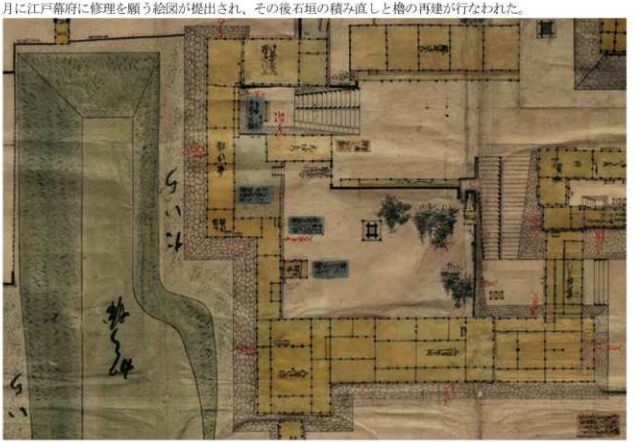
(1)概要

平左衛門丸の南に位置する曲輪で、西は空堀で奉行丸に、南は高石垣で飯田丸に接する。曲輪内には数寄屋丸五階櫓や二階御広間があった。寛永11年(1634)の「肥後国熊本城廻普請仕度所絵図」(熊本県立図書館蔵)には「二丸」とあるが[1]、正保期と推定される「平山城肥後国熊本城廻絵図」(熊本県立図書館蔵)[2]には「本丸之内」とあり、曲輪の規模は「東西四十間　南北三十一間」である。寛文6年(1666)の「御城分間」(永青文庫蔵)[3]には「御すきや丸五階御矢蔵」と見える。

明和6年(1769)頃の「御城内御絵図」(熊本市蔵)(4-3-1-116図)によると、頬当御門から入った先にある数寄屋丸櫓門から長櫓、三階櫓、五階櫓、二階御広間、地蔵櫓門は建物内部で繋がっており、これらの建物を経て地蔵櫓門北の御天守方口之間、耕作櫓門、札之間を通ると、天守や本丸御殿に向かうことができた。なお、寛政10年(1798)の「御天守方御間内之図」(熊本県立図書館蔵)[4]は数寄屋丸櫓門から天守までの平面を描いており、地蔵櫓門や二階御広間の一部は藩の武具・調度を管理する御天守方の「細工所」となっていて、天守等に保管していた什器の修理などが行なわれていたとみられる。数寄屋丸五階櫓は1階平面が8間×10間で、東に7間×18間の二階御広間が続いていた。二階御広間の北に続く地蔵櫓門は飯田丸から数寄屋丸に向かう通路に設けられた三階櫓門で、3階部分で二階御広間と御天守方口之間に続いていた。

曲輪の北と東は塀で囲われ、北の塀の平左衛門丸側には幅1間の「こしかけ」がある。数寄屋丸の東端に位置する地図石は、城内で唯一の切石積の技法が使われている場所である。「御城内御絵図」によると「御待合口」とあり、南には2間四方の「御待合」があることから、地図石は「御待合」へ向かう客の目を楽しませる意匠であろう。曲輪の中央には井戸があり、「御城図」(永青文庫蔵)及び西南戦争中の写真には宝形造りの井戸屋形が見える。

寛政8年(1796)6月には大雨のため、曲輪の西にある長櫓が石垣とともに崩落する被害が生じており、同年11月に江戸幕府に修理を願う絵図が提出され、その後石垣の積み直しと櫓の再建が行なわれた。



4-3-1-116図　御城内御絵図(熊本市蔵)　数寄屋丸部分

明治4年(1871)7月に鎮山神社が平左衛門丸に遷宮すると、数寄屋丸にも参詣者を相手にした2階建ての料亭らしき建物が建てられた[5]。明治5年(1872)までに長櫓・数寄屋丸五階櫓・二階御広間は解体されたことが古写真の変遷で確認できる。明治9年(1876)の「城郭之図」(国立国会図書館蔵)によれば、曲輪内の建物はすべて解体されている。

明治10年(1877)の西南戦争での政府軍・薩軍の配備を示した「両軍配備図」(熊本博物館蔵)には、数寄屋丸五階櫓台に「号砲」と記される。また、西南戦争中を写した写真(4-3-1-117図)には、曲輪内に仮設の小屋が複数建っており、地図石には樽や桶が置かれ、簡易な屋根が掛けられている様子が確認できる。

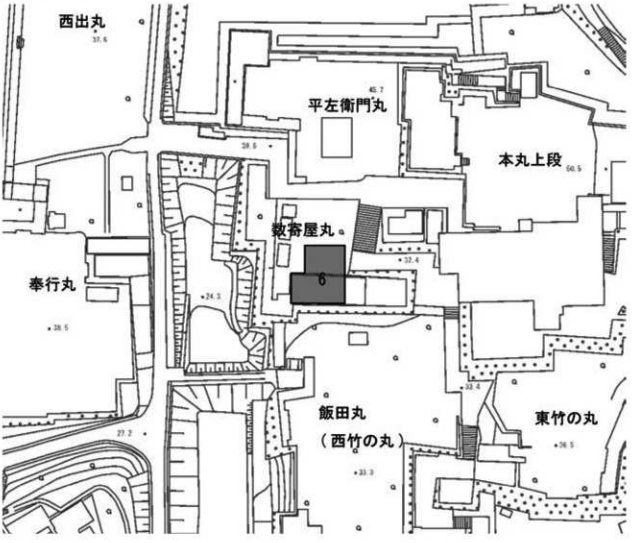
明治22年(1889)熊本地震では、頬当御門に近い長櫓台や数寄屋丸五階櫓台で石垣の崩落・膨らみの被害が生じ、積み直しが行なわれた。その後、平成元年(1989)に数寄屋丸二階御広間を復元し、現在に至っている。

4-3-1-117図　大天守台から見た数寄屋丸(宮内庁三の丸尚蔵館蔵)

---

[1]『特別史跡熊本城跡総括報告書歴史資料編　絵図・地図・写真』熊本市　2019　11～16頁
[2]　註1報告書　33～38頁
[3]『特別史跡熊本城跡総括報告書歴史資料編　史料・解説』所収165号文書
[4]　註1報告書　82～91頁
[5]　註1報告書　171頁

(2) 発掘調査成果



6. 数寄屋丸二階御広間跡

4-3-1-118 図　数寄屋丸調査地点位置図

＜6 数寄屋丸二階御広間跡＞

報 告 書：『熊本城管理棟新築に伴う熊本城数寄屋丸調査報告書』熊本大学工学部建築学教室 北野研究室 1983

調査期間：昭和 58 年 (1983)

調査面積：不明

調査主体：熊本大学工学部建築学教室 北野研究室

・調査にいたる経緯

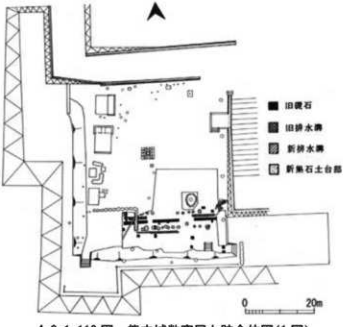
数寄屋丸二階御広間跡に熊本城管理事務所の管理棟建設の計画が起こり、新事務所の設計についての条件などを提案するために調査が行なわれた。

・調査の方法

調査区域は数寄屋丸南側であるが、井戸西側沿いには便益施設、受電室などがあるため、その周辺は調査地から外された。また、西側一帯に高圧電線の埋設が認められ、その確認が行なわれた。

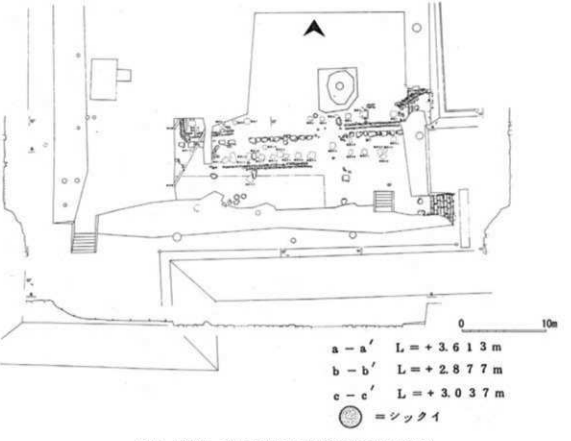
・調査の概要

主な遺構として数寄屋丸南側を中心に礎石、排水溝などが検出された。排水溝は凝灰岩の切石が使用され、東面に約26mにわたって残存している。排水溝の南側に沿って安山岩を用いた礎石の列石が27mにわたって検出された。礎石と排水溝の間は約50cmである。これらの遺構の約3mの南にも底に和瓦を敷いた凝灰岩製の排水溝がみられる。この排水溝は先述の排水溝よりも新しい。敷石をもつ排水溝の北側は、明治時代と江戸時代の瓦が大量に混在し、金具類などもみられた。また、調査区域南側の一部は攪乱をうけている。現存する東側の石段の埋もれていた部分には石の間に塗りこめた漆喰がみられた。

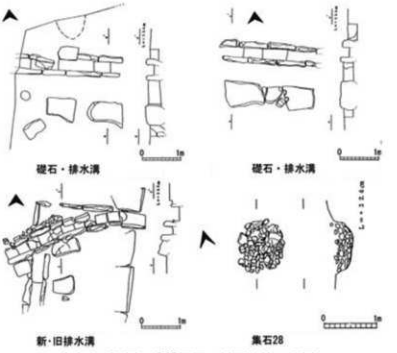


4-3-1-119図　熊本城数寄屋丸跡全体図(1図)

大半が古瓦で、平瓦・軒平瓦・軒丸瓦・筒瓦などであるが、中に朝鮮瓦(滴水瓦)が出土し、その中の1枚に、「延享四」の銘があった。陶磁器類としては、有田系の染付が大部分である。



4-3-1-120図　熊本城数寄屋丸跡遺構配置図(2図)



4-3-1-121 図　遺構平面・断面図(3 ～ 6 図)

4-3-1-122 図　出土瓦拓本

【西竹の丸(飯田丸)】

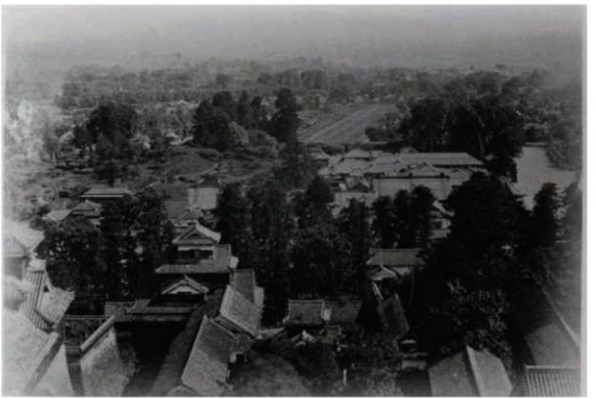
(1)概要

飯田丸は数寄屋丸の南に位置する曲輪である。加藤時代の「熊本屋鋪割下絵図」(熊本県立図書館蔵)には「たけの丸」と呼称されている[1]。名称の由来は、清正の妻である「竹之丸殿」が居住したことによると考えられる。本図では西櫓門、札櫓門、冠木門が描かれるが、他の櫓などの建築物の状況は不明である。細川家入国後の「肥後国熊本城廻普請仕度所絵図」(熊本県立図書館蔵)には「二丸」とあるが[2]、正保期と推定される「平山城肥後国熊本城廻絵図」(熊本県立図書館蔵)では「本丸之内」として、曲輪の規模を「東西四拾七間　南北五拾八間」と記す[3]。その後の絵図では特にこの曲輪を「西竹之丸」と呼称している。寛文6年(1666)に作成された「御城分間」(永青文庫蔵)[4]では、「西竹之御丸五階御矢蔵」、「西竹之御丸大塚甚右衛門預ノ五階御矢蔵」と記され、前者が平成17年(2005)に復元された飯田丸五階櫓、後者が西竹の丸五階櫓であると考えられる。「西竹之御丸五階御矢蔵ノ高サ」は18間であり、うち9間半が「五階御櫓士台より瓦棟迄」、8間半が「石垣ノ高サ」となっている。「西竹之御丸大塚甚右衛門預ノ五階御矢蔵」の高さは16間2尺、「五階御矢蔵士台より瓦棟迄」が9間、「石垣ノ高サ」が7間2尺と記される。

曲輪内の状況を「御城内御絵図」(熊本市蔵)(4-3-1-123図)によって見ていく。曲輪内の建築物としては、西南隅に五階櫓(飯田丸五階櫓)があり、五階櫓から数寄屋丸に向かって百間櫓が続いている。百間櫓の途中には西

4-3-1-123図　御城内御絵図(熊本市蔵)　飯田丸部分

4-3-1-124 図　南坂下から見た飯田丸（長崎大学附属図書館蔵）



4-3-1-125 図　大天守最上階から南方を見る（熊本市寄託）

櫓門があり、西櫓門の東側に御道具入（御側組と御持筒組）、隅櫓の北側に鉄炮蔵があった。五階櫓から東に向かって隅櫓、平櫓、三階櫓と櫓番詰所、元塩蔵があった。元塩蔵から北に向かって塀が続き、中途に曲輪の出入口である「西巌丸入口冠木御門」があり、門のすぐ西に 8 間×11 間の「飯田屋敷御台所」があった。現在は井戸だけが残っている。

また、「御城内御絵図」とその写によれば、曲輪内で解体された建物は2棟で、一つは「飯田屋敷御台所」の北側に存在した「二間梁六間之御座敷方詰所」で、宝暦5年(1755)に解体されている。一つは元塩蔵の西側にあった「六間梁拾弐間」の蔵で、明和9年(1772)に解体されている[5]。この2棟の建物は、「御城内御絵図」以前に成立したとみられる「御城図」(永青文庫蔵)にも確認できる[6]。江戸後期に描かれた「熊本城図」(永青文庫蔵)[7]には「御城内御絵図」の作成時点で存在した建物がすべて描かれており、曲輪のなかに建物の解体や増改築等の大きな変化は見られない。なお、現在もっぱら使用されている「飯田丸」の名称は江戸時代には確認できず、明治時代以降に定着したものである。その由来は、曲輪内にあった「飯田屋敷台所」であろう。

明治4年(1871)に天守から撮影した写真(4-3-1-125図)には、曲輪の中央部に「御城内御絵図」には見えなかった建物が確認できる。その後、明治9年(1876)の「城郭之図」(国立国会図書館蔵)[8]によると曲輪の中央に2棟の長大な建物が見えるが、これは鎮台が武器庫として利用したものであった。明治8〜9年(1875〜1876)頃の撮影と考えられる2点の古写真から、明治9年頃に百間櫓の北側の撤去が確認できる[9]。飯田丸五階櫓の石垣は火災による高熱を受けた形跡がみられないため、西南戦争以前に残る百間櫓とともに五階櫓も撤去されたとされる。

西南戦争における飯田丸での戦闘開始は『熊本鎮台戦闘日記』[10]によれば2月22日で、城の南西にある安巳橋・長六橋から薩軍が侵攻すると下馬橋の砲台から攻撃を開始し、さらに飯田丸・千葉城の砲兵や竹の丸の歩兵も加わって榴弾・榴霰弾で防衛が行なわれた。また、2月23日の記述では、薩軍が花岡山と四方池村に砲台を設置したことに対し、「飯田丸ノ砲台ヨリ山野砲及ヒ二十拇臼砲ヲ連発シ」、掃討を試みている。薩軍の応戦にあうが、野砲榴弾によって四方池村の砲台の砲車を破壊しており、飯田丸には野砲・臼砲・山砲が配備されていたことが判明する。西南戦争の翌年に熊本鎮台によって作成された「両軍配備図」(熊本博物館蔵)[11]には、五階櫓台跡に砲台2つと臼砲台1つが描かれる。さらに、27日には飯田丸に配備されていた山砲一門を、坪井横町方面の薩軍への砲撃のために本丸上段とみられる「櫓ノ焼跡」に移している。また、戦闘が激化し武器の損傷や弾薬の消耗が進んだため、22日に飯田丸に武器の支給場を設置し、若干名の銃工を置いて少しの損傷であれば飯田丸で修理させた。弾薬の貯蔵場所については、2月15日に竹の丸と櫨方の両所に火薬庫を置いたと記述があるが、23日に薩軍の砲撃の危険を避けるため、飯田丸から平左衛門丸へ向かう中途の地蔵櫓門跡に坑倉を掘り、各種の弾薬を移転させた。薩軍の主要な砲台は、花岡山・四方池村・長六橋・安巳橋に置かれ、飯田丸にも度々薩軍の砲弾が飛来しており、兵器庫に落下し武器が損傷を受けるなどしている。なお、飯田丸にも弾薬の格納所があり、飛来する砲弾の被害を防ぐため、厚さ1寸の板数十枚で屋根が補強された。

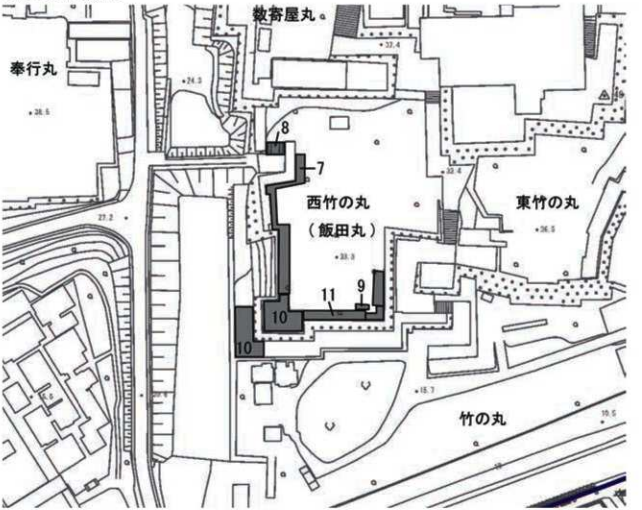
明治21年(1888)、熊本鎮台が第六師団へ改変されると、千葉城に置かれていた歩兵第十一旅団の本部が飯田丸に移った。明治22年熊本地震では飯田丸五階櫓台、隅櫓台、西櫓門周辺で石垣崩落の被害が生じた[12]。このうち飯田丸五階櫓台については被害を撮影した写真が残されており[13]、櫓台の中ほどまで崩落した石材が下段の要人櫓台に落下し、その重みで要人櫓台も被害を受けた。

戦後は梅園として整備されたほか、平成17年(2005)には飯田丸五階櫓が木造復元されている。

---

[1] 『特別史跡熊本城跡総括報告書歴史資料編　絵図・地図・写真』5〜10頁
[2] 註1報告書11〜16頁
[3] 註1報告書33〜38頁
[4] 特別史跡熊本城跡総括報告書歴史資料編　史料・解説』所収165号文書
[5] 木下泰葉「熊本城の『御城内御絵図』」『熊本城調査研究センター年報1』2015
[6] 註1報告書47〜68頁
[7] 註1報告書100〜101頁
[8] 国立国会図書館蔵「熊本城郭及市街之図」　註1報告書152頁
[9] 富田紘一『古写真に見る熊本城と城下町』肥後上代文化研究会　1993
[10] 日本史籍協会編『熊本鎮台戦闘日記』東京大学出版会　1977
[11] 熊本市立熊本博物館蔵　註1報告書154〜155頁
[12] 宮内公文書館蔵「震災ニ関スル諸報告」　註4報告書356号文書
[13] 国立科学博物館蔵「旧熊本城飯田丸　第六師団弾薬庫石垣崩壊之景」　註1報告書202頁

(2)発掘調査成果



7. 百間櫓跡　8. 西櫓門跡　9. 鉄炮櫓跡　10. 飯田丸五階櫓跡　11. 隅櫓跡・塀跡

4-3-1-126 図　西竹の丸（飯田丸）調査地点位置図

【西竹の丸（飯田丸）】

報 告 書：熊本市熊本城総合事務所『特別史跡熊本城跡　飯田丸一帯復元整備事業報告書』2005 年
※百間櫓跡・飯田丸五階櫓跡
熊本市熊本城調査研究センター『熊本城跡発掘調査報告書 1- 飯田丸の調査 -』2014 年
※百間櫓跡・西櫓門跡・鉄炮蔵跡・飯田丸五階櫓跡・隅櫓跡・南辺石塁・東辺石塁・塀跡

調査期間：平成 10 年(1998)10 月～平成 13 年(2001)3 月

調査面積：約 1500 ㎡

調査主体：熊本市教育委員会

以上は各調査地点と同じであるため、省略している。

・調査に至る経緯

熊本城跡では、平成 9 年度に「熊本城復元整備計画」を策定し、史実に基づいた建造物・遺構の復元・修理を行なうことを決定した。この「復元整備計画」は短期・中期・長期に分けて進められており、短期スケジュールの第 2 期として、飯田丸五階櫓の復元とともに飯田丸の石垣の膨らみが激しい箇所や明治初期に撤去された部分の石垣解体修理および復元整備工事が行なわれることになり、平成 12 年度の工事着工前に遺構の残存状況を確認するための発掘調査を実施した。

・調査の方法

平成10年度の調査では、まず地形測量を行なった上で五階櫓台上面に約1m四方の試掘トレンチを5ヵ所設定して人力で掘り下げを行ない、遺構面までの深さを確認した。曲輪内部では、土層の堆積状況の確認や櫓台石垣の根石や埋没した雨落ち溝などを検出するため、24ヵ所にトレンチを設定した。櫓台上面の調査面積は五階櫓で330㎡、百間櫓で640㎡、トレンチの総面積は240㎡である。

平成12年度は、五階御櫓の建造物復元整備工事に伴う素屋根基礎掘削工事に先立ち、五階櫓台西側裾の小段から南側の要人櫓跡までを対象にして、土層の堆積状況と遺構の残存状況等を把握するための確認調査を実施した。幅60㎝(部分的に1m)のトレンチを五階櫓台の西側裾に2ヵ所、南側に1ヵ所設定した。11月より素屋根基礎設置部分の掘削と石垣解体修理工事が開始されたため、掘削によって発生した排土を曲輪内に仮置きし、遺物の採集を行なった。石垣の解体修理工事については、解体完了後の遺構精査と根石の検出、図面作成作業などを中心に行なった。

調査グリッドは、縮尺2500分の1の地図上において日本測地系座標を基に設定した。まず、熊本城域全体を覆うように500m×500mの大グリッドを設けてA～Mのアルファベットを冠し、それぞれのグリッド中に5m×5mの小グリッドを設定して北から南、東から西へ1～100の番号をつけ、アルファベットの大グリッド名と小グリッドの数字2つを組み合わせてグリッド名とした。(例：A 100-100グリッド)

・調査の概要

基本土層はⅠ～Ⅳ層に大別する。調査区・トレンチごとの土層内容は、実測断面図を基に報告する。

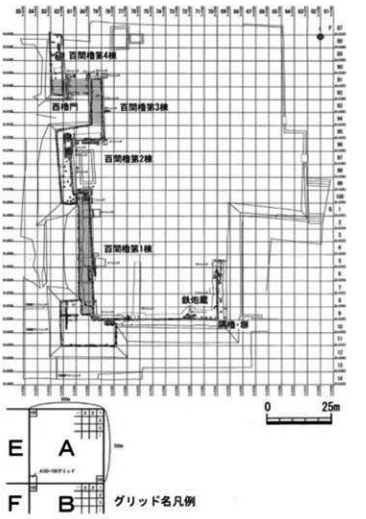
Ⅰ層：現代の表土・撹乱層。
　砂礫・瓦片などを含む黒褐色～暗褐色土。

Ⅱ層：近代～現代の堆積土。
　主として明治初期以降の堆積土。
　砂礫・瓦片などを大量に含む
　黒褐色～暗褐色土。

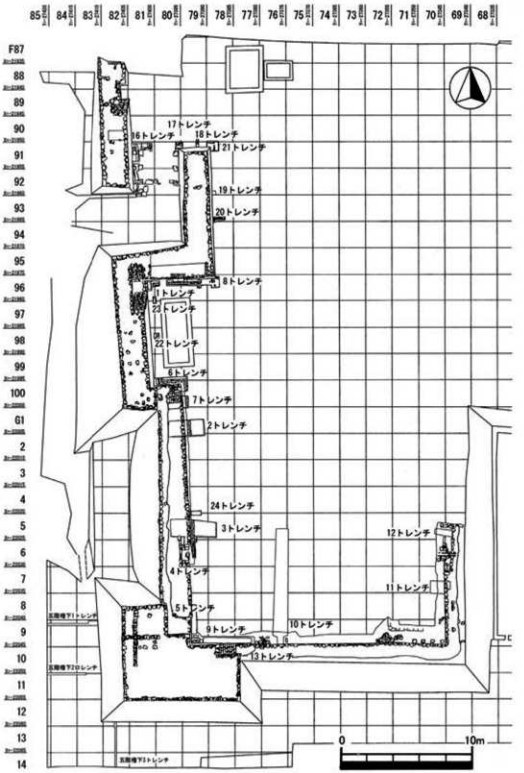
Ⅲ層：近世～近代の堆積土。
　主として幕末～明治初期の堆積土。

Ⅳ層：近世の堆積土。
　近世の整地土および遺物包含層。
　　主に灰白色・明黄褐色・暗褐色・黒褐色などの色調を呈する粘質土または砂質土、凝灰岩質の二次堆積土などからなる。

なお、飯田丸の曲輪内では、明瞭な自然堆積層を確認できなかった。



4-3-1-127図　調査区・グリッド配置図(第55図)



4-3-1-128図　遺構配置図(第56図)

遺構

調査前の現況では、百間櫓台の南側約2分の1と曲輪の南・東辺石塁の内側の石垣が失われており、斜面の状態であった。石垣撤去の詳細な時期を示す出土遺物は得られていない。五階櫓台の形状はほぼ原形を留めていたが、明治22年(1889)熊本地震によって南面の石垣が大きく崩れており、調査前の石垣観察では、櫓台の西面にも積み直しの痕跡が認められた。以下各建築物跡の調査成果を記載する。

<7 百間櫓跡>

飯田丸五階櫓から北へ延びる長大な続櫓で、棟違いの4棟を総称して「百間御櫓」という。便宜上、南から北へ順に「第1～4棟」の仮称を付け、棟ごとに報告を行なう。

a．第1棟(4-3-1-129図～4-3-1-134図)

飯田丸五階櫓の付櫓を含む南北棟と、その北端から第2棟側へ延びる桁行1間の部分を併せて第1棟とする。外面石垣の天端部分での長さは36.5mで、北端から西へ1.5m延びて第2棟の櫓台に続く。天端の標高は飯田丸五階櫓台際で35.4m、北端で約36mである。内面石垣が失われた部分を中心に2～7トレンチを設定し、石垣の残存状況などの確認を行なった。

櫓に直交するように設定した2･3･6･7トレンチでは、現地表面下20～60cmの深さに石垣の下部が残存しており、同じく現地表面より50～80cm下の部分(標高32.4～32.8m)で近代以降の攪乱を受けていない土層(Ⅳ1層)を確認した。

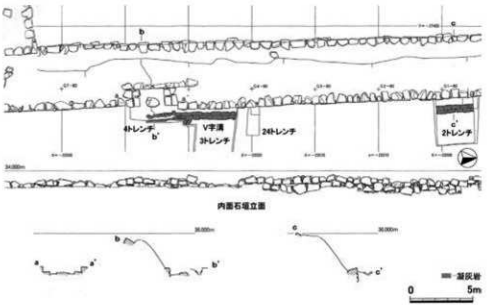
残存石垣の東側では、Ⅳ1層より上位で凝灰岩をV字形の溝状に組み合わせた石組遺構(以下V字溝とする)を検出した。

6･7トレンチ間には幅約2m、奥行2.6mの東－西方向の石階段があり、7段の階段が残存する。この石階段は内面石垣が失われた後の斜面に築かれたもので、北東の出隅部分に「御城内御絵図」と同じ北－南方向の石階段が残存していた。現地表面から約60cm下の部分(標高32.8m)で近世の堆積(Ⅳ1層)を確認しているため、検出した最下段は使用時にも埋没した状態だったと考えている。

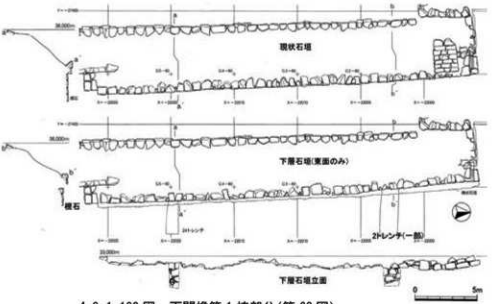
4トレンチは「御城内御絵図」にある合坂部分を確認するために設定した。下から2段分の石階段と奥壁の石垣が残存しており、平場部分の南北幅は約2m、東西の奥行が1.4mである。平場には裏込めと同じ栗石が敷かれており、その中央東寄りの位置に長辺約1m、短辺約80cmの安山岩がほぼ水平に座った状態で検出した。4トレンチでもV字溝を検出した。

解体修理工事の際に第1棟の内面石垣全体を検出したところ、4トレンチの合坂から北側と南側では石垣の通りが合わなかったため、2トレンチ内にサブトレンチ、3トレンチの北側に24トレンチを設定し、合坂以北では残存石垣の下位に別の石垣が存在することを確認した。

第1棟の南端には5トレンチを設定した。五階櫓の付櫓部分に残っていた石垣は北･東面共に長さ約3mで、天端は平場から1.7m高く、五階櫓台より約1.5m低い。天端には延石状に細長く加工した安山岩なども使用されていた。



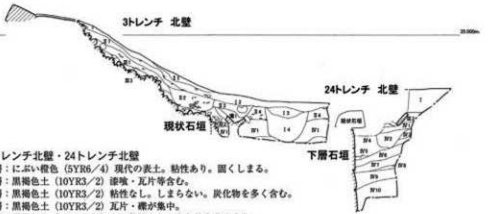
4-3-1-129図　百間櫓第1棟(第61図)



4-3-1-130 図　百間橹第１棟部分(第 62 図)

２トレンチ北壁
Ⅰ層：黒褐色土（10YR2／2）現代の表土。粘性なし。
Ⅱ層：暗褐色土～黒褐色土（10YR3／3～3／2）粘性なし。しまる。
軽石状の混入物を多く含む。
Ⅲ1層：黒褐色土（10YR3／2）粘性なし。固くしまる。軽石状の混入物含む。
Ⅲ2層：黒褐色土（10YR3／2）やや粘性あり。Ⅳ3層と軽石状の混入物含む。
Ⅲ3層：暗褐色土（10YR3／3～3／4）粘性なし。固くしまる。火砕流と褐色粘質土
（10YR4／4）のブロックを含む。
Ⅲ4層：暗褐色土（10YR3／3）粘性なし。固くしまる。漆喰の塊や砂礫・瓦片を多く含む。
Ⅲ5層：暗褐色土（10YR3／3）粘性なし。固くしまる。漆喰片と火砕流の粒を多く含む。
Ⅲ6層：黒褐色土（10YR3／2）粘性なし。固くしまる。火砕流の粒を含む。
Ⅲ7層：褐色土（10YR4／4）粘性なし。しまる。乾燥すると固い。
Ⅳ1層：暗褐色土（10YR3／3）やや粘性あり。しまり強く、固い。火砕流や軽石状の混入物を含む。
Ⅳ2層：暗褐色土（10YR3／3）灰白色（10YR7／1）の軽石状の混入物含む。
Ⅳ3層：黄褐色土（10YR5／6）粘性・しまり強い。火砕流の二次堆積土。
Ⅳ4層：暗褐色土（10YR3／3）粘性強く、しまる。軽石状の混入物多く含む。
Ⅳ3層と灰白色土（10YR7／1）のブロックが混じる。
Ⅳ5層：褐色土（10YR4／4）粘性・しまり強い。砂粒含む。
Ⅳ6層：黄褐色土（10YR5／8）粘性・しまり強い。砂粒含む。
Ⅳ7層：褐灰色土（10YR6／1）凝灰岩質の二次堆積土。
Ⅳ8層：黒褐色土（10YR3／2）粘性あり。しまる。Ⅳ6層・Ⅳ10層の粒を含む。
Ⅳ9層：黄褐色土（10YR5／8）Ⅳ6層に類似。
Ⅳ10層：灰白色土（2.5Y8／1）粘性・しまり強い。砂粒を含む。
Ⅳ11層：褐灰色土（10YR6／1）凝灰岩質の二次堆積土。
Ⅳ1～11層は石垣改変後の埋土と整地土か。
Ⅳ12層：黒褐色土（10YR2／3）粘性・しまり強い。砂粒含む。
Ⅳ13層：灰白色土（2.5Y8／1）粘性・しまり強い。砂粒を含む。
Ⅳ14層：褐灰色土（10YR4／1）凝灰岩質の二次堆積土。
Ⅳ15層：灰白色土（2.5Y8／1）・にぶい橙色～橙色土（7.5YR6／4～6／6）
粘性・しまり強い。砂粒を含む。
溝1層：暗褐色土（10YR3／3）粘性・しまりなし。炭化物含む。
瓦片・礫により埋戻したものか。
溝2層：暗褐色土（10YR3／3）粘性あり。しまる。

4-3-1-131 図　２トレンチ断面図(第 63 図)



3トレンチ北壁・24トレンチ北壁
Ⅰ1層：にぶい橙色（5YR6／4）現代の表土。粘性あり。固くしまる。
Ⅰ2層：黒褐色土（10YR3／2）漆喰・瓦片等含む。
Ⅰ3層：黒褐色土（10YR3／2）粘性なし。しまらない。炭化物を多く含む。
Ⅰ4層：黒褐色土（10YR3／2）瓦片・礫が集中。
Ⅱ1層：黒褐色土（10YR3／2）やや粘性あり。白色粒を多く含む。
Ⅱ2層：暗褐色土（7.5YR3／3～3／4）粘性なし。乾燥すると固くしまる。
火砕流の粒を含む。
Ⅱ3層：暗褐色土（10YR3／4）粘性なし。乾燥するとしまる。漆喰粒を多く含む。
Ⅱ4層：黒褐色～暗褐色土（10YR3／2～3／3）粘性なし。白色粒を含む。
乾燥すると固くしまる。
Ⅲ1層：暗褐色～褐色土（10YR3／3～4／4）やや粘性あり。間隙目立つ。
Ⅲ2層：暗褐色土（10YR3／3）粘性あり。火砕流の粒を含む。
Ⅲ3層：灰黄褐色土（10YR4／2）粘性なし。ブロック化し、崩れ易い。
火砕流の粒を含む。
Ⅳ1層：黒褐色土（7.5YR3／2）粘性あり。軽石状の混入物や火砕流の粒を含む。
Ⅳ2層：灰白色土（N8／）凝灰岩質の二次堆積土。
Ⅳ3層：黄褐色土（10YR5／6）粘性・しまり強い。
Ⅳ4層：灰白色土（10YR7／1）・にぶい黄橙色土（10YR3／3）
固くしまる。火砕流のブロック・粒を含む。
Ⅳ5層：黄褐色土（10YR5／8）粘性・しまり非常に強い。
Ⅳ6層：黒褐色土（10YR3／2）粘性・しまり非常に強い。
Ⅳ5・Ⅳ8層の粒を含む。
Ⅳ7層：黄褐色土（10YR5／8）Ⅳ5層に類似。
Ⅳ8層：暗褐色土（10YR3／3）しまり弱い。乾燥すると固い。
Ⅳ2層の粒を含む。
Ⅳ9層：黒褐色～暗褐色土（10YR3／2～3／3）粘性・しまり非常に強く、固い。
Ⅳ10層：黒褐色土（10YR3／2）しまり強く、非常に固い。

4-3-1-132 図　3・24 トレンチ断面図（第 64 図）

b．第 2 棟（4-3-1-133 図・4-3-1-134 図）

第 1 棟より西側へ張り出す南北棟と、その北端から東へ折れる東西棟を第 2 棟とする。南北棟の規模は天端部分で長さ 29 m、幅約 5 mである。天端の標高は外面石垣で 37.2 ～ 37.5 m、内面石垣ではそれより 20 cm前後下がる。

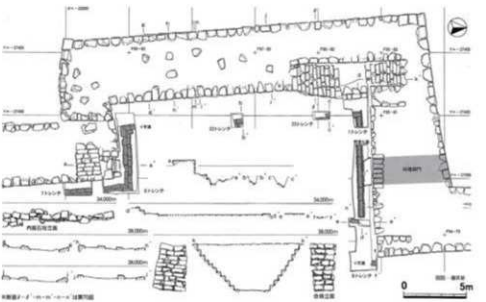
櫓台の上面では礎石が数石残存しており、石垣天端の平面配置などから推測される柱間寸法は約 2 mと推測される。内面石垣の北端には合坂があり、天端を含めて北側に 10 段、南側に 11 段の石階段を有する。最下段は栗石の敷き詰められた平場と同じ高さに座っており、1 トレンチでこの平場からの下り口となる石階段を検出した。石階段下段の表面から約 30 cm下で近世の地表面（Ⅳ 1 層）を確認している。東西棟の規模は、天端部分の計測で合坂際から櫓台東端までの長さが約 14 m、南北の幅は同じく合坂際で 5 m、東端では 6 mである。北面石垣の天端の標高は 37.3 m前後で、東端の入隅には櫓台の下部を抜ける幅 2.3 mの向埋御門が現存する。南面の向埋御門より上位の石垣は、両端に幅 1.5 m分を残して失われており、立面形は凹形を呈していた。第 2 棟の周辺には 1・8・22・23 トレンチを設定した。東西棟の南面石垣沿いに設定した 8 トレンチでは、表土の下位でV字溝と東西方向に並ぶ石敷遺構を検出した。溝は、南から櫓台の東側出隅近くに突き当たって東へ折れ、出隅から北は櫓台に沿って走る。第 3 棟横の 20 トレンチで再び東へ折れており、曲輪の東側へ導水していたようである。石敷遺構は、V字溝際から西側へ延びている。表土直下の検出で、掘り込みは確認しておらず、遺構の性格は不明である。

8 トレンチの西側と合坂横に設定した 1 トレンチでは、断面形が箱形を呈する凝灰岩製の溝を検出した。1 トレンチでは折れ口を検出しており、基底面の傾斜から南側へ導水していたことがわかる。櫓に伴う雨

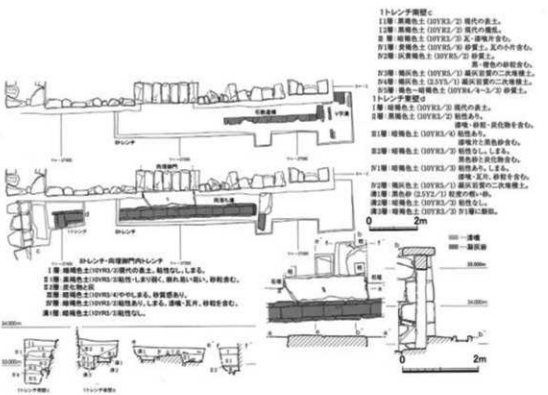
落ち溝の可能性が高い。溝の東側は櫓台の東端から西へ約 2.4 mの地点で塞がれている。1 トレンチの雨落ち溝の延長線上に 22･23 トレンチを設けたが、いずれも 3･4 トレンチなどで検出されたものと一連のV字溝を検出した。

向埋御門の南口では、雨落ち溝に沿って東西長 2.2 m、奥行 60 ㎝の安山岩を検出した。石の北側に小規模なトレンチを設定して掘り下げたところ、南口の安山岩より約 20 ㎝低い部分で別の水平に座った安山岩を検出したため、門の北口に向かって下る階段状の配石を想定した。

門内は両側壁に沿って計 16 本の石柱が並んでおり、長さ約 2.4 mの安山岩を渡し、その上に安山岩を並べて天井部としている。現況の石柱は後世に追加されたものである。



4-3-1-133 図　百間櫓第 1･2 棟（第 66 図）

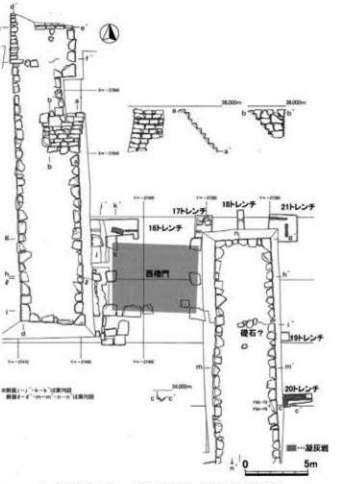


4-3-1-134 図　1･8 トレンチ　（第 67 図）

c．第３棟(4-3-1-135 図)

第２棟から続く南北棟と西櫓門の上部櫓を第３棟とする。南北棟と上部櫓の東側が架かる櫓台の規模は、天端部分の計測で南北長 17.5 m、東西幅約５m である。天端の標高は 37.3 ～ 37.4 m で、北側がやや高い。

上部櫓の東側が乗る部分では表土が薄く、裏込めが石垣天端とほぼ同じ高さで検出された。礎石はみられず、後世に栗石が追加された可能性がある。南北棟・上部櫓西側の櫓台上面では明瞭な礎石は確認していない。



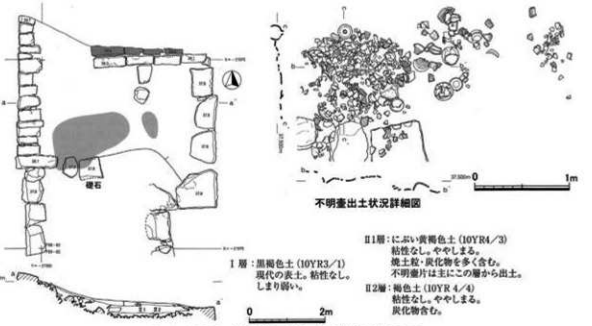
4-3-1-135 図　百間櫓第３･４棟(第 68 図)

d．第４棟(4-3-1-135 図･4-3-1-136 図)

数寄屋丸直下の櫓台において、西櫓門の上部櫓以北を第４棟とする。櫓台全体の規模は天端上面で南北長 23.5 m、東西幅約５m で、そのうち第４棟に相当する部分の長さは 16.5 m である。天端の標高は 37.6 ～ 37.8 m で、北側がやや高くなっている。第４棟は、櫓台の中程から北側に、天端を含めて９段分の南へ上る石階段が残存していた。

櫓台の北端では、約 20 ㎝角で、長さ 60 ～ 80 ㎝に加工された安山岩が数寄屋丸の石垣裾に沿って並んでおり、石垣との隙間はモルタル様の目地材で埋められていた。北西隅の天端では、安山岩の割石が数寄屋丸の石垣に寄せ掛けるように積み重ねられ、背後には安山岩の割栗石を主体とする裏込めが充てられていた。この安山岩の石積みは、櫓台天端からの高さが北端で約 2.6 m に達し、西側は天端よりも 20 ～ 30 ㎝外側にせり出している。櫓の撤去後に外からの侵入を防ぐ目的で積まれたものと推定される。石積みの中には九曜紋を陽刻した鬼瓦様の石材がみられた。櫓台の天端から 1.5 m 内側に入った位置で櫓の礎石に相当すると思われる安山岩を１石検出した。

櫓台北端の 12 ㎡の範囲には、表土の下位に焼土粒と炭化物の混入が目立つ遺物包含層(Ⅱ1･Ⅱ2 層)が存在していた。用途不明の壷(以下、不明壷とする)の破片がまとまって出土している。出土総重量は 40 kgを越えた。



4-3-1-136 図　第 4 棟不明壷出土状況（第 71 図）

百間櫓跡出土遺物（4-3-1-137 図～ 4-3-1-139 図）

櫓台および周辺の 1 ～ 8 トレンチ、16 ～ 23 トレンチから出土した遺物である。陶磁器・土器類・ガラス製品・金属製品・石製品がある。

a．陶磁器・土器類

中世（1 ～ 3）

1・2 は土師器坏である。2 は器形から 15・16 世紀の所産とみられる。3 は瓦質土器火鉢で、深鉢形を呈するものである。

近世（4 ～ 9）

4・5 は肥前系磁器染付で、4 は端反碗蓋、5 は端反碗である。6 ～ 8 は皿類をまとめた。7 は漳州窯系磁器青花皿である。8 は土師器小皿である。9 は備前焼の擂鉢で備前焼近世 1 期に位置付けられる。

近代（10 ～ 47）

10 ～ 18 は、時期・産地・用途ともに不明の壷である（以下「不明壷」）。14 を除き、出土状態から一括廃棄されたものと判断される（4-3-1-136 図）。

a 類（10 ～ 12・14）：焼成には 2 種がある。すなわち、肥前陶器のような赤褐色の胎土を呈する陶器質（13）と、その他の焼成が良好な土師質である。残存状態の良好な 11 ～ 13 は細頸で、肩部に 90 度ごとに 4 箇の円孔が認められる。

b 類（15 ～ 18）：焼成は、やや焼きの甘い焼締め陶器である。

19 ～ 31 は碗をまとめた。19・20 は関西系陶器碗である。21 は肥前系染付の平形碗である。22・23 は同形態の磁器色絵飯碗で、セット関係が評価される。24 は磁器染付碗である。25 は磁器釉下彩碗。26 は磁器染付小碗である。27 ～ 31 は軍用食器である。27 ～ 29 は磁器釉下彩で、軍用食器に特徴的な酸化クロムを用いた外面横線が認められる。27 は飯碗蓋、28・29 は小碗である。30・31 は湯呑碗である。31 は磁器釉下彩である。32 ～ 38 は皿類をまとめた。32・33 は硬質陶器の洋皿で、32 は、その意匠から東洋陶器製と判断される。34 は青磁小皿である。35 は青磁染付皿。36 ～ 38 は磁器釉下彩である。38 は輪花皿。

39 は磁器釉下彩鉢である。40・41 は白磁の軍用食器鉢である。40・41 ともに内底に統制番号「有 8」が陰刻されている。42 ～ 44 は磁器小坏で、胎土はいずれもガラス質で光沢を帯びる。42・43 は染付である。

44は色絵の記念坏。45は肥前系磁器染付の段重である。47は磁器釉下彩の缶詰蓋である。時期不明(48～52)

48は白磁製碍管である。49～52は土師質のフイゴ羽口である。

b．ガラス製品(53～56)

53は瓶蓋である。54･55は小瓶である。56は卓上インク入れである

c．金属製品

調度具(58、59～64)

58～64は笹金物で表面のみを鍍金している。

建築金物(65～73)

65は鉄製の壷金物である。66～73は鉄釘である。

武器･軍用品(74～176)

74は鉛製の火矢筒あるいは大鉄砲の銃弾である。75～81は鉛製の火縄銃弾、82～85は鉛製の火縄銃弾あるいはゲベール銃弾である。86～93は鉄製の火縄銃弾である。94は鉄製の火縄銃弾あるいは榴散弾の弾子で、錆化が著しい。

95～100は火縄銃の銅製のカラクリ部品である。95は雨覆、96～98は雨覆の下部に接してこれを支える部品(名称不明)で、96･97は竹節状の装飾を施している。99は火蓋鋲で、火皿と火蓋との蝶番部分を留めるものである。100は矢筈鋲で、弾金の端部を台に留めるものである。101～103の銅製鋲も素材･形状から火縄銃部品の可能性を指摘できる。104～143は鉛製のエンフィールド銃弾である。145はスペンサー銃実包、146はスペンサー銃薬莢である。147～153はスナイドル銃薬莢である。

155～163は銅製の摩擦管である。155～157はL字形摩擦管である。158～163はI字形摩擦管である。164～166は刀の部品である。164は銅製の小栖である。表の文様彫刻は花文陽刻で花弁や葉の脈を毛彫りにより表現している。165･166は銅製の切羽である。167は銅製の洋式剣の鐺で、鞘の木質部が残存している。168～173はピンバックル式の銅製のベルト金具である。174は銅製の帽章の裏金である。175･176は、真鍮製とみられる釦である。175は警察(旭日章)、176は警察予備隊(鳩と旭日章)のもの。

銭貨(177～189)

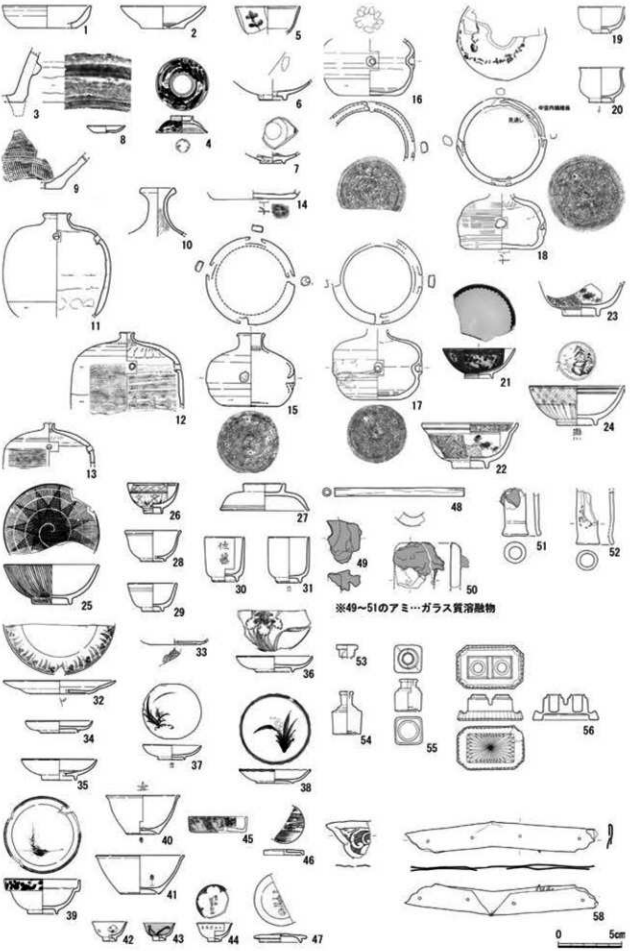
177は元豊通宝(篆書体)である。178～183は寛永通宝で、178･179は古寛永、181～182は新寛永、183は鉄四文銭である。184は仙台通宝である。185は十銭白銅貨である。186は十銭錫貨である。187は一銭銅貨である。188は一銭アルミ貨である。189は1セント銅貨である。

他の金属製品(190～198)

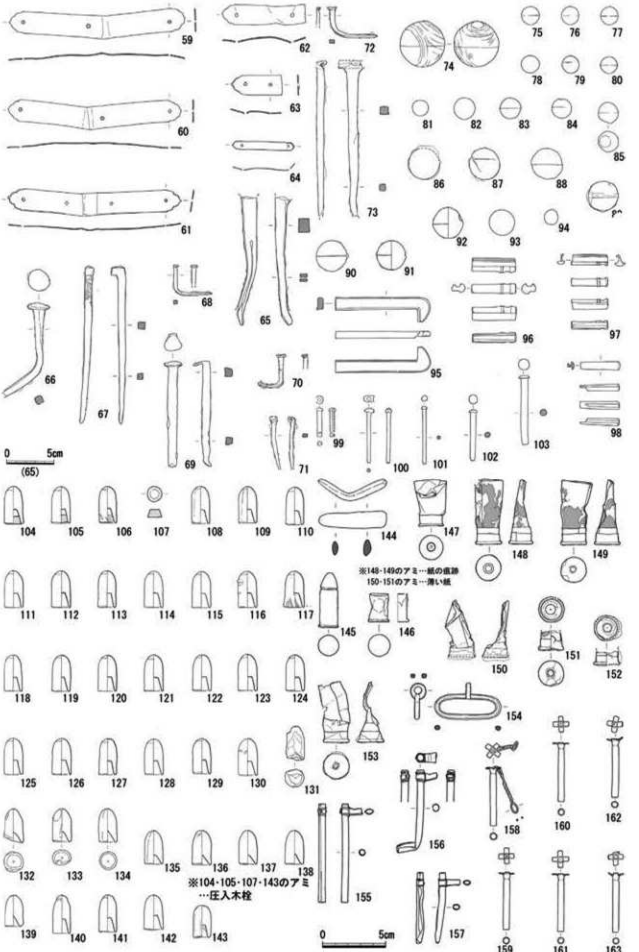
190は煙管の雁首で、火皿･脂返しの湾曲が小さい型式である。肩は鉄製である。191～193は銅製の用途不明の筒状品である。191･192は銅板を巻いて成形している。194は銅製の留具であろうか。195･196はブリキ製であろうか、端部を折り返して整形した薄い帯状の鋼板が畳まれたものである。ともにハンダ付けによって継いでおり、195は継ぎ目に補強板を貼っている。

d．石製品(199･200)

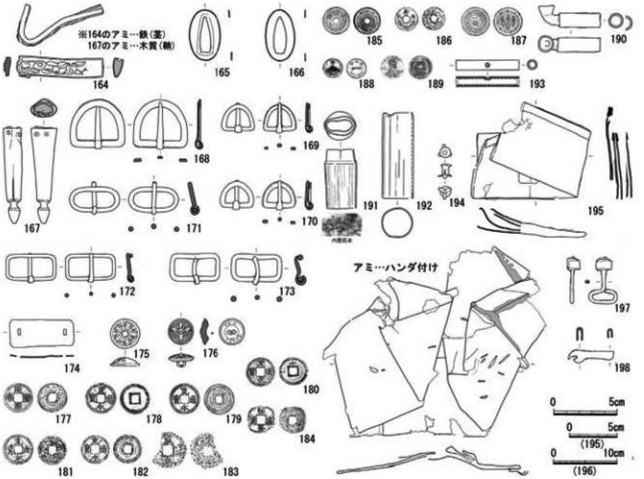
199は石硯である。赤褐色の緻密な石材で、赤間石製の可能性を指摘できる。200は黒碁石である。



4-3-1-137 図　百間樋跡出土遺物実測図 1（第 87 ～ 92 図）



4-3-1-138 図　百間櫓跡出土遺物実測図 2（第 94 ～ 97 図）

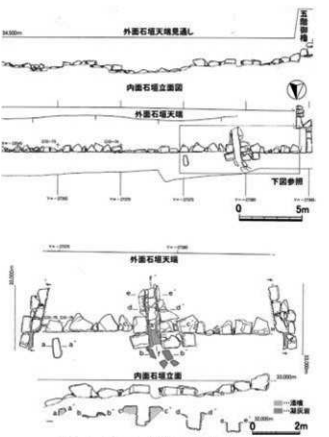


4-3-1-139 図　百間櫓跡出土遺物実測図 3（第 98・99 図）

<8 西櫓門跡>（4-3-1-140 図）

西櫓門は、下部の門構造に屋根を架けた状態で現状保存されていたため、礎石などについて可能な範囲で平面図を作成し、周辺に 16 ～ 18・21 トレンチを設定した。鏡柱の通りで計測した左右石垣裾の間隔は 8.8 m で、柱間は大門で 4.8 m、潜戸は 1.8 m である。門の内側は、控柱と上部櫓を支える柱の列にそれぞれ 3 石ずつ計 6 石の礎石が並んでおり、梁間方向の柱間寸法は 2.7 m である。門の外側は、2 段の石階段が認められる。潜戸と西側の櫓台の間には排水のための溝が切られており、礎石の間を埋めるように凝灰岩製の側石が並べられている。

門の北側に設定した 16 トレンチでは、東西方向に連なる幅 10 cm前後の凝灰岩の石列を検出した。門の東側櫓台裾に設定した 18・21 トレンチでは、石垣裾から 50 ～ 70 cm離れた位置を、石垣と平行に走る幅 15 ～ 20 cmの凝灰岩の石列



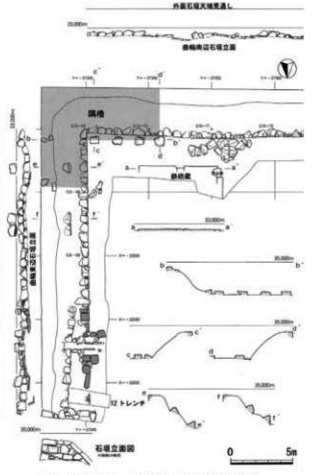
4-3-1-140 図　曲輪南辺（第 72 図）

を検出した。21 トレンチの石列は櫓台の出隅を回って南へ折れていたため、南側に 19 トレンチを設定したが、痕跡は認められなかった。トレンチ内では底石や明瞭な溝状の堆積などは確認されなかったが、2 条の石列は西櫓門脇の溝へ向かう排水溝の一部と推測している。16 トレンチでは、Ⅱ 1 層中から 20 点を超える未使用のエンフィールド銃弾が出土した。

<9 鉄炮蔵跡 >(4-3-1-141 図)

隅櫓跡の北東側で、建物の基礎と思われる東西長 6.5 m の土台石の並びが検出された。

検出したのは南端の土台部分で、天端の幅 50 cm、長さ約 3 m と 2.6 m の凝灰岩が東西方向に 2 石並んでおり、2 石の間と南西隅には安山岩が据えられていた。土台の石材は隙間なく組み合わされており、南西隅では、安山岩の形に合わせて凝灰岩の端部が加工されていた。



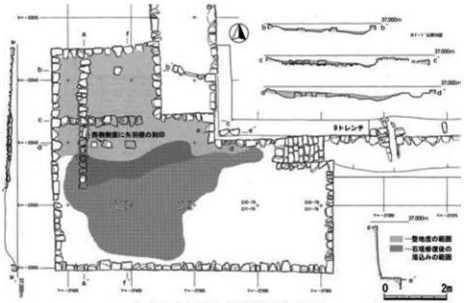
4-3-1-141 図　曲輪南東部(第 73 図)

<10　飯田丸五階櫓跡 >(4-3-1-142 図・4-3-1-143 図)

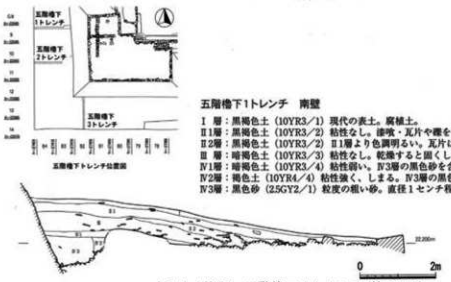
五階櫓台は曲輪の外周より南・西側に張出しており、平面形は概観でＬ字形を呈する。櫓台の規模は天端南面で長さ約 22 m、西面では約 18 m で、面積は約 300 ㎡である。石垣天端の標高は 36.7 m 前後で、曲輪内の平場側の地表面より 3.8 m 高い。曲輪南面の石塁は五階櫓台より 2.3 m 低く、百間櫓台は同じく 1.3 m 低い。櫓台東面には、東側の石塁へ下る幅約 2 m(6 尺 5 寸)の石階段がみられる。石階段は、櫓台の東面より約 3 m 西へ入った部分の天端石を含めて 9 段検出され、1 段につき幅 40 cm～ 1 m の安山岩が 2 ～ 3 石並んでいた。踏面は約 40 cm、蹴上は約 30 cmである。

櫓跡の礎石が残存していたのは櫓台の北西部のみで、約 80 ㎡の範囲である。櫓台の西辺から約 2 m 東側の位置に北一南方向に連なる礎石列、北辺から約 5 m 南側に東一西方向の礎石列が検出された。検出された礎石列は、櫓台との位置関係が「御城内御絵図」(熊本市蔵)にみられる間仕切り位置と一致していたため、櫓の土台遺構が部分的に残存しているものと判断した。遺構配置が「御城内御絵図」の平面とほぼ合致したため、基準柱間寸法は 6 尺 5 寸と推測できた。

櫓台の南西部では、表土の下位で大量の瓦片と裏込め石・礎石・築石様の石材、割石片などを含む暗褐色土の落ち込みを確認した。



4-3-1-142 図　五階櫓(第 57 図)



4-3-1-143 図　五階櫓下 1 トレンチ(第 59 図)

櫓台の周辺では、北東の入隅掘部分に 9 トレンチ、東の石塁へ下る石階段掘に 13 トレンチを設けた。9 トレンチでは、櫓台の天端より 4.3 m下の部分に小規模な石積みを検出した。ケヤキの大木の根があったため土層の堆積状況を詳細に確認できていないが、石積みの上面より 15 cmほど下がった部分を近世の旧地表面と考えた。13 トレンチを設定した場所には、五階櫓の石階段下から曲輪東面の石塁側に斜めに延びる石垣が築かれていた。

発掘調査終了後、覆屋基礎工事の際に掘削が行なわれる櫓台下の小段上面で事前の確認調査を行なった。小段西面から南西出隅付近までの石垣天端は標高が 22.1～22.4 mで、五階櫓台より約 15 m下がっている。

小段西面に 1･2 トレンチ、南面に 3 トレンチを設定した。1 トレンチでは、小段の裏込めは、石垣天端の外端から 5.6 m内側の部分までが安山岩の割栗石を主体とし、そこから五階櫓台掘までは直径 1 mm大の黒色砂を含む暗褐色土で整地されていた。下位には前述の黒色砂を主体とする砂質土が約 80 cmの厚さで堆積し、その下に栗石層を検出した。2 トレンチは、石垣天端の外端から東側へ 6.8 mの地点まで掘り下げを行なった。裏込めは第 1 トレンチと同じ割栗石を主体とし、小段外周の石垣天端より約 30 cm下がっていた。3 トレンチは要人御櫓跡に設定した。近世の地表面は現地表面下 50 cmの部分で確認され、小段の石垣外端部から約 7 mの地点で、櫓に伴うと思われる雨落ち溝を検出した。近世の地表面である暗褐色土は、石垣外端から約 6 mの部分まで直径 2～ 10 cmの栗石を多量に含んでいたが、ここより雨落ち溝ま

での間は栗石の混入が認められず、非常に硬くしまっていた。五階櫓台裾では、暗褐色土の下に1トレンチと同じく厚さ80㎝の黒色砂を主体とする層があり、その下位は割栗石による裏込めとなっていた。

飯田丸五階櫓跡出土遺物(4-3-1-144図)

櫓台および9・13トレンチから出土した遺物である。陶磁器、金属製品、石製品がある。

a．陶磁器・土器類

中世(1)

1は備前焼擂鉢である。備前焼中世2期に位置付けられる。備前焼の拡散期に先行する時期の資料と評価され、この時期の資料の出土は県内初例である。

近世(2～17)

2～8は碗をまとめた。2は漳州窯系の青花碗である。3・4は肥前産磁器碗で、3は青磁、4は染付である。5～8はヘラ描き肥前系端反碗である。9～11は肥前産陶器皿である。9は内底に胎土目(肥前Ⅰ期)、10・11は内底に砂目(肥前Ⅱ期)が認められる。12は網田焼の磁器染付皿である。13は、英国ドーソン窯産の硬質陶器小皿である。14は黒象嵌を施す陶器皿である。15は土師器坏である。外底に静止ヘラケズリを施す調整技法などから近世の所産と考えられる。16は景徳鎮窯系の芙蓉手小鉢である。17は備前焼の擂鉢である。

近代以降(18～28)

18は磁器飯碗である。19・20は磁器釉下彩碗である。21は磁器染付皿である。23～28は磁器小坏である。23～27は染付で、いずれも胎土はガラス質で光沢を帯びる。23・24は器形・法量・文様とも共通しており、セット関係が評価される。28は釉下彩小坏で、内面文様は吹き墨である。

b．金属製品

調度具(29)

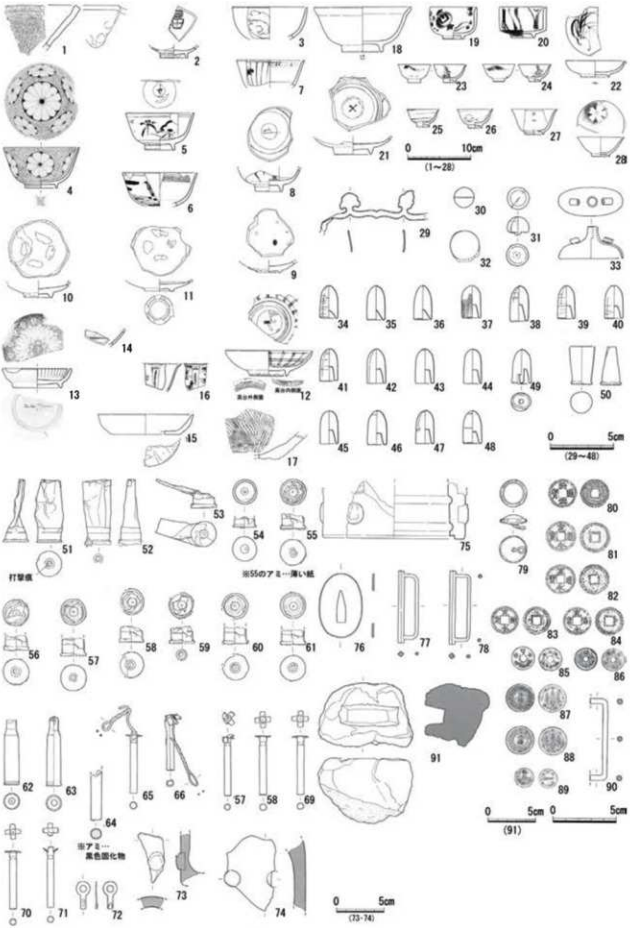
29は銅製の飾り金具である。仏具の飾りか。

武器・軍用品(30～79)

30・31は鉛製の火縄銃弾あるいはゲベール銃弾である。32は鉄製の火縄銃弾である。33は銅製の口薬入れ。34～48はエンフィールド銃弾である。49は弾底凹部内に突起があるミニエー銃弾である。50はスペンサー銃薬莢である。51～61はスナイドル銃薬莢である。62・63は30式銃あるいは38式銃の銅製薬莢である。64は管形の不明銅製品である。管の内部には火薬とみられる黒色の固形化物が詰まっている。65～71は銅製の摩擦管である。72は杓子形銅製品である。用途は不明だが、摩擦管に関わるものと想定されるものである。73・74は四斤砲弾片、75は型式不明の大型ライフル砲弾片である。76は銅製の刀の切羽で、77・78は銅製のベルト金物である。79は銅製の釦である。

c．銭貨(80～89)

80は洪武通宝の加治木銭であろう。81～84は寛永通宝で、81・82は古寛永、83・84は新寛永である。83は背面に「元」が認められる。84は「永」の上の点が草書風になっている特徴ほかの一致が、元禄13年(1700)、京都七条で鋳造されたものと共通する。85は十銭錫貨である。86は五銭白銅貨である。87・88は一銭銅貨である。87は大正8年(1919)、88は昭和13年(1938)の発行である。89は一銭アルミ貨である。



4-3-1-144 図　飯田丸五階御櫓跡出土遺物実測図 1（第 77 ～ 81 図）

飯田丸五階櫓跡下トレンチ出土遺物(4-3-1-145 図)

五階櫓台下の帯曲輪(小段)に設けた 1 ～ 3 トレンチから出土した遺物である。土師質のフイゴ羽口、金属製品がある。金属製品は鉄釘の出土が多い。

a．土師質製品(1)

1 は土師質のフイゴ羽口である。

b．金属製品

建築金物(2 ～ 16)

2 は鉄製の端金物とみられる。3 ～ 16 は鉄釘である。成形技法から a・b の 2 種に分類する。

a 類:頭部を成形する際に鏨で刻みを入れ、刻みを入れた面を谷折りにして頭部を折り曲げるものである。

b 類：鏨で刻みを入れないで頭部を叩き潰して成形するものである。

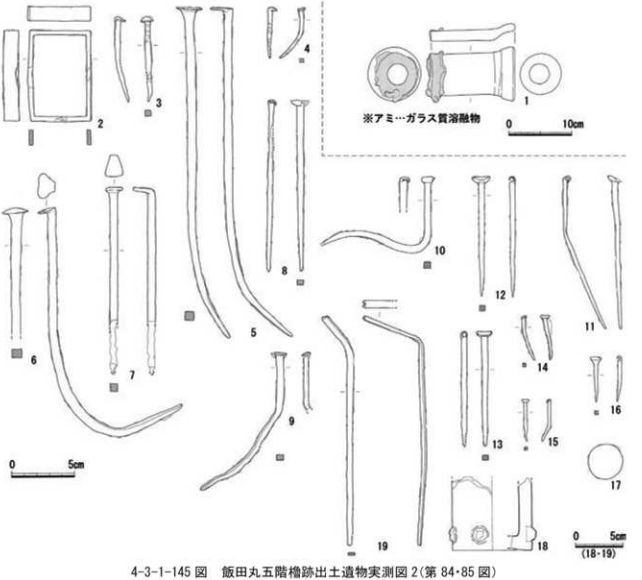
3 ～ 7 は平頭釘で、3･4 は a 類、5･6 は瓦釘 b 類、7 は五寸釘 a 類である。9 ～ 16 は巻頭釘で、9 ～ 15 は a 類、16 は b 類である。12･13･16 については、頭部が潰れていないことから未使用品と判断される。

武器・軍用品(17･18)

17 は鉄製の火縄銃弾である。18 は四斤砲弾片で、鉛製の茸翼(スタッド)が認められる。

その他の金属製品(19)

19 は不明鉄製品で断面長方形の棒状を呈するもの。



4-3-1-145 図　飯田丸五階櫓跡出土遺物実測図 2(第 84･85 図)

〈11 隅櫓跡・塀跡〉(4-3-1-141 図)

曲輪南辺の南面石垣は、天端部分の計測で長さ約 43 mである。東面石垣は、南の出隅から 26.5 mの地点より北側では、天端の高さが約 1.5 m下がっている。現況では地表面上に露出した部分は後世の積み直しである。天端の標高は、南面と東面の高い部分が 34.5 m前後、東面の低い部分が 33 m前後である。五階櫓台との比較から、両石塁の天端部分の幅は約 3 mと推測された。

発掘調査時には、曲輪南辺に直交する 10 トレンチ、東辺に直交して 11・12 トレンチを設定して石塁の残存状況を確認した。

a．南辺石塁

合坂付近に 10 トレンチを設定した。曲輪平場の現地表面(標高 33 m前後)を約 20 ㎝掘り下げた部分に内面石垣の下部が残存しており、そこから約 2 m下、標高 30.8 mの部分で石垣の根石を検出した。残存部分では、石垣の上位よりも根石の方がわずかに裏込め側へ入っており、根石の直下と前面には根固めの栗石がみられた。土層の堆積状況から、南辺石塁の石垣普請と曲輪の造成は同時期に行なわれたものと推測される。トレンチ内では造成土と純粋な地山層の差を認識することができず、自然堆積層の確認には至らなかった。

解体修理工事では、五階櫓台東面の石垣から約 5 m離れた地点で、内面石垣の裾に設けられた幅 50 ㎝の開口部から裏込めの中へ続く暗渠が検出された。裏込め内部に向かって基底面が大きく下がった部分では、下段の基底面に凹面を上にした状態で平瓦が敷かれ、それより奥は凝灰岩の割石と栗石が敷き詰められていた。暗渠の位置は五階櫓台側の合坂の平場付近と推測されるため、開口部両脇の 3 石の安山岩は石階段の部材であった可能性もある。本来は石塁の外面に排出口が存在したはずであるが認められず、現状石垣は、明治 22 年熊本地震時に崩落し、積み直されたものと推測している。

南東隅の隅櫓跡では、石塁内面石垣の前面に 4 石の礎石が検出された。実測した数値では、礎石の中心から南面石垣の天端外端までの距離が平均 4.5 m、西端の礎石の中心から東面石垣の天端外端までは 9.8 mで、「御城内御絵図」にみられる東西棟の礎石に相当するものと思われる。

b．東辺石塁

東面は、天端の高さが変わる部分までを調査対象とした。11 トレンチでは、曲輪平場の現地表面から約 30 ㎝掘り下げた部分に石塁の内面石垣が残存しており、そこから約 2 m下まで掘り下げたが、根石の深さを確認することはできなかった。石垣はほぼ直立しており、標高 32 m前後で近世以前の土層を確認した。12 トレンチでは、同じく平場の現地表面から 1.3 m掘り下げた部分で、内面石垣の一部と思われる安山岩 2 石を検出した。

東辺石塁内面の残存していた石垣は、隅櫓跡の出隅より約 17 mの地点から北側では二重になっており、内面石垣から 1 ～ 1.8 m東へ奥まった部分にも石垣が検出された。石階段の最下段と思われる石材も検出した。この性格は不明である。石階段の北側では、南面石塁と同じく裏込めの中へ続く暗渠を検出した。開口部の前面には、安山岩の割石と板状に加工された凝灰岩による側石が並んでいたが、検出範囲内に底石はみられなかった。外面石垣には、調査区北端の東西方向の石垣周辺以外に大きな改変は無く、天端から約 2 m下の部分に暗渠の排出口が残存していた。

隅櫓跡・塀跡出土遺物(4-3-1-146 図)

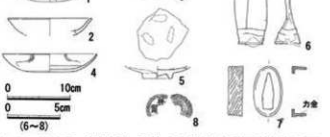
櫓台および周辺の10～12トレンチ、14・15トレンチから出土した遺物である。陶磁器・土器類、金属製品、石製品がある。

a．陶磁器・土器類(1～5)

1・2は9世紀前半～中頃の土師器坏で、外底を除き赤彩が施されている。3は底部糸切り離し技法の土師器小皿である。法量・器形から13世紀末～17世紀前半に位置付けられる。4は江戸期の土師器坏である。薄づくりで焼成は硬い。5は肥前産陶器皿である。

b．金属製品(6～7)

6はスナイドル銃薬莢である。7は銅製の刀の縁である。8は祥符元宝あるいは祥符通宝の破片である。



4-3-1-146 図　隅櫓跡・堀跡出土遺物実測図(第 101 図)

その他の出土遺物(4-3-1-147 図・4-3-1-148 図)

石垣解体修理工事の際の採集品、表面採集品である。出土位置が不明確で、前記飯田丸五階櫓跡・百間櫓跡・西櫓門跡・隅櫓跡・塀跡への帰属が難しいため、本項「その他」を設けて報告することとした。陶磁器・土器類、金属製品がある。

a．陶磁器(1～5)

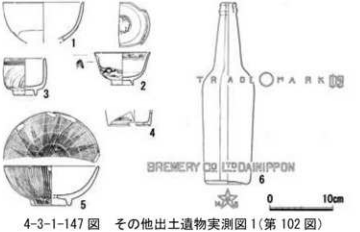
1～4は近世資料である。1は肥前産陶器碗で、肥前Ⅰ期の所産である。2・3は肥前系磁器染付碗で、2は端反碗、3は小丸碗である。4は肥前系磁器染付猪口である。

b．ガラス製品(6)

6は大日本麦酒株式会社製のビール瓶(大瓶)である。

c．金属製品

建築金物(7～13)



4-3-1-147 図　その他出土遺物実測図 1(第 102 図)

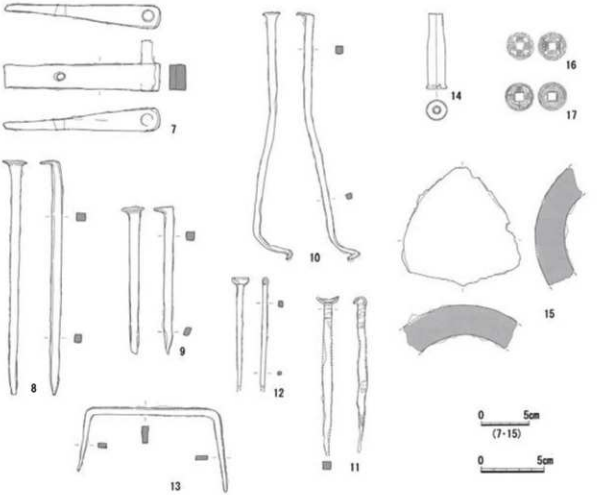
7は鉄製の肘金物である。8～12は鉄釘である。

武器(14・15)

14は村田銃の銅製薬莢である。15は鉄製の臼砲弾片である。

銭貨(16・17)

16は康熙通宝である。17は寛永通宝の新寛永である。



4-3-1-148　その他出土遺物実測図 2(第 103・104 図)

出土瓦

飯田丸地区の発掘調査では、土嚢袋約 8000 袋の瓦が出土した。出土瓦のうち、軒丸瓦・軒平瓦・軒目板(桟)瓦・鬼瓦や飾瓦を含む道具瓦を抽出して報告する。

(1)軒丸瓦(4-3-1-149 図～ 4-3-1-150 図)

飯田丸では、三巴文・日足文(李朝系)・桐紋・桔梗紋・蛇の目紋・九曜紋が出土した。

a．三巴文軒丸瓦

いずれも 3 つの巴を円状に配した三巴文で、文様区は巴とその周りに珠文がめぐる。巴の回転方向、珠文の数、巴の頭の形状、巴の長さで分けた。凡例 L 11 A : L・R (巴文の尾の方向)、数字(珠文数)、アルファベット大文字(巴文の種類)。

ア．三巴文軒丸瓦 L 7 A (1)

巴が左巻きで珠文が 7 個巡るもの。10 点出土した。瓦当の全形が残っているものはない。瓦当の復元径は 16 ～ 16.5 ㎝で、文様区の内区径約 7 ㎝、外区幅約 2 ㎝である。丸瓦凹面にはコビキ B と布目の痕跡が残る。凸面中央の玉縁側端部付近に「丸に一引文」の刻印がある。

イ．三巴文軒丸瓦 L 8 A (3)

左巻きの巴文に 8 個の珠文が巡る。4 点出土した。瓦当径 16.5 ～ 17.5 ㎝、文様区の内区径は約 8 ㎝、外区幅約 1.5 ㎝である。瓦当径・周縁幅共に横広なものがみられる。文様区内の特徴と巴頭間の范傷の一致から少なくとも 3 点は同范の可能性がある。

ウ．三巴文軒丸瓦L 9 A(5)

左巻きの巴文に9個の珠文が巡るもので、4点出土した。瓦当径は17㎝、文様区の内区径は7.8㎝、外区幅は1.8㎝である。文様の配置と中心部の笵傷の一致から少なくとも3点は同笵の可能性がある。いずれも瓦当の厚さが薄い特徴がある。

エ．三巴文軒丸瓦L 9 B(6)

左巻きの巴文に9個の珠文が巡るものの一つ。5点出土した。瓦当径は15.5㎝、文様区の内区径は6.6㎝、外区幅は2.1㎝である。瓦当面の完形資料は無いが、文様の配置と中心部の笵傷の一致から少なくとも2点は同笵の可能性がある。

オ．三巴文軒丸瓦L 10 A(7)

左巻きの巴文に10個の珠文が巡るものの一つ。7点出土した。瓦当径は16～16.5㎝で、文様区の内区径は6㎝、外区幅は2～2.5㎝である。文様の配置と、中央の笵傷の一致から全て同笵の可能性がある。

カ．三巴文軒丸瓦L 10 B(11)

左巻きの巴文に10個の珠文が巡るものの一つ。6点出土した。瓦当径は16.5㎝前後、文様区の内区径は6.5～6.7㎝、外区幅は1.8～1.9㎝である。瓦当面が完形の資料は無い。

キ．三巴文軒丸瓦L 10 C(14)

左巻きの巴文に10個の珠文が巡るものの一つ。瓦当径は15.5～16.5㎝前後で、歪みが目立つものがある。文様区の内区径は6.3～6.9㎝、外区幅は1.8～2㎝である。文様構成と巴文の曲がり具合が一致する。

ク．三巴文軒丸瓦L 11 A(17)

左巻きの巴文に11個の珠文が巡るものの一つ。7点出土した。瓦当部の全形が残っているものは17のみ。瓦当の復元径は15.5～15.9㎝、周縁幅1.9～2.4㎝で、内区径8㎝前後、文様区の深さは最大で0.8㎝である。

ケ．三巴文軒丸瓦L 11 B(20)

左巻きの巴文に11個の珠文が巡るものの一つ。9点出土した。瓦当部の全形が残るものは無い。瓦当の復元径は16㎝前後、周縁幅2.2～2.5㎝、内区径7.5㎝前後、文様区の深さ0.7㎝である。文様構成と中央の笵傷が一致するものが大半で、笵は一つであった可能性が高い。

コ．三巴文軒丸瓦L 12 A(22)

左巻きの巴文に12個の珠文が巡るものの一つ。1点出土した。瓦当径は14.7㎝、周縁幅2.1㎝、内区径7.8㎝、文様区の深さ0.6㎝である。

サ．三巴文軒丸瓦L 12 B(25)

左巻きの巴文に12個の珠文が巡るものの一つ。8点出土した。瓦当部の全形が残るものは無い。瓦当の復元径は16㎝前後、周縁幅2.2～2.5㎝、内区径8.5㎝前後、文様区の深さ0.8㎝である。笵傷の一致は無いが、文様構成と巴文の歪な部分は一致しており、笵は一つであった可能性が高い。

シ．三巴文軒丸瓦L 12 C(27)

左巻きの巴文に12個の珠文が巡るものの一つ。6点出土した。瓦当の復元径は17㎝前後、周縁幅2.5㎝前後、内区径7.5㎝前後、文様区の深さ0.7㎝である。

ス．三巴文軒丸瓦L 13 A(28)

左巻きの巴文に13個の珠文が巡るものの一つ。28が1点だけ出土した。瓦当面はほぼ完形である。瓦当径16㎝、周縁幅1.8㎝、内区径9.5㎝、文様区の深さ1.5㎝である。丸瓦の接合は、瓦当上端のやや下で、瓦当上端はわずかに反っている

セ．三巴文軒丸瓦L 15 A(29)

左巻きの巴文に15個の珠文が巡るものの一つ。29が1点だけ出土した。

ソ．三巴文軒丸瓦L 17 A(31)

左巻きの巴文に17個の珠文が巡るものの一つ。3点出土した。いずれも瓦当面はほぼ完形。瓦当径は14.5～15㎝、周縁幅は2㎝、内区径7.4㎝、文様区の深さ0.9㎝である。文様構成は一致するが、一致する笵傷は無い。丸瓦の接合は瓦当上端のやや下で、瓦当上端は反っている。瓦当と丸瓦の接合角度はやや鈍角である。

タ．三巴文軒丸瓦L 21 A(33)

左巻きの巴文に21個の珠文が巡るものの一つ。33の1点だけ出土した。

チ．三巴文軒丸瓦L 24 A(34)

左巻きの巴文に24個の珠文が巡るものの一つ。2点が出土した。いずれも瓦当面はほぼ完形で、35は丸瓦部までほぼ完形。34の瓦当径は17㎝、周縁幅は1.5㎝、内区径8.5㎝、文様区の深さ1.2㎝である。丸瓦の接合は瓦当上端のやや下で、瓦当上端は強く反っている。瓦当と丸瓦の接合角度はやや鈍角である。

ツ．三巴文軒丸瓦L 24 B(36)

左巻きの巴文に24個の珠文が巡るものの一つ。36の1点が出土した。瓦当径16.2㎝、周縁幅2～2.3㎝、内区径7.8㎝、文様区の深さ1㎝である。文様は全体的に丸みを帯びている。

テ．三巴文軒丸瓦R 13 A(37)

右巻きの巴文に13個の珠文が巡るもの。2点出土した。瓦当径16㎝、周縁幅2㎝、内区径8.6㎝、文様区の深さ0.8㎝である。37は、文様構成の一致と、黒味がかった焼き上がりは近似しており、同笵の可能性が高い。また、名護屋城跡出土軒丸瓦Ⅰ－R 13 a類と同笵の可能性がある。

ト．三巴文軒丸瓦R 14 A(39)

右巻きの巴文に14個の珠文が巡るもの。39の1点が出土した。瓦当径が小ぶりである。周縁の1/3、珠文帯の一部、丸瓦を欠く。瓦当径13.5㎝、周縁幅1.5～1.8㎝、内区径9.5㎝である。全体が黒みがかる。

ナ．三巴文軒丸瓦R 19 A(40)

右巻きの巴文に13個の珠文が巡るもの。4点出土した。瓦当面が完形の資料は無いが、瓦当径が小ぶりの資料である。瓦当径14.5㎝、周縁幅1.3㎝、内区径8.3㎝、文様区の深さ1㎝前後である。文様構成と中央の笵傷が一致するため、同笵と判断している。いずれも黒味がかった焼き上がりで、胎土も近似している。

ニ．三巴文軒丸瓦R 21 A(44)

右巻きの巴文に21個の珠文が巡るもの。3点出土した。瓦当面が完形の資料は無いが、瓦当径が小ぶりの資料である。当径14.3㎝、周縁幅1.6～2㎝、内区径8.3㎝、文様区の深さ1㎝前後である。文様構成と珠文帯の笵傷が一致することから同笵と判断している。

ヌ．三巴文軒丸瓦・その他

破片資料であり、珠文の数が不明瞭なもの。

ネ．三巴文菊丸(56)

体部長が短い瓦。8点出土した。巴文が左に巻くものが5点。瓦当面が完形のものが無いため、珠文の数は不明。巴文は丸みを帯び、珠文の配置も似ているため、同笵の可能性もあるが、根拠となる一致部分を見出せていない。巴文が右に巻くものが2点出土している。

b．日足文軒丸瓦(63・65)

9点出土した。いずれも破片資料であり、同笵関係は不明。文様は、周縁の幅が広いものと狭いものに分かれる。幅が広いものは2点出土しており、周縁幅が1.7㎝以下の狭いものは6点出土した。文様の端部と周縁の間に空間があるものと、無いものがある。

c．桐紋軒丸瓦

17点出土しているが、すべてが破片で完形資料は無い。文様がわかるものは五三の桐と四三の桐のようである。五三の桐で2種類の同笵関係があり、四三の桐で笵が1種類あり、他の五三の桐と合わせて笵は4種類以上存在する。

ア．五三の桐(73･74･76)

花の形は丸みを帯びた形。花と葉の結節点に珠文がある。珠文の位置、中央の花茎に向かって左側上から2番目の花と茎の間の形状、中央茎と向かって左茎の間の配置の一致から73･74を同笵と判断した。76は名護屋城跡出土桐紋軒丸瓦Ⅱ-1 b類と同笵か。

イ．四三の桐(80)

80･81･82は、中央の葉の先端が右に曲がり、両端の葉が外側に反るもの。中心茎に4花、脇茎にそれぞれ3花で、花はほぼ四角で表現されている。

ウ．その他(83)

83は中央葉と右葉の破片。五三の桐と同笵の可能性もあるが一致部分は少なく根拠が弱い。

d．蛇の目紋軒丸瓦(88)

大小の同心円からなる文様で、加藤家の本来の家紋。3点出土した。

e．桔梗紋軒丸瓦

桔梗紋だけのものと桔梗紋の周囲に珠文が入るものに大別され、前者は、花弁が接し輪郭が直線的なものと、花弁が接し輪郭が丸みを持つもの、花弁同士が離れ丸みを持つものに分かれる。後者は、珠文の数でさらに分かれる。なお、本丸御殿の調査で出土した花弁が直線的なものを桔梗紋軒丸瓦1としている。2 b･3 bも本丸御殿では出土したが、飯田丸での出土例は無い。

ア．桔梗紋軒丸瓦2 a (89)

花弁の間が離れているもの。文様は立体的で、肉厚な弁の中央が船底状に窪み、雄蕊が配置されている。雄蕊は、先端が剣先状になり、長さは弁の長さの半分を超える。6点出土した。笵傷の一致は無いが、文様の構成や雰囲気から同笵の可能性が高い。

イ．桔梗紋軒丸瓦2 c (92)

92の1点出土した。花弁が接し、輪郭が直線に近い。雄蕊は、先端が剣先状で花弁の長さの約半分まで伸びる。

ウ．桔梗紋軒丸瓦2 d (94)

花弁が接し、輪郭が丸みを帯びるもの。10点出土した。笵傷の一致は無いが、文様の構成からは同笵の可能性がある。

以下は、桔梗文の周囲に珠文が巡るもの。桔梗文は、陽刻された円内に配され、珠文帯とは段差がある。

エ．桔梗紋軒丸瓦3 a (96)

珠文が9個巡り、雌蕊と雄蕊の境界が明瞭で、雄蕊の中心に沈線があるもの。26点出土した。文様の形状、珠文の配置から同笵の可能性がある。花弁の輪郭は丸みを持ち、各弁は雄蕊に向かって緩やかに窪む。丸瓦凸面はナデ調整が施され、

オ．桔梗紋軒丸瓦3 c (104)

珠文が9個巡り、雌蕊と雄蕊の境界が曖昧で、雄蕊の中心に沈線は無いもの。

カ．桔梗紋軒丸瓦4 (107)

完形資料は無いが、珠文が7つと想定されるもの。城内の西出丸で完形資料が出土した。今回の調査では4点出土した。

ｆ．九曜紋軒丸瓦

報告の便宜上、珠文を「曜」と呼ぶ。中央の曜は中心曜、それを囲む曜を周曜とする。笵の差を見出しにくい文様であり、分類は瓦当内区径－中心曜径－周曜径の差で 26 群に分けている。

ア．九曜紋軒丸瓦 9.5 － 3 － 2（108）

文様区の直径が 9.4 ～ 9.7 ㎝、中心曜径が 3 ～ 3.2 ㎝、周曜径が 1.8 ～ 2 ㎝のもの。12 点出土した。周縁幅が広く、文様区が狭い瓦。

イ．九曜紋軒丸瓦 10.5 － 3.3 － 1.8（113）

文様区の直径が 10.5 ～ 10.8 ㎝、中心曜径が 3.2 ～ 3.6 ㎝、周曜径が 2 ～ 2.5 ㎝のもの。8 点出土している。同笵の可能性があるもの 1 種があるのみで、笵や調整に差がある。

ウ．九曜紋軒丸瓦 10.5 － 3.9 － 2（116）

文様区の直径が 10.5 ～ 10.6 ㎝、中心曜径が 3.7 ～ 3.9 ㎝、周曜径が 1.8 ～ 2.3 ㎝のもの。5 点出土した。

エ．九曜紋軒丸瓦 10.5 － 4 － 2（117）

文様区の直径が 10.5 ～ 10.7 ㎝、中心曜径が 3.8 ～ 4.1 ㎝、周曜径が 2 ～ 2.2 ㎝のもの。10 点出土した。

オ．九曜紋軒丸瓦 10.5 － 4.2 － 2（120）

文様区の直径が 10.5 ㎝前後、中心曜径が 4.2 ～ 4.5 ㎝、周曜径が 1.9 ～ 2 ㎝のもの。4 点出土した。同笵関係はない。残存部分ではコビキＢと思われる痕跡が認められる。

カ．九曜紋軒丸瓦 11 － 3.5 － 2（124）

文様区の直径が 11 ㎝、中心曜径が 3 ～ 3.5 ㎝、周曜径が 1.9 ～ 2.2 ㎝のもの。4 点出土した。

キ．九曜紋軒丸瓦 11 － 3.8 － 2.3（127）

文様区の直径が 11 ～ 11.3 ㎝、中心曜径が 3.8 ～ 4.1 ㎝、周曜径が 2.3 ㎝のもの。5 点出土した。いずれも文様の凹凸が明瞭。同笵例は無い。

ク．九曜紋軒丸瓦 11 － 4 － 1.9（130）

文様区の直径が 10.8 ～ 11 ㎝、中心曜径が 4 ～ 4.1 ㎝、周曜径が 1.8 ～ 1.9 ㎝のもの。8 点出土した。いずれも文様の凹凸が明瞭。笵傷から 2 種の同笵例を確認した。

ケ．九曜紋軒丸瓦 11 － 4 － 2（132）

文様区の直径が 10.7 ～ 11.2 ㎝、中心曜径が 3.9 ～ 4.1 ㎝、周曜径が 1.8 ～ 2.3 ㎝のもの。34 点出土した。

コ．九曜紋軒丸瓦 11 － 4 － 2.1（136）

文様区の直径が 10.7 ～ 11.2 ㎝、中心曜径が 3.8 ～ 4.1 ㎝、周曜径が 2 ～ 2.1 ㎝のもの。18 点出土した。瓦当面から丸瓦まで完形のものが 2 点と同笵例が 2 種ある。

サ．九曜紋軒丸瓦 11 － 4 － 2.2（140）

文様区の直径が 10.8 ～ 11.3 ㎝、中心曜径が 4 ～ 4.1 ㎝、周曜径が 1.8 ～ 2.4 ㎝のもの。30 点出土した。3 種の同笵例を確認した。

シ．九曜紋軒丸瓦 11 － 4 － 2.5（144）

文様区の直径が 10.8 ～ 11 ㎝、中心曜径が 3.9 ～ 4.1 ㎝、周曜径が 2.5 ㎝のもの。6 点出土した。同笵関係の根拠は無いが、各曜の丸みのある形状、黒味の強い色調、全てにキラコがみられる点、仕上がりの雰囲気など、近似する点が多い。

ス．九曜紋軒丸瓦 11 － 4.2 － 2（147）

文様区の直径が 10.7 ～ 11.1 ㎝、中心曜径が 4.1 ～ 4.3 ㎝、周曜径が 1.8 ～ 2 ㎝のもの。9 点出土した。笵傷から 1 種の同笵例を確認した。

セ．九曜紋軒丸瓦 11 － 4.2 － 2.2（151）

文様区の直径が 10.8 ～ 11.2 ㎝、中心曜径が 4.2 ～ 4.3 ㎝、周曜径が 2.1 ～ 2.2 ㎝のもの。18 点出土した。

1種の同笵例を確認した。

ソ．九曜紋軒丸瓦 11 － 4.3 － 2.4（153）

文様区の直径が 10.8 ～ 11.3 ㎝、中心曜径が 4.2 ～ 4.4 ㎝、周曜径が 2.3 ～ 2.5 ㎝のもの。12 点出土した。文様が丸みを帯び稜線があいまいで文様が明瞭でないもの、文様の凹凸が弱いもの、文様が明瞭で瓦当に細かな砂がみられるものなど、それぞれ特徴を見出せるものがある。

タ．九曜紋軒丸瓦 11 － 4.6 － 2.5（2.3）（154）

文様区の直径が 10.7 ～ 11.3 ㎝、中心曜径が 4.6 ～ 4.7 ㎝、周曜径が 2.2 ～ 2.5 ㎝のもの。7 点出土した。文様が浅いもの（4 点）と、深いもの（3 点）がある。浅いものの、丸瓦凹面にはコビキＢと思われる痕跡がみられるが明瞭ではない。

チ．九曜紋軒丸瓦 11.5 － 4 － 2.2（161）

文様区の直径が 11.3 ～ 11.5 ㎝、中心曜径が 3.9 ～ 4.2 ㎝、周曜径が 2 ～ 2.2 ㎝のもの。完形のもの 1 点を含む計 16 点出土した。同笵例が 1 種ある。

ツ．九曜紋軒丸瓦 11.5 － 4.2 － 1.9（162）

文様区の直径が 11.5 ㎝、中心曜径が 4.1 ～ 4.3 ㎝、周曜径が 1.9 ㎝のもの。3 点出土したが同笵例は無い。

テ．九曜紋軒丸瓦 11.5 － 4.5 － 2.3（163）

文様区の直径が 11.5 ～ 12 ㎝、中心曜径が 4.3 ～ 4.8 ㎝、周曜径が 2.2 ～ 2.3 ㎝のもの。

ト．九曜紋軒丸瓦 12 － 4.3 － 2（164）

文様区の直径が 11.8 ～ 12 ㎝、中心曜径が 4.2 ～ 4.3 ㎝、周曜径が 2.1 ㎝のもの。

ナ．九曜紋軒丸瓦 12 － 4.7 － 2（166）

文様区の直径が 12 ～ 12.2 ㎝、中心曜径が 4.6 ～ 4.7 ㎝、周曜径が 2.1 ～ 2.3 ㎝のもので、周曜が小ぶりにみえる。

(2)軒平瓦(4-3-1-150 図～ 4-3-1-152 図)

飯田丸では、宝珠文、桐紋、三葉文、立木文、蓮華文、鳥文、笹紋、半菊文、桔梗紋、九曜紋などの軒平瓦が出土した。瓦当文様によって分けて記述する。また、滴水瓦・垂瓦も軒平瓦の一種として、通常の軒平瓦の後に記述する。

ａ．宝珠紋軒平瓦(169)

中心飾に宝珠文を用い、左右に唐草文を配する。宝珠を線刻で表現している。5 点出土しており、笵は 2 種類以上ある。

ｂ．桐紋軒平瓦

中心飾に桐紋を用い、左右に唐草を配する。文様の違いから 3 種類に分かれる。

ア．桐紋軒平瓦Ａ(170)

上に伸びる 3 本の茎の先端に花が珠文で表現され、唐草が 1 回反転する。2 点出土したが、唐草の形状が異なり同笵ではない。170 は平瓦凹面には凸型台の痕跡と、横方向のナデ調整がみられる。コビキＡの痕跡もうっすらと残る。

イ．桐紋軒平瓦Ｂ(172)

3 本の茎が細線で表現され、花の表現は無い。唐草は 2 回反転するが、反転ごとに分離して巴文状になる。最初の反転の下に小ぶりな珠文がある。6 点出土した。

ウ．桐紋軒平瓦Ｃ(174)

桐紋軒平瓦Ｂに近い。外側の唐草がやや間延びする。小片を含めて 10 点出土した。174 のように文様区が大きく文様が全体的に太いものと、文様区が小さく文様が明瞭なものに大別できる。174 は、平瓦凹面にはコビキＢの痕跡と凸型台の痕跡がみられる。

c．下三葉文軒平瓦

中心飾に下方に向いた三葉文を用い、左右に唐草を配する。三葉文に分類しているが、桐紋の葉の意匠と近似することから、桐紋に近いものと想定している。文様の違いから4種類に分けた。

ア．下三葉文軒平瓦A(177)

最も写実的な葉の表現である。唐草の大半は欠損しており、全体の文様構成は不明。2点出土した。

イ．下三葉文軒平瓦B(178)

中心飾の部分の178が1点出土した。全体の文様構成は不明。

ウ．下三葉文軒平瓦C(179)

瓦当が完全に残存するものが無く、文様構成は不明。中心飾の中心葉は陽刻、脇葉は線刻で表現される。

エ．下三葉文軒平瓦D(181)

5点出土した。文様構成は不明。脇葉が開き気味の三葉が陽刻されている。脇葉の上端から唐草が伸び、2回反転するが反転ごとに分離している。

d．上三葉文軒平瓦

中心飾に上を向いた三葉文を用い、左右に唐草を配する。バリエーションは多く、5種類に大別し、さらに9種類に分けた。

ア．上三葉文軒平瓦A

中心飾が三葉と珠文からなるもの。文様の差からさらに4種類に分かれる。

・上三葉文軒平瓦A a (182)

182の1点のみ出土した。中心飾の各葉は肉厚に陽刻され、下部の珠文から放射状に配されている。

・上三葉文軒平瓦A b (183)

5点出土した。各葉に弱い稜がみられ、脇葉がやや外反する。

・上三葉文軒平瓦A c (未掲載)

小片が1点出土した。脇葉が稜を持った三角状になっている。

・上三葉文軒平瓦A d (185)

中心飾の各葉が稜を持たない三角形で、脇葉も上を向いている。8点出土しており、右側の唐草にみられる傷の一致などから同笵の可能性が高い。186の凹面にはコビキBと思われる痕跡がみられる。

イ．上三葉文軒平瓦B

中心飾に珠文を持たない上三葉文。文様の差からさらに3種類に分かれる。

・上三葉文軒平瓦B a (187)

中心飾の三葉の各葉は稜を持ち、脇葉は大きく外反する。5点出土した。同笵の可能性が高い。

・上三葉文軒平瓦B b (190)

中心飾の三葉は小ぶりで、各葉は稜を持ち放射状に配されている。10点出土し、同笵の可能性が高いものの笵傷の一致などを見出せていない。

・上三葉文軒平瓦B c (191)

191の1点出土した。中心飾の右側の小片であり、文様の全体構成は不明。

ウ．上三葉文軒平瓦C(192)

中心飾に輪郭や葉脈を線で表現した三葉文が陽刻されている。192の1点のみの出土で、瓦当の完形資料はない。

エ．上三葉文軒平瓦D(193)

中心飾の文様は、直上に伸びる茎と湾曲して上に伸びる脇茎が線で表現され、その先端に菱形の葉が付く。193は、斜め方向のコビキの痕跡がみえる。

オ．上三葉文軒平瓦E(194)

中心飾が三葉文で左右に文字が配されている。笵に正位のくずし字で彫りこんでいるため、瓦当面では反転した文字になっている。194は瓦当面の右側を上にして笵に陰刻しており左から「年四禄文　中心飾　拾月一日」と読める。

e．立木文軒平瓦(195)

中心飾に枝分かれする植物のような文様を用い、左右に唐草を配する。

f．蓮華文軒平瓦

中心飾にハスの花のような文様を用い、左右に唐草を配する。唐草の違いで2種類に分けた。

ア．蓮華文軒平瓦A(196)

涙滴状の意匠から角状に花弁が突出し、下部からは短い唐草が上下に伸び反転する。4点出土している。

イ．蓮華文軒平瓦B(197)

蓮華文軒平瓦Aの中心飾から短い唐草を無くし、3個の花弁をほぼ同じ大きさにしたような中心飾である。唐草もそれぞれが分離している。3点出土した。

g．鳥文軒平瓦

中心飾に左右の唐草を合わせて鳥を抽象化したような文様を用いている。中心飾の違いで2種類に分けた。

ア．鳥文軒平瓦A(198)

10点出土しているが、瓦当面が完形の資料は無いが、大半は同笵の可能性が高い。凹面の瓦当側に「○に一引両文」の刻印がみられるものが3点ある。198は、文様区がほぼ完形である。

イ．鳥文軒平瓦B(199)

鳥文Aと文様構成が近似するが、中心飾が逆Z字状である。8点出土した。文様構成や瓦の雰囲気から同笵の可能性が高い。

h．笹紋軒平瓦

中心飾に笹文を用い、左右に唐草を配する。文様の違いで3種類に分けた。

ア．笹紋軒平瓦A(200)

1つの笹の葉が五葉のもの。4点出土している。平瓦凹面にコビキAと思われる痕跡がみられるものもある。

イ．笹紋軒平瓦B(201)

1つの笹の葉が六葉のものである。201の1点のみ出土した。

ウ．笹紋軒平瓦C(202)

中心の笹の葉が六葉で右側の笹の葉が五葉のものである。202の1点のみ出土した。

i．半菊文軒平瓦(203)

中心飾に菊の花を半裁したような文様を用い、左右に唐草を配する。平瓦凹面には、コビキA・凸型台の痕跡・ナデ調整がみられる。

j．その他(204～214)

稜を持つ紡錘形の中心飾から唐草が上・下・上に反転する。16点出土した。完形資料は無いが、文様構成や笵傷の一致から同笵の可能性が高い。206・207は橘文か。可能性が高いものを含めて7点出土したが、瓦当面が完形のものは無い。笵は2種類以上か。209は、牛角状の意匠の中央に線で珠文を配した特異な中心飾の瓦である。1点のみ出土した。210は中心飾に写実的な葉を置くものか。小片1点の出土であり詳細は不明瞭である。211は1点のみの出土で、柏葉状の葉の意匠が陽刻されている。212は1点のみ出土した。紡錘形の中心飾から先端が鈎状の唐草が展開する。213は1点のみ出土した。中心部分の文様構成は212に類似する。214は1点のみ出土した。名護屋城跡で213に近似した文様の右側に配された植物文に似る。

k．桔梗紋軒平瓦

加藤家の家紋である桔梗紋を中心飾に用い、左右に唐草を配する。

ア．桔梗紋軒平瓦１（215）

小片が３点出土した。文様構成は不明。中心飾が突出し、桔梗が立体的に表現されている。

イ．桔梗紋軒平瓦２（未掲載）

桔梗紋軒平瓦１のように中心飾が突出しないものを桔梗紋軒平瓦２とする。雄蕊に沈線がみられないものを桔梗紋軒平瓦２Ａとし、沈線がみられるものを桔梗紋軒平瓦２Ｂとした。

・桔梗紋軒平瓦２Ａ(217)

花弁の輪郭線が細いものと太いものがあり、さらに雄蕊の長短・雌蕊の違いから笵は複数ある。

・桔梗紋軒平瓦２Ｂ(220)

雄蕊に沈線がみられるもの。唐草の太さで２つに分けられる。

l．九曜紋軒平瓦

細川家の家紋である九曜文を中心飾に用い、左右に唐草を配する。唐草の違いで、15 種類に大別した。

ア．九曜紋軒平瓦Ａ

唐草の内側の子葉が下に巻き先端が三葉状になるものを祖形とすると思われる一群である。文様構成からさらに４つに分かれる。

・九曜紋軒平瓦Ａａ（225）

子葉が下・下・上に反転し、蔓の先端は膨らんで菱形や珠文状になる。

・九曜紋軒平瓦Ａｂ(229)

内側の子葉が珠文状で、唐草全体としては、子葉が文様区の端部に集約して花状である。

・九曜紋軒平瓦Ａｃ(230)

唐草の子葉がすべて端部に集約し花状である。

・九曜紋軒平瓦Ａｄ(231)

唐草の子葉は、内側が三日月形で他は反りがほとんど無い。

イ．九曜紋軒平瓦Ｂ

唐草の子葉が内側から３本が下に反転し、先端は双葉状に開くもの。この文様を基本としたものが最も多く出土した。文様構成から２つに分かれる。

・九曜紋軒平瓦Ｂａ(232)

最も内側の子葉が長く大きく反転する点と、先端の上向きの子葉も大きく反転する点を特徴とする。

・九曜紋軒平瓦Ｂｂ(233・234)

先端の双葉が大きく、最も内側の子葉が比較的反転が大きい。

ウ．九曜紋軒平瓦Ｃ

細めの唐草で、子葉が下・上・下に巻くもの。文様構成から３つに分かれる。

・九曜紋軒平瓦Ｃａ(235・236)

唐草の波打ちが大きい。子葉はいずれも釣り針または三日月形である。中心飾脇の唐草のしなりから、笵は複数ある。235 は「庄」の刻印がみられる。

・九曜紋軒平瓦Ｃｂ(237)

九曜紋Ｃａに比べ､唐草の波打が小さく右端の蔓が大きく反転する。飯田丸では 237 の１点が出土した。

・九曜紋軒平瓦Ｃｃ(238)

九曜紋Ｃａに比べ、唐草の波打が小さく子葉の反転も小さい。出土量は多く、製作技法に大差は無い。

エ．九曜紋軒平瓦D

唐草の内側の子葉が下に反転し、先端が双葉状になるもの。文様構成から4つに分かれる。

・九曜紋軒平瓦D a (239)

8の1点のみの出土。文様区の右側を欠く。緩やかに波打つ唐草から珠文状の子葉が反転する。蔓の端部は双葉状で、上に反転する子葉が大きな鉤状である。

・九曜紋軒平瓦D b (240)

唐草の波打ちが弱く、内側の子葉と端部の双葉が分離気味である。右側の唐草がその傾向が強い。240の1点のみの出土で、瓦当面から平瓦までほぼ完形の資料である。「四郎」の刻印がみられる。

・九曜紋軒平瓦D c (241)

唐草の波打ちが弱く、内側の子葉と端部の双葉が分離している。子葉はいずれもほぼ同じ大きさで、反転の仕方も似る。4点出土しており、全て同笵の可能性が高い。

・九曜紋軒平瓦D d (242)

唐草が中心飾から斜め上方に伸びる以外はほぼ波打ちが無く、子葉が三日月状である。唐草は分離していない。4点出土しており、瓦当面の完形資料は無く小片だが、少なくとも2点は同笵である。

オ．九曜紋軒平瓦E

唐草が上・下・上に反転し、各子葉が分離するもの。中心飾の周曜の配置が崩れ気味である。

・九曜紋軒平瓦E a (243)

中心飾の周曜の配置が崩れ、各曜の大きさもまちまちである。唐草の内側の子葉は中心飾の下から斜め上に伸びる。

・九曜紋軒平瓦E b (244・245)

中心飾の周曜の配置が崩れ気味。中心飾の中位から鎌状の唐草が連続する。244の凹面には「五」の刻印、凸面には凹型台の痕跡がみられる。245の凹面には「勘七」の刻印がみられる。

カ．九曜紋軒平瓦F (246)

246の1点だけ出土した。瓦当面の左側を欠く。右側の唐草は、両端が鋭く尖る蔓に、下・上に棘状の子葉が突出する。

キ．九曜紋軒平瓦G

唐草が2個に分離するもので、内側の反転が強く外側はほぼ反転しないもの。文様構成から5つに分かれる。

・九曜紋軒平瓦G a (247)

九曜文の周曜の位置が崩れ気味で、内側の唐草が大きな円を描いて下へ反転する。

・九曜紋軒平瓦G b (248)

九曜文の周曜の位置が崩れ気味で、内側の唐草が大きな円を描いて下へ反転する。九曜紋G aに近いが、唐草の先端が中心飾に食い込むようにしなる点が特徴である。

・九曜紋軒平瓦G c (249)

249の1点だけの出土。中心飾の一部と左側の唐草を欠く。文様区がやや狭いため、唐草も釣針状に小さく反転する。

・九曜紋軒平瓦G d (250)

250の1点だけの出土。文様区の右側を欠く。内側の唐草は釣針状で、外側は意匠化して鎌状である。

・九曜紋軒平瓦G e (251)

251の1点だけの出土。中心飾の九曜紋は崩れ気味。中心飾下から出た内側の唐草は下向きに反転し、反転付近から伸びる外側の唐草は、両端が尖り文様区の端部に向けて上向きに伸びる。

ク．九曜紋軒平瓦H(252)

2点出土した。瓦当面の左端を欠くが、文様区はほぼ残存している。唐草は、子葉の表現は無く緩やかに上下に波打つ。波打ち毎に分離している。

ケ．九曜紋軒平瓦Ⅰ(253)

唐草の子葉が下と上に反転し、それぞれ分離気味である。蔓の波打ちや子葉の巻きは強い。

内側の唐草や中心飾の違いから、笵は2種類以上ある。

コ．九曜紋軒平瓦J(254)

内側の唐草は、中心飾の下位から上へ伸び子葉の先端が珠文化し音符状になっている。この唐草の途中から小花状の子葉が分離して中心飾を囲むように反転する。外側の唐草は、船底状に波打ち、間にオタマジャクシ状の珠文が配されている。

サ．九曜紋軒平瓦K(255)

唐草が子葉ごとに分離気味のもので、下・上・下・上に反転する。最も内側の子葉と、最も外側の子葉の端部は珠文状である。

シ．九曜紋軒平瓦L(256)

中心飾の下から唐草が大きく波打ち、下・上・下に反転する。端部以外の子葉の巻きは強く、ほぼ1周する。子葉の分かれ目にはつぼみが細い紡錘形または棒状の意匠で表現されている。

「山西」と読める意匠化した刻印がみられる。

ス．九曜紋軒平瓦M

中心飾の九曜が丸みを帯びて突出し、中心飾の下から花卉文化した唐草が伸びる。文様構成から2つに分かれる。

・九曜紋軒平瓦Ma(257)

唐草は中心飾下から子葉と蔓に分かれ、子葉は中心飾を囲むように反転する。先端が珠文化し勾玉状である。蔓は波打ちながら伸び、子葉が下に反転し、先端が珠文化している。この子葉の先は反転しない

・九曜紋軒平瓦Mb(259)

文様構成は九曜紋Laと同じだが、内側の子葉の端部が珠文にならない。3点出土しているが、同笵の可能性が高い。瓦当面右端に「丸に十字」の刻印がみられる。

セ．九曜紋軒平瓦N(260)

唐草につぼみの意匠があるもの。唐草は緩やかに波打ちながら子葉が上に反転し、その枝分かれ部分に異形のつぼみがある。蔓の先端は反転せず上に跳ねるように尖って終わる。

ソ．九曜紋軒平瓦O(261)

内側の唐草は巴文状に中心飾を囲み、その他は雲文化している。4点以上出土し、九曜文の笵傷からは少なくとも3点は同笵である。

m．滴水瓦(262～281)

「李朝系瓦」の一つ。過去の報告では朝鮮瓦と記述されたこともある。瓦当面の文様は、中央に年号「慶長四年八月吉日」などの文字が入る部分を2本の隆起線で区画し、その左右に梵字状の円形意匠や雲形が配されるものが特に知られている。今回の調査では瓦当面が完形の資料はない。277は雲形が線で表現されている。

中央に文字ではなく家紋などの文様を配したものもある。桔梗紋を配した滴水瓦が出土した(278・279)。

n．垂瓦(第137図282～287)

軒平瓦の一種だが、瓦当面の上下の幅が広い点と、平瓦との接合角度が鈍角になる点が特徴の「李朝系瓦」である。中心飾が下三葉文と果実のものが出土している。下三葉文は3点出土しており、いずれも笵

が異なる。285･286 は中心飾が果実状のもの。重複した葉が果実の脇に立体的に表現されている。

ｏ．軒目板(桟)瓦･軒桟瓦

軒目板(桟)瓦は桟瓦の一種で、軒平瓦の端に軒丸瓦を簡略化した軒丸部を、軒平部の瓦当面よりやや前になるように接合した軒先瓦である。軒桟瓦は、桟瓦をもとに軒平部の顎と円形の粘土板で瓦当面を形成したもの。軒丸部の文様の違いで、巴文･蛇の目紋･九曜紋･その他に大別し、さらに軒平部の文様構成や笵の違いで細分される。

ア．巴文軒目板(桟)瓦(288)

軒平部の文様の違いで 3 種に細分される。288 は瓦当面が軒平部の文様は、左右に広がる花文状の中心飾を内側に反転する勾玉状の唐草が囲む。さらに外側に双葉状の子葉と、波打つ蔓がそれぞれ分離して配される。

イ．巴文軒桟瓦(292)

292 は軒平部が桟瓦で、軒平部の文様は、放射状に広がる花弁の菊文を中心飾として、2 本の唐草が別々に伸びる。

ウ．蛇の目紋軒桟瓦(293)

293 の軒平部は蕉状の中心飾から 3 本に分かれた太い蔓が伸びる。上が雷状で、下二つが子葉状で先端が珠文状になる。

(3)鬼瓦･鯱(4-3-1-153 図)

鬼瓦は文様により桔梗紋･九曜紋･その他に分けて記述する。

ａ．桔梗紋鬼瓦(305 ～ 312)

305 ～ 307 は、花弁が接し花の輪郭が比較的直線的なもの。305 は、文様が陽刻されたもの。306 は桔梗紋状の花文。307 は大型の桔梗紋の花弁。308 ～ 310 は、花弁が接し花の輪郭が太く丸みを持つもの。311 は頂部が丸い盾形の隅鬼瓦。312 は、花弁もしくは葉の端部のみが残存し桔梗紋かは不明瞭。沢瀉文の可能性もある。

ｂ．九曜紋鬼瓦･その他(313 ～ 319)

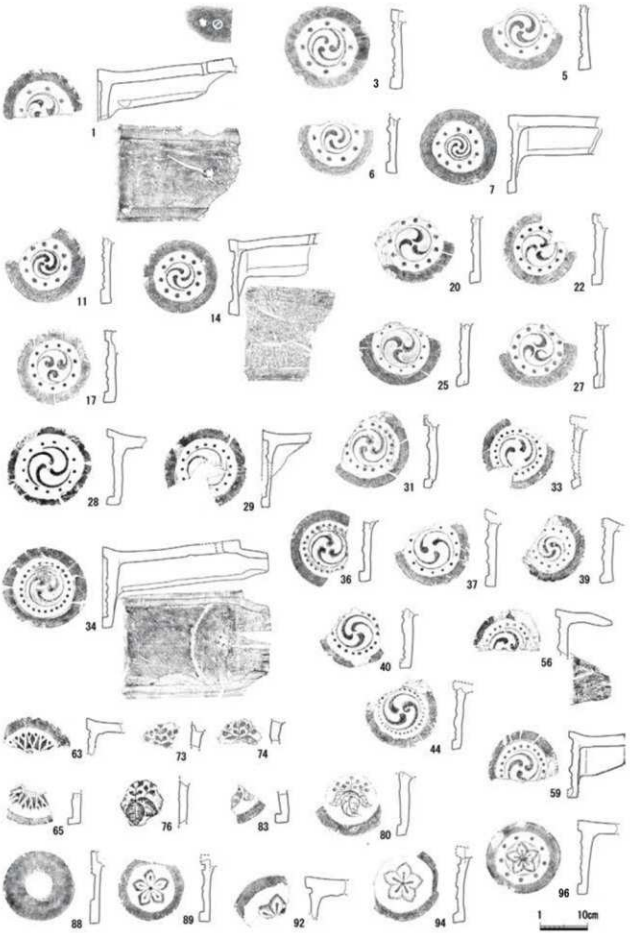
313 は九曜紋鬼瓦の右上部分。文様は脱落しているが、脱落痕が体部に球状に残る。314 は鬼瓦の右上の破片。文様は完全に欠けている。315 は鬼瓦の右側部分。脚部が直線状で、組み合わせ式の鬼瓦の可能性がある。316 は鬼瓦の左鰭部分。表面には手彫りにより葉脈部分を隆起させた葉の模様が彫られている。318 は隅鬼瓦の周縁。319 は右下の脚部で、脚の形状から隅鬼瓦である。本資料の表面には「元禄五　土山四□」の刻印がある。

(4)隅木蓋瓦(4-3-1-153 図 323 ～ 326)

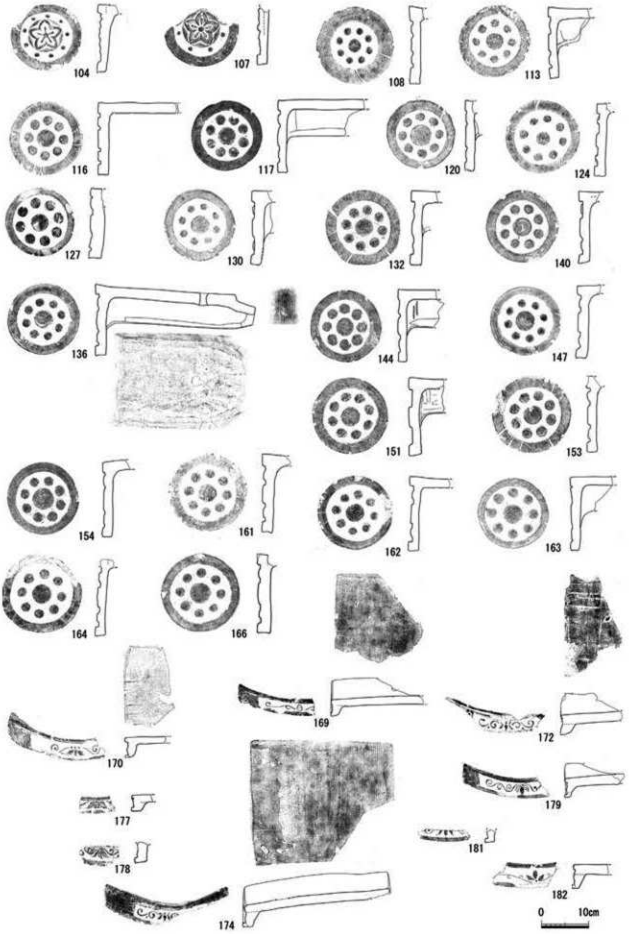
323 ～ 325 は九曜紋の隅木蓋瓦。326 は桔梗紋の隅木蓋瓦か。

(5)その他の道具瓦(4-3-1-153 図 329 ～ 4-3-1-154 図 358)

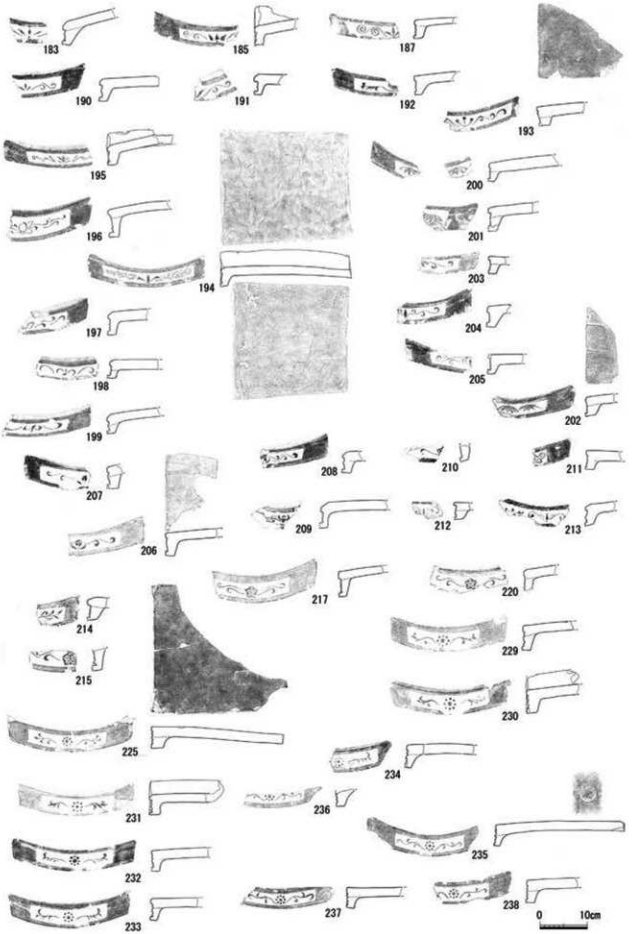
329 は桔梗紋の飾板瓦。330 も飾板瓦か。円で区画された中に花文が隆起線で表現される。331･333 は九曜紋鳥衾である。337 は雁振瓦である。側端には玉縁状の重ね目が突出する。「茂兵衛」の刻印がみられる。338･339･340･341･342 は輪違い。343 は袖瓦である。湾曲が非常に緩い平瓦側縁に、水切りが付く。344 は谷平瓦か。全長は 27 ㎝で、凹面側縁に水切り状の立ち上がりがある。345･346 は谷丸瓦である。345 は谷の右側の瓦である。水返しが付いていた痕跡がある。348 は谷平瓦で「源」の刻印がみられる。349 は谷平瓦か。350 は谷平瓦である。凹面に細かな砂と九曜紋の刻印がみられる。351･352･353･354･355･356 は使用位置が不明瞭な瓦である。357 は板瓦である。



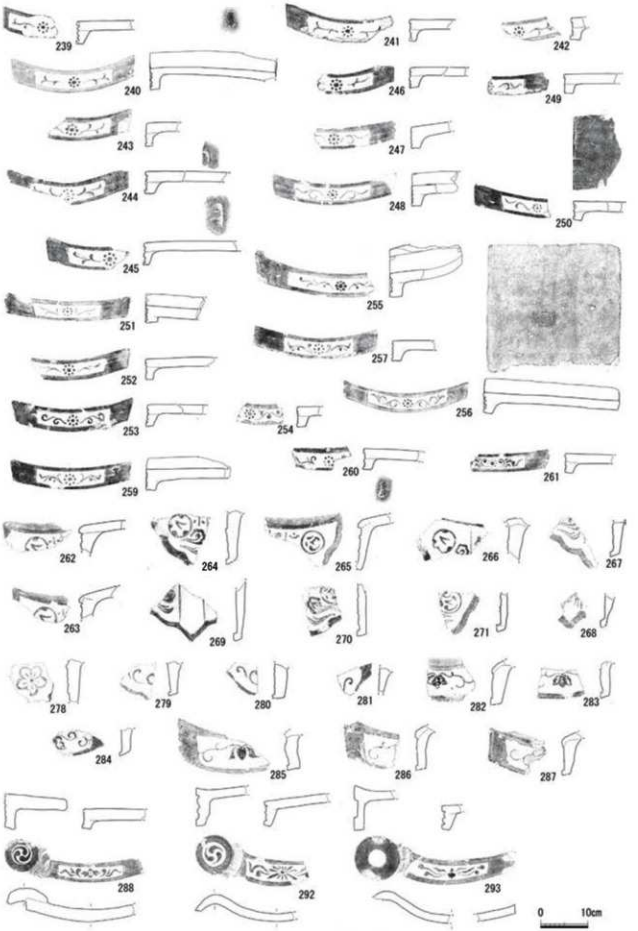
4-3-1-149 図　出土瓦実測図 1



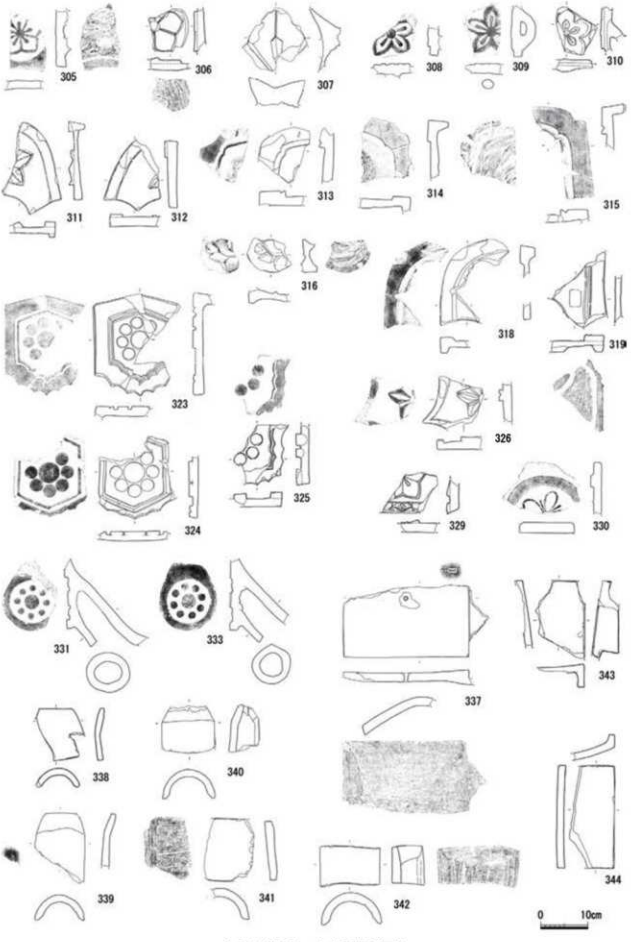
4-3-1-150図　出土瓦実測図2



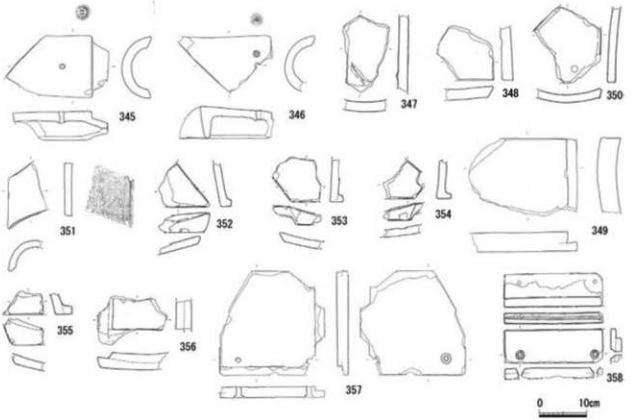
4-3-1-151 図　出土瓦実測図 3



4-3-1-152 図　出土瓦実測図 4



4-3-1-153 図　出土瓦実測図 5



4-3-1-154 図　出土瓦実測図 6

刻印(4-3-1-155 図～ 4-3-1-158 図)

a. 瓦の刻印について

飯田丸から出土した瓦のなかで、刻印のあるものについて述べる。刻印の種類としては、年号が記されたもの、工人の名前を記したもの、工人の名前の一部と思われる漢字一字を表したもの、記号的なものに大きく分類することができる。

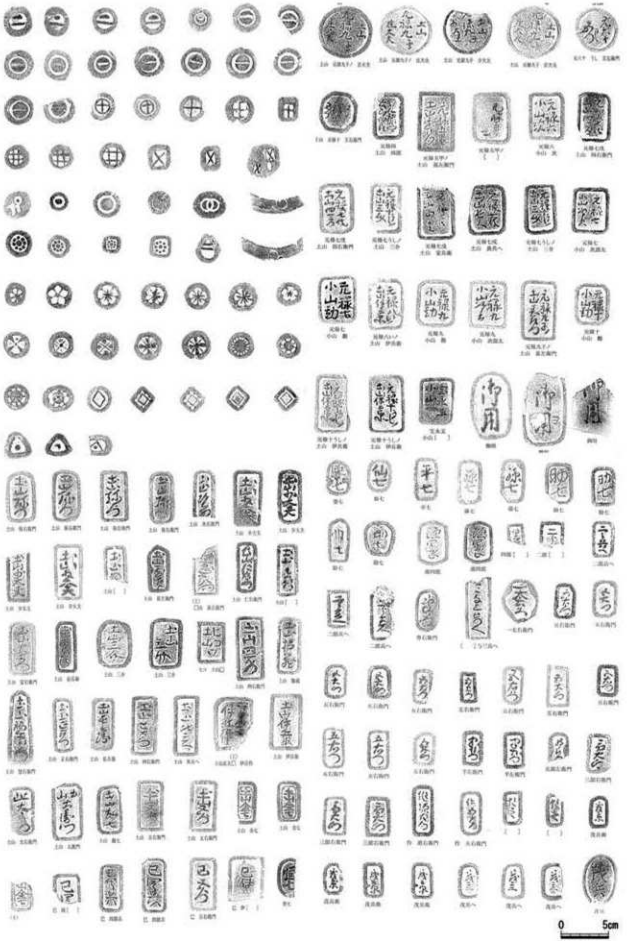
年号入りの刻印としては、元禄年間のものが大半を占め、宝永年間のものも数点みられた。刻印のパターンとしては、年号・製作地・製作者の三つを記すものが最も多い。判は角形と丸形のものが見られた。元禄・宝永年間の刻印を持つ瓦は飯田丸に限らず、城内の各所の発掘調査で出土している。地震や大雨・洪水などの災害による破損・修復についても考慮に入れる必要がある。

職人の名前を表した刻印には、地名と名前を記すもの、製作年の十二支と名前を記すもの、名前のみが記されたもの、製作者であることを明示したものが見られた。次に、丸形に「五」のように福田五右衛門の漢字一字を記したものや、漢字一字に十二支を組み合わせたものも見られた。このほかに、工人の名前を示す刻印として「猿渡」や、北村家を示す「北」のように苗字を記したものもある。

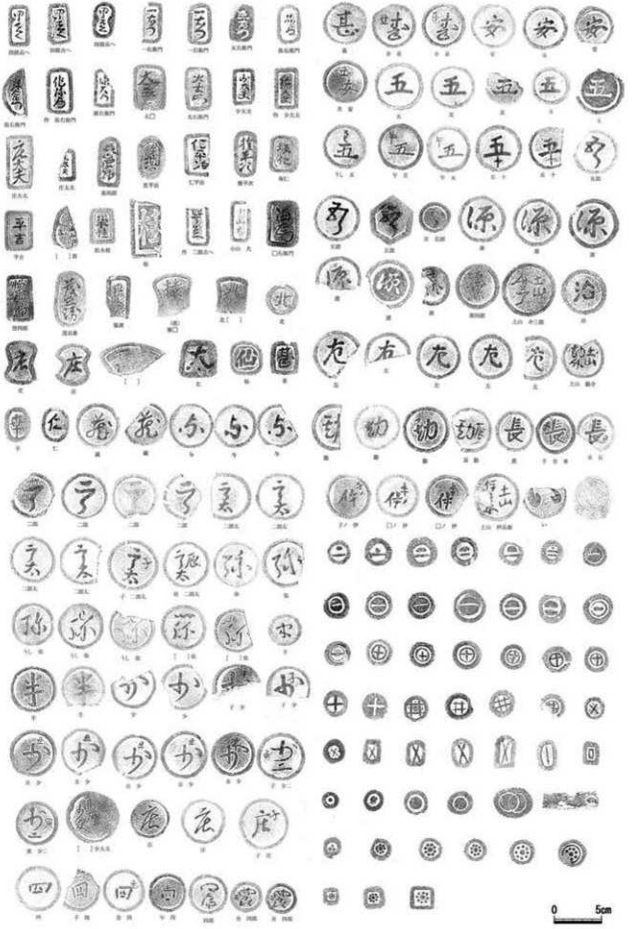
記号的な刻印の種類としては、九曜・桔梗・丸に一つ引きのように家紋として使用されるもののほか、丸や菱、花形などが見られる。

以上の刻印のほかに、「御用」と記されたものも見られ、目的によって判が使い分けられていたと考えられる。なお、小山・土山で製作された瓦のほかに、近代以降に柳川で製造されたことを示す刻印を持つ瓦が出土した。

4-3-1-155 図　出土瓦刻印拓本 1(第 153 ～ 156 図)



4-3-1-156 図　出土瓦刻印拓本 2(第 157 ～ 160 図)



4-3-1-157図　出土瓦刻印拓本3(第161～164図)

4-3-1-158 図　出土刻印瓦拓本 4（第 165 ～ 168 図）

【東竹の丸】

(1)概要

東竹の丸は本丸上段の下段、北東から南に伸びた曲輪である。寛永 11 年(1634)の「肥後国熊本城廻普請仕度所絵図」(熊本県立図書館蔵)によると平櫓から東十八間櫓付近までと、三間櫓から南の二つの曲輪に分かれており、いずれも「二丸」と記している。正保期とみられる「平山城肥後国熊本城廻絵図」(熊本県立図書館蔵)[2]も同様で、北東の曲輪は「本丸之内　東西廿四間　南北十八間」、南の曲輪は「本丸之内　東西三拾八間　南北三拾九間」と記され、二つの曲輪の間には塀が設けられている。宝暦年間以前と推定される「御城図」(永青文庫蔵)[3]には、曲輪を分ける塀はなくなり、以降の絵図も同様である。また、「御城図」には元硫黄櫓の北に塀に囲まれた建物群が描かれる。さらに、十四間櫓の西にも塀で囲まれた蔵のような建物と、塀の外に東西に長い建物が 1 棟ある。これらの建物は明和 6 年(1769)頃に描かれた「御城内御絵図」(熊本市蔵)(4-3-1-159 図)には見られない。

曲輪内の建築物について「御城内御絵図」から詳しく見ていく。曲輪内へは北の不開門、北東の東櫓門、南西の東竹丸入口冠木門の 3 ヵ所で連絡している。このうち不開門は現存する唯一の櫓門で、櫓部分は梁間 2 間、桁行 5 間の規模である。東竹の丸には江戸期の櫓が良好に残り、不開門のほかに田子櫓・七間櫓・十四間櫓・四間櫓・源之進櫓・東十八間櫓・北十八間櫓・五間櫓・平櫓が現存し、国の重要文化財に指定されている。このうち、天保 15 年(1844)に十四間櫓、安政 4 年(1857)に七間櫓、安政 6 年(1859)に源之進櫓、文久元年(1861)に東十八間櫓・北十八間櫓・五間櫓、慶応元年(1865)に田子櫓、慶応 2 年(1866)に四間櫓・不開門が修理を受けたことが棟札や懸魚・柱等の部材から分かっている。

このほか、現存しないが曲輪の南には元硫黄櫓、東に三間櫓と廻下塀、塩蔵、東櫓門、北東に櫓番詰所と六間櫓があった。これらの解体時期は不明だが、元硫黄櫓と東櫓門・六間櫓については明治 9 年(1876)の城内建物の様子を示した「城郭之図」[4](国立国会図書館蔵)には描かれているので、この時期までは残っていたと考えられる。

また、「御城内御絵図」では、城の東に位置する千葉城地区から不開門に向かう坂道上に等間隔でスギが植えられ、坂道下の冠木門前にも 4 本のスギの描写が見える。明治 4 年(1871)頃に撮影された写真ではスギはすべてなくなっており、坂道北東側の塀は中腹部分が大きく破損していたが、明治 5 年(1872)に撮影された写真(第 4-3-1-160 図)では塀は撤去されているのが確認できる。

明治 10 年(1877)の西南戦争直前の火災でも重要文化財櫓群は焼失を免れた。さらに明治 22 年(1889)熊本地震の被害図によると東竹の丸の石垣被害はほとんどなく、わずかに不開門脇の石垣が幅 4 間、高さ 3 間にわたり膨らみが生じ[5]、積み直しが実施されている。

大正 15 年(1926)に設立された熊本城趾保存会による募金活動の結果、宇土櫓の解体修理が決定すると保存の機運が高まり、昭和 2 年(1927) 2 月には東竹の丸の櫓群の修理が陸軍省予算で実施された[6]。昭和 8 年(1933)に石垣が史蹟に、田子櫓・七間櫓・十四間櫓・四間櫓・源之進櫓・東十八間櫓・北十八間櫓・五間櫓・不開門・平櫓が国宝に指定された。昭和 25 年(1950)に文化財保護法が成立すると、国宝は重要文化財に指定名称が変更となった。東竹の丸の重要文化財櫓群は昭和 31 年(1956)から 36 年(1961)にかけて解体修理、昭和 51 年(1976)から 59 年(1984)にかけて部分修理が実施された。また、不開門坂道は昭和 53・54 年(1978・79)度に整備工事を行なっている。

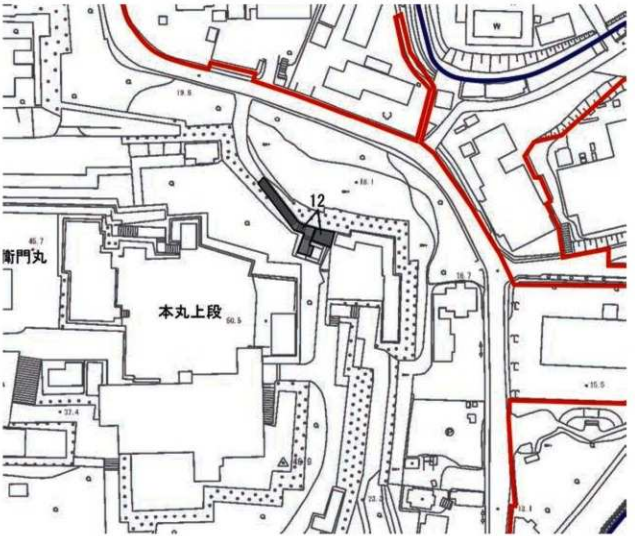
---

[1] 熊本県立図書館蔵『特別史跡熊本城跡総括報告書歴史資料編　絵図・地図・写真』熊本市　2019　11 ～ 16 頁
[2] 熊本県立図書館蔵　註 1 報告書 33 ～ 38 頁
[3] 永青文庫蔵　註 1 報告書 47 ～ 68 頁
[4] 国立国会図書館蔵　註 1 報告書 150 ～ 152 頁
[5] 宮内公文書館蔵　『特別史跡熊本城址総括報告書歴史資料編　史料・解説』所収 356 号文書
[6] 小島徳貞「熊本城址保存会を回顧して　十九」『熊本城』第 9 号　熊本城址保存会　1941

4-3-1-159 図　御城内御絵図（熊本市蔵）　東竹の丸部分

4-3-1-160図　千葉城から東竹の丸越しに見た天守(長崎大学付属図書館蔵)

(2)発掘調査成果の概要



12. 不開門

4-3-1-161 図　東竹の丸調査地点位置図

＜ 12 不開門＞

(昭和 51 年(1976)-53 年(1978))

報 告 書：熊本市教育委員会『熊本城不開門坂道復元工事報告書』1980

調査期間：昭和 51 年(1976)8 月 12 日～同年 9 月 10 日

昭和 53 年(1978)12 月 6 日～昭和 54 年(1979)1 月 20 日

調査面積：不明

調査主体：熊本市教育委員会

・調査に至る経緯

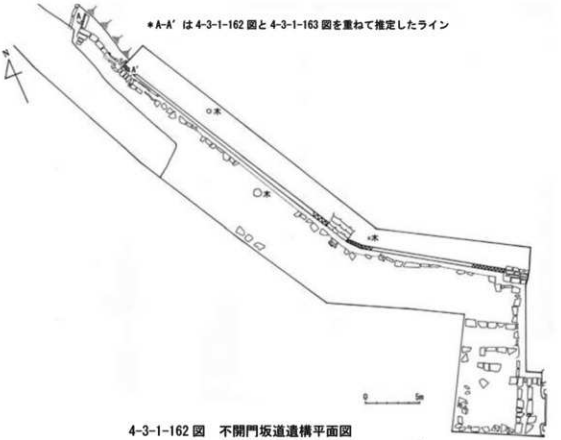
昭和 50 年(1975)より熊本市教育委員会では城内の工事、整備事業時に立会調査や事前の発掘調査を行なった。不開門坂道の整備に伴い、昭和 51 年(1976)に旧態を確認するための事前調査が始まった。昭和 53 年(1978)には昭和 51 年の調査にもとづき、工事に伴う発掘調査が行なわれた。

・調査の方法

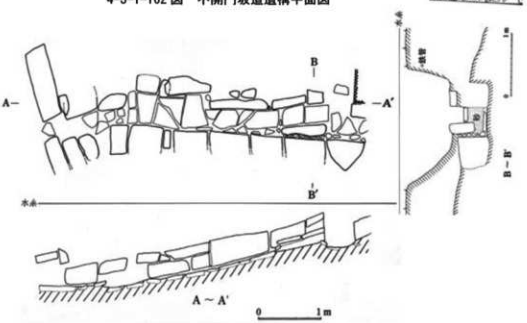
昭和 51 年に「加藤氏代ノ熊本之図」(個人蔵)、「肥後国熊本城廻普請仕度所絵図」(熊本県立図書館蔵)の史料を用いて文献調査を行ない、不開門坂道にトレンチを設定した。昭和 53 年は昭和 51 年の発掘調査の結果を受けて、工事の過程に合わせて不開門下より行ない、坂下へと順次進められた。

・調査の概要

5回の工事が行なわれていることがわかった。最上層のコンクリート舗装は昭和37年(1962)の工事であるが、その下に明治以降と推定される凝灰岩砕石を敷いた路面の形跡が見え、それより下に坂道の土留め兼排水のための石列があり、そのもう一段下に紫色の灰石を並べた石列が残っていた。コンクリート層表面から次の凝灰岩砕石敷の間には30cm～50cmの厚さで砂層と小砂利層がある。この下の茶褐色土層中には瓦片、陶磁器の混入が見られるので、この上面より明治になってからの改修とみることができる。茶褐色土層下には栗石層があり、その下には赤土の層がある。



4-3-1-162図　不開門坂道遺構平面図



4-3-1-163図　不開門坂道登口付近排水溝平・断面図

不開櫓門外虎口の門の外にある二段の安山岩の階段の発掘調査では、東西方向へ斜めに伸びる安山岩の石列を発見した。又虎口西北石垣と直角に三列の安山岩の石列を検出した。

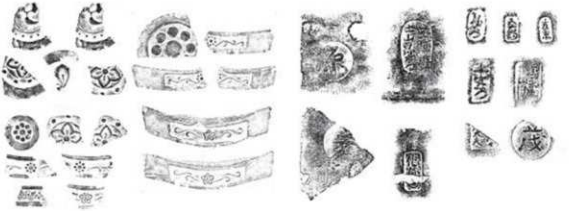
遺物の大半は江戸時代以前の瓦などである。軒丸瓦には桔梗紋、連珠文のめぐった三巴文をもつものがあり、軒平には桔梗を中心に置く唐草文がみられた。陶磁器類は幕末から明治・大正にかけてのものと考えられ、伊万里焼系のものが大半である。

昭和53年(1978)の調査は、昭和51年度の工事中に発見された安山岩を使った排水溝の存在状況を確認することを目的とした。虎口周辺では昭和51年度の調査時に検出した三列の排水溝が残っていた。坂下から見て二列目までは一石動いている他はほぼ完全に赤土層にのっており、動かされた痕跡はない。虎口を出た排水溝は、虎口よりの袖石垣へ登る階段付近の溜め桝と思われる遺構地点までは比較的良く残存していたが、そこを過ぎると点々と残っている程度である。一部凝灰岩の切石を排水溝の蓋として使用している部分がある。不開門下から袖石垣末端までの排水溝の総長は約52.4mであった。

着工前

虎口周辺遺構状況

4-3-1-164図　調査状況写真



4-3-1-165図　出土瓦拓影

(昭和55年(1980))

報 告 書：熊本市『重要文化財 熊本城不開門修理工事報告書』1981

調査期間：昭和55年(1980)7月～同年8月

調査面積：不明

調査主体：熊本市教育委員会

・調査に至る経緯

不開門修理にあたって、六間櫓跡に足場を設置することから、地下遺構を破壊する恐れもあるため、発掘調査が行なわれた。

・調査の方法

発掘前に礎石と思われる石が見え隠れしていたため、表土を剥ぐことから始め、一部礎石の据え具合を見るためトレンチを設定した。

・調査の概要

表土を剥いだ結果、六間櫓部分はすべて栗石で、柱礎石はすべて動いておらず原位置であることが確認でき、絵図と一致した。東石は、現存するものでも動いているものと動いていないものとがあり、一部抜き穴らしいピットも発見されたが、六間櫓部分はすべて栗石が入っていたため、東石の抜き穴かどうかは確認できなかった。栗石は、北西の一部に砕石と赤土が混じっており、明らかに他と異なっている。この部分の石垣西面は、裏込めを少なくして扇状に積み上げる手法であり、明らかに後世積み替えをしている。栗石は安山岩の川原石が主であり、礎石はすべて安山岩の川原石が使用されている。

・出土遺物

出土遺物は、和釘・瓦針・漆喰のかけらが出土している。そのほか、鉛板・十銭硬貨他がある。

4-3-1-166図　遺構配置図(15図)

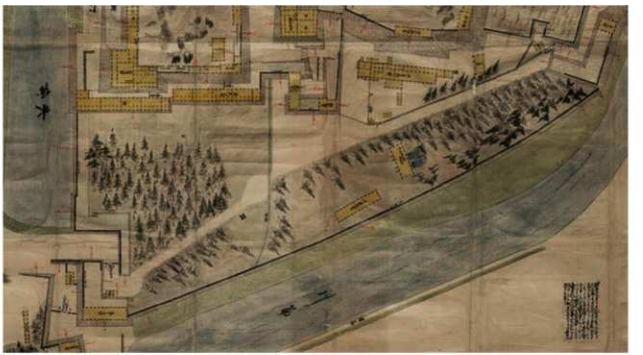
【竹の丸】

(1)概要

竹の丸は本丸のなかでも最も南に位置する、東西に延びた曲輪である。白川の旧河道だったが、慶長期の白川を直線化し坪井川を付け替えた河川改修工事後に、曲輪として造成された。慶長17年(1612)の「肥後筑後城図」(山口県文書館蔵)にはこの曲輪は見えず、「さこ」と記されている[1]。寛永7年(1630)前後の「熊本屋鋪割下絵図」(熊本県立図書館蔵)[2]では曲輪内に「御下台所」「えんしやう蔵」「御馬屋」「明屋敷」の施設が見える。また、重要文化財である長塀が建っている坪井川に面する石垣の中央付近には桝形があった。この桝形は南の花畑屋敷に向かう橋を架ける目的で設けられたものだったが、寛永11年(1634)の「肥後国熊本城廻普請仕度所絵図」(熊本県立図書館蔵)[3]では桝形を石垣でふさぐこととし、同年の夏には実施が指示されている[4]。また、同絵図では書物櫓・馬具櫓・平御櫓の建築が申請され、実施された。さらに須戸口門に櫓門、長塀のある石垣上に櫓を1棟建築する予定であったが、これらは実施をみなかった。

正保期の「平山城肥後国熊本城廻絵図」(熊本県立図書館蔵)[5]には「二之丸　東西百二十間　南北四拾四間」とあるように二の丸の扱いであったが、元禄年間以降の修補願絵図では「本丸」に含められている。長塀中央の桝形は完全に消失し、直線の長い塀となっていることが確認できる。曲輪へは東西2ヵ所の桝形で連絡しており、「御城内御絵図」(熊本市蔵)(4-3-1-166図)によると東は「東須戸口」、西は「山崎口」と呼ばれている。山崎口には「山崎口冠木御門」が設けられ、この門を出て下馬橋の方へ折れると「花畑橋口冠木御門」があった。この2つの門の内側にはそれぞれ番所が設けられていた。

「御城内御絵図」で曲輪内の建物を挙げると、元札櫓門・茶櫓・要人櫓・書物櫓・馬具櫓・平御櫓・長塀・御作事所・御鉄砲蔵・御作事所預御蔵である。元札櫓門は竹の丸から飯田丸に向かう最初の櫓門で、3間×10間の規模である。元札櫓門の東には3間×4間の茶櫓があった。要人櫓は4間×23間、4間×22間の2棟からなり、西側の櫓は西隅で北に2間折れている。「熊本屋鋪割下絵図」で「下御台所」とあった場所は「熊本城廻絵図」(熊本県立図書館蔵)[6]で「西郡要人佐」とあり、これが要人櫓の由来となったと考えられる。「御城図」(永青文庫蔵)[7]では同所は塀に囲まれたなかに、東西に長い建物と檜皮葺とみられる建物があるが、「御城内御絵図」にはこれらの建物はなく、スギ林となっている。書物櫓は4間×5間で、南面と東面の角と、南面の西端に石落が設け



4-3-1-166図　御城内御絵図(熊本市蔵)　竹の丸部分

られている。馬具櫓となっている石垣は南面で高さ4間、北面で2間3尺5寸と記される。馬具櫓は4間×11間で、南面の東西に石落が付く。須戸口の平御櫓は3間×4間で北東・北西の角に石落が付く。また、長塀は本図によると10ヵ所に石落が設けられている。曲輪の中腹から西寄りの位置に、北から南に向かって水道が確認できる。曲輪の北東は塀に囲まれた作事所で、曲輪の南側中央には御鉄砲蔵・御作事所預御蔵があり、周囲はスギ林となっていた。

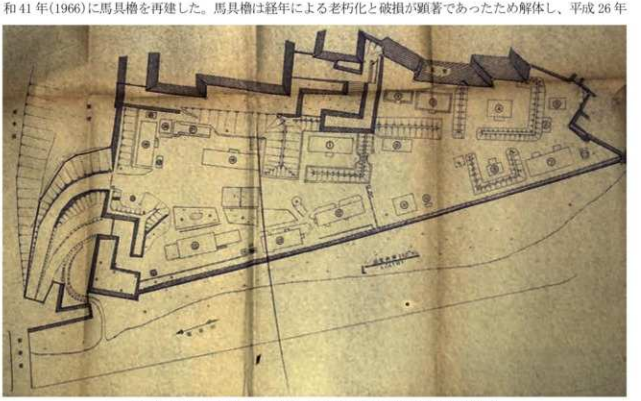
明治4年(1871)以前に撮影されたと想定される古写真には、入母屋造りで南面に引き上げ戸を持つ馬具櫓が写る。また、飯田丸を望んだ古写真(4-3-1-124図)には、備前堀の東側に、「山崎口冠木御門」から要人櫓台の石垣に向って続塀が確認できる。明治4年(1871) 7月には鎮西鎮台(のち熊本鎮台)が設置され、明治7年(1874) 6月には旧花畑屋敷から本丸へ鎮台司令部が移った。明治9年頃の作成と推定される「城郭之図」(国立国会図書館蔵)には、当時存在した建物の位置を斜線で示してあるが、馬具櫓の箇所には建物の表現はなく、すでに解体されていたようである[8]。

明治10年(1877)の西南戦争時の写真では馬具櫓跡は砲台として利用され、堡塁が築かれていた[9]。なお、書物櫓は明治10年時点では残存していたが、その後解体されたとみられる。また、要人櫓台から南を撮影した写真には長塀が写っておらず[10]、西南戦争以前に解体されている。

明治22年(1889)熊本地震では長塀の石垣全面に崩落と膨らみ、山崎口の桝形内と馬具櫓台・要人櫓台に石垣崩落の被害があった 。長塀石垣については積み直された後に、軍によって塀が復旧されたとみられる。要人櫓台は一部が復旧されないまま残っていたが、平成16年(2004)に積み直しが行なわれた。

軍の管理下に置かれていた時期に竹の丸には火薬庫などの建物が建ち、その周辺に石垣等が造られた(4-3-1-167図)。戦後には進駐軍によって行幸坂から要人櫓台南に車両通行のためのスロープが形成された。昭和28年(1953)に長塀が白アリ被害のため約110mにわたって倒壊、その後復旧された。また、昭和29年(1954)に竹の丸は特別史跡熊本城跡に追加指定された。昭和34年(1959)には長塀の北に残っていた陸軍の煉瓦倉庫が解体されたが、その解体工事中に倉庫の煉瓦壁が倒れたため一部長塀が損傷し、復旧されている。

その後、昭和32年(1957)には櫨方門が移築され、昭和35年(1960)に須戸口に平御櫓をコンクリート再建、昭和41年(1966)に馬具櫓を再建した。馬具櫓は経年による老朽化と破損が顕著であったため解体し、平成26年



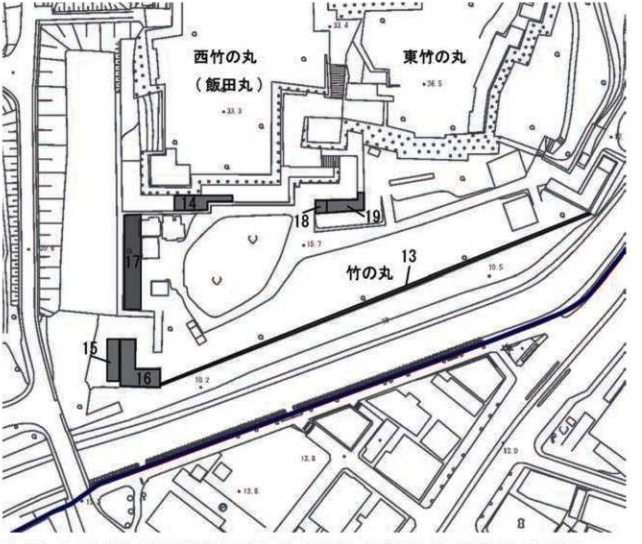
4-3-1-167図　昭和29年竹の丸平面図(熊本県教育委員会提供)

(2014)に木造復元した。

---

[1]『特別史跡熊本城跡総括報告書歴史資料編　絵図・地図・写真』熊本市　2019　4 頁
[2] 註 1 報告書　5 ～ 10 頁
[3] 註 1 報告書　11 ～ 16 頁
[4]『特別史跡熊本城址総括報告書歴史資料編　史料・解説』所収 102 号文書
[5] 註 1 報告書　33 ～ 38 頁
[6] 註 1 報告書　98 頁
[7] 註 1 報告書　47 ～ 68 頁
[8] 註 1 報告書　150 ～ 152 頁
[9] 註 1 報告書 154 ～ 155 頁、193 頁
[10]註 1 報告書 195 頁
[11]註 1 報告書 158 ～ 159 頁

(2) 発掘調査成果



13. 長塀　14. 要人櫓跡　15. 御花前橋口冠木門跡　16. 馬具櫓跡　17. 続塀跡　18. 元札櫓門跡　19. 茶櫓跡

4-3-1-168 図　竹の丸調査地点位置図

＜13 長塀＞

報 告 書：熊本市『重要文化財熊本城監物櫓・長塀修理工事（屋根葺替、部分修理）報告書』1979

調査期間：昭和 52 年（1977）12 月～昭和 53 年（1978）2 月

調査面積：不明

調査主体：熊本市教育委員会

・調査に至る経緯

昭和 28 年（1953）以降、国の直轄事業として長塀の解体修理工事が行なわれた。昭和 51 年(1976)9 月 12 日に上陸した台風によって堀側に約 60 mにわたって 100 分の 3 が内外傾斜する被害を受けたもので、番線などにより補強していたが、軸部の傾斜が徐々に進行しており、危険な状態にあった。そのため、解体修理に伴い、掘削が行なわれた。

挿図15　慶長 4 年銘の瓦
（昭和52年長塀控石柱据え直し時出土）

挿図18　長塀控石柱据え直し時
（昭和52年）出土の瓦当

4-3-1-169 図　出土瓦（挿図 15・18）

・調査の方法

不明

・調査の概要

控石柱の据え直しのための掘削中に軒平瓦（滴水瓦）の一部が発見された。左右に金鳥玉兎雲形を配し中心に「慶長四年八月吉日」とあり昭和 32 年（1957）天守閣復元に伴う発掘調査で発見された二枚の瓦と同じ時期のものである。出土場所は、東より第二十九控柱付近であり、他の瓦の破片や煉瓦などが混じった土層である。

同時に、軒丸瓦の一部が出土したが、これは不開門の中に保管されていたものと同じ紋様のもので、中心に二重の円を巡らし、その周りに楔形や菱形を配する重弁のもので西洋的な文様である。監物櫓の石垣下からも同じものが出土している。

＜14 要人櫓跡＞

報 告 書：熊本市熊本城調査研究センター『熊本城発掘調査報告書３－石垣修理工事と工事に伴う調査－第１分冊』2016

調査期間：平成 16 年(2004)12 月 24 日～平成 17 年(2005)1 月 20 日

調査面積：約 90 ㎡

調査主体：熊本市教育委員会

調査に至る経緯

昭和 51、52 年度に実施した西竹の丸五階櫓台石垣の解体修理の際にその一部(東隅から 9.7 m)が復元整備されたが、撤去部分が残されており本来の姿に復元することが城としての景観からも適切であるとしたため、石垣修理工事に伴い発掘調査が行なわれた。

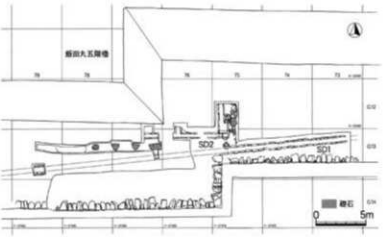
・調査の方法

調査地は、飯田丸曲輪南面石垣にとりつく犬走り状の帯曲輪の上面に位置する。既設配管周辺の表土を重機で除去し、遺物包含層の掘り下げと遺構の検出は人力で行なった。

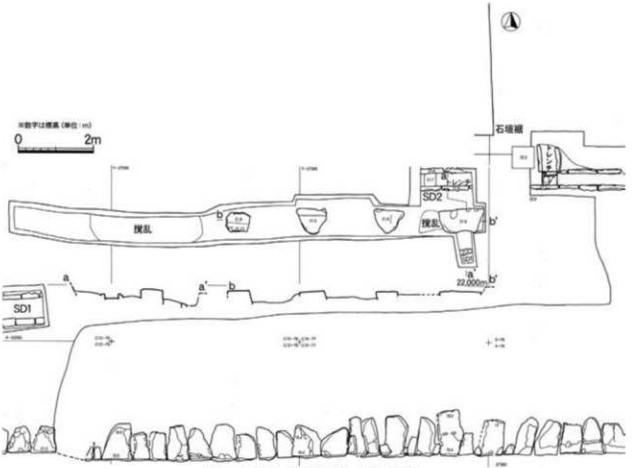
調査グリッドは、縮尺 2500 分の１の地図上において日本測地系座標を基に設定した。まず、熊本城城全体を覆うように 500 m ×500 m の大グリッドを設けてＡ～Ｍのアルファベットを冠し、それぞれの大グリッド中に５m ×５m の小グリッドを設定して北から南、東から西へ１～ 100 の番号をつけ、アルファベットの大グリッド名と小グリッドの数字２つを組み合わせてグリッド名とした。(例: A 100 － 100 グリッド)

・調査の概要

飯田丸曲輪南面石垣にとりつく犬走り状の帯曲輪の上面に位置する。基本層序は以下の通りである。



4-3-1-170 図　遺構配置図(76 図)



4-3-1-171 図　遺構実測図(77･78 図)

1 層：黒褐色土(10YR 2/2)栗石を多く含む。

2 層：黒褐色土(10YR 2/2)栗石を含む。

3 層：暗褐色土(10YR 3/4)焼土･炭化物を含む。

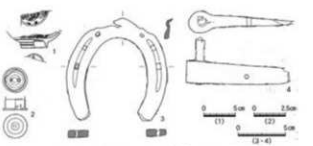
4 層：暗褐色土(10YR 3/3)焼土･炭化物と漆喰片を多く含む。

5 層：暗褐色土(10YR 3/4)焼土･炭化物と漆喰片を多く含む。ややしまる。旧地表面か。

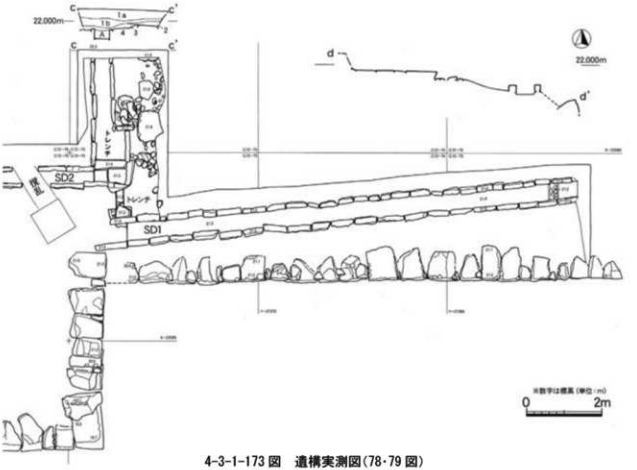
A 層：褐色土　(10YR 4/4)焼土･炭化物と漆喰片を多く含む。近世瓦片が混じる。溝の埋土。

礎石は、帯曲輪石垣中程の入隅北側で南北方向に並ぶ 2 石、同じく入隅より西側で東西方向に並ぶ 4 石を検出した。櫓の柱間寸法は 6 尺 5 寸(約 2 m)と推測している。SD2 は櫓の北側を通る雨落ち溝と判断した。雨水は SD2 の拡幅部分から帯曲輪石垣の入隅部分へ導水されていたが、拡幅部分から南側では側石が抜き取られ、底石を残して埋め戻した上に礫を積み、溝が塞がれていた。この SD2 が塞がれた部分の南側では、溝状の石組 SD1 が検出されている。SD1 は、櫓廃絶後の排水施設として、SD2 の改変と同時か、それ以降に造られたものと考えている。

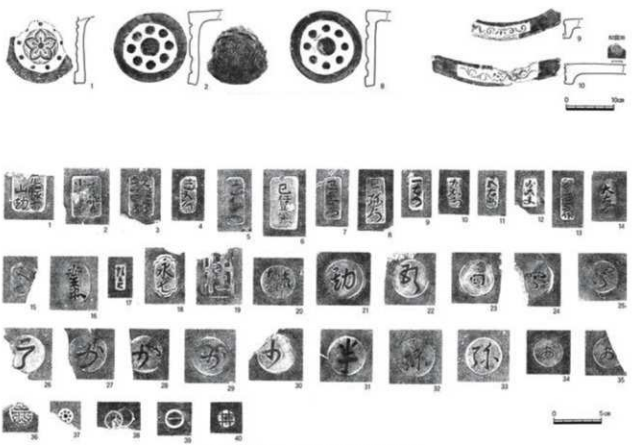
遺物は、景徳鎮窯系青花碗･スナイドル銃薬莢･蹄鉄･鉄製の肘壷金物･瓦などが出土している。



4-3-1-172 図　出土遺物 1(80 図)



4-3-1-173 図　遺構実測図(78・79 図)



4-3-1-174 図　出土遺物 2(81・82 図)

＜15 元札櫓門跡＞

報 告 書：熊本市熊本城調査研究センター『熊本城跡発掘調査報告書３－石垣修理工事と工事に伴う調査－第１分冊』2016

調査期間：平成 15 年(2003)11 月 28 日～同年 12 月 16 日

調査面積：不明

調査主体：熊本市教育委員会

以上茶櫓も同様である。

・調査に至る経緯

元札櫓門跡南側の石垣は経年による膨らみや間詰石の落下が顕著であり、天守台などへ到る主要な見学通路であることから、観光客などの安全を確保する必要があった。

以上のことにより、櫓台南側について、上面の遺構調査及び石垣の膨らみや間詰石の落下が顕著な部分を中心として解体修理工事などを行なった。解体修理工事に先立ち、櫓台上面の発掘調査を行なわれた。

・調査の方法

発掘調査は人力により表土から手掘りで行なわれた。調査対象は櫓台上面であり、「門」部分の調査は行なっていない。

・調査の概要

元札櫓門は、石垣の輪どりによって羽子板状に西に開く櫓台の西端の上に乗る格好である。石垣の西端は南北幅約 7.3 m で、西端から 5 m東側で礎石列を確認した。礎石列部分の南北幅は 6.45 m。調査前の地表面下 40 ～ 60 ㎝で栗石を確認した。栗石上面のレベルは 21.8 m前後で、石垣沿いは浅くなる。石垣内側沿いの栗石は、やや大振りで人頭大ものが使用されている。栗石上に堆積していた土は整然と堆積し、全体的に軟質であり、石垣との天端合わせのための客土と判断した。表土上にみられた安山岩はこの層の中で収まる。よって、元位置ではないことが確実であり建物の礎石ではない。礎石の可能性があるものは、栗石上面で安定した一石だけである。礎石の可能性がある遺構の断面の土層の所見は以下の通りである。

1 層：黒褐色土

現在の表土。現代の遺物。近世瓦を多く含む。しまり・粘性弱い。

2 層：黒色土

1 に近似した土。炭化物を多く含む。元札櫓と茶御櫓付近にみられ、間にはほとんどみられない。

3 層：暗褐色土

しまり・粘性やや強い。瓦をまばらに含む。

4 層：暗褐色土

粘性強く、砂質感も強い。褐色土がブロック状に入る。

5 層：灰色土

粘性強く、砂質感も強い。小礫がやや目立つ。

6 層：4・5 が混在した土

近世瓦を多く含む。

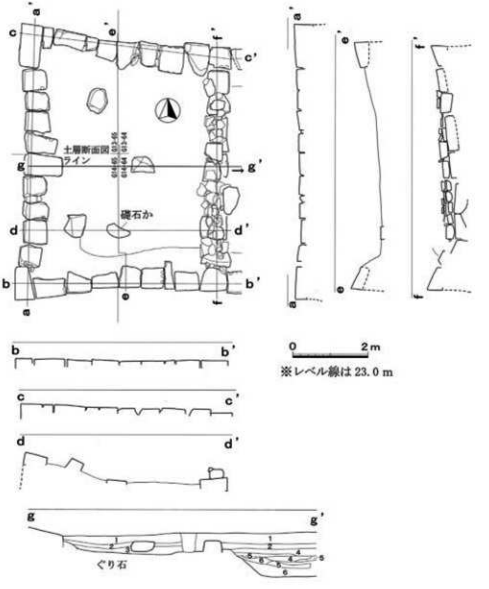
※1 ～ 3 は近現代の客土。4 以下は整地土。全体的にしまりが強く、櫓台の本来の表土と判断した。

1 ～ 3 をⅠ層、4 以下をⅡ層として遺物を取り上げている。

礎石列は、当初は安山岩のみで構成されていたが、安山岩や凝灰岩を挿石している。石垣天端石と当初の礎石列の高低差は、南側で 75 ㎝である。

・出土遺物

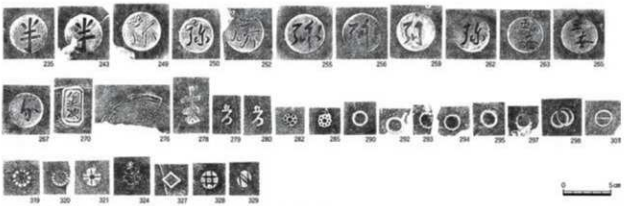
軒丸瓦・軒平瓦とも細川家家紋の九曜紋を刻するものが出土量・種類とも多く、突出している。整地層から出土した瓦は、桐紋・桔梗紋・巴文軒丸瓦、桔梗紋・三葉紋軒平瓦、桔梗紋飾板瓦など加藤期の瓦が主体で九曜紋軒丸瓦など細川期の瓦は客体的である。



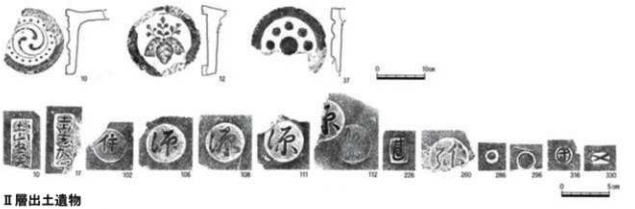
4-3-1-175 図　遺構実測図 元札櫓平面・断面図(第 28 ～ 31 図)

Ⅰ層出土遺物

4-3-1-176図　出土遺物1



Ⅰ層出土遺物



Ⅱ層出土遺物

栗層出土遺物

4-3-1-177 図　出土遺物 2

＜16 茶櫓跡＞

調査期間：平成 15 年(2003)11 月 28 日～同年 12 月 16 日

調査面積：不明

・調査に至る経緯

櫓台の石垣に膨らみがみられたため、石垣の解体修理を行なった。この解体修理に先立ち、櫓台上面の発掘調査を行なった。

・調査の方法

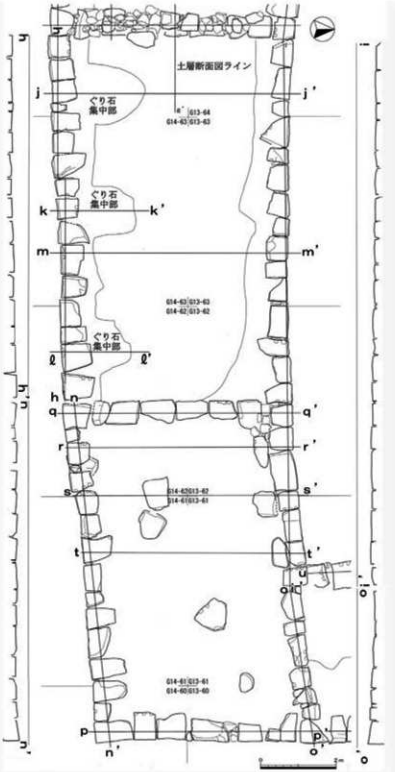
発掘調査は人力により表土から手掘りで行なった。調査対象は、櫓台上面である。

・調査の概要

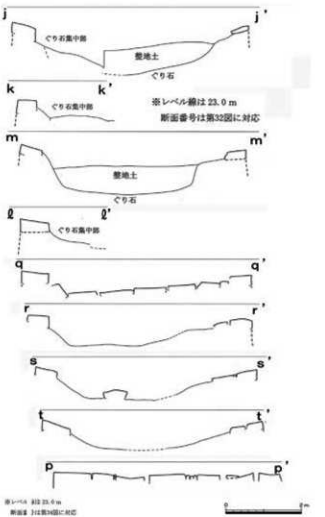
調査の結果、櫓台上面はいびつな長方形を呈し、東西約 9 m、南北約 6 mで、東端から約 8.5 m西側で礎石列を検出した。地業土は 30 ㎝前後の厚さで、しまりの強い土が版築状に貼られていた。地業土下は栗石である。栗石は、こぶし大が多いが、南側石垣沿いでは人頭大のものが使われている。礎石列は安山岩で、挿石はないが石垣天端とは高低差がある。南側の高低差は顕著で、約 60 ㎝である。表土中に安山岩が数石あったが、安定したものはない。元位置ではなく、礎石ではないと判断した。北側の石垣沿いには 3 石の平らな石が据えられている。芯心距離で 120 ㎝の等間隔である。

元札櫓跡・茶櫓跡の礎石列間は、表土下に茶櫓下と同様の地業土がみられた。同じような質の土が版築

状に貼られていたが、茶櫓跡に比べかなり分厚く 70 ～ 80 ㎝の厚さがある。地業土は中央部分が深く、西と東の礎石列に向けて船底状に浅くなる。地業土下は栗石である。南側石垣沿いの地業土上面には、3 ヵ所の栗石の集中がみられた。集中部の平面形は、直径 130 ～ 150 ㎝ほどのいびつな円形である。集中部の芯心距離は 300 ㎝と 360 ㎝で等間隔ではないが、礎石列間が約 10 m であった。茶櫓跡の北側からも地業土が検出され、東側石垣沿いに 2 ヵ所の栗石集中がみられた。集中部の芯心距離 280 ㎝である。地業土の下位からは多量の瓦が出土した。九曜紋瓦も出土しており、今回確認した地業土が貼られたのは細川期以降である。



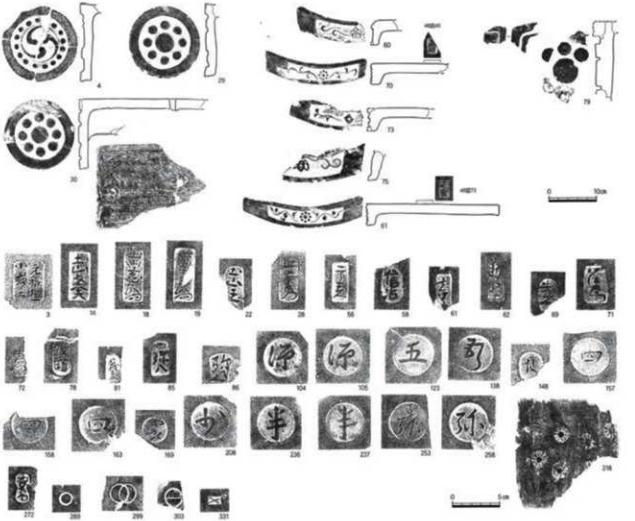
4-3-1-178 図　遺構実測図 元札櫓・茶櫓門平面・断面図(第 32 ～ 35 図)



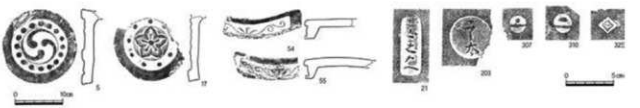
4-3-1-179 図　遺構実測図
元札櫓・茶櫓門断面図(第 33・35 図)

・出土遺物

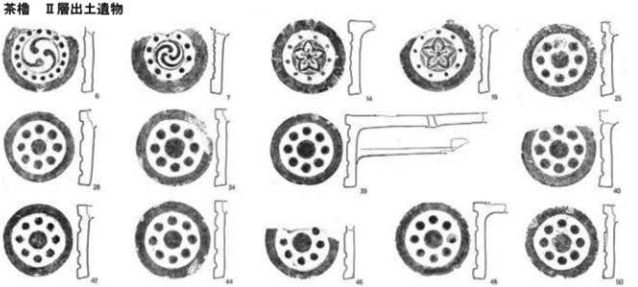
遺物は、元札櫓門跡と様相は似ている。軒丸瓦・軒平瓦とも細川家家紋の九曜紋を刻するものが出土量・種類とも多く、突出している。上面が硬化した整地層が確認されており、ここから出土した瓦は、桐紋・桔梗紋・巴文軒丸瓦、桔梗紋・三葉紋軒平瓦・桔梗紋飾板瓦など加藤期の瓦が主体で、九曜紋軒丸瓦など細川期の瓦は客体的である。



茶櫓　Ⅰ層出土遺物



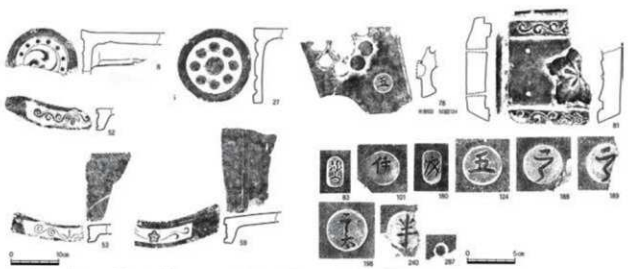
茶櫓　Ⅱ層出土遺物



元札櫓・茶櫓間　Ⅰ層出土遺物

4-3-1-180図　出土遺物1

元札櫓・茶櫓間　Ⅰ層出土遺物



元札櫓・茶櫓間　Ⅱ層出土遺物

4-3-1-181 図　出土遺物 2

＜17 御花前橋口冠木門跡＞

報 告 書：熊本市『特別史跡熊本城跡　馬具櫓復元整備事業報告書』2016

調査期間：平成21年(2009)11月18日～平成22年(2010)3月31日

調査面積：約3500㎡(馬具櫓及び続塀一帯復元整備事業)

調査主体：熊本市教育委員会

以上、馬具櫓・続塀も同様である。

・調査に至る経緯

熊本市は平成9年度に「熊本城復元整備計画」を策定した。昭和35年(1960)から昭和42年(1967)にかけて再建された建造物は、経年による老朽化、破損等が顕著となっていた。平成20年度から平成29年度までの10年間を目処に「馬具櫓及び続塀一帯」「平左衛門丸の塀一帯」「西櫓御門及び百間櫓一帯」の復元整備が計画された。

・調査の方法

馬具櫓跡の櫓台上面を中心に備前堀沿いの塀跡と山崎口冠木門跡、御花前橋口冠木門跡および番所跡等チを設定しながら行なわれた。

・調査の概要

馬具櫓台北西隅の石垣から御花前橋口冠木門遺構を確認するために調査が行なわれた。便所跡と思われる埋甕が検出された。

・出土遺物

遺物は瓦などが出土した。

4-3-1-182図　出土遺物

＜18 馬具櫓跡＞

調査期間：平成21年(2009)11月18日～
平成22年(2010) 3月31日

調査面積：約3500㎡
(馬具櫓及び続塀一帯復元整備事業)

・調査に至る経緯

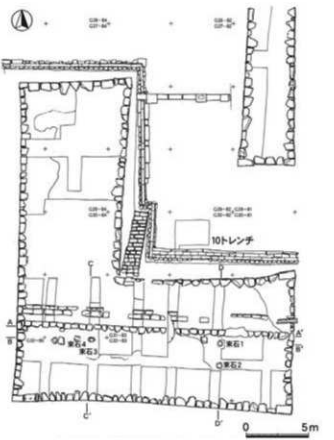
御花前橋口冠木門跡・続塀跡と同様に馬具櫓及び続塀一帯の復元整備に伴い調査が行なわれた。

・調査の方法

馬具櫓跡の櫓台上面を中心に備前堀沿いの塀跡と山崎口冠木門跡、御花前橋口冠木門跡および番所跡などにトレンチを設定しながら行なわれた。

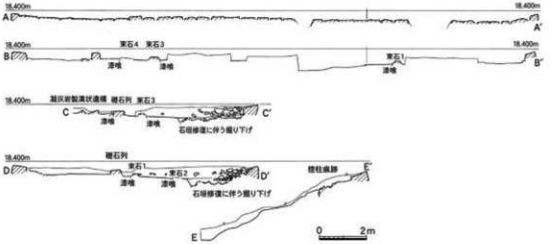
・調査の概要

調査は櫓台上面に設定したトレンチの掘り下げを中心に行なった。櫓台上面に露出していた礎石列に伴う整地面は南へ傾斜しており、調査前の櫓台上面の高さは明治以降の客土によるものである。礎石列の南側で検出した4石の東石も含め、石材はすべて安山岩で、礎石列の北面下部と東石の根回りには漆喰が塗られていた。櫓台南面と西面石垣の中位から



4-3-1-183図　遺構実測図(第21図)

上位では石垣の改修が行なわれており、礎石列と東石に伴う整地面は礎石列から南へ約３ｍの部分で途切れていた。



4-3-1-184 図　遺構断面図(第 24 図)

4-3-1-185 図　出土遺物

・出土遺物

遺物は、瓦など・8 世紀後半～ 9 世紀初頭の須恵器の碗・14 世紀後半の高麗青磁・19 世紀後半～ 20 世紀中頃の肥前系陶磁器・金属製品・エンフィールド銃弾・スナイドル銃薬莢・銭貨・石製品・獣骨が出土した。

＜ 19 統塀＞

調査期間：平成 21 年(2009)11 月 18 日～平成 22 年(2010)3 月 31 日

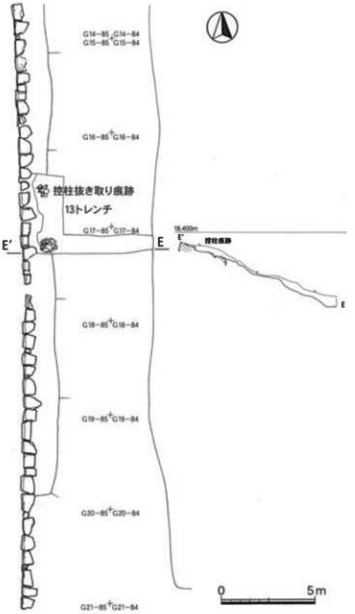
調査面積：約 3500 ㎡(馬具櫓及び統塀一帯復元整備事業)

・調査に至る経緯

御花口冠木門跡・馬具櫓跡と同様に馬具櫓及び統塀一帯の復元整備に伴い調査が行なわれた。

・調査の方法

馬具櫓跡の櫓台上面を中心に備前堀沿いの塀跡と山崎口冠木門跡、御花前橋口冠木門跡および番所跡などにトレンチを設定しながら行なわれた。



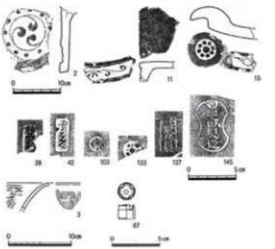
4-3-1-186 図　遺構実測図(第 23・24 図)

・調査の概要

控柱の抜き取り痕跡が 2 基検出された。根固めにはこぶし大から人頭大の自然礫が使用されており、西側石垣天端との間隔は約 1.4 m、2 基の間隔は約 2.8 m であった。抜き取り痕跡周囲の整地面は、現状の斜面とほぼ同じ傾斜で東へ下っており、表土下で中段に幅 1 m程の平坦面がみられた。山崎口冠木門東側から北側にかけての石垣も後世に改修されており、塀の痕跡は確認できない。

・出土遺物

出土遺物は、瓦など・不明真鍮製品が出土した。



4-3-1-187 図　出土遺物

【西出丸】

(1) 概要

西出丸は平左衛門丸の西に築かれた出丸で、平左衛門丸と空堀で隔てられている。江戸期・近代の西出丸は奉行丸も含むが、本報告書では奉行丸・櫨方丸を除いた地区を西出丸と表記する。なお、「西出丸」の名称は江戸時代には確認できず、寛文6年(1666)の「御城分間」(永青文庫蔵)には「長寿院様御丸」と見える[1]。その後、享保年間の「隈本御城之事」(熊本県立図書館蔵上妻文庫)には「元御預人被召置候丸」とあり[2]、同時期の「肥州録」には戌亥櫓を「宇土類族方御預置候三階櫓」と呼んでいる[3]。

西出丸の完成は安永8年(1779) 5月の戌亥櫓修復時に発見された棟札に「慶長七年寅十月、出丸にて十八棟の末に大黒矢倉出来」と書かれていたことが「肥後国年歴」にあることから慶長7年(1602)とされるが[4]、この棟札は現存しない。一次史料としては慶長17年(1612)の「肥後筑後城図」(山口県文書館蔵)で西出丸が成立しているのが確認でき、曲輪の北には中川寿林屋敷、南には御米蔵が置かれていた[5]。寛永7年(1630)前後の「熊本屋鋪割下絵図」(熊本県立図書館蔵)では、曲輪北側に佐々平馬屋敷、南側が御蔵となっており、同絵図によると、細川家入国後に佐々平馬屋敷は浅山修理の屋敷に割り当てられた[6]。

以下、明和6年(1769)頃に成立した「御城内御絵図」(熊本市蔵)(4-3-1-188図)によって曲輪の構成を述べる。西出丸への出入口として北大手門・西大手門・南大手門の3つの櫓門が設けられた。北大手門は3間×10間、西大手門は4間×11間、南大手門は6間×17間の規模である。なかでも西大手門は「平山城肥後国熊本城廻絵図」(熊本県立図書館蔵)によると、二の丸から西大手門を通って頬当御門、閘御門まで太い朱線が引かれ[7]、このルートが正式なものであったと考えられる。3つの櫓門の内側にはそれぞれ番所が配されていた。さらに、南大手門の北には「大御番所」が位置した。また、北東の櫨方会所とは柵で区切り、南の奉行丸とは塀で区切って中門を設けていた。本丸とは空堀で隔てられ、土橋に設けられた頬当御門が出入口となっていた。

曲輪の大部分は蔵と塀で囲われた「御蔵方会所」である。「御城内御絵図」より前に成立したとみられる「御城図」(永青文庫)には曲輪北側に檜皮葺の建物が集中し、曲輪の中央付近に南北方向に長い蔵が1棟、西大手門の北に東西方向の蔵が1棟確認できる。これらの2棟の蔵は「御城内御絵図」でも描かれ、6間×33間と6間×17間の2棟の「御米蔵」である。なお、「御城内御絵図」では御蔵方会所内の建物は描写を省略しているとみられる。

明治4年(1871)頃に撮影された古写真には、西大手門と御蔵、戌亥櫓などの建物を確認できる(4-3-1-189図)。その後に西出丸では建物の解体が進み、西大手門・西側塀が解体され、西南戦争前までに西面の石垣は中途まで撤去が完了し(4-3-1-190図)、西南戦争開戦前には宇土櫓側の堀際に堡塁が築かれた(4-3-1-191図)。

明治22年(1889)熊本地震では北側石垣の内側2ヵ所で石垣が崩落する被害があったが[8]、陸軍で復旧された。昭和8年(1933)に北側の石垣が史蹟に指定され、昭和27年(1952)に史跡熊本城跡となり、昭和29年(1954)には西出丸一帯が史跡に追加指定された。また、昭和30年(1955)には特別史跡に指定された。

明治時代に撤去された西側石垣は、昭和45年(1970)に復元に着手し、昭和50年に完成した。さらに昭和56年度に西大手門を木造復元したが、平成11年(1999)の台風18号で西大手門が倒壊し、石垣も一部被害を受けた。平成13年(2001)に石垣の保存修理工事を行ない、同年から平成16年(2004)にかけて西大手門の復元整備工事を行なった。

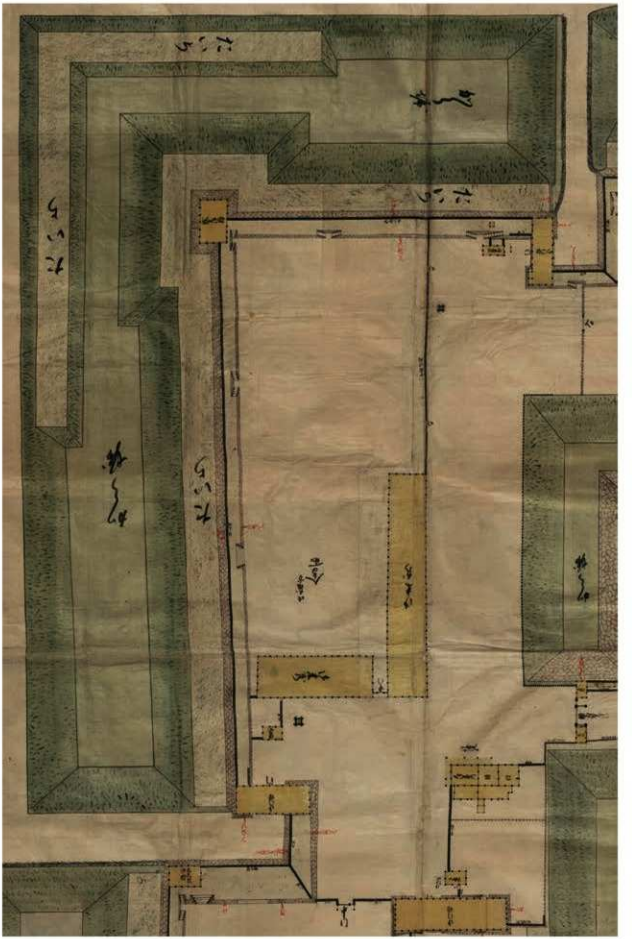
また、西出丸一帯は平成9年度に策定された「熊本城復元整備計画」において第Ⅰ期の整備地区として復元整備に着手し、平成11年度から南大手門及び塀、戌亥櫓及び西出丸塀、未申櫓、元太鼓櫓及び奉行丸塀、奉行丸東南側塀等の復元整備を行ない、平成17年(2005)に完成した。

---

[1] 『特別史跡熊本城跡総括報告書歴史資料編　史料・解説』熊本市　2019年　所収165号文書

[2] 註1報告書所収173号文書

[3] 註1報告書所収174号文書



4-3-1-188 図　御城内御絵図（熊本市蔵）　西出丸部分

4-3-1-189 図　二の丸から本丸を見る（長崎大学付属図書館蔵）

[4] 生田宏編『肥後近世史年表』日本談義社　1958 年

[5]『特別史跡熊本城跡総括報告書歴史資料編　絵図・地図・写真』熊本市　2019 年　4 頁

[6] 註 5 報告書　5 ～ 10 頁

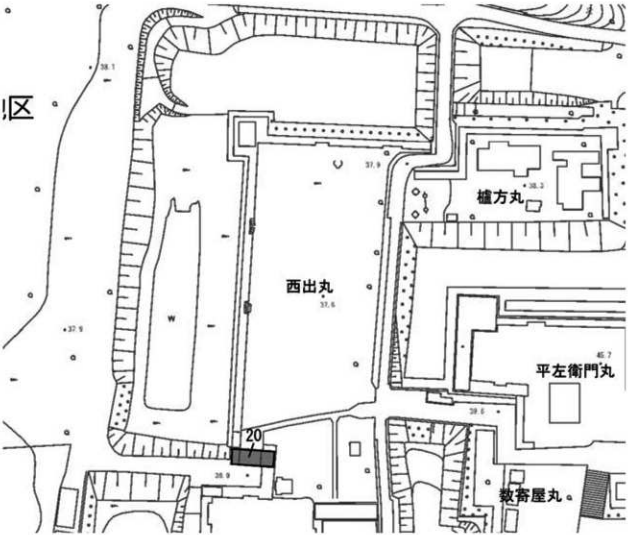
[7] 註 5 報告書　33 ～ 38 頁

[8] 註 5 報告書　158 ～ 159 頁

4-3-1-190 図　二の丸から西出丸越しに見た大小天守・宇土櫓(冨重写真所蔵)

4-3-1-191 図　二の丸から西出丸越しに見た大小天守・宇土櫓(冨重写真所蔵)

(2)発掘調査成果



20. 西大手門

4-3-1-192 図　西出丸調査地点位置図

＜20 西大手門跡＞

(平成 13 年(2001))

報 告 書：熊本市教育委員会『特別史跡 熊本城跡 西出丸一帯復元整備工事報告書』2005

調査期間：平成 13 年(2001) 10 月 10 日～同年 10 月 16 日

調査面積：不明

調査主体：熊本市教育委員会

・調査に至る経緯

平成 11 年(1999)の台風 18 号によって西大手門が倒壊した。西大手門を復元するにあたり、倒壊した西大手門の解体を行なった。門部の既存コンクリート基礎解体修理後に、調査が行なわれた。

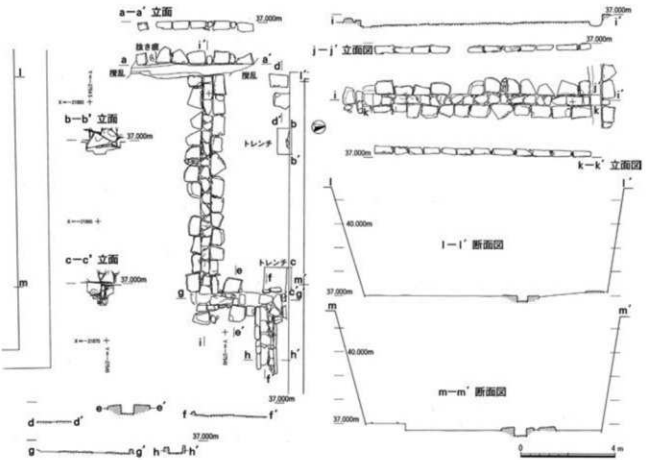
・調査の方法

西側石垣の根石状況確認のため 2 カ所においてトレンチ調査が行なわれた。

・調査の概要

西大手門内通路のほぼ中央を南北に通る安山岩の割石を側壁及び底石に用いた排水溝が確認された。東側に沿う箇所から南大手門跡にも同様の構造の排水溝を確認した。東側石垣に沿う箇所から、凝灰岩の切

石を用いた構造に替わっている。西出丸の西側石垣に沿うように凝灰岩製切石を用いた排水溝も検出された。北側では現地盤面より約30㎝で地山の土層を確認した。また、南側では約40㎝以下に拳大の栗石が全体に敷き込まれている栗石基礎を確認した。



排水溝遺構全景（南方より）

北側（b－b′）

南側（c－c′）

東側石垣、根石状況

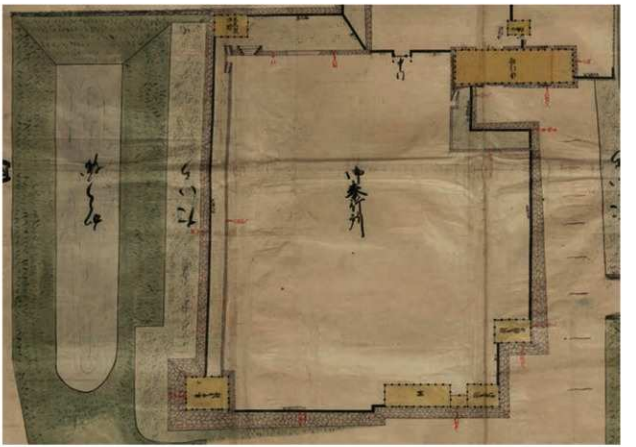
4-3-1-193図　発掘遺構図(図4-2-24･25)・調査状況写真(図4-2-22･23)

【奉行丸】

(1) 概要

奉行丸は西出丸のうち南に位置する曲輪で、東は空堀と南坂で本丸に接し、西は空堀で二の丸と隔てられていた。慶長 17 年(1612)の「肥後筑後城図」(山口県文書館蔵)には南西隅に多層の櫓が描かれ、曲輪内には「下川又左衛門」とある[1]。寛永 7 年(1630)前後の「熊本屋鋪割下絵図」(熊本県立図書館蔵)には「加藤平左衛門尉中屋敷」とあり[2]、細川家入国後は田中兵庫の屋敷に割り当てられた。その後、「奉書」(永青文庫蔵)の寛永 13 年(1636)7 月 26 条に「一、兵庫屋敷、御奉行所に仰せ付けらるべく候間、なわばりの事」とあるので[3]、これ以降に奉行所として整備されたと考えられる。

正保期とみられる「平山城肥後国熊本城廻絵図」(熊本県立図書館蔵)によると奉行丸は「東西四拾間　南北四拾七間」の規模である[4]。明和 6 年(1769)頃の「御城内御絵図」(熊本市蔵)(4-3-1-194 図)によると北西隅に元



4-3-1-194 図　御城内御絵図(熊本市蔵)　奉行丸部分

太鼓櫓、南西隅に 3 階建ての未申櫓、南東隅に井樋方櫓と御客方櫓があり、石垣上は櫓を除いて塀が巡らされていた。曲輪内の奉行所は数回の増改築が行なわれたとみられるが、宝暦改革以降の作成とみられる「御奉行所図」(永青文庫)(4-3-1-195 図)で建物の配置を述べておく。

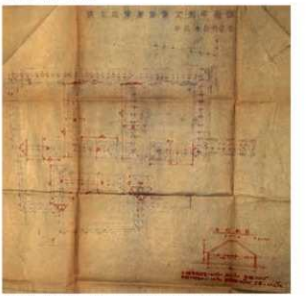
曲輪の北にある中門から入ると正面が奉行所で、郡方・当用方・町方・寺社方・刑法方・機密間などが配置され、奥に家老間・御上段がある。その東に勘定方があり、小物成方は正面左、東奥に群代方があり、西側には牢屋があった。なお、「御城内御絵図」では井樋方櫓と御客方櫓となっていたが、「御奉行所図」では御絵図所と小物成方御銀所・御手当方・諸帳方となっている。諸帳方は藩の文書記録の保存などを管轄する部署で、未申櫓を永年保存文書の保管場所として利用したことが知られる[5]。未申櫓に保管されていた文書類は明治 5 年(1872)正月に北岡邸へ移され、熊本城は熊本鎮台に引き渡された[6]。

明治以降の奉行丸内の建物の解体時期は不明である。明治 22 年(1889)まで残存し火薬庫に転用していた御客

4-3-1-195 図　御奉行所図（永青文庫蔵）

方櫓は、同年の地震で南面の石垣の崩落とともに倒壊した[7]。石垣は陸軍によって復旧されたが、倒壊した櫓は撤去された。この地震では西大手門の櫓台や元太鼓櫓跡など複数の箇所で石垣の崩落や膨らみが生じ、陸軍によって復旧されている。これ以降も奉行丸は軍の管理下のもとで火薬庫として使用され、曲輪内には石垣が増築されていたが(4-3-1-196 図)、これらの石垣は昭和 29 年(1954)に撤去された。

昭和 8 年(1933)に石垣が史蹟に指定され、昭和 27 年(1952)に史跡熊本城跡となり、昭和 29 年(1954)には西出丸一帯が史跡に追加指定された。また、昭和 30 年(1955)には特別史跡に指定された。



4-3-1-196 図　熊本城弾薬庫跡実測平面図
（熊本県教育委員会提供）

その後、西出丸一帯は平成9年度に策定された「熊本城復元整備計画」において第Ⅰ期の整備地区として復元整備に着手し、平成11年度から南大手門及び塀、戌亥櫓及び西出丸塀、未申櫓、元太鼓櫓及び奉行丸塀、奉行丸東南側塀などの復元整備を行ない、平成17年(2005)に完成した。

---

[1] 『特別史跡熊本城跡総括報告書歴史資料編　絵図・地図・写真』熊本市　2019　4頁
[2] 註1報告書5～10頁
[3] 新熊本市史編纂委員会編『新熊本市史　通史編第三巻　近世Ⅰ』熊本市　407頁
[4] 註1報告書33～38頁
[5] 高橋実「熊本藩の文書記録管理システムとその特質(その1)」「同(その2)」『国文学研究資料館アーカイブズ研究紀』(2)・(3)　国文学研究資料館　2006～2007
[6] 細川家編纂所『改訂肥後藩国事史料　復刻版』國書刊行会　1974
[7] 註1報告書158～159頁

(2)発掘調査成果

21. 南大手門跡　22. 奉行所跡　23. 未申櫓跡　24. 御客方櫓跡　25. 井樋方櫓跡　26. 元太鼓櫓跡

4-3-1-197 図　奉行丸調査地点位置図

＜21 南大手門跡＞

報 告 書：熊本市教育委員会『特別史跡 熊本城跡　石垣保存修理工事・発掘調査報告書』1999

調査期間：平成９年(1997)５月７日～同年５月28日・８月９日～同年８月19日

調査面積：不明

調査主体：熊本市教育委員会

・調査に至る経緯

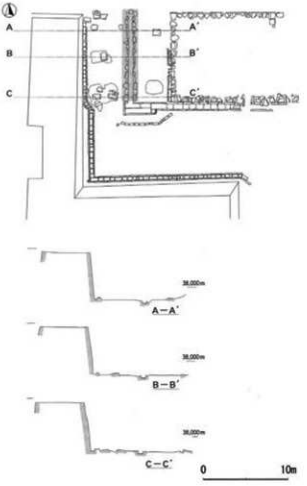
文化庁の補助事業「中近世城郭緊急保存修理事業」の最終年度として南大手門跡の石垣復元及び南坂の一部復元整備に伴い、櫓台石垣及び南坂の遺構確認調査が行なわれた。

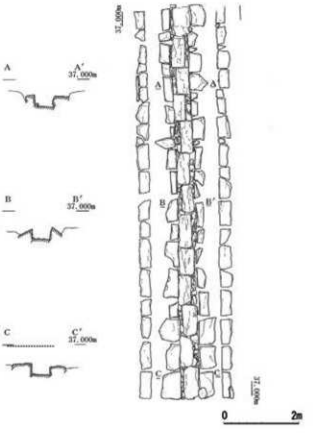
・調査の方法

すでに確認されている行幸坂側の法面に露出している石垣の一部及び南、西側に残る石垣の位置及び絵図により調査区を設定した。

・調査の概要

遺構確認調査を第一次(平成９年５月７日から５月28日)及び第二次調査(平成９年８月９日～８月19日)を行なった。調査により、北、西、南面の石垣根石部分を確認した。部分的に２段残っているがほとんど





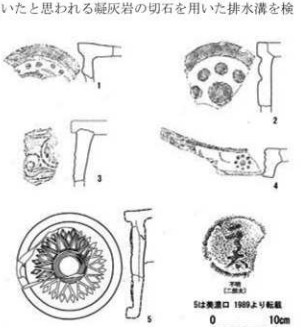
4-3-1-198 図　南大手門跡遺構平面図通路横断面（第 68･69 図）　4-3-1-199 図　排水溝実測図（第 70 図）

が最下部の根石のみであった。北西隅の根石が現地表面下約 30 cmで確認されたのに対し南西隅では約 80 cmとかなりの高低差を確認した。

また東面については、行幸坂との高低差が約 2.0 mあり改修工事の際根石まで撤去されていたことが確認できた。通路中心部(門内)を南北にはしる安山岩の割石の側壁に、底石に凝灰岩を用いた排水溝とこれに直行する形で屈曲部を枡状にし、東側の堀まで延びていたと思われる凝灰岩の切石を用いた排水溝を検出した。これも石垣根石と同様に行幸坂の改修により分断されている。また門内より礎石が検出され若干移動している。

南坂については、行幸坂西側に当時の排水遺構が部分的に残っており、平成 2 年度の石垣修理に伴う根石調査でも同様の遺構を確認した。

遺物は、軒丸瓦 8 点、丸瓦 3 点、軒平瓦 2 点、平瓦 1 点、李朝系軒平瓦(滴水瓦) 1 点、目板(桟)瓦 1 点、軒桟瓦 1 点、桟瓦 1 点が出土した。軒丸瓦の瓦当文様は、李朝系(日足文) 1 点、九曜紋 5 点、三巴文 2 点である。



4-3-1-200 図　出土瓦（第 84 図）

＜22 奉行丸所跡＞

(昭和 59 年(1984)～昭和 60 年(1985))

報 告 書:熊本市教育委員会『熊本城西出丸発掘調査概報』1985

調査期間:昭和 59 年(1984)11 月 12 日～26 日

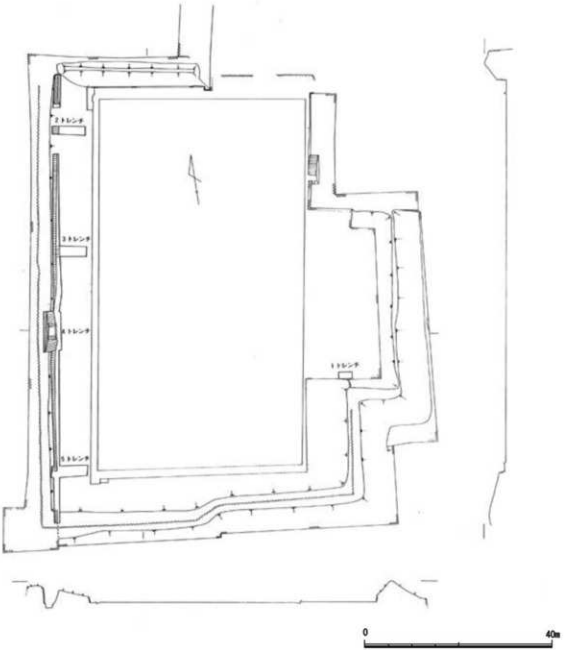
昭和 60 年(1985)1 月 12 日～24 日

調査面積:不明

調査主体:熊本市教育委員会

・調査に至る経緯

昭和 41 年(1966)以来国の補助を受け、月見櫓石垣の修理を始めとして、本丸石門の修復、西出丸笹園の整備、西出丸の復元、西竹の丸五階櫓石垣の築き直し、要人櫓の石垣修理を実施してきた。昭和 59 年度に棒庵坂石垣残部の石積工事と西出丸バレーコートの遺構調査を実施することになり、西出丸石垣の保



4-3-1-201 図　調査地全体図(第 2 図)

存状況の確認と旧地形を確認することを目的として熊本城の絵図を参考に発掘調査が行なわれた。

・調査の方法

発掘調査は熊本城の絵図を参考に行なわれた。現状地形、残存する遺構などの確認を行なったところ、テニスコートの西側斜面上部に部分的にはしる石垣の残存部が露呈されており、まずこの石垣の上部の線を追って掘り進めていった。トレンチの位置は、旧藩時代と大日本帝國陸軍を区別できる土層状態が確認できる所を1ヵ所、石垣の残存状態が良好なところを1ヵ所と、絵図に、石垣部から続く階段が3ヵ所あることから、その付近を推定し、階段にかかるような所に3ヵ所と計5ヵ所にトレンチを入れた。

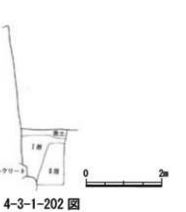
・調査の概要

1トレンチの第1層は、小石・コークス混ざりの埋土でありおそらく石垣を築くための掘り込みであろう。そして第2層の地表に近い部分は、地表から50㎝下にあり、3トレンチの第2層の高さと比べるとほぼ同じになる。このことから旧藩時代の生活面は、調査区の表面から約50㎝下にあったと推定できる。

2トレンチは、南北に2m、東西に7m、深さ4mで、石垣上端部から約3.5m下に大日本帝国陸軍のものと思われる厚さ20㎝のコンクリートがあり、その真下にコンクリートと密着した状態で、石垣部北端から南へ5mの所から南へ下る階段の一部と推定される石垣が検出できた。4トレンチでは、ほぼ絵図通りの状態で階段が検出できた。

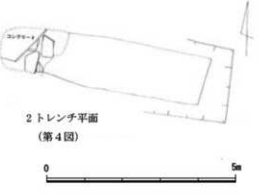
3トレンチでは石垣は絵図通り完全な状態で検出できた。石垣は高さ3.8mで最下部の石がまだ土中に埋まっている。トレンチ南側断面は表土・第1層が小石混ざりの埋土・第2層が赤褐色土であった。第2層は、石垣手前50㎝の所から石垣方向へ下っており、おそらく石垣を築くための掘り込みと推定される。第2層が旧藩時代の地面と推定される。

出土遺物は各トレンチより種々の遺物が見つかっているが、多くは陶磁器の破片や近世の瓦、古銭などである。瓦は大半が旧藩時代のものである。軒丸瓦の一部で特異な文様をもつ瓦が見つかっている。中心に二重の円を巡らし、その周りに楔形や菱形を配する重弁をもつ瓦である。県内では宇土城跡、八代城跡から同様の文様をもつ瓦が見つかっている。陶磁器類は、幕末から明治、大正期と考えられる甕・深鉢・平皿・碗などで伊万里系の染付が大半であるが、中に松尾焼の破片も認められた。



4-3-1-202図

1トレンチ土層断面図(第1図)

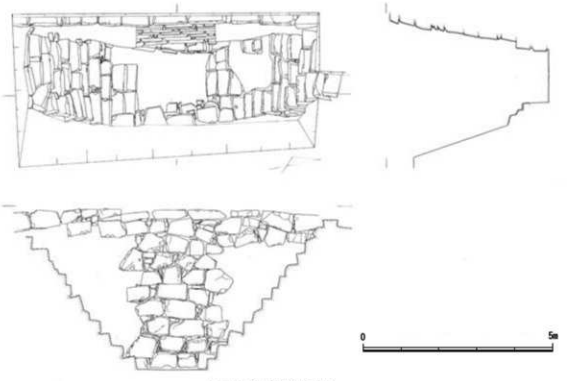


2トレンチ平面

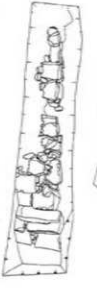
(第4図)

3トレンチ土層断面(第4図)

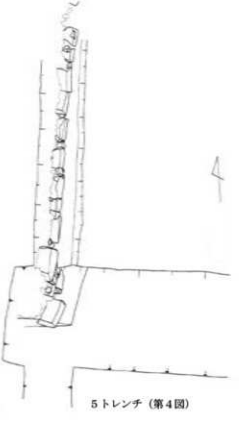
4-3-1-203図　トレンチ実測図1(第4図)



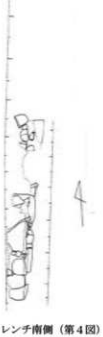
4トレンチ実測図(第5図)



2トレンチ北（第4図）



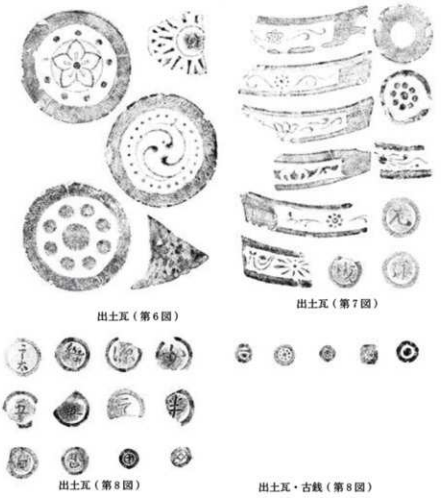
5トレンチ（第4図）



5トレンチ南側（第4図）

0　5m

4-3-1-204図　トレンチ実測図2(第4･5図)



4-3-1-205 図　出土瓦・古銭拓影図(縮尺任意)(第 6～8 図)

昭和 64 年(1989))

報 告 書：熊本市教育委員会『特別史跡 熊本城跡　石垣保存修理工事・発掘調査報告書』1999

調査期間：昭和 64 年(1989)1 月 4 日～平成元年(1989)12 月

調査面積：不明

調査主体：熊本市教育委員会

以下「報告書」・「調査主体」は、平成 7 年(1995)～平成 8 年(1996)の調査まで同様である。

・調査に至る経緯

昭和 63 年度からの新規事業として、奉行丸を旧状に戻し、その全容を確認するために発掘調査が行なわれた。

・調査の方法

昭和 59 年度の調査により確認された石垣及び階段などの検出を目的として、西側のバレーコート観覧席となっている土盛りを除去し、埋もれている石垣全体の検出を行ない、同時に除去土の中から遺物などの採取を行なう。その後、絵図などを参考にして、石垣上部を調査し、櫓などの基礎遺構の存在も確認する。

・調査の概要

検出された石垣は天端石の落下が一部見られるもののほぼ良好に残されており、階段も北西角、中央付近、南西側に 3 ヵ所検出された。「熊本城図」（永青文庫蔵）とほぼ一致するものである。北側石垣の根石確認のためトレンチ調査を行ない、現地盤面より約 40 ㎝下から排水路と思われる凝灰岩製の暗渠を確認した。

(平成元年(1989))

調査期間：平成元年(1989)

調査面積：不明

・調査に至る経緯

昭和 63 年度からの新規事業として、奉行丸を旧状に戻し、その全容を確認するために発掘調査を行なった。

・調査の方法

西出丸東側土塁の擁壁を破砕・撤去の後、土塁の 2 ヵ所でトレンチ調査を行なった。

・調査の概要

土塁の構築土層の観察及び包含する遺物などを検討した結果、昭和 35 年(1960)のバレーコート整備時に築造されたことがわかった。土塁が昭和 35 年築造と確認されたため、東側土塁は掘削・除去された。

(平成 5 年(1993))

調査期間：平成 5 年(1993) 11 月～同年 12 月

調査面積：不明

・調査に至る経緯

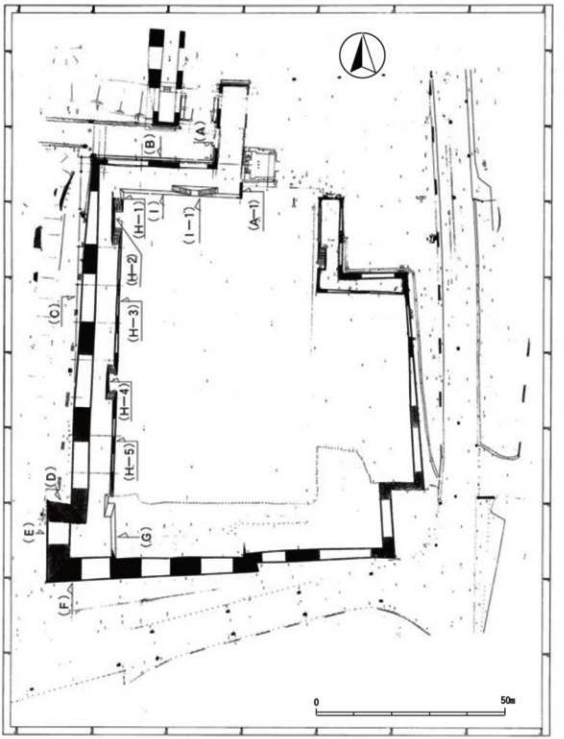
平成 5 年度から平成 7 年度まで西出丸(奉行所跡)西側の復元工事、また、奉行所跡一帯の遺構調査が行なわれた。

・調査の方法

元太鼓櫓跡の石垣などを基に幅 2.0 m の細長い調査区を設定した。

・調査の概要

表土を除去したところ、現地表面から 40 ㎝下で根石が検出された。根石は元太鼓櫓下から石垣が西大手門に向かって曲がる部分の間で、最下部の一石のみが残存していた。阿蘇 4 火砕流(Aso-4)まで掘り込み、そこを基礎にして安山岩の割石を並べている。検出した根石列の東寄りの内側で石垣が検出された。階段部分は残っていなかったが、この石垣は階段部の奥壁と考えられる。宝暦以降に描かれた絵図には北側の石垣に階段がないことから、それ以降に設けられたものと考えている。この石垣も根石同様に阿蘇 4 火砕流まで掘り込み、そこを基礎に石を据えてあった。



4-3-1-206 図　奉行所跡西側石垣修理箇所平面図平成 5 年度・平成 6 年度(第 25・27 図)

調査区の東側で凝灰岩の切石で作った溝が約 2.0 m検出された。溝の規模は、幅、深さ共に約 30 cmで側壁の一部と底石のみが残っていた。石垣に並行して東西方向に走っており、東端で南へ直角に曲がり調査区外に続いている。本来は石垣沿いに続いていたものと考えられる。南壁で見えている部分には蓋が残っていることから暗渠であったといえる。

宝暦以降の絵図によると、このあたりには供腰掛と記された建物と、その建物と石垣を結ぶ塀が描かれていることから、この溝は建物に沿って造られていた溝である可能性が考えられる。

(平成 6 年(1994))

調査期間：平成 6 年(1994)

調査面積：不明

・調査に至る経緯

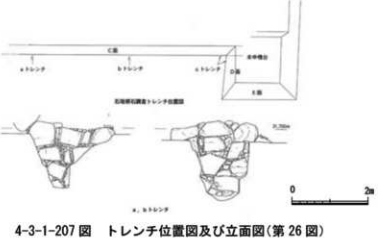
平成 5 年度より続く西出丸(奉行所跡)西側の石垣保存修復工事に伴い、西側の石垣について現地盤より約 1.5 m～2.0 m(約 3 ～ 4 石)の根石の調査を行なった。

・調査の方法

トレンチを 3 ヵ所設定し、北から順に a、b、c とし、いずれのトレンチも重機による掘削の後手掘りで確認した。a トレンチは元太鼓櫓跡石垣の角石から南に 51 mの地点、b トレンチは a トレンチより 21 m南に設定した。

・調査の概要

a トレンチは 1.4 m掘り下げたが、幅が狭かったため根石の最下部は確認できなかった。b トレンチは 1.6 m掘り下げて確認した結果、現地表面から 1.5 m下で根石の最下部が検出された。根石は直接火砕流の固い地山に据えられている。



4-3-1-207 図　トレンチ位置図及び立面図(第 26 図)

(平成7年(1995) ～平成8年(1996))

調査期間：平成7年(1995)9月12日～同年9月14日
平成7年(1995)10月25日～平成8年3月末日

調査面積：不明

以下、「調査期間」「調査面積」は未申櫓平成7年(1995)～平成8年(1996)まで同様である。

・調査に至る経緯

平成5年度より続く西出丸(奉行所跡)西側の石垣保存修理及び南側土塁の撤去に伴う調査を実施した。併せて奉行所跡全体及び未申櫓台の遺構調査を実施した。

・調査の方法

西出丸(奉行所跡)の調査区域を概ね北地区と南地区に分けて実施した。奉行所跡全体及び未申櫓台の遺構調査の終了を待って東西に延びる南側土塁に直行する形で2ヵ所にトレンチを設置した。南側土塁調査後、公共座標を基に10 m ×10 mのグリッドを設定した。グリッドは南北軸を南からアルファベット、東西軸を西からアラビア数字を用い、それぞれを組み合わせて呼称する。調査区は全体で3区に大別された。

4-3-1-208図　調査区配置図(第85図)

・調査の概要

南側土塁内部から東西方向に延長73.5 m、高さ2.30～2.65 mの練り石積みが検出され、石垣内部にも煉瓦などを含む近代の遺物の混入がみられテニスコート整備の際の築造であることが確認された。

未申櫓台東側石垣は当初南側の一部が露出していたが、土塁調査及び撤去により階段部を含めてほぼ全体を確認した。南面の石垣は天端から数段が外されており、石垣から3 m程は本来の生活面が失われていたため、遺構はほとんど残っていなかった。

1区では近代の建物1棟、溝2本、雪隠(トイレ)、土坑3基を検出した。

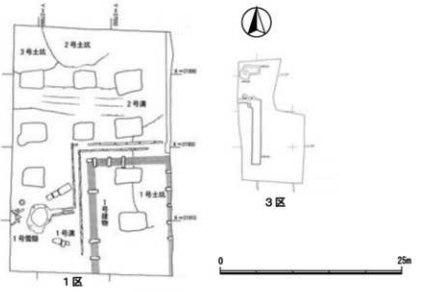
2区では①御客方櫓跡(西)、②御客方櫓跡(東)、③井樋方櫓跡の3棟の櫓跡を確認した。礎石と周囲の雨落ち溝を検出している。御蔵跡・2号建物・3号建物・4号建物、溝25本、水槽3基、井戸5基、雪隠(トイレ) 10基、土坑46基が検出されている。5号雪隠はL字状の囲いを伴う。18世紀後半とされている。

3区では3基の土坑が確認されている。47号土坑は軍時代、48号土坑は幕末とされている。

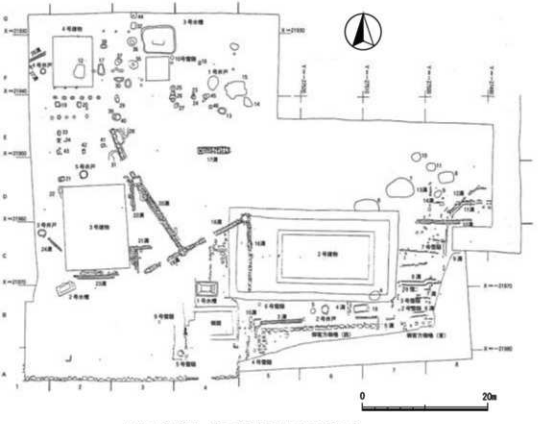
おもな出土遺物に陶磁器と瓦がある。陶磁器は約5000点出土しているが、ほとんどは明治時代以降の整地層や表土中からの出土であった。出土した器種は碗・皿が多い。碗は丸碗・端反り碗・広東碗などが出土している。産地については、肥前系のものが大半で肥後産のものは少なかった。

瓦には、軒丸瓦・丸瓦・軒平瓦・平瓦・滴水瓦・軒目板(桟)瓦・目板(桟)瓦を主体に熨斗瓦・鬼瓦・鯱瓦など総数約4000点に及ぶ。軒丸瓦の文様は李朝系・桐紋・桔梗紋・蛇の目紋・三巴文・九曜紋があり、三巴文・九曜

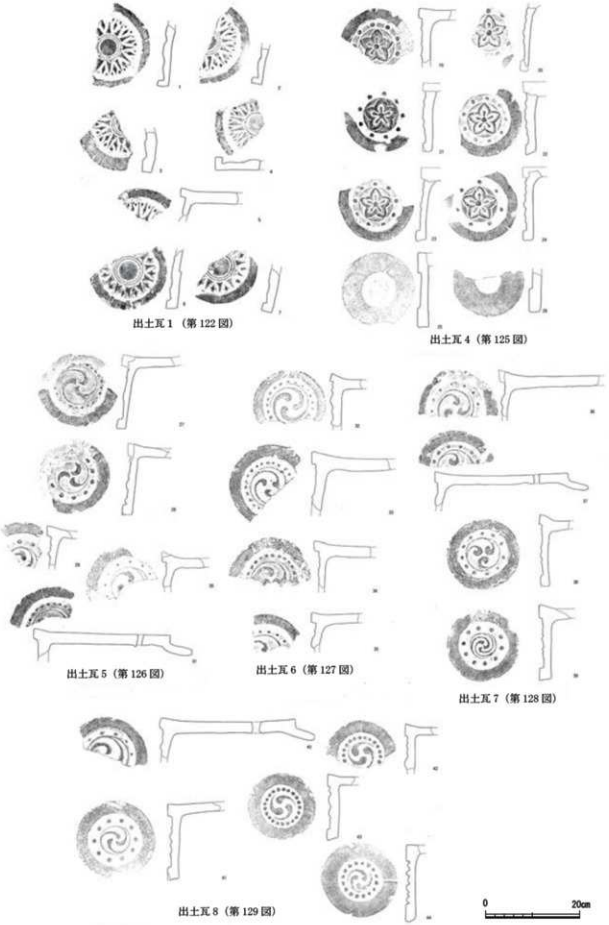
紋の割合が高い。軒平瓦の文様は多様であるが、中心飾りの違いから、三葉文・立木文・桐紋・笹紋・桔梗紋・九曜紋などに大別できる。ほか李朝系(滴水瓦)もある。



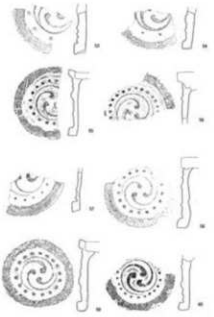
4-3-1-209 図　1 区・3 区遺構配置図(第 86・103 図)



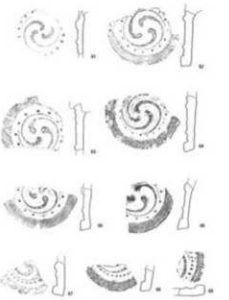
4-3-1-210 図　2 区遺構配置図(第 88 図)



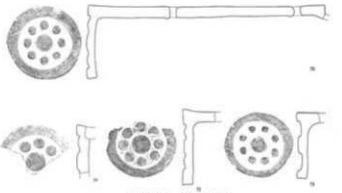
4-3-1-211図　出土瓦1（軒丸瓦）（第122、125～129図）



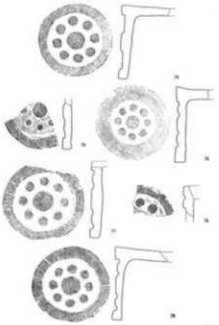
出土瓦 10（第 131 図）



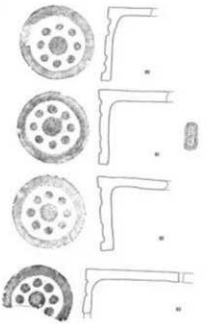
出土瓦 11（第 132 図）



出土瓦 12（第 133 図）



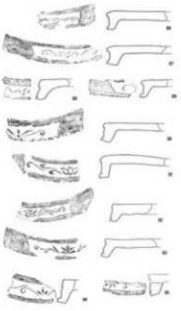
出土瓦 13（第 134 図）



出土瓦 14（第 135 図）

0　20cm

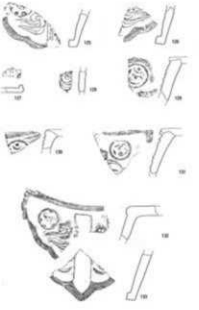
4-3-1-212 図　出土瓦 2（軒丸瓦）（第 131～135 図）



瓦 16（第 137 図）

瓦 17（第 138 図）

瓦 19（第 140 図）

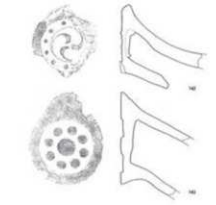


瓦 20（第 141 図）

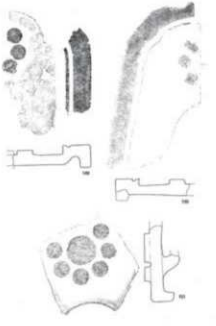
瓦 21（第 142 図）

0　20cm

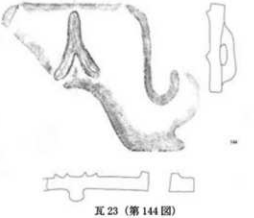
4-3-1-213 図　出土瓦 3（軒平瓦）（第 137・138・140～142 図）



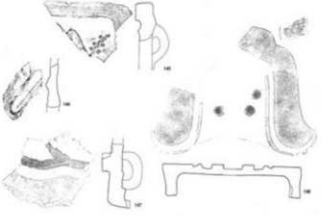
瓦22（第143図）



瓦25（第146図）



瓦23（第144図）

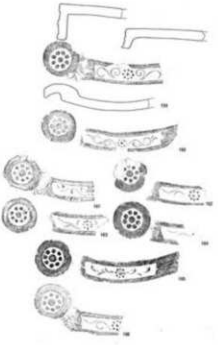


瓦24（第145図）

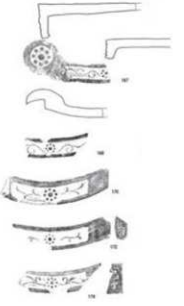
0　20cm

4-3-1-214図　出土瓦4（鳥衾瓦・鯱瓦・鬼瓦）（第143～146図）

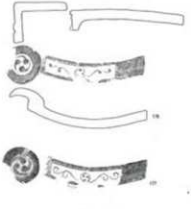
瓦26（第147図）



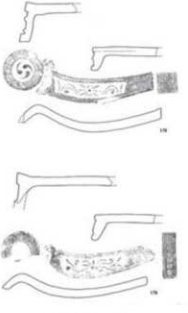
瓦27（第148図）



瓦28（第149図）



瓦29（第150図）



瓦30（第151図）

瓦31（第152図）

0　20cm

4-3-1-215図　出土瓦5（軒目板瓦）（第147～152図）

刻印1（第154図）

刻印2（第155図）

刻印3（第156図）

刻印4（第157図）

0　10cm

4-3-1-216図　出土瓦6（刻印）（第154～157図）

刻印 5（第 158 図）

刻印 6（第 159 図）

刻印 7（第 160 図）

刻印 8（第 161 図）

刻印 9（第 162 図）

0　10cm

4-3-1-217 図　出土瓦 7（刻印）（第 158～162 図）

＜23 御客方櫓跡＞

調査期間：平成7年(1995)9月12日～同年9月14日
平成7年(1995)10月25日～平成8年3月末日

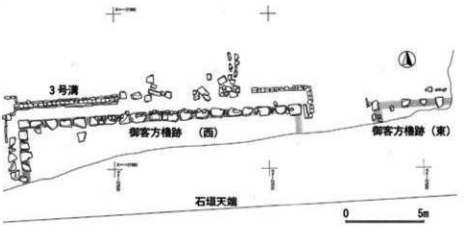
調査面積：不明

・調査に至る経緯

平成5年度より続く西出丸(奉行所跡)西側の石垣保存修理及び南側土塁の撤去に伴う調査が行なわれた。併せて奉行所跡全体及び未申櫓台の遺構調査が行なった。

・調査の方法

西出丸(奉行所跡)の調査区域を概ね北地区と南地区に分けて行なわれた。奉行所跡全体及び未申櫓台の遺構調査の終了を待って東西に延びる南側土塁に直行する形で2ヵ所にトレンチを設置した。南側土塁調査後、公共座標を基に10 m×10 mのグリッドを設定した。グリッドは南北軸を南からアルファベット、東西軸を西からアラビア数字を用い、それぞれを組み合わせて呼称する。調査区は全体で3区に大別された。御客方櫓は2区に該当する。

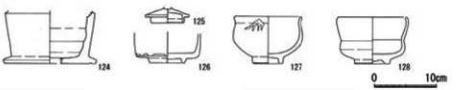


4-3-1-218図　御客方櫓跡平面図(第89図)

・調査の概要

南東隅に2つあり、西側の御客方櫓跡では、基礎は安山岩製の大きな石を用い、建物の外周に合わせて面を揃えてあり、控えはすべて内側に向いている。上面を平らにするために拳大から人頭大の石が約8 mにわたって置かれている。明治時代に弾薬庫が作られていたため、西側の基礎の南側半分と東側の基礎がなくなっている。中央部の基礎は、明治時代に井戸を造る際に外されている。建物の周囲には雨落ちと考えられる溝が巡らされている。東側の御客方櫓は安山岩製の礎石が4基検出されたのみである。東西で基礎構造が異なっている。

遺物は、土瓶のかけ蓋・磁器の香炉・磁器の香炉が出土した。



4-3-1-219図　2区出土遺物実測図

＜24 井樋方櫓跡＞

調査期間：平成7年(1995)9月12日～同年9月14日
平成7年(1995)10月25日～平成8年3月末日

調査面積：不明

・調査に至る経緯

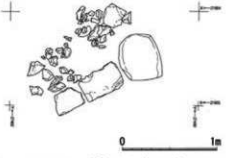
平成7年(1995)奉行所跡の調査と同じである。

・調査の方法

同上。井樋方櫓は2区に該当する。

・調査の概要

礎石と考えられる上面が平らな石が2ヵ所で検出されたほか、櫓に伴うと考えられる凝灰岩製の溝が検出された。井樋方櫓は時代によっては、御絵図所であり、それを裏付けるように11号溝と12号溝の西側で岩絵具の原料である珪孔雀石の原石がまとまって出土した。珪孔雀石は、岩絵具の原料であるが、熊本県内には産出しない。近隣では宮崎県高千穂町や山口県美祢市で産出される。



4-3-1-220図　鉱物出土状況(第90図)

＜25 未申櫓跡＞

(平成6年(1994))

調査期間：平成6年(1994)11月23日～平成6年度内

調査面積：不明

・調査に至る経緯

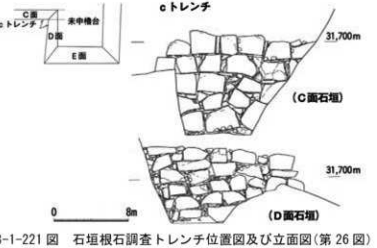
西出丸(奉行所跡)西側の石垣の保存修復工事に伴い、未申櫓台西側入角部分の石垣根石の調査が行なわれた。

・調査の方法

未申櫓台西側入角部分にトレンチを設定し、重機による掘削の後手掘りで確認した。

・調査の概要

入角部に設定したトレンチでは根石が確認されたため、北面と西面の記録を行なった。西面の石垣は入り角から南方に直進しており、北面の石垣はその上に築かれているため、西面から北面の順で構築されていることが判明した。



4-3-1-221図　石垣根石調査トレンチ位置図及び立面図(第26図)

(平成 7 年(1995)～平成 8 年(1996))

調査期間：平成 7 年(1995) 10 月 25 日～平成 8 年(1996) 3 月末日

調査面積：不明

・調査に至る経緯

平成 7 年奉行所跡の調査と同じ。

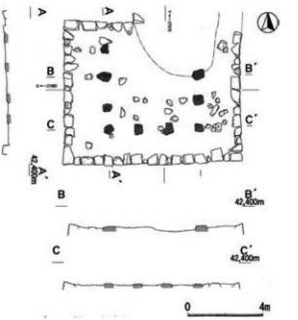
・調査の方法

同上。未申櫓は 2 区に該当する。

・調査の概要

調査前の櫓台の上に「く」の字状に調整された安山岩の切り石が 4 個残っていた。表土を除去し櫓跡の確認を行なったところ、北から続いてくる石垣との接点付近がやや撹乱されていたものの、それ以外の部分については最終的な建物の基礎が残っていた。石垣天端は多少のずれはあるものの全部残っており、その内側一間半のところに礎石が据えられていた。

残存していた礎石は 9 個でいずれも上面が平らで、高さも一致していることから原位置を留めているといえる。



4-3-1-222 図　未申櫓跡平面図・断面図(第 102 図)

(平成 10 年(1998)～平成 11 年(1999))

報 告 書:『特別史跡 熊本城跡 西出丸一帯復元整備工事報告書』2005

調査期間：平成 10 年(1998) 11 月～平成 11 年(1999) 3 月

調査面積：不明

調査主体：熊本市教育委員会

・調査に至る経緯

西出丸一帯の石垣保存修理事業は平成 5 年度から平成 9 年度に文化庁の補助事業、中近世城郭緊急保存修理事業として、修理を予定していた。特に建造物等復元整備の基本計画を策定する中で、その土台となる櫓台石垣に膨らみや南北隅脇石に欠落及びズレなどが顕著であるため、復元する建造物の安定を図るため、建造物復元工事に先行して解体修理を行なうことになった。発掘調査は、石垣出隅部の根石の位置調査を目的として行なわれた。

・調査の方法

不明

・調査の概要

調査の結果、根石の位置はほとんど地盤高であることが判明した。ただ、構築当時はから堀の犬走りであったと思われるところに、昭和 40 年代の公園整備により園路が整備されており、現在の深さから検討するとかなり削平が行なわれたものと思われる。

4-3-1-223 図　D.E 面(北西隅部)・E.F 面(南西隅部)根石状況(図 3-1-3・図 3-1-4)

＜26 元太鼓櫓跡＞

報 告 書：熊本市教育委員会『特別史跡 熊本城跡　西出丸一帯復元整備工事報告書』1999

調査期間：平成 10 年(1998)

調査面積：不明

調査主体：熊本市教育委員会

・調査に至る経緯

文化庁の史跡等総合保存整備活用推進(地方拠点史跡等総合整備)事業として、西出丸一帯の櫓門、櫓、塀などの建造物復元及び石垣保存修理工事などが行なわれた。発掘調査は事業に伴い行なわれている。

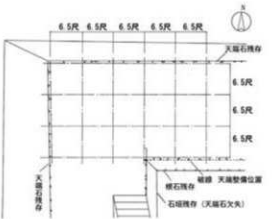
・調査の方法

不明

・調査の概要

櫓に伴う礎石は残存していない。

発掘調査により根石が確認されている。



4-3-1-224 図　元太鼓櫓石垣実測図(図 2-3-33)

4-3-1-225 図　石垣根石の残存状況・同拡大 入隅部分(図 2-3-34・図 2-3-35)

【櫨方丸】

(1) 概要

櫨方丸は西出丸のうち北東に位置する曲輪である。慶長17年(1612)の「肥後筑後城図」(山口県文書館蔵)には、北大手門とみられる櫓門の東に、北・東・南を空堀で区画された曲輪があり、北東隅に多層の櫓が描かれている[1]。寛永7年(1630)前後の「熊本屋鋪割下絵図」(熊本県立図書館蔵)には曲輪の入口に「馬屋」とあり、曲輪内には「えんしやうこや」の文字が見える[2]。寛永11年(1634)の「肥後国熊本城廻普請仕度所絵図」(熊本県立図書館蔵)には平櫓から櫨方南東隅まで長さ36間、高さ7間の石垣の構築が申請され[3]、その後実施された。正保期の「平山城肥後国熊本城廻絵図」(熊本県立図書館蔵)によると櫨方丸には「二之丸ノ内」と記され、その規模は東西51間、南北24間である[4]。なお、元禄期以降の修理願絵図では「本丸」に含んで描かれている[5]。

寛文6年(1666)の「御城分間」(永青文庫蔵)によれば櫨方丸北東隅の櫓は「権兵衛殿被召置御丸三階御矢蔵」と呼称している[6]。「権兵衛殿」とは徳川忠長の家来で寛永10年(1633)に細川家が預かった伊藤権兵衛と考えられる。「御城図」(4-3-1-226図)には曲輪の西側に塀に囲まれた柿葺きの建物があり、曲輪の入口には長屋門と、それに続く櫓が描かれる。なお、三階櫓は享保期には「類族改丸三階」や「宇土類族方御預合置候三階櫓」と呼ばれたが[7]、寛延2年(1749)に櫨方役所が設けられると、明和6年(1769)頃の「御城内御絵図」(熊本市蔵)(4-3-1-227図)では「櫨方隅御櫓三階」と呼ばれた。

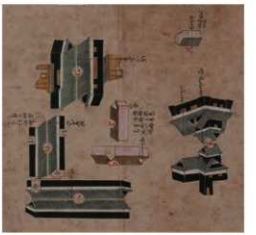
「御城内御絵図」によると、曲輪の北側の塀に囲まれた空間が「櫨方会所」で、建物の配置は不明である。また、「御城内御絵図」では曲輪の入口は長屋門ではなく、木柵のようである。江戸時代後期には三階櫓は「櫨方隅三階御櫓」と呼ばれた。なお、櫓台は寛政10年(1798)に膨らみが生じて修理し[8]、文政4年(1821)にも高さ11間、幅折廻17間にわたって膨らみが生じたため、一度櫓を解体して積み直しが行なわれた[9]。この時の修理では石垣石材に「文政五年六月竣功」の文字が刻まれた。

明治9年(1876) 4月17日に工兵第六小隊が発足し旧花畑屋敷に駐屯したが、兵舎が失火のため全焼し、棒庵坂下の仮兵舎へ移転した。明治9年の「城郭之図」(国立国会図書館蔵)には櫨方丸に「工兵方面」と記される[10]。明治10年(1877)の西南戦争では千葉城方面の守備隊が置かれ、解体された三階櫓跡には砲台が築かれた。その後、櫨方丸には軍法会議所が置かれたが、明治22年(1889)熊本地震で北側の石垣で石垣の膨らみ・崩落が生じた[11]。その後、石垣は復旧され、曲輪内は戦前に倉庫となっていたようである。

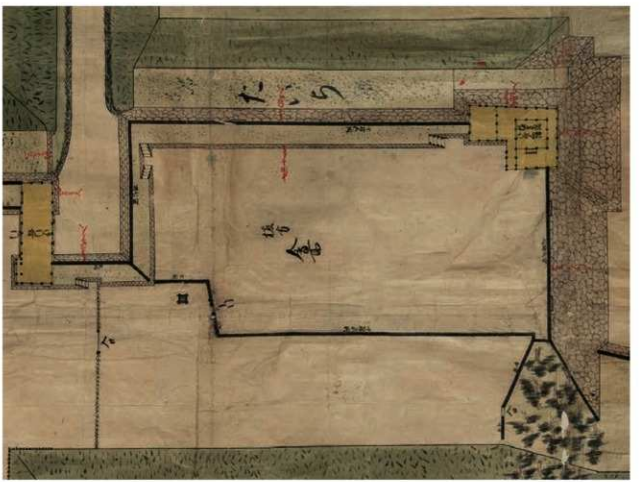
昭和8年(1933)、石垣や堀が史蹟に指定され、昭和27年(1952)に一帯が史跡に追加指定され、昭和30年(1955)に特別史跡となった。同年、曲輪の入口にあった櫨方門を解体保存し、昭和32年(1957)に竹の丸に移築、昭和37年(1962)に加藤神社が京町台から移転し現在に至る。

---

[1] 『特別史跡熊本城跡総括報告書歴史資料編　絵図・地図・写真』熊本市　2019　4頁
[2] 註1報告書　5～10頁
[3] 註1報告書11～16頁
[4] 註1報告書33～38頁
[5] 註1報告書22頁
[6] 『特別史跡熊本城跡総括報告書歴史資料編　史料・解説』熊本市　2019　所収165号文書
[7] 註6報告書所収173・174号文書
[8] 註6報告書所収187号文書
[9] 註1報告書32頁
[10] 註1報告書150～152頁
[11] 註1報告書158～159頁

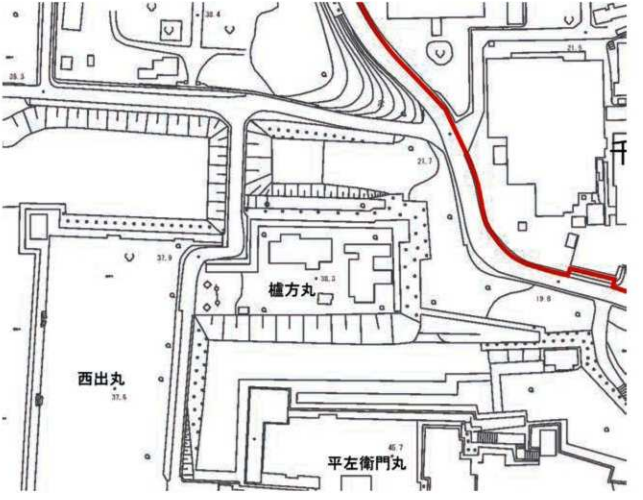


4-3-1-226 図　御城図(永青文庫蔵)　櫨方丸部分



4-3-1-227 図　御城内御絵図(熊本市蔵)　櫨方丸部分

(2)発掘調査成果



4-3-1-228 図　櫨方丸位置図

2019 年度時点で櫨方丸内の発掘調査報告書は刊行されていない。

特別史跡熊本城跡総括報告書

調査研究編

第１分冊

2020年３月

発行　熊本市熊本城調査研究センター
〒860-0806　熊本市中央区花畑町９-６
℡（096）355-2327

印刷　株式会社河田印刷
〒861-4101　熊本市南区近見８-５-105
℡（096）353-1049